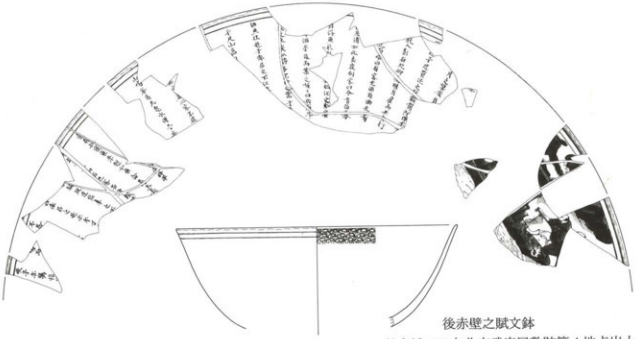
ISSN 1341-6952

東北大学埋蔵文化財調査年報13

仙台城二の丸跡第11地点の調査
仙台城二の丸北方武家屋敷跡第４地点の調査
青葉山遺跡Ｅ地点第４次調査



後赤壁之賦文鉢
仙台城二の丸北方武家屋敷跡第４地点出土

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
2000

東北大学埋蔵文化財調査年報13

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
2000

1．川内地区全景（南東上空から）

2．仙台城二の丸北方武家屋敷跡第４地点調査区全景（東から）

3．仙台城二の丸北方武家屋敷跡第４地点１号溝出土の陶磁器・土器・瓦（17世紀）

4．仙台城二の丸北方武家屋敷跡第４地点２号池埋土４・５層出土の陶磁器・土器（17世紀末～18世紀前葉）

5．仙台城二の丸北方武家屋敷跡第４地点１号井戸・３号井戸出土の陶磁器・土器（18世紀）

6．仙台城二の丸北方武家屋敷跡第４地点10号土坑出土の陶磁器・土器（18世紀末～19世紀前半）

7．武家屋敷跡第４地点出土の中国産陶磁器（明末）

8．武家屋敷跡第４地点出土の後赤壁之賦文鉢（清初）

9．武家屋敷跡第４地点出土の肥前産色絵磁器（17～18世紀）

10．武家屋敷跡第４地点出土の近世漆紙文書

11．武家屋敷跡第４地点出土の地鎮に使われたかわらけと古銭

12．武家屋敷跡第４地点出土の茶道具

13．武家屋敷跡第４地点出土の化粧道具

14．武家屋敷跡第４地点出土の土人形・土製玩具

序

東北大学の川内キャンパスは、南キャンパスが仙台城二の丸跡に、北キャンパスが武家屋敷跡にあたる。二の丸跡については、15年に亘る東北大学の埋蔵文化財調査によって、様々な建物、庭園の跡、井戸・水路跡といった各種の仙台城中枢施設の遺構群が明らかにされてきた。また、陶磁器や漆器、装身具・化粧具、金属製品といった多様な文化財が発掘され、二代藩主伊達忠宗以後の仙台城中枢である二の丸における建物の機能、性格、その変遷の解明が進められてきた。また、二の丸における藩主を中心とした公、私的生活のあり方についても様々な新資料が提示されてきた。

本年報は、北キャンパスの武家屋敷跡における貴重な調査成果が中心となった。宮城県図書館、仙台市博物館、斎藤報恩館に所蔵されている仙台城下絵図には、仙台城本丸・二の丸とともに、現在の川内北キャンパスの位置に多数の武家屋敷が描かれている。これまでの北キャンパスでの小規模調査で、この地区の地下に武家屋敷の建物跡、苑池、井戸跡、溝などが埋没、保存されていることが予想されてきたが、今回、武家屋敷跡の具体的な姿を明らかにすることができた。

課外活動施設新営に伴う調査で、1000㎡を超す広い範囲が対象となり、この武家屋敷地1区画分が発掘された。調査の結果、藩主の居城である二の丸跡における調査を補完する重要な成果を多数うることができた。また、本丸、二の丸、三の丸、そしてこれを取り巻く武家屋敷群が、それぞれきわめて有機的に結びついて機能していることを明らかにすることができた。また、陶磁器や生活資材などの物質文化についても、二の丸跡資料と本遺跡の資料を比較、研究することではじめてその文化内容を正しく理解できるものとなった。

武家屋敷の大規模な遺構群は、よく地下に保存されていた。その調査で、藩政を支えた上、中級藩士屋敷の規模、構造、そしてその生活の内容を具体的に捉えることができた点は大きな成果である。

この調査で、南キャンパスの二の丸跡とともに、北キャンパスの武家屋敷跡もかけがえのない埋蔵文化財であることがあらためて確認できたといえる。二の丸跡とともに、この地区の埋蔵文化財についても、今後より一層入念な調査を進め、東北大学における研究・教育環境の整備の中で、可能な限りその保護と活用に努力していくことが必要といえる。

青葉山の調査では、理学部研究棟の新営に伴う調査が1994年にひきつづいて行われた。建物建設予定地の広い範囲を調査した結果、縄文時代早期集落のひろがりが確定した。2回の調査で、縄文時代早期のムラの全体像がほぼ解明されたことになる。

これらの貴重な調査成果が、近世城郭、伊達藩研究など近世史研究、日本先史時代研究に新たな資料として活用されることを心から期待したい。

調査の実施と報告書の作成にあたっては、施設部をはじめ、学生部・理学部など関係部局には多大な支援と協力をいただいた。関係各位に心から謝意を表する次第である。

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
センター長　須　藤　　隆

例　　言

1．本年報は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが1995年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。

2．報告される遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下の通りである。

仙台城二の丸跡第11次調査地点（NM11）

試掘調査　1992年9月14日～10月29日　藤沢敦・関根達人

本調査　1995年10月30日～11月30日　藤沢敦・関根達人

仙台城二の丸北方武家屋敷跡第4次調査地点（BK4）

試掘調査　1985年11月19日～11月25日　梶原洋

本 調 査　1994年8月1日～12月24日　1995年3月1日～8月31日　藤沢敦・関根達人・菊池佳子

青葉山遺跡E地点第4次調査（AOE4）

本 体 部 分　1995年7月24日～12月15日　藤沢敦・関根達人・菊池佳子

搬入路部分　1996年3月1日～4月2日　関根達人・菊池佳子

3．調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが行った。

4．本年報の編集は、須藤隆の指導のもとに、藤沢敦・関根達人・奈良（旧姓菊池）佳子が担当した。

5．本文は、須藤隆・藤沢敦・関根達人・奈良佳子・玉橋さやか（東北大学考古学研究室研究生）が分担執筆した。本文執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅲ章5（1）①、8：須藤隆

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章1～4、7（1）：藤沢敦

第Ⅲ章5（2）①～③・⑥～⑧、7（2）：関根達人

第Ⅲ章5（1）③・④、（2）④・⑤、7（3）、第Ⅳ章（4（3）以下）：奈良佳子

第Ⅲ章5（1）②、第Ⅳ章4（3）：玉橋さやか

また、第Ⅲ章の自然科学的分析については、以下の方々に分析を依頼し、原稿をいただいた。

第Ⅲ章6．（1）花粉分析・プラントオパール分析：古環境研究所

第Ⅲ章6．（2）植物遺存体：内藤俊彦氏（東北大学大学院理学研究科附属植物園）

英文要旨については、関根達人が作成し、阿子島香氏（東北大学文学部）に校訂していただいた。

6．研究編には、北野信彦氏（くらしき作陽大学）による、仙台城二の丸跡出土漆器の分析結果を掲載した。

7．発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

大橋康二（佐賀県教育庁文化課）、仲野泰裕・井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、藤沢良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）、中野晴久（常滑市民俗資料館）、加藤真司（土岐市美濃陶磁歴史館）、堀内秀樹、安芸毬子・青山正昭・大貫浩子（東京大学埋蔵文化財調査室）、石田義光（東北学院大学）、鈴木功（白河市教育委員会）、井上雅孝（滝沢村役場）、進藤秋輝（宮城県教育庁文化財保護課）、本田泰貴（東北陶磁文化館）、今泉隆雄（東北大学文学部）、蟹沢聡史、松本秀明（東北大学大学院理学研究科）、飯淵康一（東北大学大学院工学研究科）、中川学（東北大学百年史編纂室）、永田英明（東北大学記念資料室）、鈴木拓也（日本学術振興会特別研究員）、水見淳哉（東北大学文学部考古学研究室）

瀬戸市埋蔵文化財センター、土岐市美濃陶磁歴史館、東京大学埋蔵文化財調査室、仙台市教育委員会、仙台市博物館、東北大学文学部日本史研究室、東北大学文学部考古学研究室

8．出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターで保管・管理している。

凡　　例

1．方位は、真北に統一してある。

2．図１と図２は、それぞれ国土地理院作成の、２万５千分の１地形図「仙台西北部」と「仙台西南部」、１万分の１地形図「青葉山」を使用した。

3．川内地区の仙台城二の丸跡、および北方の武家屋敷地区にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」（縮尺500分の１）を使用した。

4．遺物の実測図および写真の縮尺はそれぞれに示した。

5．引用・参考文献は、第Ⅲ章６．自然科学的分析を除いては、巻末にまとめた。また本文中で、東北大学埋蔵文化財調査年報を引用する場合は、年報１という形で略記した。

6．挿図中のスクリーントーンは、特に指示しないものについては、以下の通りである。

遺構断面図　木材：　礫：　コンクリート：

遺物実測図　全体　煤状付着物：

磁器　青磁釉：　瑠璃釉：　鉄釉：

発掘調査参加者

青井恭子　芦野徳松　芦野ヒデ子　石井忍　石井みゆき　石田公子　石田純子　石堂祐子　伊藤大介
稲津裕司　猪俣亜矢　今泉八重子　上野美子　歌川喜恵子　内海薫　梅沢みえ　大内孝子　大内松夫
大久保靴彦　太田すゑ子　太田はるよ　大谷基　大塚玲子　大友泰子　大野太輔　大本麻美　奥田美津子
小関満知子　小沼善太郎　小野さよ子　小野寺史郎　小山久美子　織茂麻木子　川添裕幸　神田和彦
菅野春枝　岸本さち　菊地和江　工藤将樹　熊谷宏靖　小鹿崇司　後藤真希子　後藤靖子　斉藤美穂
佐伯晴子　佐伯史子　笹川秀寿　佐々木きみ子　佐々木陽子　佐々木好夫　佐藤ケイコ　佐藤としゑ
佐藤とみ子　佐藤路子　佐藤由加　佐藤良正　澤田理恵　渋谷絵理　庄司明美　菅谷芳幸　菅原千絵
鈴鹿修　鈴鹿久子　鈴木貴美子　鈴木健太郎　鈴木寿幸　鈴木博子　鈴木友香　鈴木由美　鈴木ヨシノ
勢藤力　太子夕佳　高橋和子　高原要輔　竹内美江子　田中スエ　谷春佳　谷口幸範　田原由男　千葉あけみ
千葉奈美　土屋みどり　独古史恵　戸津奈央子　中嶋祐介　新本雅子　西川尚子　丹羽美智子　針生せつ子
半谷美佐江　廣田英一郎　福田清彦　藤田直行　藤田光男　辺見貞子　本多百合子　真嶋剣　松澤香理
三上剛　武藤信子　武藤初美　谷津ミツ子　山本亮　若山恭輔　和田潤子　王小庆

整理作業参加者

青井恭子　今泉八重子　大塚玲子　後藤真希子　古山友子　庄司明美　鈴木綾　白石浩子　玉橋さやか
千葉直樹　千葉直美　橋本千晶　平井真理

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会(1995年度)

委員長	センター長	(文学部　教授)	須藤　隆
	川内地区協議会	(言語文化部　教授)	長沼敏夫
	青葉山地区協議会	(薬学部　教授)	佐藤　進
	星陵地区協議会	(医学部　教授)	大井竜司
	片平地区協議会	(金属材料研究所　教授)	鈴木謙爾
	文学部	教授	羽下徳彦
	文学部	助教授	今泉隆雄
	文学部	助教授	阿子島　香
	理学部	教授	蟹澤聰史
	工学部	助教授	飯淵康一
	施設部	長	荻原久和
幹事	施設部	企画課長	花坂勝治

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会(1995年度)

委員長	センター長(文学部　教授)	須藤　隆
	文学部　教授	羽下徳彦
	文学部　助教授	今泉隆雄
	文学部　助教授	阿子島　香
	理学部　教授	蟹澤聰史
	工学部　教授	飯淵康一
	調査研究員(文学部　助手)	藤沢　敦
	調査研究員(文学部　助手)	関根達人
	調査研究員(文学部　助手)	菊池佳子
	施設部　企画課長	花坂勝治
	理学部　事務長	阿部経三

東北大学埋蔵文化財調査研究センター設置規程

（平成６年５月17日　規第56号）

（設置）

第一条　東北大学（以下「本学」という。）に、東北大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

（目的）

第二条　センターは、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査及び研究を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

（職員）

第三条　センターに、センター長、調査研究員及びその他の職員を置く。

２　センター長は、本学の専任の教授をもって充て、総長が命ずる。

３　センター長は、センターの業務を掌理する。

４　センター長の任期は、二年とし、再任を妨げない。

５　調査研究員は、本学の専任の教官をもって充て、総長が命ずる。

６　調査研究員は、センターの業務に従事する。

（運営委員会）

第四条　センターに、センターの組織、人事、予算その他運営に関する重要事項を審議するため、東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（組織）

第五条　委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　東北大学施設整備委員会各地区協議会の協議員　各一名

二　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授　若干名

三　発掘調査地に関連のある部局の教授又は助教授で、その都度委員長が指名するもの

四　施設部長

（委員長）

第六条　委員長は、センター長をもって充てる。

２　委員長は、必要があると認めるときは、委員会の同意を得て、委員以外の者を委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

（専門委員会）

第七条　委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、専門委員会を置く。

２　専門委員会は、委員長及び次の各号に掲げる専門委員をもって組織する。

一　調査研究員

二　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授　若干名

三　施設部企画課長

四　発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

３　委員長は、センター長をもって充てる。

（委嘱）

第八条　第五条第一号から第三号までに掲げる委員並びに前条第二項第二号及び第四号に掲げる専門委員は、総長が委嘱する。

（幹事）

第九条　委員会に幹事を置き、施設部企画課長をもって充てる。

（事務）

第十条　センターの事務は、当分の間、事務局施設部において処理する。

（雑則）

第十一条　この規程に定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項は、センター長が定める。

附　則（略）

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会(2000年3月現在)

委員長	センター長	（文学部　教授）	須藤　隆
	川内地区協議会	（法学部　教授）	寺田浩明
	青葉山地区協議会	（理学部　教授）	田村俊和
	星陵地区協議会	（医学部　教授）	菅村和夫
	片平地区協議会	（素材工学研究所　教授）	早稲田嘉夫
	文学部	教授	今泉隆雄
	文学部	教授	大藤　修
	文学部	教授	阿子島　香
	理学部	教授	蟹澤聰史
	工学部	教授	飯淵康一
	東北アジア研究センター	教授	入間田宣夫
	総合学術博物館	教授	柳田俊雄
	施設部	長	黒岩七三
幹事	施設部	企画課長	佐々木紀安

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会(2000年3月現在)

委員長	センター長（文学部　教授）	須藤　隆
	文学部	教授	今泉隆雄
	文学部	教授	大藤　修
	文学部	教授	阿子島　香
	理学部	教授	蟹澤聰史
	工学部	教授	飯淵康一
	東北アジア研究センター	教授	入間田宣夫
	総合学術博物館	教授	柳田俊雄
	調査研究員（文学部　助手）	藤沢　敦
	調査研究員（文学部　助手）	関根達人
	調査研究員（文学部　助手）	奈良佳子
	施設部	企画課長	佐々木紀安

目　　次

巻頭カラー図版

序
例言
凡例
東北大学埋蔵文化財調査研究センター設置規程
東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員
東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会委員
目次
図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章　1995年度調査の概要……1
　1．はじめに……1
　2．埋蔵文化財調査の概要……1
　（1）川内地区の調査……1
　（2）青葉山地区の調査……4
　（3）富沢地区の調査……4
　3．その他のセンターの活動……4
第Ⅱ章　仙台城二の丸跡第11地点（NM11）の調査……9
　1．調査地点の位置……9
　2．調査経緯……9
　3．検出遺構と出土遺物……11
　4．まとめ……14
第Ⅲ章　仙台城二の丸北方武家屋敷跡第4地点（BK4）の調査……15
　1．仙台城二の丸跡と
　　二の丸北方武家屋敷の立地と歴史……15
　2．調査経緯……15
　（1）1994年度までの調査……15
　（2）調査地点の位置……16
　（3）調査の方法と経過……16
　3．基本層序……18
　4．検出遺構……21
　（1）江戸時代以前の遺構……21
　（2）江戸時代の遺構……23
　　①時期区分の方法……23
　　②Ⅰa期の遺構……25
　　③Ⅰb期の遺構……37
　　④細分時期不明のⅡ期の遺構……38
　　⑤Ⅱa期の遺構……39
　　⑥Ⅱb1期の遺構……47
　　⑦Ⅱb2期の遺構……50
　　⑧Ⅱb3期の遺構……55
　（3）4層上面の遺構……63
　（4）3層上面の遺構……70
　（5）2層上面の遺構……70
　5．出土遺物……72
　（1）江戸時代以前の遺物……72
　　①縄文土器・弥生土器……72
　　②石器……73
　　③須恵器……74
　　④古代の瓦……75
　（2）江戸時代以降の遺物……75
　　①陶磁器……75
　　②欧質施釉土器……79
　　③土師質・瓦質土器……79
　　④土人形・土製玩具……81

⑤瓦……84
⑥金属製品……84
⑦石製品……85
⑧その他の遺物……86
6．自然科学的分析 ……157
（1）花粉分析・プラントオパール分析 …157
（2）植物遺体 ……165
7．考察 ……166
（1）検出遺構の検討 ……166
①絵図との対比による屋敷地の推定 …166
②屋敷内の土地利用 ……167
③建物跡・柱列の柱間寸法 ……168
④地鎮遺構について ……169
（2）陶磁器・土器の検討 ……169
①陶磁器・土器の種類別組成の検討 …169
②陶磁器の産地別組成の検討 ……170
③岸窯系陶器の分布と編年 ……174
（3）土人形・土製玩具の検討 ……178
①土人形 ……178
②土製玩具 ……181
③小結 ……182
8．まとめ ……182
第Ⅳ章　青葉山遺跡E地点第4次調査（AOE4） ……184
1．調査経緯 ……184
（1）青葉山地区の立地と
1994年までの調査 ……184
（2）調査地点の位置 ……184
（3）調査の方法と経過 ……184
2．基本層序 ……186
3．検出遺構 ……186
4．出土遺物 ……194
（1）遺物の出土状況 ……194
（2）縄文土器 ……194
（3）石器 ……195
（4）土師器 ……195
5．まとめ ……195

引用・参考文献 ……200
英文要旨 ……204

写真図版 ……207

研究編
東北大学構内（仙台城二の丸跡）遺跡出土漆器資料の材質と製作技法
くらしき作陽大学　食文化学部　北野信彦 ……283

図　目　次

図1　東北大学と周辺の遺跡……2
図2　仙台城と二の丸の位置……3
図3　仙台城二の丸跡・武家屋敷跡調査地点……5
図4　青葉山地区調査地点……7
図5　仙台城二の丸跡第11地点調査区の位置……9
図6　仙台城二の丸跡第11地点平面図……10
図7　仙台城二の丸跡第11地点断面図……11
図8　仙台城二の丸跡第11地点出土瓦……13
図9　仙台城二の丸北方武家屋敷跡
　第4地点調査区の位置……17
図10　武家屋敷跡第4地点
　基本層序模式図……18
図11　武家屋敷跡第4地点外周壁セクション(1)……19
図12　武家屋敷跡第4地点外周壁セクション(2)……20
図13　武家屋敷跡第4地点6層の分布範囲……22
図14　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅰa期遺構配置図……26
図15　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅰb期遺構配置図……27
図16　武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構(1)……28
図17　武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構(2)……29
図18　武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構(3)……30
図19　武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構(4)……31
図20　武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構(5)……32
図21　武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構(6)……33
図22　武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構(7)……34
図23　武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構(8)……35
図24　武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構(9)……36
図25　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱa期遺構配置図……40
図26　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱa期の遺構(1)……41
図27　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱa期の遺構(2)……42
図28　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱa期の遺構(3)……43
図29　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱa期の遺構(4)……44
図30　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱa期の遺構(5)……45
図31　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb！期遺構配置図……48
図32　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb1期の遺構(1)……49
図33　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb1期の遺構(2)……50
図34　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb1期の遺構(3)……50
図35　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb2期遺構配置図……51
図36　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb2期の遺構(1)……52
図37　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb2期の遺構(2)……53
図38　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb2期の遺構(3)……54
図39　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb3期遺構配置図……57
図40　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb3期の遺構(1)……58
図41　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb3期の遺構(2)……59
図42　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb3期の遺構(3)……60
図43　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb3期の遺構(4)……61
図44　武家屋敷跡第4地点
　江戸時代Ⅱb3期の遺構(5)……62
図45　武家屋敷跡第4地点4層上面遺構配置図……64
図46　武家屋敷跡第4地点4層上面の遺構(1)……65
図47　武家屋敷跡第4地点4層上面の遺構(2)……65
図48　武家屋敷跡第4地点4層上面畑跡の区画……65
図49　武家屋敷跡第4地点3層上面遺構配置図……66
図50　武家屋敷跡第4地点2層上面遺構配置図……67
図51　武家屋敷跡第4地点2層上面の遺構(1)……68
図52　武家屋敷跡第4地点2層上面の遺構(2)……69
図53　武家屋敷跡第4地点2層上面の遺構(3)……70
図54　武家屋敷跡第4地点2層上面の遺構(4)……71
図55　武家屋敷跡第4地点
　1・3・4・6号建物跡の関係……72
図56　武家屋敷跡第4地点出土原始・古代の遺物……87
図57　武家屋敷跡第4地点出土石器(1)……88
図58　武家屋敷跡第4地点出土石器(2)……89
図59　武家屋敷跡第4地点出土磁器(1)……90
図60　武家屋敷跡第4地点出土磁器(2)……91
図61　武家屋敷跡第4地点出土磁器(3)……92
図62　武家屋敷跡第4地点出土磁器(4)……93
図63　武家屋敷跡第4地点出土磁器(5)……94

図64　武家屋敷跡第4地点出土磁器(6)……95
図65　武家屋敷跡第4地点出土磁器(7)……96
図66　武家屋敷跡第4地点出土磁器(8)……97
図67　武家屋敷跡第4地点出土磁器(9)……98
図68　武家屋敷跡第4地点出土磁器(10)……99
図69　武家屋敷跡第4地点出土磁器(11)……100
図70　武家屋敷跡第4地点出土陶器(1)……101
図71　武家屋敷跡第4地点出土陶器(2)……102
図72　武家屋敷跡第4地点出土陶器(3)……103
図73　武家屋敷跡第4地点出土陶器(4)……104
図74　武家屋敷跡第4地点出土陶器(5)……105
図75　武家屋敷跡第4地点出土陶器(6)……106
図76　武家屋敷跡第4地点出土陶器(7)……107
図77　武家屋敷跡第4地点出土陶器(8)……108
図78　武家屋敷跡第4地点出土陶器(9)……109
図79　武家屋敷跡第4地点出土陶器(10)……110
図80　武家屋敷跡第4地点出土陶器(11)……111
図81　武家屋敷跡第4地点出土陶器(12)……112
図82　武家屋敷跡第4地点出土土器(1)……113
図83　武家屋敷跡第4地点出土土器(2)……114
図84　武家屋敷跡第4地点出土土器(3)……115
図85　武家屋敷跡第4地点出土土器(4)……116
図86　武家屋敷跡第4地点出土土器(5)……117
図87　武家屋敷跡第4地点出土土人形・玩具(1)……118
図88　武家屋敷跡第4地点出土土人形・玩具(2)……119
図89　武家屋敷跡第4地点出土土人形・玩具(3)……120
図90　武家屋敷跡第4地点出土土人形・玩具(4)……121
図91　武家屋敷跡第4地点出土瓦(1)……122
図92　武家屋敷跡第4地点出土瓦(2)……123
図93　武家屋敷跡第4地点出土古銭(1)……124
図94　武家屋敷跡第4地点出土古銭(2)……125
図95　武家屋敷跡第4地点出土金属製品(1)……126
図96　武家屋敷跡第4地点出土金属製品(2)……127
図97　武家屋敷跡第4地点出土石製品(1)……128
図98　武家屋敷跡第4地点出土石製品(2)……129
図99　武家屋敷跡第4地点出土その他の遺物……130
図100　武家屋敷跡第4地点における花粉組成……159
図101　武家屋敷跡第4地点の花粉・胞子遺体……160
図102　武家屋敷跡第4地点の植物珪酸体
　　(プラント・オパール)の顕微鏡写真……163
図103　武家屋敷跡第4地点調査区周辺の絵図……166
図104　武家屋敷跡第4地点武家区画推定図……167
図105　慶応元年仙台城下図屏風(第6扇)……168
図106　武家屋敷跡第4地点陶磁器変遷図……171
図107　武家屋敷跡第4地点
　　陶磁器・土器種類別組成の変遷……172
図108　武家屋敷跡第4地点
　　磁器産地別組成の変遷……173
図109　武家屋敷跡第4地点
　　陶器産地別組成の変遷……173
図110　岸窯系陶器出土遺跡分布図……175
図111　岸窯系陶器編年案……177
図112　武家屋敷跡第4地点出土
　　土人形と各地の土人形……179
図113　武家屋敷跡第4地点出土玩具と各地の玩具…180
図114　青葉山遺跡E地点第4次調査調査区の位置…185
図115　青葉山遺跡E地点第4次調査遺構配置図……187
図116　青葉山遺跡E地点第4次調査断面図(1)……188
図117　青葉山遺跡E地点第4次調査断面図(2)……189
図118　青葉山遺跡E地点第4次調査断面図(3)……190
図119　青葉山遺跡E地点第4次調査断面図(4)……191
図120　青葉山遺跡E地点第4次調査検出遺構(1)……192
図121　青葉山遺跡E地点第4次調査検出遺構(2)……193
図122　青葉山遺跡E地点第4次調査
　　グリッド別遺物密度……196
図123　青葉山遺跡E地点第4次調査出土遺物(1)……197
図124　青葉山遺跡E地点第4次調査出土遺物(2)……198

表　目　次

表1　1995年度調査概要表……1
表2　仙台城二の丸跡第11地点
　　出土遺物集計表……14
表3　仙台城二の丸跡第11地点出土瓦観察表……14
表4　武家屋敷跡第4地点出土
　　原始・古代の遺物集計表……131
表5　武家屋敷跡第4地点出土磁器集計表(1)……132
表6　武家屋敷跡第4地点出土磁器集計表(2)……133
表7　武家屋敷跡第4地点出土陶器集計表(1)……133
表8　武家屋敷跡第4地点出土陶器集計表(2)……134
表9　武家屋敷跡第4地点出土陶器集計表(3)……134
表10　武家屋敷跡第4地点出土陶器集計表(4)……135
表11　武家屋敷跡第4地点出土
　　土人形・玩具集計表(1)……136
表12　武家屋敷跡第4地点出土
　　土人形・玩具集計表(2)……137
表13　武家屋敷跡第4地点出土
　　近世・近代瓦集計表(1)……138

表14　武家屋敷跡第４地点出土
近世・近代瓦集計表(2) ……139
表15　武家屋敷跡第４地点出土
硬質陶器・軟質施釉土器集計表 ……139
表16　武家屋敷跡第４地点出土
木・竹・漆塗製品集計表 ……139
表17　武家屋敷跡第４地点出土
金属製品集計表(1) ……140
表18　武家屋敷跡第４地点出土
金属製品集計表(2) ……141
表19　武家屋敷跡第４地点出土
その他の遺物集計表 ……141
表20　武家屋敷跡第４地点出土
土師質土器・瓦質土器集計表(1) ……142
表21　武家屋敷跡第４地点出土
土師質土器・瓦質土器集計表(2) ……143
表22　武家屋敷跡第４地点出土瓦質土器観察表 ……143
表23　武家屋敷跡第４地点出土磁器観察表(1) ……144
表24　武家屋敷跡第４地点出土磁器観察表(2) ……145
表25　武家屋敷跡第４地点出土磁器観察表(3) ……146
表26　武家屋敷跡第４地点出土陶器観察表(1) ……147
表27　武家屋敷跡第４地点出土陶器観察表(2) ……148
表28　武家屋敷跡第４地点出土陶器観察表(3) ……149
表29　武家屋敷跡第４地点出土
土師質土器皿観察表 ……150
表30　武家屋敷跡第４地点出土
土師質土器(皿以外)観察表 ……150
表31　武家屋敷跡第４地点出土
土人形・玩具観察表(1) ……151
表32　武家屋敷跡第４地点出土
土人形・玩具観察表(2) ……152
表33　武家屋敷跡第４地点出土
軟質施釉土器観察表 ……152
表34　武家屋敷跡第４地点出土
近世・近代瓦集計表(2) ……152
表35　武家屋敷跡第４地点出土古銭観察表(1) ……153
表36　武家屋敷跡第４地点出土古銭観察表(2) ……154
表37　武家屋敷跡第４地点出土漆器観察表 ……154
表38　武家屋敷跡第４地点出土煙管(雁首)観察表 …154
表39　武家屋敷跡第４地点出土煙管(吸口)観察表 …155
表40　武家屋敷跡第４地点出土
その他の金属製品観察表 ……155
表41　武家屋敷跡第４地点出土石製品観察表 ……155
表42　武家屋敷跡第４地点出土ガラス製品観察表 …155
表43　武家屋敷跡第４地点出土骨角製品観察表 ……155
表44　武家屋敷跡第４地点出土
その他の遺物観察表 ……155
表45　武家屋敷跡第４地点出土縄文土器・
弥生土器・須恵器・古代の瓦観察表 ……156
表46　武家屋敷跡第４地点出土石器観察表 ……156
表47　武家屋敷跡第４地点における花粉分析結果 …158
表48　武家屋敷跡第４地点における
プラント・オパール分析結果 ……162
表49　武家屋敷跡第４地点出土の植物遺体 ……165
表50　絵図に見える人名 ……167
表51　仙台藩の家格と採禄 ……167
表52　武家屋敷跡第４地点
陶磁器・土器種類別組成の変遷 ……172
表53　武家屋敷跡第４地点磁器産地別組成の変遷 …173
表54　武家屋敷跡第４地点陶器産地別組成の変遷 …173
表55　岸窯系陶器出土遺跡・窯 ……175
表56　青葉山遺跡E地点第４次調査出土
土器観察表 ……199
表57　青葉山遺跡E地点第４次調査出土
石器観察表 ……199

図　版　目　次

図版１　仙台城二の丸跡第11地点調査状況(1) ……207
図版２　仙台城二の丸跡第11地点調査状況(2) ……208
図版３　仙台城二の丸跡第11地点出土瓦 ……209
図版４　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構全景(1) ……210
図版５　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構全景(2) ……211
図版６　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構全景(3) ……212
図版７　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構全景(4) ……213
図版８　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構全景(5) ……214
図版９　武家屋敷跡第４地点外周塁セクション ……215
図版10　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(1)建物跡 ……216
図版11　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(2)建物跡 ……217
図版12　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(3)建物跡 ……218

図版13　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(4)建物跡・柱列 ……219
図版14　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(5)柱列 ……220
図版15　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(6)柱列 ……221
図版16　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(7)２号池 ……222
図版17　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(8)２号池 ……223
図版18　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(9)３号池 ……224
図版19　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(10)溝 ……225
図版20　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(11)溝 ……226
図版21　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(12)溝 ……227
図版22　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(13)溝 ……228
図版23　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(14)溝 ……229
図版24　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(15)石敷溝 ……230
図版25　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(16)井戸 ……231
図版26　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(17)井戸 ……232
図版27　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(18)土坑 ……233
図版28　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(19)土坑 ……234
図版29　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(20)土坑 ……235
図版30　武家屋敷跡第４地点
江戸時代の遺構(21)その他の遺構 ……236
図版31　武家屋敷跡第４地点４層上面の遺構 ……237
図版32　武家屋敷跡第４地点
４層上面・３層上面の遺構 ……238
図版33　武家屋敷跡第４地点２層上面の遺構(1) ……239
図版34　武家屋敷跡第４地点２層上面の遺構(2) ……240
図版35　武家屋敷跡第４地点出土
原始・古代の遺物(1) ……241
図版36　武家屋敷跡第４地点出土
原始・古代の遺物(2)石器 ……242
図版37　武家屋敷跡第４地点出土磁器(1) ……243
図版38　武家屋敷跡第４地点出土磁器(2) ……244
図版39　武家屋敷跡第４地点出土磁器(3) ……245
図版40　武家屋敷跡第４地点出土磁器(4) ……246
図版41　武家屋敷跡第４地点出土磁器(5) ……247
図版42　武家屋敷跡第４地点出土磁器(6) ……248
図版43　武家屋敷跡第４地点出土磁器(7) ……249
図版44　武家屋敷跡第４地点出土陶器(1) ……250
図版45　武家屋敷跡第４地点出土陶器(2) ……251
図版46　武家屋敷跡第４地点出土陶器(3) ……252
図版47　武家屋敷跡第４地点出土陶器(4) ……253
図版48　武家屋敷跡第４地点出土陶器(5) ……254
図版49　武家屋敷跡第４地点出土陶器(6) ……255
図版50　武家屋敷跡第４地点出土陶器(7) ……256
図版51　武家屋敷跡第４地点出土陶器(8) ……257
図版52　武家屋敷跡第４地点出土陶器(9) ……258
図版53　武家屋敷跡第４地点出土陶器(10) ……259
図版54　武家屋敷跡第４地点出土陶器(11) ……260
図版55　武家屋敷跡第４地点出土土器(1) ……261
図版56　武家屋敷跡第４地点出土土器(2) ……262
図版57　武家屋敷跡第４地点出土土器(3) ……263
図版58　武家屋敷跡第４地点出土
土人形・玩具(1) ……264
図版59　武家屋敷跡第４地点出土
土人形・玩具(2) ……265
図版60　武家屋敷跡第４地点出土瓦(1) ……266
図版61　武家屋敷跡第４地点出土瓦(2) ……267
図版62　武家屋敷跡第４地点出土古銭(1) ……268
図版63　武家屋敷跡第４地点出土古銭(2) ……269
図版64　武家屋敷跡第４地点出土金属製品(1) ……270
図版65　武家屋敷跡第４地点出土金属製品(2) ……271
図版66　武家屋敷跡第４地点出土石製品 ……272
図版67　武家屋敷跡第４地点出土その他の遺物 ……273
図版68　武家屋敷跡第４地点
出土遺物の赤外線写真 ……274
図版69　青葉山遺跡E地点第４次調査区
全景・北壁セクション ……275
図版70　青葉山遺跡E地点第４次調査セクション …276
図版71　青葉山遺跡E地点第４次調査
セクション・遺物出土状況 ……277
図版72　青葉山遺跡E地点第４次調査
検出遺構(1) ……278
図版73　青葉山遺跡E地点第４次調査
検出遺構(2) ……279
図版74　青葉山遺跡E地点第４次調査
検出遺構(3) ……280
図版75　青葉山遺跡E地点第４次調査出土遺物 ……281

第Ⅰ章　1995年度調査の概要

1．はじめに

東北大学には、仙台市内の各キャンパスに加えて、多くの研究施設がある。これらの各地区構内には、多くの埋蔵文化財が存在し、特に川内地区は近世の仙台城二の丸跡と武家屋敷跡にあたり、青葉山地区には旧石器時代から古代の遺跡が存在する（図1）。

東北大学構内の埋蔵文化財については、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が組織されて以降、その実務機関である埋蔵文化財調査室が、その調査の任にあたってきた。1994年度からは、埋蔵文化財調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置され、調査委員会の事業を引き継いでいる。

1995年度においても、川内地区・青葉山地区で調査が行われ、新たな資料を提供することとなった。本年報は、これらの調査研究の成果についてまとめたものである。

2．埋蔵文化財調査の概要

1995年度は、川内地区・青葉山地区・宮沢地区において、本調査3件、立会調査6件の、合計9件の調査を実施した（表1）。

(1)　川内地区の調査

川内地区では、本調査2件、立会調査4件を実施した（図3）。

仙台城二の丸跡第11地点は、植物園本館新営に伴う調査である。ここでは、1992年度に試掘調査を実施している。その後の建築計画の具体化によって、新築される建物基礎で削平される範囲が僅かとなったため、工事で削平される部分のみを本調査の対象とした。また、付帯施設部分については、立会調査で対処している。これについては、1992年度の試掘調査結果をあわせて、本年報の第Ⅱ章で報告する。

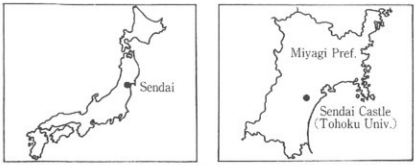
仙台城二の丸北方武家屋敷跡第4地点は、課外活動施設新営に伴う調査である。前年度の8月から調査を開始しており、厳寒期の1・2月は調査を中断したが、2ヶ年にわたる調査となった。これについては、1985年度の試掘調査を合わせて、本年報の第Ⅲ章で報告する。

立会調査としたものの内、ATMネットワーク整備に伴う調査は、一部青葉山地区も含んでいる。具体的な工事はケーブルの埋設で、掘削深度もさほど深くなく面積も狭いため、立会調査とした。女子便所取設は、川内北地区のB講義棟北側で、これまでの周辺の立会調査によって、かなり削平を受けていることが確実な場所であったため立会調査とした。川内南地区環境整備は、道路の中央分離帯設置・舗装改修や外灯改修などの工事であっ

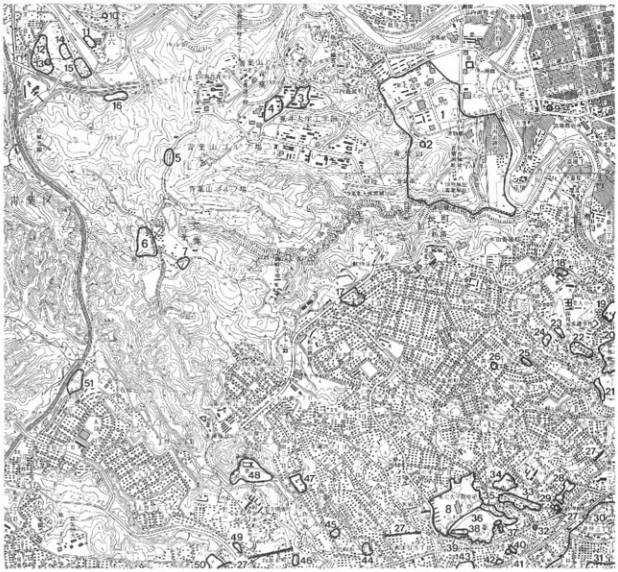
表1　1995年度調査概要表

Tab.1　Excavations on the campus in the fiscal year 1995

調査の種類	調査地点（略号）	原因	調査期間	面積	時期
本調査	仙台城二の丸跡第11地点(NM11)	理学部附属植物園本館新営	10/30~31、11/27~30 12/8~4/11	35m²	近世
	仙台城二の丸北方武家屋敷跡 第4地点(HK4)	課外活動施設新営	3/1~8/31、12/18~4/10	1,143m²	近世・縄文・弥生・古代
	青葉山遺跡E地点第4次調査	理学部研究実験棟新営	7/24~12/15、3/1~4/2	1,380m²	縄文(草・晩)
立会調査	川内地区・青葉山地区(95-1)	ATMネットワーク取設	11/7	—	—
	川内北地区講義棟北側(95-2)	女子便所取設	1/11	—	—
	宮沢地区原子核理学研究施設(95-3)	ビーム偏向室取設	3/19	—	—
	川内南地区(95-4)	環境整備	3/21~25	—	—
	川内北地区B200教室冷房制(95-5)	パラボラアンテナ取設	3/20~25	—	—



1 : Ruin of Sendai Castle
2 : Kawauchi steles
3 : Aobayama Site Loc. B
4 : Aobayama Site Loc. E
5 : Aobayama Site Loc. C
6 : Aobayama Site Loc. A
7 : Aobayama Site Loc. D
8 : Ashinokuchi Site



1：仙台城跡　2：川内古碑群　3：青葉山遺跡B地点　4：青葉山遺跡E地点　5：青葉山遺跡C地点
6：青葉山遺跡A地点　7：青葉山遺跡D地点　8：芦ノ口遺跡　9：片平台台大神宮の夜碑　10：縄六大日如来の碑
11：荒巻城跡　12：縄六城跡　13：縄六建武碑　14：荒巻遺跡　15：縄六銅鏡跡　16：縄六遺跡　17：松ヶ岡遺跡
18：向山高裏遺跡　19：萩ヶ丘遺跡　20：夜ヶ崎城跡　21：二ツ沢横穴墓群　22：萩ヶ岡B遺跡　22：八木山緑町遺跡
24：二ツ沢遺跡　25：青山二丁目遺跡　26：青山二丁目B遺跡　27：杉土手(抱除土手)　28：砂押屋敷遺跡
29：砂押古墳　30：富沢遺跡　31：泉崎浦遺跡　32：金洗沢古墳　33：土手内窯跡　34：土手内遺跡
35：土手内横穴墓群　36：三神峯遺跡　37：金山窯跡　38：三神峯古墳群　39：富沢窯跡　40：裏町窯遺跡
41：裏町古墳　42：芦東遺跡　43：原遺跡　44：八幡遺跡　45：後田遺跡　46：町遺跡　47：神殿山遺跡
48：御堂平遺跡　49：上野山遺跡　50：北筋遺跡　51：佐保山東遺跡

図1　東北大学と周辺の遺跡
Fig. 1　Archaeological sites and Tohoku University

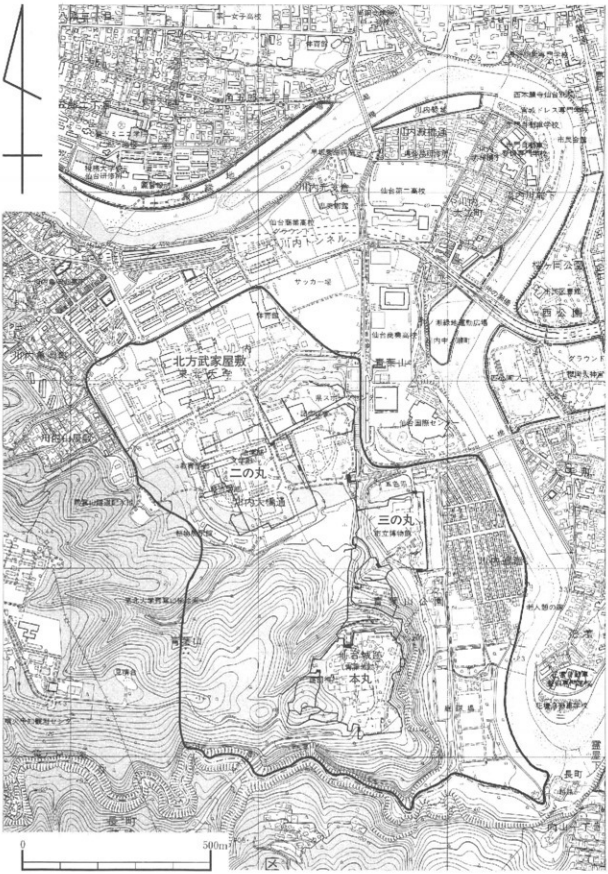


図2　仙台城と二の丸の位置
Fig. 2　Distribution of Sendai Castle

た。外灯改修も、既存外灯を同じ位置で取り替える形となり、大きな掘削を伴なう工事は、ほとんどなかったため立会調査とした。パラボラアンテナ取設は、近代以降の大規模な盛土が施されている場所であったため、立会調査とした。いずれの調査においても、江戸時代の層位まで影響が及ぶような部分は認められなかった。

⑵ 青葉山地区の調査

青葉山地区では、本調査１件、立会調査１件を実施した（図４）。

本調査を実施したのは、理学部研究実験棟新営に伴う、青葉山遺跡Ｅ地点第４次調査である。この理学部研究実験棟は、３期に分けて工事を行う計画で、今回は、その１期工事区域の調査である。調査地点は、前年度に実施した青葉山遺跡Ｅ地点第３次調査の西側に隣接する場所である。第３次調査では、縄文時代早期後葉の貝殻条痕文土器や石器が大量に出土した他、同時期の竪穴住居などが検出されている。今回の調査でも、縄文時代早期の遺物が出土したほか、縄文時代晩期の遺物も出土した。これについては、本年報の第Ⅳ章で報告する。

立会調査を行ったのは、ＡＴＭネットワーク整備に伴うもので、遺構・遺物は検出されていない。

⑶ 富沢地区の調査

富沢地区では、立会調査１件を実施した。

富沢地区には、理学部附属原子核理学研究施設が置かれているが、この実験施設に付随するビーム偏向室を設置するのに伴なう調査である。工事予定場所は、本体の実験施設建設時の余掘りで掘削を受け、さらに大規模な盛土がなされている場所であったため、立会調査とした。調査の結果、遺構・遺物は発見されていない。

３．その他のセンターの活動

武家屋敷跡第４地点の調査では、調査成果の概要が固まった７月１日に現地説明会を開催し、100名あまりの参加を得た。またこれに先だって、報道機関に対して調査成果の発表を行っている。この武家屋敷跡第４地点については、東北史学会と宮城県遺跡調査成果発表会で、調査成果の概要を発表した。日時・題目・発表者などは下記の通りである。

東北史学会　10月１日　於：岩手大学

発表題目「仙台城北方武家屋敷地区の調査」発表者：菊池佳子

宮城県遺跡調査成果発表会　12月９日　於：多賀城市文化センター

発表題目「仙台城二の丸北方武家屋敷地区第４次調査」　発表者：菊池佳子

センター業務に関わる資料調査としては、以下の２件の調査を行い、それぞれ担当する調査研究員が出張した。

２月５・６日　福島県鹿島町教育委員会・同浪江町（大月平窯跡出土資料など）　関根達人・菊池佳子

２月10・11日　江戸遺跡研究会第９回大会「江戸時代の墓と葬制」於：江戸東京博物館

藤沢敦・関根達人・菊池佳子

当センター保管の資料の貸出としては、次の１件であった。

貸出先：仙台市博物館　新館開館10周年記念特別展「世界と日本－天正・慶長の使節－」

貸出資料：二の丸跡第９地点出土南蛮人人形　貸出期間：1995年９月29日～12月５日

図3　仙台城二の丸跡・武家屋敷跡調査地点

Fig. 3　Location of excavations until 1995 at *Ninomaru* (NM i.e. Secondary Citadel) and *samurai* residence (BK)

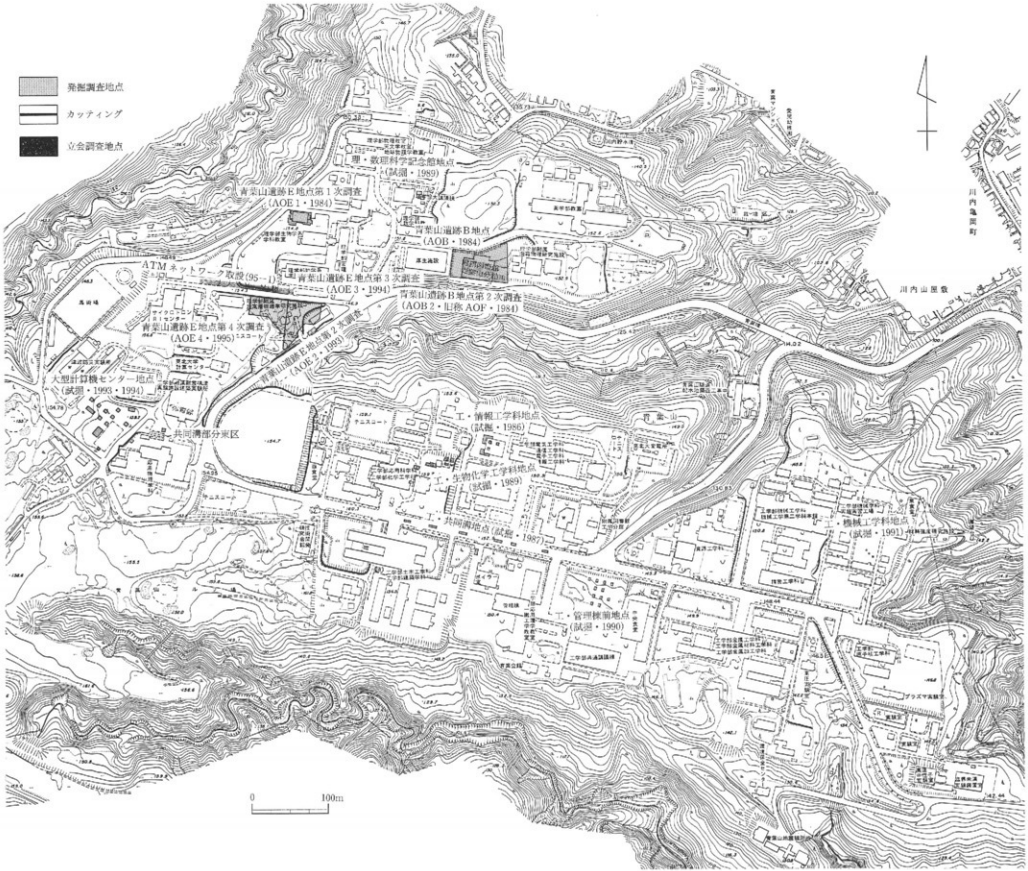


図4　青葉山地区調査地点
Fig. 4　Location of excavations at Aobayama campus

第Ⅱ章　仙台城二の丸跡第11地点(ＮＭ11)の調査

１．調査地点の位置

今回の調査地点は、仙台城二の丸跡の南西隅に近い、丘陵裾にあたる場所である(図５)。調査区の北西20mのところにある植物標本館（通称沖田記念館）は、1985年度に調査を実施した、仙台城二の丸跡第６地点の調査区にあたる。この第６地点では、南西側の丘陵から下ってくる、２条の溝が検出されている。また、植物園本館と第６地点の調査区の南西側の一段高いところには、二の丸最西端の塀の基礎と考えられる石組遺構が、南北に連なっていることが、第６地点の調査の際に確認されている(年報３)。したがって今回の調査地点も、二の丸最西端に近い場所にあたる。なお、仙台城と二の丸の立地と歴史については、第Ⅲ章１を参照されたい。

２．調査経緯

仙台城二の丸から本丸の西側、すなわち裏側にあたる山林は、藩政時代には「御裏林」と呼ばれ、立ち入りが厳しく制限されていた。明治以降は、二の丸跡に陸軍第二師団司令部が置かれたことから、引き続き一般の立入が禁止された区域となってきた。戦後も、駐留軍用地として立入禁止区域にされてきた。このため、この丘陵地一帯は、自然林としての環境を良好に残す結果となり、1958年の東北大学移管後に理学部附属植物園となっている。1972年には、附属植物園の総面積の85％が、国の天然記念物「青葉山」として指定を受けている。この植物園を管理する本館は、植物園北側の丘陵裾に存在する米軍時代の建物を利用しており、老朽化が著しくなっていた。

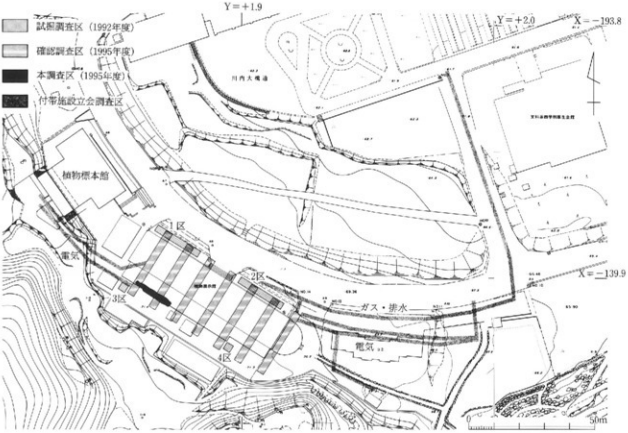
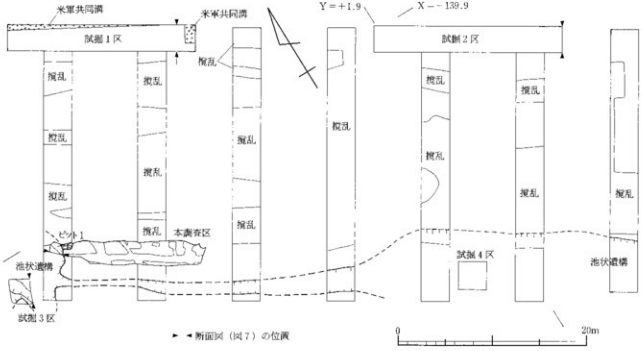


図５　仙台城二の丸跡第11地点調査区の位置
Fig. 5　Location of NM11 (NM11 i.e. Location 11 of *Ninomaru*)


米軍共同溝
米軍共同溝
Y＝＋1.9
X－－139.9
試掘1区
試掘2区
撹乱
撹乱
撹乱

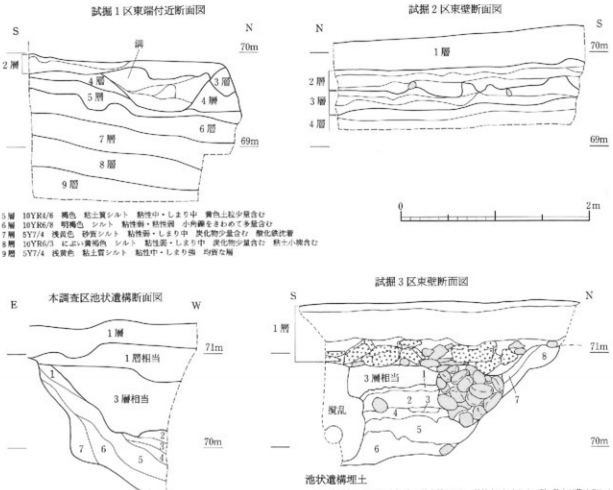


図７　仙台城二の丸跡第11地点断面図
Fig. 7　Cross sections at NM11

３．検出遺構と出土遺物（図６・７、表２・３、図版１～３）

基本層序は、１～９層まで確認した。旧本館北側の試掘１区と２区では、１層から９層までの層序が確認されたが、南側では、１層と３層に相当すると考えられる層のみが存在する（図７）。そのため、現在は平坦な地形であるが、もともとは南から北へ、かなり傾斜していたものと考えられる。

１層は、現表土である。

２層は、黄褐色シルトを基調とするが、場所によって細かな様相が異なる。明治以降の整地層と考えられ、米軍時代の整地の可能性が高い。

３層は、試掘１区の厚い所で80cmにおよぶ整地層である。様々な層相の土が使用されている。中には、亜炭や凝灰岩など、青葉山丘陵地帯の基盤をなす地層に由来すると考えられる部分もある。丘陵裾の部分などを大規模に削平した際に発生した土を、整地に利用したものであろう。試掘１区の米軍共同溝による撹乱の壁における観

察で、東から西に傾斜する方向で、整地が進められていった様子が良く確認できた。試掘３区では、この３層に相当すると考えられる層によって、池状遺構が埋められ、その上から暗渠が掘り込まれている。暗渠は明治時代の第二師団期のものと考えられ、３層の整地も第二師団期のものと考えられる。また、亜炭を整地に使用した例は、これまでの調査では、二の丸期の整地層には確認されていないことも、この推定を支持する。

４層も場所によって、細かな様相が異なる。褐色から黄褐色のシルトあるいは粘土質シルトを主体とする整地層である。時期の判明する出土遺物が無いが、次の５層以下が比較的均質であるのに対して不均質であるなど、層相が異なることから、明治時代の整地層の可能性が考えられる。

５層以下の８層までは整地層と考えられるが、含有物が少なく、比較的均質である。出土遺物が無いため、詳細な時期が明らかにできないが、江戸時代のものと考えられる。

９層は、含有物が全く認められない均質な層で、地山の可能性もあるが、南側の試掘３区・４区と本調査区では、地山は砂質の堅くしまった地層であり、違いが大きいため、整地層の可能性も残る。

試掘調査と本調査を合わせて、検出された遺構は、一連の池状遺構と、ピット１基だけであった（図６・７）。試掘１区と２区では、江戸時代に遡る遺構は検出されていない。１区で溝が検出されているが、３層上面から掘り込まれており、明治以降のものである。

【池状遺構】

試掘３区・同４区と本調査区で検出されている他、確認調査においても、その輪郭を連続して確認している。不整形の池状の落ち込みが、溝によってつながっているものと考えられる。おそらく、丘陵裾をめぐるような形で、さらに南東にのびていくものと考えられる。南北の幅は、池状の部分では7.6m以上、溝の部分では1.2m程である。深さは、試掘１区と本調査区では1.5m程、試掘２区では、２mの深さまで調査したが、底まで達しておらず、さらに深くなることは確実である。埋土は自然堆積と考えられ、粘土や砂がラミナ状に入ったり、植物遺体が含まれる部分が多い。ある程度埋まった後、上部は不均質な土で一気に埋められており、その上面に石を詰めた暗渠が造られている。時期が判明するような遺物は出土しておらず、詳細な時期は確認できない。埋め戻された後に造られた暗渠は、明治の第二師団期のものと考えられ、池状遺構は江戸時代に遡るものと考えられる。

二の丸を描いた絵図では、今回検出された池状遺構に確実に対応するような施設は描かれていないが、調査地点の東側にあたるところに二の丸西端をめぐるような形で溝状の施設が描かれている。今回の調査区の南西側の丘陵には、小規模な沢が入っており、現在も大雨時には、多量の出水が見られる。今回検出された池状施設、あるいは絵図に見られる二の丸西端をめぐる溝は、二の丸背後の丘陵から流れ出す水流が、直接二の丸建物群の方向へ向かわないよう、丘陵裾をめぐる形で水を逃がす目的の施設と考えられる。

【ピット１】

本調査区において、池状遺構のすぐ近くで検出されたものである。時期の判明するような遺物は出土していない。

今回の調査で出土した遺物は、極めて少ない（表２）。試掘調査区・本調査区では、ごく僅かの出土に留まり、時期などが判明する遺物はない。付帯施設部分の立会調査において、瓦がややまとまって出土しているが、江戸時代に遡る層位からの出土ではない。瓦以外の遺物では、その特徴が判明するようなものがないため、図示したものはない。二の丸西端に近い場所であり、日常の生活とは離れた場所であることを伺わせる。

瓦は、板塀瓦と平瓦２類が多数を占める。平瓦２類は、細かな種類が不明なもののうち、平坦な瓦をまとめており、多くは板塀瓦と推定される。調査区の西側には、二の丸最西端の塀が存在しており、そこで使用された板塀瓦に由来するものが多く含まれている結果であろう。出土した瓦の内、特徴が判明する資料を、図８・表３に示した。２・３の「宮」に続けて漢数字が２つ並ぶ刻印は、これまでの二の丸跡の調査で多数出土しているが、いずれも桟瓦に伴うものである。引掛桟瓦の例もあり（第９地点、年報８）、明治時代の所産であろう。

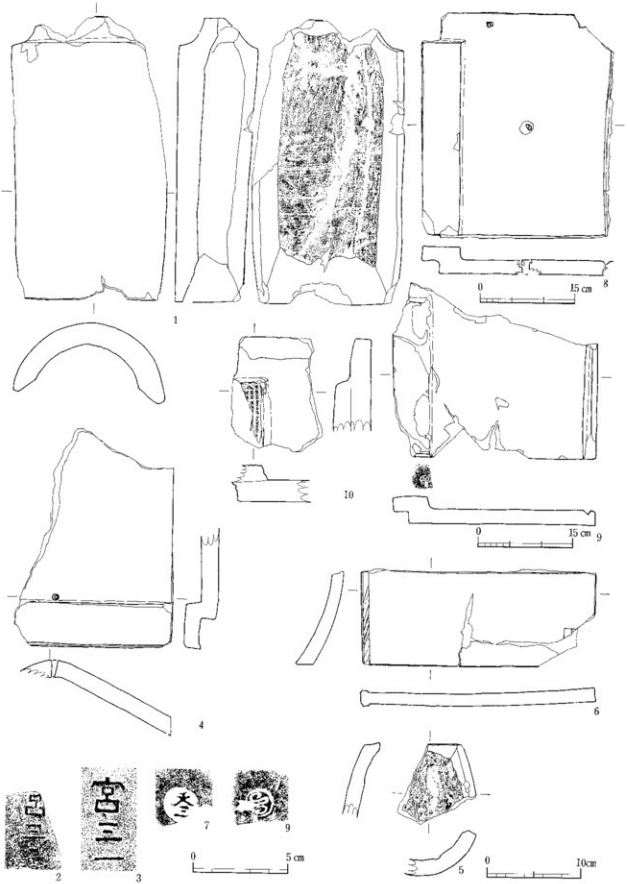


図8　仙台城二の丸跡第11地点出土瓦
Fig. 8　Roof tiles from NM11

4．まとめ

今回の調査は、限定された範囲の調査であったが、二の丸西端付近における、水対策のためと考えられる遺構の様相が把握できた。しかし出土遺物が少なく、細かな時期などは確認できなかった。工事によって影響を受ける範囲が狭かったため、限定した狭い範囲の調査としたが、遺構の詳細が把握できない部分も多く残ることとなった。全域の遺構確認調査を実施した上で、削平される部分のみ遺構を完掘するなど、調査方法については今後検討していく必要があるだろう。

表2　仙台城二の丸跡第11地点出土遺物集計表
Tab.2 Distribution of various implements at NM11

		磁器						陶器				土師質・土器類	土師質その他	瓦質不明	木製品	加工木	瓦									下段は重量(g)		金属製品	ガラス
		範不明	国	産不明	産物不明	その他	不明	山茶碗	擂鉢	鍋釜不明	不明						軒瓦	桟瓦	丸瓦	平瓦1類	平瓦2類	板瓦	その他	不明			
試掘1区	1層	1				蓋1											桟1 303	1 738		5 1994								
	2層上面																		1 58	4 131	1 85			3 38				
	2a層								1					1		4			1 90			2 104	輪違い1 166					
	2b・2c層																											
	2c層																											
	1号溝			2	1			1								5		1 215	1 170	5 940	5 808	1 137						
試掘2区	2a層	1	2				4									6		1 125	1 116	11 2274	3 176	1 130				洋釘1 鋼3 不明1	1
	2b・2c層	9	3	15			4				5							9 2796	1 181	17 1338			桶瓦 1 936	1	53	鎹21	6
	2c層	6	8			火鉢1 段皿1	25			1	2	1				1										洋釘1	3
	2d層									3	2									1 1356							
	3層上面	3	1				5									4		1 34	1 116	3 413						洋釘1 鋼1	
	1層			1																							
試掘4区	2a層	2				湯呑1						1						1 107		2 146							
	2b層														1		平1 116	7 2275	12 1958	18 3953	1 211						
	3層														1				1 9	3 316	1 120						
	暗渠																	1 93	1 200	1 27							
本調査区	P1土坑七1～6層																	1 180	1 98		1 161	1 129		1 10			
	不明	1						1	1							6		2 126		5 339	1 107	11 1039		9 76		洋釘2 鉄釘1 釘1	
付帯施設	電気西側	1															桟1 700	3 608	19 8903	15 3151	62 19064	111 80329	袖瓦 1 155	7 300			
	電気東側								1		2		3							1 184	6 810		軒丸瓦1 610				
	排水管			1																							3
	不明																	2 356	11 2963	15 3455	6 810		輪違い1 他1 229	3 19			
区・層位不明						蓋物1					1															洋釘1	

表3　仙台城二の丸跡第11地点出土瓦観察表
Tab.3　Notes on roof tiles at NM11

遺物番号	出土場所	種類	特徴	図	図版
T001	付帯施設　表土	丸瓦	玉縁長3.1cm　胴長27.5cm　広さ8.5cm　凹面：コビキ(B)→布目　凸面：ナデ	8	3
T002	試掘2区北半　2a層	平瓦1類	凸面に瓦による隅刷の痕印「宮三…」　桟瓦の可能性が高い	8	3
T003	試掘1区　表土	平瓦1類	凸面に瓦による隅刷の痕印「宮三…」　引掛桟瓦の可能性が高い	8	3
T004	試掘2区北半　2b層	桟瓦	角形　桟幅4.9cm　桟のごく近く中央に釘穴1　凸面：ナデ　凹面も平滑に仕上げる	8	3
T005	試掘1区C－12　2a層	輪違い	凸面全体と側面周縁に褐色の施釉　凹面：コビキ(B)→面白→布目？痕	8	3
T006	付帯施設1区北側　石垣上の盛土	軒平瓦	厚さ2.2cm　瓦当：16弁　凹面凸面ともに丸く仕上げる	8	3
T007	付帯施設電気2区　黄土色土層断面	板瓦	瓦頭の隅部周囲が凸物がかぶせられたように凹状に仕上げられている痕	8	3
T008	付帯施設　表土	板瓦丸	角桟　桟幅2.7cm　瓦頭は凸状隅周囲に刷毛目　「天」	8	3
T009	付帯施設　表土	板瓦丸	角桟　全長36.5cm　桟幅6.25cm　さき反31.5cm　瓦頭隅部近くに方形の釘穴2　下面はザラザラしている	8	3
T010	付帯施設　表土	板瓦丸	角桟　桟幅11.5cm　桟高6.6cm　さき幅30.1cm　さき反21.8cm 瓦頭：桟幅6.8cm　桟高2.5cm　瓦頭は凸状隅周囲に刷毛目　「天」 瓦頭：桟幅6.8cm　桟高2.5cm　瓦頭は凸状隅周囲に刷毛目　「天」(逆位置) 瓦頭周囲に凸状盛り上げ痕跡　凸状部分は瓦頭部分のみ　「天」(逆位置)　一部瓦頭部にヘラ削り痕あり	8	3

第Ⅲ章　仙台城二の丸北方武家屋敷跡第４地点（ＢＫ４）の調査

１．仙台城二の丸跡と二の丸北方武家屋敷の立地と歴史

東北大学の川内地区は、沢とその脇を東西に走る道路によって、川内南地区と北地区に分かれている。この川内南地区は仙台城二の丸が置かれた場所であり、北地区は武家屋敷が存在した区域に相当する。

仙台城は、仙台市街地の西方、広瀬川を渡った通称青葉山の東端に位置している（図１）。北と東を広瀬川に、南を竜の口渓谷によって囲まれている。本丸は標高115～140mの急崖上に立地しており、北側の二の丸、北東側の三の丸も、それぞれ標高61～78m、40mの河岸段丘上に位置する（図２）。

仙台城は、慶長５年(1600年)、仙台藩初代藩主伊達政宗によって、本丸の造営が開始される。川内地区の後に二の丸が造営される区域には、伊達政宗の四男である伊達宗泰の屋敷が置かれていた。元和６年（1620年）には、この伊達宗泰の屋敷の北側に、政宗の長女五郎八姫の居館「西屋敷」が造られる。

二の丸北方の武家屋敷地については、それが整備されていく状況を具体的に知ることができる絵図などは知られていない。しかし、正保２・３年（1645･46年）の「奥州仙台城絵図」では、二の丸の北方一帯に屋敷が広がっていることが知られ、おそらく本丸の造営が開始された頃から、屋敷が造られていったものと思われる。この区域は、その後細かな変化は見せるものの、比較的上級の家臣の屋敷地として幕末まで利用されていく。

寛永15年(1638年)、二代藩主伊達忠宗は、もとの伊達宗泰の屋敷地において、二の丸の造営を始める。二の丸完成後、仙台藩の政治・諸儀式のほとんどはここに移るされ、藩主の居館ともなる。17世紀末から18世紀初頭の元禄年間には、四代藩主伊達綱村によって二の丸は大改造され、もとの「西屋敷」の敷地を取り込んで拡張される。その後いく度かの災害や火災を被るが、その都度再建され、幕末まで仙台城の中枢として機能していく。

版籍奉還の明治２年（1869年）には二の丸に勤政庁が置かれ、明治４年（1871年）の廃藩置県後は、仙台城が明治政府・兵部省の管轄下に移り、東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。この頃に本丸の建物群は取り壊されるが、二の丸建物群は残っている。しかし明治15年（1882年）の火災で、二の丸建物群のほとんどが焼失する。明治21年（1888年）には仙台鎮台廃止、仙台第二師団が設置され、敗戦まで続くこととなる。もとの二の丸にあたる区域には第二師団司令部が、北側の武家屋敷にあたる区域には歩兵隊や輜重隊などが置かれていた。戦後は米軍の駐留地となり、昭和32年（1957年）に米軍より返還されて後、東北大学が移転し現在に至るのである。

２．調査経緯

(1)　1994年度までの調査

1983年度に輝蔵文化財調査委員会が設置されて以降、仙台城二の丸北方の武家屋敷地区については、二の丸跡と一連の遺跡としてとらえ、一体として対処していくことを基本的な方針としてきた。ただし、この区域での遺構の遺存状況が必ずしも明らかでなく、まずその状況を把握する必要があった。そのため、1984年度以降、関係部局の理解を得て、試掘調査を行ってきた（図３）。

1984年度に実施した武家屋敷地区の第１次調査地点（ＢＫ１）は、当時、課外活動施設の予定地であったため、江戸時代の遺構・遺物の有無を確認するために行った試掘調査である。３ヶ所を重機で掘り、江戸時代の遺構面が残存していることを確認したに留まっている。1985年に実施した第２次調査地点（ＢＫ２）と第３次調査地点（ＢＫ３）については、立会調査で終わっているため、欠番としている。第４次調査地点は、今回報告するものであるが、1985年に試掘調査を実施している。第５次調査地点(ＢＫ５)は、教養部学生実験施設にエレベーターを設置するのに伴い、1989年に実施された。当初試掘調査という位置づけであったが、江戸時代の遺構が検出さ

れたため、本調査に切り替えて実施している。40m²という小規模な調査であったが、南北方向にのびる溝が1条検出されている。これらの調査を通じて、二の丸北方の武家屋敷地区まで、二の丸跡の遺構面が途切れることなく連続して遺存していることが明らかとなってきた。そのため1993年度に、仙台城の範囲を拡大する措置が仙台市教育委員会によってとられ、川内北地区の大部分が、周知の遺跡の範囲に含まれることとなった。

このように、二の丸北方武家屋敷跡の調査は、小規模な調査が試掘調査に留まっており、今回の第4次調査地点（BK4）の調査が、当武家屋敷地区の発掘調査としては、初めての本格的な発掘調査となる。

(2) 調査地点の位置

今回の調査は、課外活動施設新営に伴う調査で、川内北地区のプール南側の地点である。現在の川内南地区と北地区の間には、西から東へ流れる沢があるが、この沢は江戸時代にも二の丸と武家屋敷との境となっていた。調査地点は、この沢の北側に沿って走る道路の、すぐ北側の区域にあたる。この道路が曲がるところから、構内に入っていく通路があるが、この通路の下に雨水管と汚水管を設置する工事が1978年に行われた際に、石組の井戸跡などが検出されている。当時は、大学構内での埋蔵文化財調査に対処する組織がなく、文学部考古学研究室によって臨時の調査がなされたに留まっている。詳細な記録を残す余裕もない、ごく限られた調査であったため、今回の調査地点との細かな位置関係などは確認できなかった。

(3) 調査の方法と経過

今回の建設予定建物は、ロ字形の平面形の計画であった。調査にあたっては、建物範囲と余掘り部分を対象区域として、中庭部分は調査を行っていない。恒久建造物に囲まれてしまうこと、調査区が中庭で分断され、遺構の理解に支障をきたすことが予想されることから、中庭部分も調査範囲に含めることも検討したが、次のような理由で中庭部分の調査は見送った。建物の西側1階部分が吹き抜けで、小型の重機や車両が中庭に入ることが可能な構造であり、中庭部分の調査が今後必要となっても調査が可能であること。給排水・電気・ガスなどの付帯施設は、全て建物の外側へ出し、中庭側には作らない方針となったこと。調査地点の遺構が、極めて複雑であることが予想され、将来再検証できる余地を残しておいた方が良いと判断したこと。また、建物の計画策定段階の埋蔵文化財調査研究センターと施設部との協議において、センター側から破壊される範囲をできるだけ少なくするよう設計変更を求めたところ、施設部側では当初の3階建ての計画を4階建てとし、接地面積を少なくするという設計変更で応じていただいた。この変更によって、廊下・エレベーターなどの共用部分の配置の関係上、ロ字形の計画となったという経緯も考慮したことによって、中庭部分の調査は行わないこととした。

今回の調査地点では、1985年度に試掘調査を実施している。当時は、保健管理センターの建設予定地として試掘調査を実施したが、その後保健管理センターは別の場所で建設されることとなり（二の丸跡第12地点、年報11）、この場所が課外活動施設の建設予定地となったものである。試掘調査は1985年11月19日から25日までの期間で実施され、当時の保健管理センターの建設予定範囲全体に11ヶ所の試掘区を設定して調査している（試掘1～11区）。重機によって掘削した上で、平面精査が行われた痕跡があるのは試掘5区・6区だけ、調査区の断面図が残されているのも2・3・4・5・6区だけである。それ以外の調査区については、図面・写真ともに残されておらず、調査日誌にも全く記載がなく、断面の検討すら為されたかどうか判らない。そもそも調査日誌自体が、期間全体を1枚にまとめて記載しただけのものしかない。この僅かな記録と、出土遺物をあわせて検討したが、各層序で様々な時期の遺物が混ざっており、混入が甚だしいと判断せざるを得なかった。そのため、試掘調査結果は、試掘6区に大規模な溝跡（1号溝）が存在すること以外は、参考にならないものであった。今回の本調査にあたっては、手続き上は試掘調査済みの扱いの場所となるため、改めて試掘調査を実施することはできなかった。そのため、試掘4区の断面図で、礎石建物跡の存在が確認できた2層上面から精査を行わざるを得なくなってしまっ

図9　仙台城二の丸北方武家屋敷跡第4地点調査区の位置
Fig.9　Location of BK4 (BK4 i.e. Location 4 of *samurai* residence)

た。結果的に2層上面の遺構は、明治時代の第二師団に関係するものであった。明治初頭の畑跡が検出された4層上面の精査中に厳冬期を迎え、初年度の調査を終えることとなったが、初年度の5ヶ月間は明治時代の層序の調査に費やす結果となってしまった。試掘調査によって、これら層序の時期が判明していれば、明治期については、別な対応がとれたはずである。

調査にあたっては、建物予定範囲にあわせて、3mグリッドを組んだ。グリッド設定の際の基準点の国土座標は次の通りで、基準線は北から17°20′西偏している。

原点　BK4－B　X＝－193 401.280　　原点　BK4－C　X＝－193 416.475
　　Y＝＋ 2 130.926　　Y＝＋ 2 082.242

今回の調査地点では、排土置き場がプール東側しか確保できず、その面積が小さく調査途中に排土を運搬する必要があった。そのため、重機やダンプが通行できる通路を、北側のプール脇に残すこととした。この区域は、排土運搬の必要がなくなってから調査を行った。B列の中程にあたる位置に、東西に給水管が設置されており、ここまでを当初の調査範囲とした。図12のC－C′断面は、この給水管掘方の北壁のラインでの断面図である。

調査は1994年の8月1日から開始したが、翌年度まで継続して調査が必要であったため、12月下旬に調査区全面にシートを貼り、要所を土嚢で埋め越冬に備えた。翌1995年度は、前倒しで3月1日から調査を開始した。江戸時代の遺構が、予想をはるかに超える密度であったことと、整地層の上での遺構確認の困難さに苦闘することとなり、ようやく8月31日に調査を終了した。前年度とあわせて、11ヶ月間に渡る調査であった。

付帯施設部分は、工事の進展に合わせて随時立会調査を行ったが、建物本体から排水管をのばす部分で、江戸時代の遺構面まで削平されることとなったため、この部分については本調査を行った（付帯A・B・C区）。

3．基本層序

基本層序は1層から6層に区分した。6層の下位は地山である。なお、今回の調査で出土した動物遺存体については、数量が少なく、まとまって出土した場所も無いため、東北大学考古学研究室の水見淳哉氏に同定していただいた結果を、基本層序や各遺構の記述に含めて記載することとした。以下、基本層の層相について記載する。

1層は現在の表土層である。

2層は、暗褐色から褐色を呈する粘土質シルト主体の整地層で、場所によって土色・土質・含有物は異なる。調査区の全面に分布する。厚さは20cmから40cm程度である。

3層は、地山起源と考えられる黄褐色シルト主体の整地層で、場所によって土色・土質・含有物は大きく異なる。調査区西端には分布しない。ほとんどの範囲では厚さ30cm程度であるが、4層上面の1号池を埋めている所では、厚さ1m以上に及ぶ。3層上面からは遺構がほとんど検出されていないことから、2層と3層は一連の整地層と考えられる。

4層は、にぶい黄褐色から灰黄褐色を呈する粘土質シルトで、調査区のほぼ全面に分布する。4層上面では、溝で区画された内部から畝状の遺構が検出されており、畑跡と考えられる。畑跡は調査区西側を除いて分布しており、この範囲では4層が畑の耕作土にあたる。仙台城下の絵図では、調査地点は幕末ま

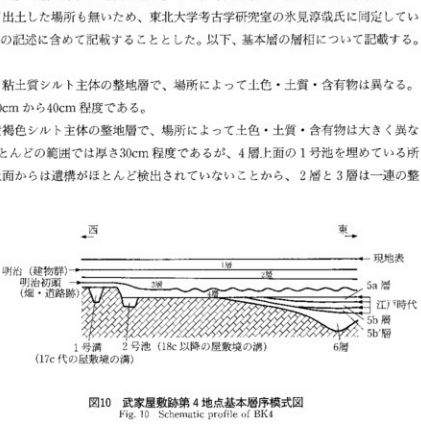


図10　武家屋敷跡第4地点基本層序模式図
Fig. 10　Schematic profile of BK4

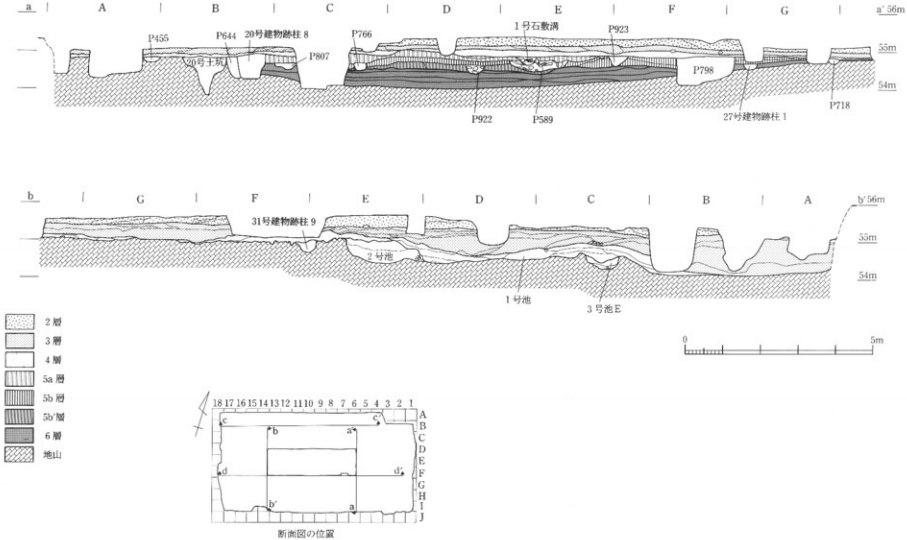


図11　武家屋敷跡第４地点外周壁セクション (1)
Fig. 11　Cross sections of excavation at BK4 (1)

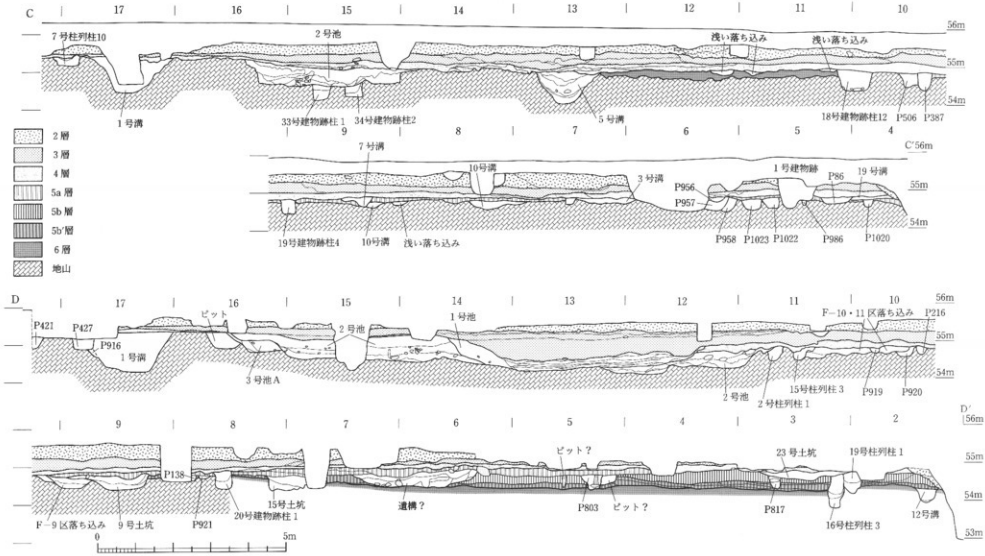


図12　武家屋敷跡第4地点外周壁セクション（2）
Fig. 12　Cross sections of excavation at BK4 (2)

で屋敷として利用されていたことが確実なため、明治になって屋敷が廃絶して以降の所産と考えられる。なお、調査区から西へ80m程の、厚生会館南側での付帯施設部分の立会調査においても、この4層が分布し畝状の遺構が存在することを確認しており、畑がさらに西側まで広がっていたことが明らかとなっている。この4層には、比較的多くの遺物が含まれている。大半は幕末から明治初頭のものであるが、畑の耕作土という性格もあって、江戸時代各時期の遺物が混在する。また動物遺存体の種類も比較的多く出土している。貝類では、ハマグリ・アサリ・アワビ・エゾアワビ・アカニシ・シジミガイ科・イシガイ科・ムカデガイ科・ニシキウズガイ科・マイマイが確認されている。魚類ではマグロ属椎骨、両生類ではアカガエル科、鳥類ではヤマドリ第三指、哺乳類ではイノシシ類が確認されている。それぞれの出土量は1点ないし数点と、きわめて少ない。

5層は、5a層・5b層・5b'層に細分された。江戸時代の整地層である。当初5a層と5b層にのみ分けていたが、6層上面まで調査を進めた後に断面を検討したところ、5b層の途中から掘り込まれているピットが存在することが判明し、さらにこの掘り込み面より下位を5b'層として分けている。

5a層は、褐色から暗褐色のシルトを主体とする。5b層と比べると、比較的均質である。整地層と考えられるが、江戸時代の地表面に形成された表土を含んでいる部分もあるかも知れない。厚さは10cm程度の部分が多く、厚い所でも20cm程度である。動物遺存体は、受熱したタラ科前上顎骨が確認されている。

5b層は、暗褐色粘土質シルトを主体とするが、様々な土が混ざり合う整地層で、層相は場所によって大きく異なる。ほとんどの部分では厚さ10～20cm程度であるが、厚いところでは30cm程ある。

5b'層は、暗褐色粘土質シルトを主体とする。5b層と同様に、様々な土が混じり合い、5b層との違いは顕著ではない。厚さは10～20cm程度である。

6層は、地山上に形成された沢状の落ち込み内に堆積した層である。場所によって細分されるが、暗褐色から黒褐色の粘土質シルトで、下位ほど色が暗い。

地山は黄褐色を基調とするローム起源の地層であるが、場所によっては段丘礫層が露出している部分もある。6層の分布する範囲では、地山との間に漸移層が形成されている。G－7区では、この漸移層中に火山灰層がブロック状に入っているのが確認されている（図版9－8）。この火山灰については、現在分析中である。

江戸時代の整地層である5a層・5b層の分布は、ほぼ6層の分布範囲（図13）と似通っている。5b'層の分布は、中庭東側に限定される。このことから、沢状の落ち込みに堆積した6層の分布する範囲が低くなっていたため、5b'層の整地を部分的に行い、さらに5b層・5a層とこの低い部分に整地を繰り返したものと考えられる。その際、調査区西端の屋敷境と考えられる所で、50cm程東側が低くなっており、この部分を削平して低い部分に整地した可能性が考えられる。このような基本層序の関係を模式的に示すと、図10のようになる。5層の整地層が分布しない範囲は、4層の直下が地山となっており、江戸時代の遺構も地山面から掘り込まれている。

4．検出遺構

(1) 江戸時代以前の遺構

江戸時代以前には、自然の沢状の落ち込みが確認されただけである。沢状の落ち込みを埋めている6層は、西北西から東南東方向へ幅を広げながら分布している（図13）。標高から見て、この方向で下っていく、浅い沢状の地形であったと考えられる。深さは、北側の深掘調査区では25cm、中庭東側の深掘り調査区では50cmである。6層から縄文土器・弥生土器・石器が出土しているが、いずれもその上部からのみ出土している。しかも散漫な分布を示すことから、これらの遺物は、付近から流れ込んだものである可能性が高い。しかし、さほど摩滅していないことから、ごく近傍に当該期の遺跡が存在することが予想される。

図13　武家屋敷跡第4地点6層の分布範囲
Fig.13 The extent of layer 6 at BK4

(2) 江戸時代の遺構

① 時期区分の方法

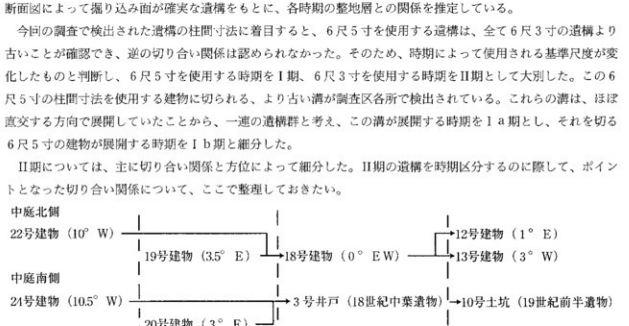
江戸時代に属する遺構の内、建物跡・柱列を構成する柱穴を含めたピットの総数は1036で、この中には、地鎮遺構と考えられるもの3基を含んでいる。この内、建物跡や柱列の柱として組み合うことが確認されたものは382基で、全体の37%に留まっている。確認できた江戸時代の遺構を列挙すると、次の通りとなる。

建物跡　28棟（7～34号建物跡）　　柱列　24列（2～28号柱列、1・4・5・9号は欠番）
池状遺構　2基（2号池・3号池）　　溝　20条（1号溝～22号溝、2号溝と20号溝は欠番）
石敷溝　4条（1～4号石敷溝）　　井戸　3基（1～3号井戸）
土坑　19基（8号土坑～26号土坑）　　粘土貼床遺構　3基（1～3号粘土貼床遺構）
石垣状遺構　1基（2号石垣）　　木箱埋設遺構　1基（1号木箱埋設遺構）
地鎮遺構　3基（1～3号地鎮跡）

江戸時代では、5a層・5b層・5b'層の3枚の整地層が存在するが、整地層上面での遺構確認は極めて難しく、複雑に切り合っていることから、遺構間の関係は充分にはとらえられていない。そのため、特徴的なものを除くと、建物跡・柱列としてピットが組み合うことを調査時に確認できていたものは、ごく僅かである。調査後の整理によって、ほとんどの建物跡・柱列を認識することとなっている。この作業によって、異なった面で確認していたピットが組み合う例が多数存在することが判明した。調査時に整地層の各面で、その面から掘り込まれた遺構を、とらえきれていなかったことが明白である。特に、5a層上面で確認できた遺構は、調査時にはごく少数であったが、整理を経た段階では、他の遺構との切り合い関係から、5a層上面掘り込みと考えざるを得ないものが多数確認される結果となっている。そのため、基本層序の断面図で検証し得た遺構以外は、現場で確認した掘り込み面は確実性を欠く。また、各整地層出土として取り上げた遺物の中には、その整地層に掘り込まれた遺構埋土に本来帰属すべき遺物が、混入していることが考えられる。結果的に、各整地層と遺構の掘り込み面との関係を基準に、遺構の変遷段階を検討することは困難であった。また、遺構から出土した遺物が概して少なく、遺物から遺構の年代を決定できたのは、井戸や土坑のごく一部など、ごく少数に留まっている。したがって、遺構の切り合い関係、柱間寸法、遺構の方位を基準に、時期区分を行うこととした。このような作業を経た上で、基本層序の断面図によって掘り込み面が確実な遺構をもとに、各時期の整地層との関係を推定している。

今回の調査で検出された遺構の柱間寸法に着目すると、6尺5寸を使用する遺構は、全て6尺3寸の遺構より古いことが確認でき、逆の切り合い関係は認められなかった。そのため、時期によって使用される基準尺度が変化したものと判断し、6尺5寸を使用する時期をⅠ期、6尺3寸を使用する時期をⅡ期として大別した。この6尺5寸の柱間寸法を使用する建物に切られる、より古い溝が調査区各所で検出されている。これらの溝は、ほぼ直交する方向で展開していたことから、一連の遺構群と考え、この溝が展開する時期をⅠa期とし、それを切る6尺5寸の建物が展開する時期をⅠb期と細分した。

Ⅱ期については、主に切り合い関係と方位によって細分した。Ⅱ期の遺構を時期区分するのに際して、ポイントとなった切り合い関係について、ここで整理しておきたい。



遺構の方向でグループ分けをすると、N－5～15.5°－Wと西に大きく振れる段階が認められた。上記の切り合い関係から、この段階はⅡ期の中で最も古いことが明らかとなり、しかも5a層より下から遺構が掘り込まれていることが確認できた。一方、この段階より新しい遺構は、5a層の上から掘り込まれていると考えられるため、前者をⅡａ期、後者をⅡｂ期と区分した。

Ⅱｂ期の細分にあたっては、N－2～3.5°－Eと、逆に東に振れるグループが認められ、これが切り合い関係からⅡａ期に後続するため、Ⅱｂ１期とした。残る遺構については、切り合い関係や出土遺物から最終段階と考えられる遺構をまず抽出したところ、溝が比較的多く存在していた。これらの溝との位置関係や出土遺物から、最終段階と考えられる遺構をまとめて、Ⅱｂ３期とした。遺構の方向は、N－3°－EからN－14°－Wまで幅がある。かなり異なる方向の遺構が混在する結果となっており、問題が残っている。このⅡｂ３期の溝に切られる遺構や、Ⅱｂ１期とⅡｂ３期との間の、どちらにも帰属させることが困難な遺構を、Ⅱｂ２期としてまとめた。遺構の方向はN－0～4°－Wと、比較的まとまっている。

以上のような方法で、Ⅰａ期、Ⅰｂ期、Ⅱａ期、Ⅱｂ１期・Ⅱｂ２期・Ⅱｂ３期の、合計６時期に細分した。各期の年代は、まとまって遺物が出土している遺構が少なく、不確実な部分を残すが、次の通りと推定した。

Ⅰａ期：初限は17世紀初頭。伊達政宗の本丸築城開始とほぼ同じ1600年頃と考えられる。下限は確実ではないが、17世紀後半代には下らないものと考えられる。

Ⅰｂ期：17世紀中葉から後葉と推定される。次のⅡａ期の年代から見て、下限は17世紀末まで下らない。

Ⅱａ期：２号池の下部からまとまった遺物が出土しており、17世紀末から18世紀前葉にかけてと考えられる。

Ⅱｂ１期：18世紀前葉から中葉にかけて。まとまった遺物が無く、Ⅱａ期とⅡｂ２期との間としか判明しない。

Ⅱｂ２期：１号井戸と３号井戸でまとまった遺物が出土しており、18世紀中葉ごろと考えられる。

Ⅱｂ３期：18世紀後葉から19世紀中葉。下限は江戸時代末年。

Ⅰｂ期やⅡａ期には、比較的規模の大きな建物跡が確認できるが、それ以外は、いずれも規模の小さな建物である。礎石建物跡の可能性のある建物はⅡｂ期の16号建物跡１棟ぐらいで、他の建物跡の大部分は掘立柱建物と考えられる。今回の調査区の南東区域では、同時併存し得ない遺構の重なりは10段階にもおよぶ。組み合っていないピットも多く残っており、さらに多くの遺構が本来は存在したはずである。そうすると、単純計算で20年に満たない期間で建て替えられ続けたこととなる。屋敷の主要な建物が、これだけ頻繁に建て替えられていると考えるのは無理があるだろう。また、細分された各期のなかでも、何段階もの変遷が認められる。このような状況から、今回確認できた建物跡の多くが、屋敷内の主要な建物ではなく、付随する小規模な建物である可能性を示している。江戸時代の遺構群は、続く明治初頭の４層の畑の耕作によって、上部が攪乱されている可能性が高く、礎石建物跡が存在したとしても、礎石が動かされて確認できなかった可能性がある。したがって、屋敷内の主要な建物は、礎石建物であったが、４層の耕作によって削平され、検出できなかった可能性が高い。あるいは、攪乱によって破壊されている区域に、主要な建物が存在した可能性も考慮しておく必要があるだろう。

先述の通り、礎石建物跡の可能性が残るものは、Ⅱｂ２期の16号建物跡だけで、それ以外の建物跡・柱列は全て掘立柱である。そのため、通常の掘立柱の建物跡や柱列については、以下の記述ではいちいち記載しない。また、遺物が出土している遺構が少ないため、特徴の判明する遺物が出土している場合にのみ、出土遺物について触れることとする。建物跡と柱列については、柱の組み合わせを推定したラインを入れているが、必ずしもきれ

いにライン上に乗ってくる訳ではなく、推定した柱間隔からずれる場合も多い。そのずれの程度を検証できるようにするために、遺構図面の推定した柱間隔のところに、交差する線を入れて示している。遺構の方向については、東西方向のものでも、比較しやすくするため、それと直交させた北からのずれとして示した。

② Ⅰａ期の遺構

10条の溝がほぼ直交するような方向で展開する。調査区西端付近で検出された1号溝は、調査区を南北に走る断面逆台形の深い溝で、東西の屋敷を区切る溝と考えられる。この1号溝については、唯一掘り直した痕跡が確認され、出土遺物から存続期間が長い可能性があり、Ⅰｂ期まで使われたものと考えられる。それ以外の溝の内、4・5・6・15・16号溝は、断面逆台形の深いもので、このような断面形状の溝は、Ⅰａ期に限られている。1号溝とそれにつながる16号溝・17号溝以外の溝は、ほぼ直交する方向に走っており、区画を目的とした一連の遺構と考えられるが、溝が交差するところは、相互の溝をつながず、間を掘り残していることが特徴である。

1号溝の東側の、Ⅱ期に2号池が造られる範囲には、3号池とした溝状・池状の遺構が存在しているが、2号池にほとんどが破壊され、全体像は良く判らない。3号池は7基の遺構に細かく分かれ、それぞれに時間差がある可能性がある。そのため、Ⅰａ期とⅠｂ期の両方に属する可能性がある。

Ⅰｂ期の可能性もあり確実ではないが、当期に属する可能性のある建物跡が1棟ある。しかし、部分的な検出で、全体像は判らない。柱列が2ないし4列存在するが、溝跡や建物跡との関係は良く判らない。そのため、溝で区画された内部の状況は、ほとんど不明である。ただし、調査区南東側で、3基のピットの底面から、土師質土器の皿を合わせ口にして埋納した遺構が検出され、地鎮遺構と考えられる。

当期の遺構の掘り込み面は、6層上面ないし5b'層上面と考えられる。なお、図16～24の遺構詳細図については、Ⅰａ・Ⅰｂ両期に渡る遺構もあるため、区分せずにまとめて示している。

【27号建物跡】（図23）

C～F－5・6区で検出した。Ⅱ期の遺構による破壊が顕著な場所で、途中の柱穴が検出できない部分が多いが、図示したように柱穴が組み合うものと考えた。東西2間以上、南北4間以上となる。柱間寸法は6尺5寸。方向はN－2°－E。Ⅰａ期・Ⅰｂ期のいずれかは決定し難い。

【27号柱列】（図21）

A～C－14区で3間分を検出した。さらに北側の調査区外へ続いていた可能性がある。柱間隔は5尺で、方向はN－7.5°－E。柱2が、Ⅰｂ期の34号建物跡の柱7に切られている。また柱2の北側の柱穴が、同じく34号建物跡の柱8によって壊されていると考えられ、検出されていない。柱穴の深さは10～30cmと一定しない。この27号柱列と次の28号柱列は、Ⅰｂ期には建物跡が3棟重複している範囲に重なり、その内の34号建物跡に切られることから、それらの建物より前の段階と考え、Ⅰａ期に含めた。

【28号柱列】（図21）

A～C－14区で3間分を検出した。さらに北側の調査区外へ続いていた可能性がある。柱間隔は6尺で、方向はN－10.5°－W。柱2の北側の柱穴が、34号建物跡の柱8によって壊されていると考えられ、検出されていない。柱穴の深さは、10～15cmと浅い。

【3号池】（図17、図版18）

調査区南西のF～Ⅰ－13～16区の、Ⅱ期に2号池が造られる範囲で、池状の落ち込みが各所で確認された。3号池A～Gの7基の遺構に分けられるが、2号池による破壊によってそれぞれの全体形状は判然としない。3号池Bは、14号溝の延長線上にあり、一連の遺構の可能性が考えられる。3号池Eが3号池DとFに切られているように、複数時期に渡る。17世紀中葉から後葉の遺物が比較的まとまって出土しており、Ⅰｂ期が主体の部分ももあると考えられる。

図14　武家屋敷跡第4地点江戸時代Ia期遺構配置図
Fig. 14　Distribution of features belonging to Edo period (phase Ia) at BK4

図15　武家屋敷跡第４地点江戸時代 Ib 期遺構配置図
Fig. 15　Distribution of features belonging to Edo period (phase Ib) at BK4

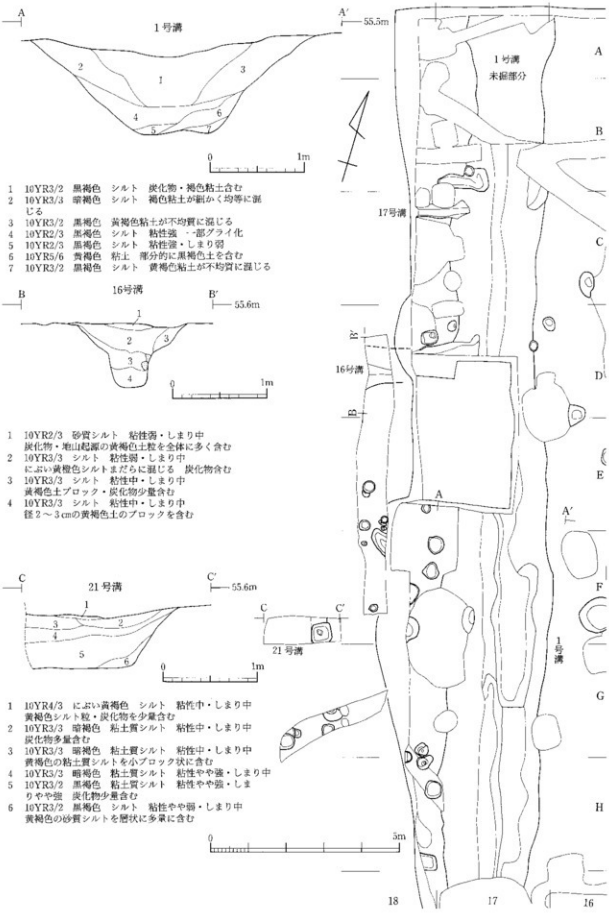


図16 武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構 (1)
Fig.16 Features belonging to Edo period (phase I) at BK4 (1)

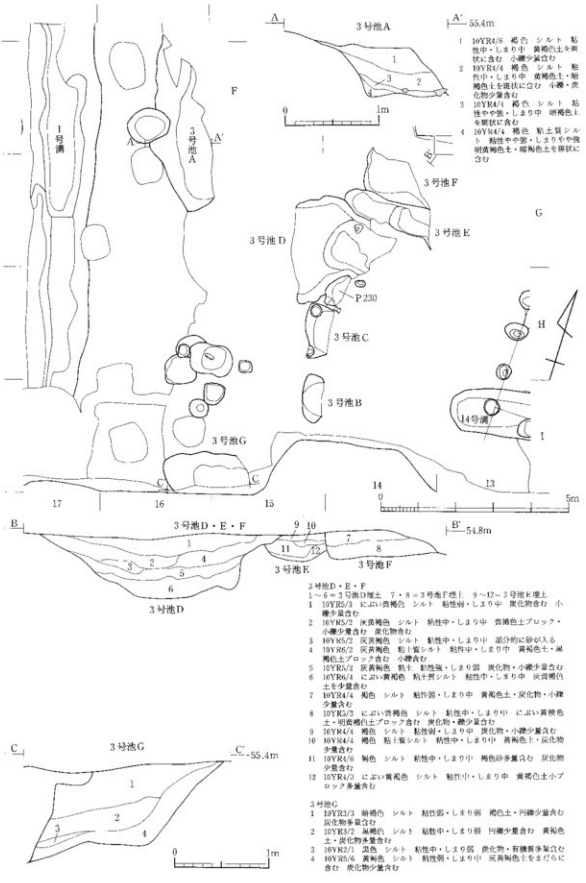


図17 武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構 (2)
Fig. 17 Features belonging to Edo period (phase Ⅰ) at BK4 (2)

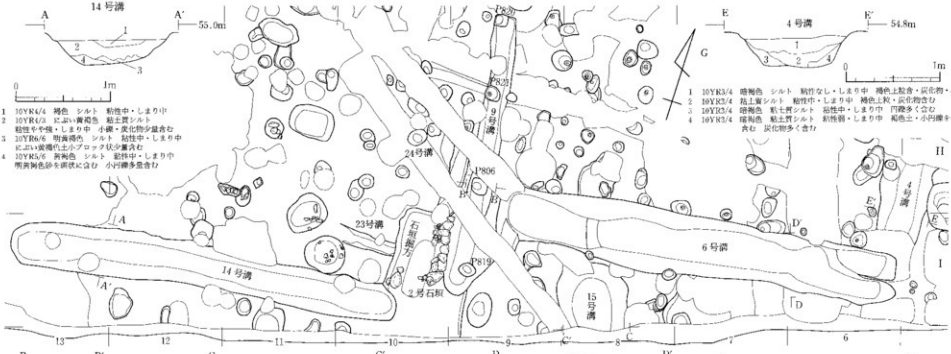


図18 武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構 (3)

Fig.18 Features belonging to Edo period (phase I) at BK4 (3)

図19　武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構（4）
Fig.19 Features belonging to Edo period(phase I) at BK4 (4)

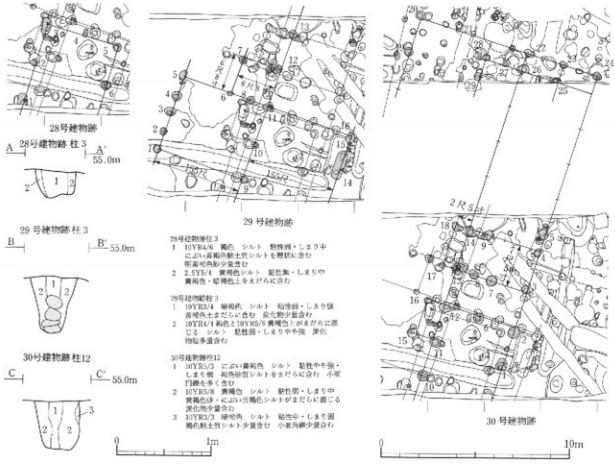


図20　武家屋敷跡第４地点江戸時代Ⅰ期の遺構 (5)
Fig.20 Features belonging to Edo period(phase I) at HK4 (5)

【１号溝】(図16、図版19)

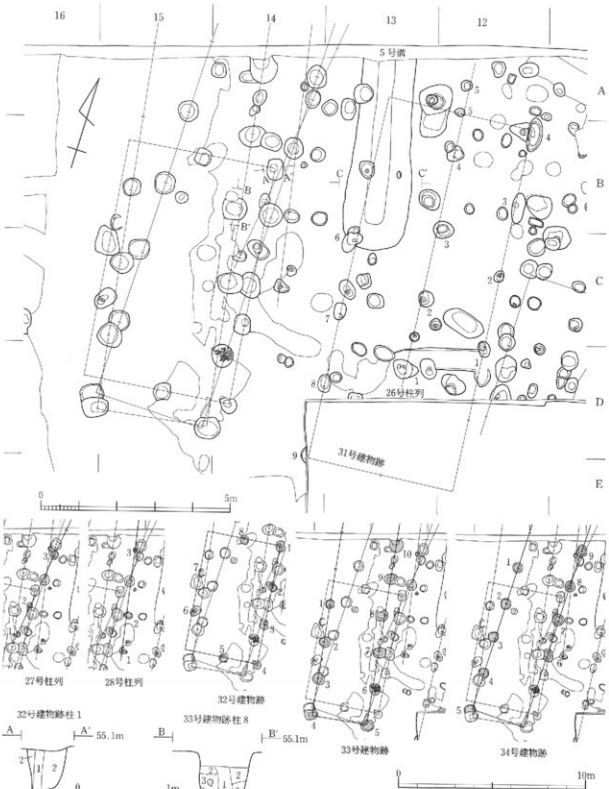
調査区西端の17列に南北にのびる溝で、南北とも調査区外へのび、検出した長さは23.2mである。ただしＡ列とＢ列の北半部は、拡張後調査した範囲で、プラン確認のみに終わっている。方向はＮ－16.5°－Ｗ。断面逆台形で、上幅220～300cm、下幅は底面に小さな段が付く部分もあり一定ではないが狭いところで40cm、広いところでは70cm 程度、深さは110cm 程度である。埋土の状況から、埋土２層は一旦掘り直された後に堆積した可能性がある。Ⅰａ期の溝の中で、掘り直しの痕跡が認められるのは、この１号溝だけである。出土遺物の様相も踏まえると、次のⅠｂ期まで存続した可能性が強い。17世紀前半の中国産・肥前産磁器、16世紀末から17世紀前半の瀬戸・美濃・唐津・信楽・丹波産の陶器、瓦質土器、土製玩具、瓦など、比較的多くの遺物が出土している。

【４号溝】(図23、図版20)

Ⅱ・Ⅰ－５・６区で検出された南北溝である。南端は撹乱で、北端は20号建物跡によって壊され、２ｍ分を検出したに留まる。南北とも壊された部分より先にのびていた痕跡がないことから、南北とも途切れるものと推定される。方向はＮ－１°－Ｅ。断面逆台形で、上幅110～140cm、下幅60cm、深さ40cm。埋土は自然堆積かと思われるが、確実ではない。17世紀前葉～中葉の肥前産磁器、16世紀後葉から17世紀前半の美濃産・備前産陶器などが出土している。位置関係から、25号柱列と切り合いを有すると思われるが、柱穴が確認できていない。この25号柱列や他の溝との関係でⅠａ期の遺構と考えたが、Ⅰｂ期まで存続する可能性も残る。

【５号溝】(図21・22、図版20)

Ａ～Ｃ－13区で検出された南北にのびる溝である。南端は途切れており、北側は調査区外へ続くが、長さ5.1ｍ分を検出した。方向はＮ－13'－Ｗ。断面ほぼ逆台形を呈し、上幅140～170cm、下幅50cm、深さ85cmを測る。



32号建物跡柱 1

1　10YR4/3　にぶい黄褐色
　シルト　粘性弱・しまり中
　明黄褐色シルトまだらに含む
　炭化物少量含む
2　10YR6/6　明黄褐色　シルト
　粘性無・しまり中
　にぶい黄褐色シルトまだらに含む
　小円礫少量含む

33号建物跡柱 8

1　10YR4/4　褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　炭化物粒少量含む
2　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　小礫多量含む
3　10YR4/3　褐色　粘土質シルトと砂質シルトが混在　粘性強・しまり弱　小礫多量含む
4　10YR4/3　褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　小礫多量含む

図21　武家屋敷跡第４地点江戸時代１期の遺構（6）
Fig.21　Features belonging to Edo period (phase I) at BK4 (6)

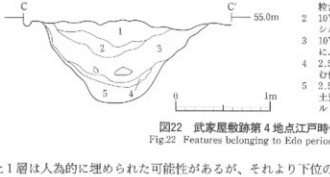


図22 武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構(7)
Fig.22 Features belonging to Edo period(phase I) at BK4 (7)

埋土1層は人為的に埋められた可能性があるが、それより下位の層は自然堆積である。南端から2m程の所で、東西両側の溝斜面に向き合うようにピットが検出され、いずれも柱と思われる木材の一部が遺存していた。あるいは、この5号溝に伴う施設かも知れない。

【6号溝】(図18、図版20)

H・I－6～9区で検出された東西にのびる溝である。西端は浅い溝状の遺構が直角にとりつき、9号溝に合流するかのように見えるが、撹乱で分断されているため確実ではない。東端は途切れており、端が2つに分かれたようになっている。長さは10.7mで、方向はN－7°－W。断面逆台形で、上幅130～170cm、下幅60～90cm、深さ110cmを測る。埋土1層は人為的に埋められた可能性があるが、それより下位の層は自然堆積である。東端近くの底面には、川原石が敷かれたようにまとまって検出された部分がある。

【9号溝】(図18、図版21)

G～I－9・10区で検出された南北にのびる溝である。北端は途切れており、南端も途切れているが、直交方向からのびてくる14号溝の延長と交差する付近は、少し低くなっており、浅い落ち込みで14号溝とつながるのかも知れない。この南端付近の西側には、2号石垣が存在し、9号溝の護岸施設と考えられる。また南端付近では、東側が広くなっている部分があり、6号溝の西端とつながる可能性があるが、撹乱のためはっきりしない。長さは7.5mで、方向は、やや曲がっているが、N－7.5°－W程度である。断面はほぼ逆台形で、上幅70cm、下幅40～50cm、深さ30cm。埋土は不均質で、埋め戻されたものと考えられる。この9号溝の底面に、9号溝に切られる4基のピット（南からピット819・806・821・820）が並んでいる。間隔が一定しないため柱列とはしなかったが、9号溝に先行し、同じ場所を区画する柱列の可能性も考えられる。

【12号溝】(図23、図版22)

調査区東端のF～I－2区で検出された南北にのびる溝で、5b'層の下位から掘り込まれていることが確実な遺構である。北側が撹乱で壊され、南側は調査区外へのびるが、10.2m分を検出した。方向はN－14.5°－W。断面形は丸みを帯びた逆台形で、上幅75cm、下幅30～40cm、深さ40cmを測る。埋土は、2層は自然堆積であるが、1層は不均質な人為的に埋め戻されたものである。13号溝がほぼ直交する位置にあるが、13号溝は5b'層あるいは5b層上面からの掘り込みであり、12号溝とは掘り込み面が異なり一連の溝ではない。

【14号溝】(図18、図版22)

I－10～13区で検出された東西溝である。東端は途切れるが、浅い落ち込み状の部分がのび、9号溝とつながる可能性があり、この交点部分に2号石垣が造られる。西端は2号池に切られるが、立ち上がりが確認され、ここで途切れるものと考えられる。ただし、この延長方向には3号池Bが存在し(図17)、形状が似通っていることから、一旦途切れて連続する一連の遺構の可能性がある。両端の立ち上がる部分の間の長さは10.3mで、方向はやや曲がっているが、N－7.5°－W。断面形は浅い逆台形を呈し、上幅100～130cm、下幅45～75cm、深さ35cmを測る。埋土2層は埋め戻された土の可能性が高い。Ⅰb期の29・30・31号建物跡に切られる。

【15号溝】(図18、図版22)

調査区南壁沿いのI－8区で検出した南北にのびる溝で、南側は調査区外へ続く。北端は、6号溝との間隔が

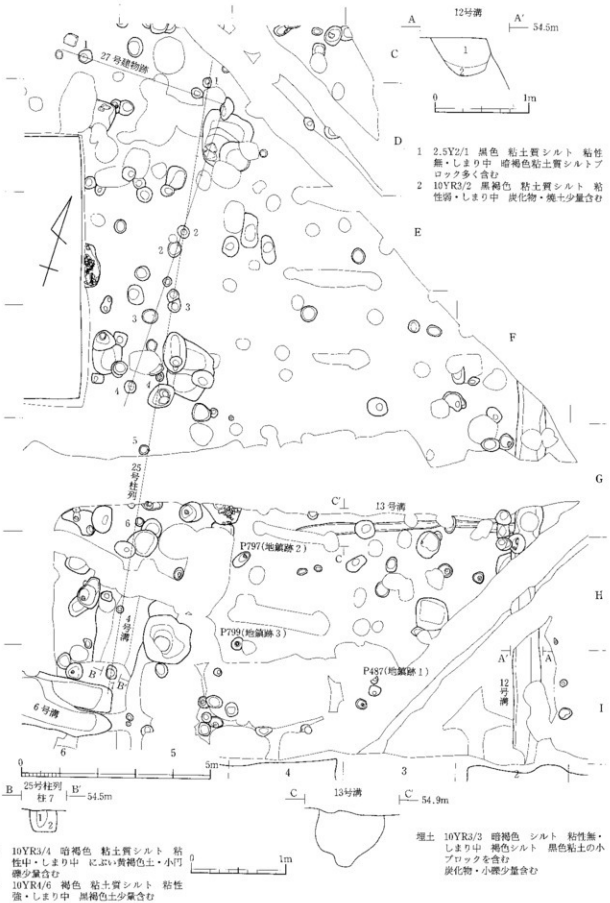


図23　武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅰ期の遺構 (8)
Fig.23 Features belonging to Edo period (phase I) at BK4 (8)

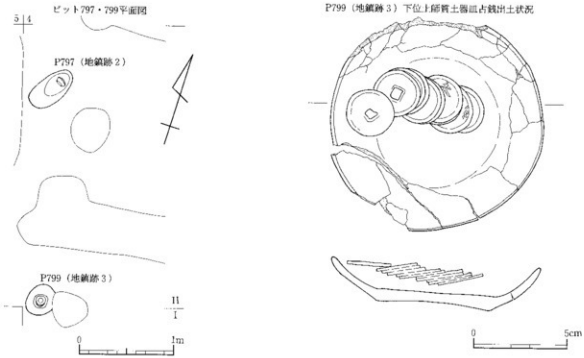


図24　武家屋敷跡第４地点江戸時代Ⅰ期の遺構 (9)
Fig. 24　Features belonging to Edo period (phase 1) at BK4 (9)

ごく僅かしか残っていないにも関わらず、連続せず途切れている。方向はN－14.5°－W程度である。断面形は丸みを帯びた逆台形で、上幅190cm、下幅100cm、深さ75cm を測る。埋土の上部は埋め戻されている可能性が高い。

【16号溝】（図16、図版22）

本調査区のD－17・18区で一部が検出され、付帯A区で続きが検出された東西溝である。東端は１号溝につながる。１号溝との明確な前後関係は認められなかったため、１号溝と同時に存在していたものと考えられる。西端は調査区外へのびる。方向はN－16°－Wで、１号溝にほぼ直交する。断面形は深い逆台形を呈するが、上部の岸の傾斜が弱い。上幅135cm、下幅25cm、深さ70cm。埋土の上部は埋め戻されたものと考えられる。

【17号溝】（図16）

C－17・18区で検出されたもので、16号溝とほぼ平行する、同様の東西溝と考えられる。検出した長さは１．４m、方向はN－16°－W、上幅40cm、下幅20cm である。

【21号溝】（図16、図版23）

付帯B区で検出されたもので、一部の検出に留まるため、溝と断定できるわけではないが、他のⅠa期の溝と逆台形の断面形状や埋土の様相が類似することから、南北にのびる溝と考えた。ごく一部の検出のため確実ではないが、方向はN－15.5°－W、上幅・下幅は不明で、深さは65cm である。

【23号溝】（図18、図版23）

Ⅰ－10区で検出された小規模な東西溝で、東端は２号石垣の掘方で壊されている。検出した長さは1.6mで、方向はN－0°－EW。上幅40cm、下幅20cm、深さ15cm 程度。この23号溝と次の24号溝は、ほぼ直交するものと思われ、つながっていた可能性が高い。14号溝と９号溝がほぼ同じ方向ですぐ近くに存在するため、23号溝・24号溝を造り替えて14号溝・９号溝が造られた可能性が考えられる。

【24号溝】（図18、図版23）

H－９・10区で検出した小規模な南北溝で、北端は攪乱で、南端は29号建物の柱穴で壊されている。検出範囲が少なく不確実だが、方向はN－0°－EW。上幅50cm、下幅30cm、深さ15cm。

【２号石垣】（図18）

９号溝と14号溝の交差する部分に造られた石垣状の遺構で、両溝の護岸を目的としたものと考えられる。230×140cm、深さ40cm程の掘方に、９号溝と14号溝に沿う形で石を１段ないし２段積み重ねている。掘方埋土をＩｂ期の29号建物跡が切っている。23号溝を切っており、24号溝との前後関係は29号建物の柱穴のため不明である。おそらく、23号溝と24号溝を造り替えて14号溝と９号溝を造ったと考えられ、23号溝と24号溝の交わっていた部分が弱いため、この２号石垣を造って補強したものと考えられる。

【地鎮跡１～３】（図23・24、図版30）

Ｈ・Ｉ－３・４区で、３基の地鎮遺構と考えられるものを検出した。いずれもピットの底面に、２枚の土師質土器の皿を合わせ口にして埋納したものである。地鎮跡１（ピット487）から出土した皿の内部には、永楽通寶が12枚入っていた。皿の一方には、底面に「東」との墨書が見られる。地鎮跡２（ピット797）では、柱痕跡が明瞭に確認でき、柱穴の底面に埋納したものであることが明確になった。しかし、３基のピットが建物跡などに組み合う状況は確認できなかった。地鎮跡３（ピット799）から出土した皿の内部には、永楽通寶が11枚入っていたほか、稲の籾が良好に遺存していた。上側で出土した皿の底面には「中北天」との墨書が見られる。地鎮跡１と３から出土した銭貨が、全て永楽通寶で占められることから、17世紀初頭の遺構と考えられる。

③　Ｉｂ期の遺構

前述のように、１号溝が当期まで存在したと考えられ、１号溝に付随する16号溝・17号溝、１号溝の西側の21号溝も当期まで存在した可能性が残る。しかし１号溝より東側の溝は、切り合い関係から見て、当期に残る可能性はない。新たに13号溝が、東側には造られるだけである。また３号池の一部は、当期に存在したと思われる。それ以外は、Ｉａ期とは遺構の様相が一変する。Ｉａ期に見られた溝は無くなり、やや規模の大きな建物跡が展開する。建物跡は７ないし８棟、柱列は１ないし３列存在する。調査区中央南よりには、南北に長い建物が存在し、ほぼ同じ場所で３棟の建物が重複する。その内の最も古い30号建物跡は、比較的規模が大きいことから、屋敷内の中心的な建物である可能性もある。調査区北西側には、南北方向の建物が４棟確認された。その内３棟は、同じ場所で建て替えられたものと思われ、規模が小さいことから、付属的な建物と推定される。当期の遺構の掘り込み面は、13号溝が5b層ないし5b層上面からの掘り込みであることが判明しているだけである。

【28号建物跡】（図19・20、図版12）

Ｈ・Ｉ－10～12区で検出した建物跡で、東西２間、南北２間以上となる。東西の柱間寸法は６尺５寸、南北の柱間寸法は７尺である。Ｉａ期の14号溝とＩｂ期の30号建物跡を切っている。29号建物跡とも位置が重複するが、直接の切り合い関係はない。方向はＮ－0.5°－Ｗ。柱穴の深さは30cm前後と、29号・30号建物跡と比べると浅い。特に、柱４が浅くて小規模な柱穴のため、梁行となる可能性が高く、南北棟と考えられる。

【29号建物跡】（図19・20、図版13）

Ｇ～Ｉ－10～13区で検出された。やや不規則な柱配置で、どのような構造物になるのか判然としない。柱間寸法も図20に示したように不規則である。柱穴には底面に平坦な石を入れたものもあるが、不規則である。柱３では、底面から石を４段重ねているのが観察された。30号建物跡を切っている。方向はＮ－２°－Ｅ。

【30号建物跡】（図19・20、図版13）

Ｃ～Ｉ－９～12区で検出されたもので、今回の調査で確認できた建物跡としては最も規模が大きい。東西５間、南北９間以上の、南北に長い建物であるが、複数の建物が連接する可能性もある。柱間隔は６尺５寸を１間とした、１間間隔か半間間隔であるが、柱３と４、柱13と14の間だけは７尺５寸となっている。この柱13と14の西には、７尺５寸の３分の１の２尺５寸出た所にも柱が入る。その南の柱11と12から西にも柱があるが、こちらは６尺５寸を１間とした半間である。柱穴の底面に平坦な石を入れるものが多いが、全てに入っている訳ではない。方向はＮ－0.5°－Ｅである。柱穴は、ほとんどが50cm以上の深さを有する、しっかりしたものである。

【31号建物跡】(図21)

A～E－12～14区で検出された南北棟で、桁行5間、梁行2間の建物である。梁行の真ん中に入る柱5は、他の柱より小さくて浅い。北東コーナー付近の柱穴が検出できていないが、5号溝の埋土が分布する範囲で、認識できなかった可能性が高い。柱6は5号溝埋土を切っている。方向はN－5°－Wである。

【32号建物跡】(図21、図版13)

B～D－14～16区で検出された南北棟で、桁行3間、梁行2間の小規模な建物である。桁行の柱間寸法は7尺、梁行の柱間寸法は6尺5寸で、28号建物跡と共通するが、方向はN－6.5°－Wと異なる。33号・34号建物跡と位置が重なるが、切り合う場所がなく、前後関係はつかめない。柱8がⅡa期の22号柱列の柱2に切られる。

【33号建物跡】(図21、図版13)

A～D－14～16区で検出された南北棟で、桁行5間以上、梁行1間の細長い建物である。桁行の柱間寸法は6尺5寸、梁行の柱間寸法は6尺5寸を1間とした1間半である。34号建物跡を切っており、規模や位置が34号建物跡と共通するため、34号建物跡を建て替えたものと考えられる。Ⅱa期の24号土坑と4号石敷溝、Ⅱb3期の6号柱列に切られる。いずれの柱穴も80cm前後の深さがあり。方向はN－8.5°－Wである。

【34号建物跡】(図21、図版13)

A～D－14～16区で検出された南北棟で、桁行5間以上、梁行1間の細長い建物である。桁行の柱間寸法は6尺5寸、梁行の柱間寸法は6尺5寸を1間とした1間半である。33号建物跡に切られる。Ⅰa期の27号・28号柱列を切っている。方向はN－0.5°－Eである。

【24号柱列】(図19)

C・D－11区で検出した南北方向の柱列である。3間分を検出した。柱間寸法は4尺である。方向はN－1°－W。柱3が、Ⅱa期の22号建物跡柱4に切られている。Ⅱa期の遺構とは方向がずれるため、1期に遡ると考えた。それ以上の決定材料はなく、Ⅰa期・Ⅰb期のいずれかは決定し難い。

【25号柱列】(図23、図版15)

C～I－4・5区で検出された南北方向の柱列である。8間分を検出したが、途中検出できていない部分もある。Ⅰa期の4号溝と重なり、切り合い関係を有すると思われるが、この部分の柱穴は検出できていない。柱間寸法が6尺5寸のため、建物跡の一部の可能性もある。方向はN－8°－W。

【26号柱列】(図21)

A～D－12・13区で検出された南北方向にのびる柱列である。4間分を検出した。柱間寸法が6尺5寸であるため、建物跡の一部である可能性も残る。方向はN－5°－W。直接の切り合い関係はないが、31号建物跡と位置が重なるため、同時存在は考えられない。

【13号溝】(図23、図版22)

G－2～4区で検出した東西溝である。次のⅡa期の26号建物跡と19号柱列に切られており、Ⅰb期とした。調査時には6層上面で確認したが、掘り込み面は5b層か5b層の上面である。溝のごく下部しか確認できなかったため、平面図では細い溝となっているが、断面では上幅70cm、下幅15cm、深さ60cmの大きさである。底面近くが一段深くなっている。埋土は、人為的に一気に埋められた様相を示す。方向はN－19.5°－Wである。

④ 細分時期不明のⅡ期の遺構

Ⅱ期の細分時期ごとの遺構を記述する前に、Ⅱ期のどの細分時期に該当するか不明な遺構、あるいはⅡ期を通じて存在した可能性のある遺構について、先に説明する。

【7号柱列】(図26・27、図版14)

調査区西端の17・18列を南北に走る柱列で、14間分が検出された。1号溝とほぼ同じ位置で、1号溝埋土の上に造られていることから、Ⅱ期に下る遺構である。柱8がⅡb3期の13号土坑に切られている。この13号土坑か

らは、19世紀中葉の磁器が出土しており、幕末の屋敷廃絶時の遺構である可能性もあり、IIｂ３期に存在した可能性は残る。したがって７号柱列は、II期のいずれか、あるいは複数の時期に存在したことは判るが、細かな時期は判らない。柱間寸法は５尺間隔で、３本に１本ずつ、西側に控え柱が付く。控え柱までの間隔は３尺である。次の２号池の様相も合わせて考えると、屋敷の境を区切る塀跡と考えられる。控え柱が西側に出ていることから、西側の屋敷地の東端に造られた塀と考えて良いだろう。方向はN－21.5°－Wと、他の遺構とは異なる。

【２号池】（図26・27、図版16・17）

２号池としたものは、南北に走る溝状の遺構に、不定形の池状遺構が連なったものである。この２号池をはさんで、東西では地盤のレベルが、50cm 程東側が低くなっていることから、この２号池、あるいはその西端の段差が、東西の屋敷の境と考えられる。北半部は、本来は溝状の遺構であったと考えられるが、東側がえぐられるようにふくらんでいる。この部分の壁は、オーバーハングする部分が各所で見られ、水流によって浸食されたものと考えられる。北部の溝状の部分が比較的良く残っている西岸で測ると、方向はグリッドラインとほぼ同じN－17.5°－Wである。南半部は、方形を基調とするものや不整形の池状の遺構と、溝状の遺構が複雑につながる。その形状から、複数の遺構が切り合っているものと考え、サブトレンチを設定するなどして検討したが、確実に切り合う部分は認められず、一連の遺構と考えざるを得ない。埋土の状況から、掘り直しが何回か施されたものと思われ、さらに浸食を受けたりしたためか、細かな変化はうまくとらえられていない。埋土からは比較的多くの遺物が出土しており、埋土４～６層では17世紀末葉から18世紀前葉の遺物がまとまって出土している。埋土１・２層からは、19世紀前半の遺物も出土しており、最後のIIｂ３期まで存続していたと考えられるが、IIｂ３期には、ごく浅い落ち込みとなっていたものと思われる。埋土から、魚類不明・哺乳類四肢骨が出土している。北半部を中心に、底面近くで礫が多く出土している。

【土坑】

細かな時期が判明しない土坑について、Ｉ期にかかるものもあるが、ここでまとめて触れておく。９号土坑（図版27）はG－９区で検出された。5a 層下より掘り込まれていることから、Ｉａ期～IIａ期の間に造られたものである。11号土坑（図版27）はG－９区で検出され、９号土坑を切ることから、IIｂ１期～IIｂ３期の間に造られたものである。12号土坑（図版27）はＩ－７区で検出され、14号建物跡を切ることから、IIｂ２期あIIｂ３期に帰属する。17号土坑（図版28）はB－10区で検出され、18号建物跡に切られることから、Ｉａ期～IIｂ１期の間に造られたと推定されるが、22号溝との関係で問題が残る。19号土坑（図版28）はＩ－１区で検出され、時期は全く限定できない。20号土坑（図版29）はH－６区で検出され、時期は限定できない。21号土坑（図版29）はG－５・６区で検出され、II期のものと思われるが、確実ではない。22号土坑（図版29）はH・Ｉ－５区で検出され、6号建物跡に切られることから、Ｉａ期～IIｂ１期の間に造られたと考えられる。

⑤　IIａ期の遺構

遺構の方向が、N－５～15.5°－Wと、大きく西に傾く時期である。当期と考えられる15号土坑などが、5a 層の下から掘り込まれており、掘り込み面は5b 層上面と考えられる。建物跡７棟、柱列５ないし６列がある。調査区東側に、建物跡と柱列が重複して多数存在する。調査区中央近くには、やや規模の大きな24号建物跡がある他、調査区北側にかけて建物跡と柱列が重複する。２号池のすぐ東側には、石敷溝と柱列が存在する。８号柱列と22号溝は方向が大きくずれるが、８号柱列の柱間寸法が６尺３寸であり、Ｉ期に入るとは考え難いことから当期に含めた。これらは他のIIａ期の遺構より切り合い関係から先行することが確認でき、あるいはＩｂ期とIIａ期との間に、さらに１期設定する必要があるのかも知れない。

【８号建物跡】（図30、図版10）

D～G－３・４区で検出した南北棟で、桁行３間、梁行は１間分が東西の柱穴の間を溝でつないでいる。柱間間隔は７尺であるが、半分の３尺５寸西に出たところにも柱筋が通る。方向はN－11°－W。

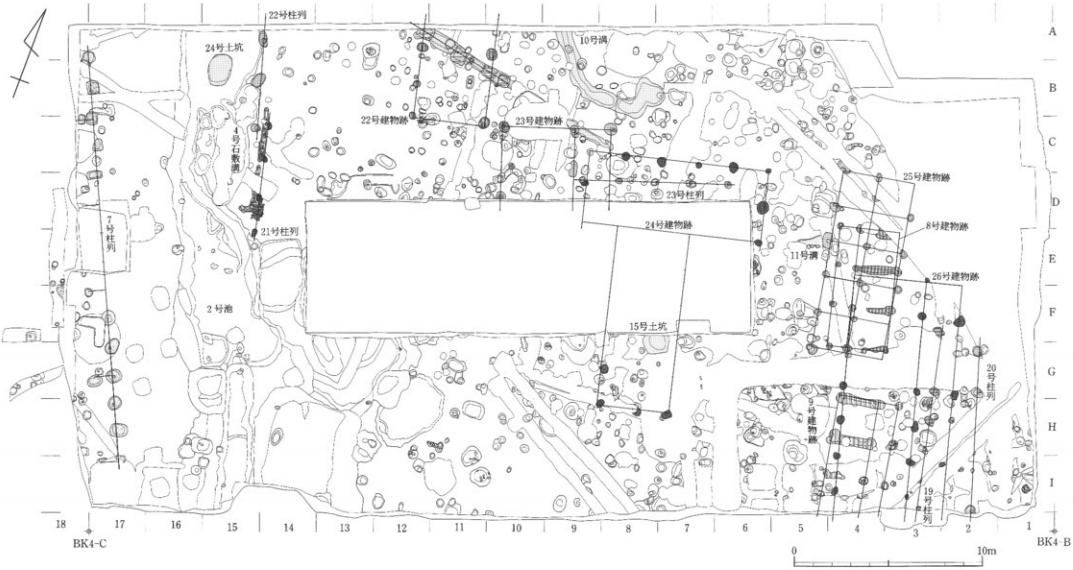


図25　武家屋敷跡第４地点江戸時代Ⅱａ期遺構配置図
Fig. 25　Distribution of features belonging to Edo period (phase II a) at BK4

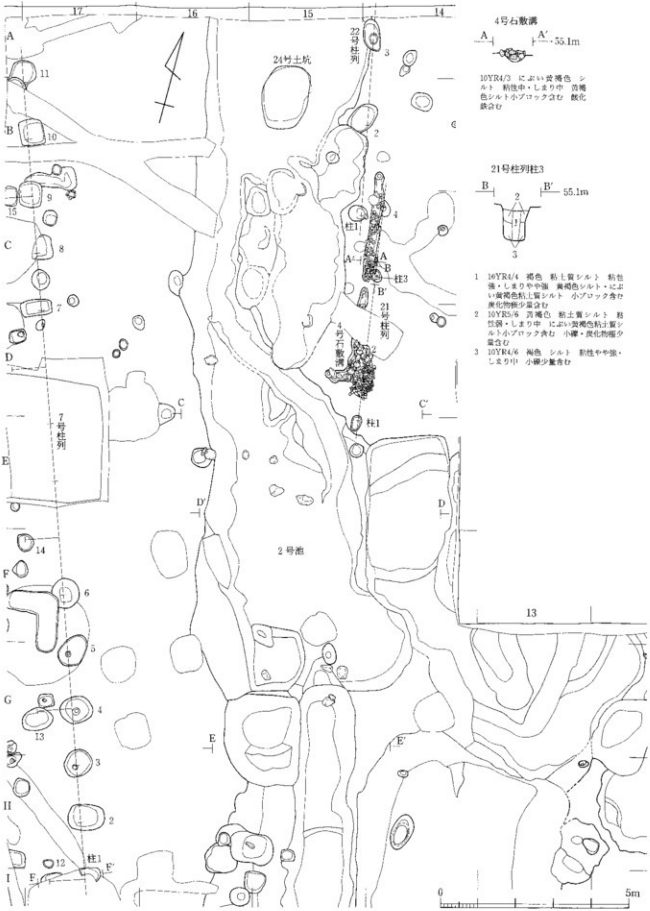
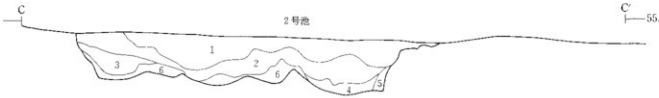
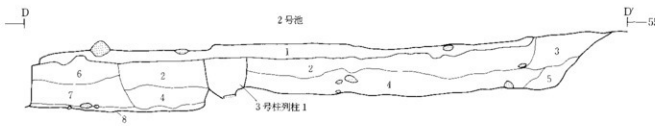


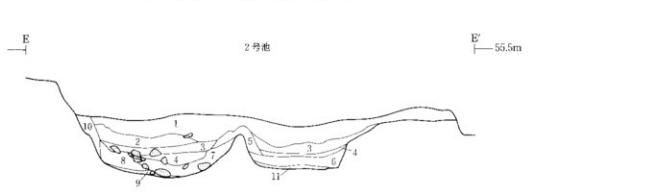
図26　武家屋敷跡第４地点江戸時代Ⅱａ期の遺構 (1)
Fig. 26　Features belonging to Edo period (phase Ⅱa) at BK4 (1)



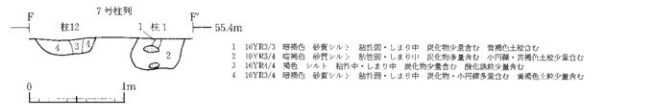
1　埋土1層　10YR5/2　灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　小灰線上部に少量含む　炭化物少量含む　酸化鉄が帯状・ブロック状に入る
2　埋土2層　10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり固　明黄褐色砂質シルトがブロック含む　小灰線少量含む　炭化物多量含む
3　部分的に分布　10YR4/2　灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　にぶい黄橙シルト小ブロック状含む　小灰線少量含む　炭化物多量含む
4　埋土3層　10YR5/2　灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物・酸化鉄少量含む
5　部分的に分布　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色シルト小ブロック含む　小線少量含む　炭化物少量含む　酸化鉄少量含む
6　埋土4層　10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり固　明黄褐色砂質シルトをまだらに含む　小線・炭化物少量含む　酸化鉄多量含む



1　埋土1層　10YR4/2　灰褐色　砂質シルト　粘性少・しまり固　黄褐色砂質シルトブロック含む　小灰線・炭化物少量含む　酸化鉄多量含む
2　埋土2層　10YR5/2　灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　にぶい黄色土粒・小礫少量含む　炭化物含む　酸化鉄を帯状またはまだらに含む
3　部分的な分布　10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性弱・しまり中　褐色粘土質シルト・炭化物・小礫少量含む
4　埋土3層　10YR4/2　灰黄褐色　シルト　粘性やや強・しまり中　にぶい黄褐色シルト粒・小礫少量含む　炭化物・酸化鉄多量含む
5　部分的な分布　10YR4/2　灰黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまりやや強　灰黄褐色粘土質シルトと　炭化物少量含む　酸化鉄多量含む
6　埋土5層　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性強・しまりやや強　灰黄褐色粘土質シルト・炭化物小礫少量含む
7　埋土6層　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色粘土質シルト・灰黄褐色粘土質シルト・炭化物・小礫少量含む
8　部分的な分布　10YR4/1　褐灰色　粘土質シルト　粘性強・しまりやや強　褐色土・炭化物少量含む



1　埋土1層　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色粘土質シルト・灰黄褐色粘土質シルト・炭化物・小礫少量含む
2　埋土3層　10YR3/2　黒褐色　砂質シルト　粘性中やや・しまり固　暗褐色砂質シルトが混ざり合う　褐色砂質シルト・小線・炭化物含む
3　埋土4層　10YR3/1　黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　土主体とし、暗褐色粘土質シルト上部に含む　炭化物含む　小線少量含む
4　埋土5層　10YR4/2　灰黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　褐色粘土質シルトまだらに含む　炭化物・礫少量含む
5　埋土5層　10YR4/2　灰黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　褐色粘土質シルトまだらに含む　炭化物少量含む
6　埋土5層　10YR4/2　灰黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや弱　褐色粘土質シルトをまだらに含む　小礫・炭化物少量含む
7　埋土5層　10YR4/1　褐灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　褐色粘土質シルトまだらに含む　炭化物・礫少量含む
8　埋土6層　10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　明黄褐色粘土質シルトが混ざり合う　礫含む
9　部分的な分布　10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　にぶい黄橙色粘土質シルトが混ざり合う
10　部分的な分布　10YR3/6　黄褐色　粘土質シルト　粘性弱・しまり強　暗褐色砂質シルトが混ざり合う　小礫・炭化物少量含む
11　部分的な分布　10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性弱・しまり強　黄褐色粘土質シルトが混ざり合う



1　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　粘性固・しまり中　炭化物少量含む　黄褐色土粒含む
2　10YR3/4　暗褐色　砂質シルト　粘性固・しまり中　炭化物多量含む　小円礫・黄褐色土粒少量含む
3　10YR4/4　褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物少量含む　酸化鉄粒少量含む
4　10YR3/4　暗褐色　砂質シルト　粘性固・しまり中　炭化物・小円礫多量含む　黄褐色土粒少量含む

図27　武家屋敷跡第4地点江戸時代Ⅱa期の遺構（2）
Fig. 27　Features belonging to Edo period (phase II a) at BK4 (2)

図28　武家屋敷跡第４地点江戸時代Ⅱａ期の遺構（3）
Fig. 28　Features belonging to Edo period (phase Ⅱ a) at BK4 (3)

【９号建物跡】（図29・30、図版10）

調査時には８号建物跡の一部と認識していたが、方向がずれることと、両建物跡の間が、柱間寸法の７尺より大きくなることから、別の建物と判断した。８号建物と同じ構造、柱間寸法であるが、３尺５寸出た柱筋が逆に東側にある。桁行は２間以上。方向はＮ－７°－Ｗである。

【22号建物跡】（図28、図版12）

Ａ～Ｃ－10～12区で検出された南北棟で、桁行２間以上で、柱間寸法は６尺３寸。梁行は６尺３寸を１間とした２間分の間隔があいているが、間に柱穴が見つかっていない。方向はＮ－10°－Ｗ。

【23号建物跡】（図28）

Ｃ～Ｄ－８～10区で検出された南北棟と思われる建物で、桁行２間以上、梁行３間。柱間寸法は６尺３寸。東桁から１間のところにも柱筋が通る。柱５以外の柱穴は、底面に石を入れたものである。方向はＮ－15.5°－Ｗ。

【24号建物跡】（図29）

Ｃ～Ｈ－６～９区で検出された、比較的規模の大きな建物で、南北７間、東西５間。柱間寸法は６尺３寸。大

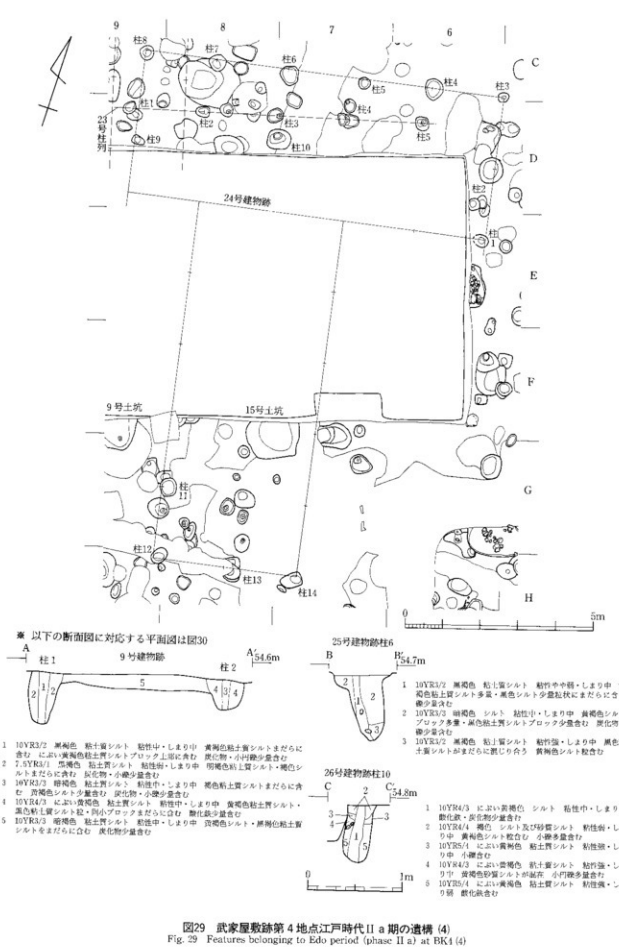


図29 武家屋敷跡第4地点江戸時代II a 期の遺構 (4)
Fig. 29 Features belonging to Edo period (phase II a) at BK4 (4)

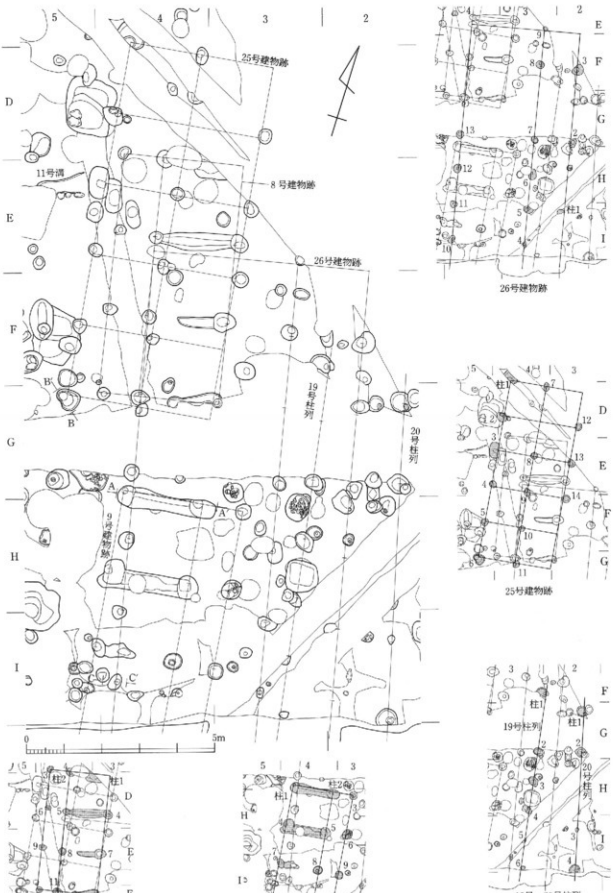


図30　武家屋敷跡第４地点江戸時代Ⅱａ期の遺構（5）
Fig. 30　Features belonging to Edo period (phase Ⅱa) at BK4 (5)

部分が中庭にかかるため確実でないが、北側の東西方向の建物の南に南北方向の建物が連接する可能性がある。北側は南北２間以上、東西５間で、西端から２間のところにも柱筋が通る。南側は東西２間である。方向はＮ－10.5°－Ｗ。柱９が、23号柱列の柱１に切られている。

【25号建物跡】（図29・30、図版12）

Ｃ～Ｇ－３～５区で検出された南北棟で、桁行５間、梁行２間の総柱建物である。柱間寸法は６尺３寸。８号建物跡・26号建物跡と位置が重なるが、直接の切り合い関係がないため、前後関係は不明である。方向はＮ－７°－Ｗ。柱穴の深さは、70cm 前後。

【26号建物跡】（図29・30、図版12）

Ｅ～Ｉ－２～４区で検出された南北棟で、桁行６間以上、梁行３間の建物である。東桁から１間のところにも柱筋が通る。８号建物跡に切られる。柱間寸法は６尺３寸で、方向はＮ－７°－Ｗ。柱穴の深さは、60cm 前後。

【８号柱列】（図28、図版14）

Ａ・Ｂ－10～12区で検出した東西方向の柱列で、方向はＮ－15°－Ｅと他と大きく異なる。一辺60～80cm の方形の柱穴で、この点も他と異なる。柱列をつなぐように溝がのびており、一連の遺構である可能性がある。この溝は、間が17号土坑と試掘区で壊されているため確実ではないが、Ｃ－８・９区で検出された22号溝と方向が一致するため、22号溝の一部とも考えられる。検出した範囲の西側２間分は、柱間寸法が６尺３寸で、東側に６尺３寸を１間とした半間のところに柱がある。この柱間寸法から、建物跡の一部を構成する可能性も考えられる。

【19号柱列】（図30）

Ｈ～Ｉ－２・３区で検出した南北方向の柱列で、６間分を検出。柱間寸法は５尺２寸で、方向はＮ－９°－Ｗ。

【20号柱列】（図30、図版15）

Ｇ～Ｉ－２区で検出した南北方向にのびる柱列で、４間分を検出した。柱間寸法は８尺で、方向はＮ－14°－Ｗ。柱穴の深さは、100cm 前後あり、極めて深い。

【21号柱列】（図26、図版15）

２号池のすぐ東側のＣ～Ｅ－14・15区で検出した南北方向の柱列で、３間分を検出した。４号石敷溝に切られている。柱間寸法は６尺３寸で、あるいは建物跡の一部を構成するものかも知れない。方向はＮ－10.5°－Ｗ。

【22号柱列】（図26）

Ａ～Ｃ－14・15区で検出した南北方向の柱列で２間分を検出した。２号池と一部切り合うが、切り合い関係は良くつかめていない。方向から当期と考えた。柱間寸法は８尺で、方向はＮ－13°－Ｗである。

【23号柱列】（図29）

中庭北側のＤ－６～９区で検出した東西方向の柱列で、４間分を検出した。柱間寸法は６尺３寸で、建物跡の一部を構成する可能性がある。方向はＮ－15.5°－Ｗ。柱１が、24号建物跡の柱９を切っている。

【10号溝】（図28、図版21）

Ａ・Ｂ－７～９区で検出した溝で、東端付近では鍵の手状にまがり、西側は緩く屈曲している。場所によって異なるが、上幅70～120cm、下幅25～90cm、深さは深いところで20cm である。５ａ層の下から掘り込まれており、当期に含めたが、Ｉ期に遡る可能性も残っている。

【11号溝】（図30、図版22）

Ｅ－５区で検出した東西方向の溝で、長さ1.3m分を検出しただけである。南側に川原石が並べられている。幅は30～50cm で、ごく浅い。方向はＮ－19°－Ｗである。5b 層上面掘り込みの可能性が高いため、当期に含めた。

【22号溝】（図28）

Ｃ－８・９区で検出した東西方向の溝で、さらに西側の８号柱列をつなぐ溝と、一連の溝となる可能性がある。上幅45cm、下幅30cm、深さ20cm で、方向はＮ－15°－Ｗと、他の遺構とは大きく異なる。

【４号石敷溝】（図26、図版24）

２号池のすぐ東側のＢ～Ｄ－14･15区で検出したもので、南北方向の幅30～40cmの浅い溝の中に礫が入っている。南端で、西側に少し屈曲する。南端付近では、Ⅰｂ期の33号建物跡柱５の上面まで礫が敷かれている。南北の長さは5.7m で、方向はＮ－９°－Ｗ。21号柱列を切っており、Ⅱｂ２期の６号柱列に切られている。

【15号土坑】（図29、図版28）

Ｆ・Ｇ－７・８区で検出された土坑である。18世紀代の大堀相馬産陶器が出土しており、なおかつ5a 層の下から掘り込まれていることから、当期の遺構と判断した。

【24号土坑】（図26、図版29）

Ａ・Ｂ－15区の２号池底面で検出した不整楕円形の土坑である。Ⅰｂ期の32号・33号建物跡を壊していることから当期に入れたが、２号池との関係が問題である。あるいはⅠｂ期に含め、その最後の段階と考えるべきかも知れない。しかし、この土坑は確認面からの深さが65cm あり、Ⅰｂ期の遺構であるとすると、本来の掘り込み面からの深さは１ｍを越えることとなり、疑問が残る。２号池に付随する施設と考えるべきかも知れない。

⑥　Ⅱｂ１期の遺構

遺構の方向がＮ－２～3.5°－Ｅと、前段階とは逆に東に振れる時期である。建物跡４棟、柱列２ないし５列がある。調査区中央南側には、３棟の建物跡と柱列１列が、近接して存在する。この建物跡としたものは、Ｌ字形に柱が展開するもので、建物に付随した施設かもしれない。他の建物跡・柱列も比較的小規模なものである。

【７号建物跡】（図32、図版10）

Ｇ・Ｈ－７～10区で検出された、柱がＬ字形に並ぶものである。東西方向で８間分、南北方向は１間分を検出した。柱穴に沿うように溝が掘られており、一連の施設と考えられるが、一度溝を埋めてから柱穴が掘られている。柱間寸法は４尺で、建物よりは塀の柱間寸法に近い。建物に付随し屈曲する塀のような施設かも知れない。方向はＮ－2.5°－Ｅである。

【19号建物跡】（図33）

Ａ・Ｂ－９～11区で検出された建物跡で、東西３間、南北２間以上である。柱間寸法は６尺３寸で、方向はＮ－3.5°－Ｅである。

【20号建物跡】（図32、図版12）

Ｆ～Ｈ－５～８区で検出された、柱がＬ字形に並ぶものである。東西10間、南北１間分を検出した。柱穴をつないで溝が掘られており、一連の施設と考えられる。東端はⅡｂ３期の18号土坑に壊されているが、これより先にのびていた痕跡が無い。柱間寸法は３尺６寸。７号建物跡同様、建物に付随する塀のような施設の可能性もある。方向はＮ－３°－Ｅである。

【21号建物跡】（図32）

Ｇ・Ｈ－８～10区で検出された、柱がＬ字形に並ぶものである。東西５間、南北１間分を検出した。東西方向の柱筋は、７号建物跡とほぼ重なり、これに切られている。柱間寸法は５尺２寸。これも建物に付随し屈曲する塀のような施設の可能性がある。方向はＮ－２°－Ｅである。

【17号柱列】（図32、図版15）

Ｈ・Ｉ－６～９区で検出した東西方向の柱列で、６間分を検出した。北側に存在する19・20・21号建物跡と、ほぼ平行して並んでいる。柱間寸法が６尺３寸であるため、建物跡の一部を構成する可能性もある。方向はＮ－2.5°－Ｅ。柱穴が比較的大きいことが特徴である。

【18号柱列】（図34、図版15）

Ａ・Ｂ－４～６区で検出した東西方向の柱列である。中２間分の柱間寸法は６尺３寸で、その両側は６尺３寸を１間とした半間の間隔である。このことから、この柱列から北側に展開する建物跡の一部である可能性が高い。

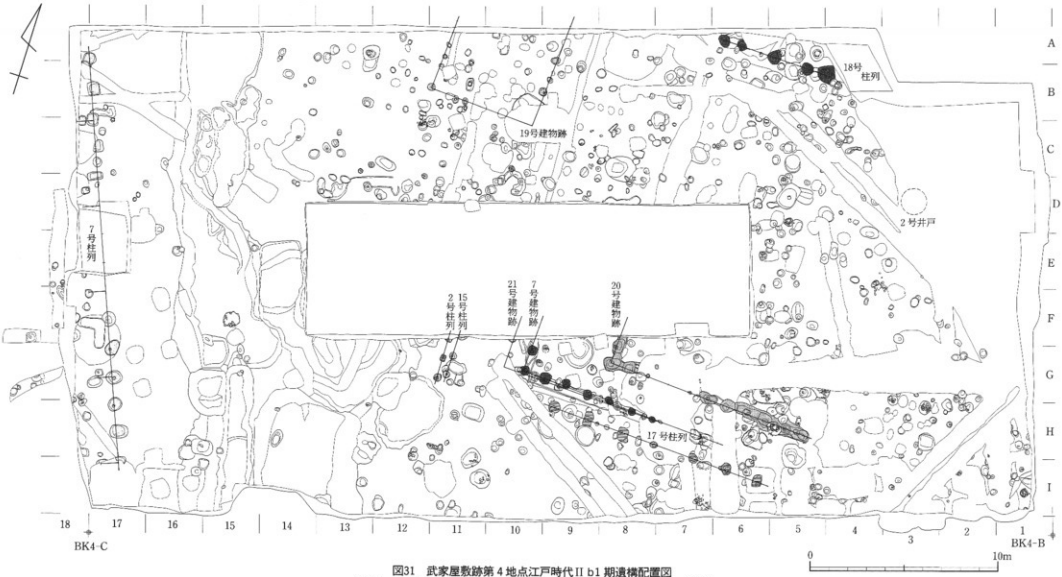
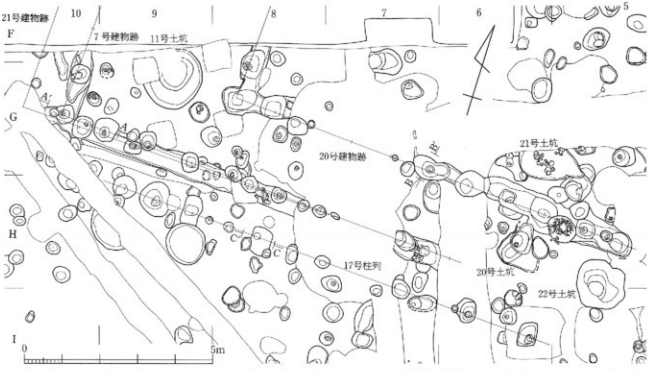
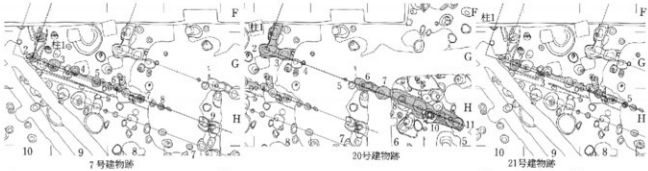
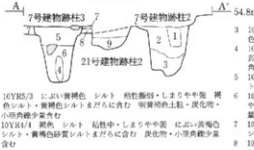


図31　武家屋敷跡第4地点江戸時代IIb1期遺構配置図
Fig. 31　Distribution of features belonging to Edo period (phase IIb1) at BK4

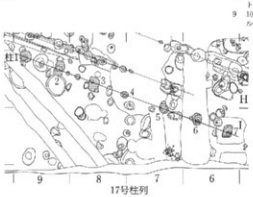


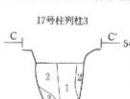




1 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性弱・しまりやや強 褐色シルト・黄褐色シルトまだらに含む 明黄褐色土粒・炭化物・小焼角礫少量含む
2 10YR4/4 褐色 シルト 粘性中・しまりやや弱 にぶい黄褐色砂質シルトまだらに含む 炭化物・小焼角礫少量含む
3 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中・しまりやや弱 黄褐色～褐色ブロック土塊に含む 焼化礫・小焼角礫少量含む
4 10YR4/4 褐色 粘土質シルト 粘性中・しまりやや弱 にぶい黄褐色粘土質シルト・明黄褐色シルトまだらに含む 基部に小焼角礫少量含む
5 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性無・しまり中 褐色シルトまだらにまじりあう 小角礫・亜角礫・亜角土粒少量含む
6 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまりやや弱 褐色シルト・褐色砂質シルトブロック含む 褐褐色土粒少量含む
7 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性強弱・しまり中 黄褐色シルト粒・白色粒子・小亜角礫多量含む
8 10YR5/6 褐色 シルト 粘性無・しまり中 にぶい黄褐色シルトまだらに含む 小焼角礫少量含む
9 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性弱弱・しまり中 褐色シルトまだらに含む 炭化物・小焼角礫少量含む

1 10YR4/4 褐色 シルト 粘性中・しまり中 黄褐色シルト・にぶい黄褐色シルトブロック含む 焼土・焼化粒少量含む 瓦含む 炭化物多量含む
2 10YR4/6 褐色 シルト 粘性中・しまり中 暗褐色シルト・褐色砂質シルトまだらに含む 炭化物・焼土少量含む
3 10YR4/6 褐色 砂質シルト 粘性無・しまり中 炭化物少量含む





1 10YR4/4 褐色 シルト 粘性強・しまり中 黄褐色シルトまだらに含む 炭化物・小礫少量含む
2 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性弱弱・しまり中 小礫多量含む
3 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性弱・しまり中 黒褐色シルトブロック含む 炭化物少量含む
4 10YR4/4 褐色 シルト 粘性弱弱・しまり中 褐色シルト・明黄褐色粘土質シルト多量含む 小礫・炭化物少量含む

図32 武家屋敷跡第4地点江戸時代II b1期の遺構 (1)
Fig. 32 Features belonging to Edo period (phase II b1) at BK4 (1)

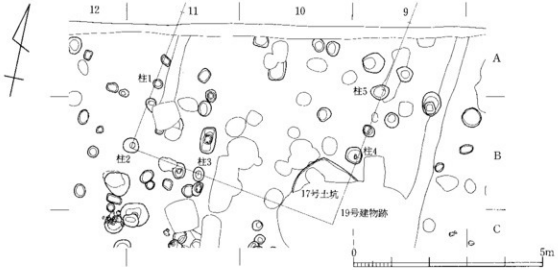


図33　武家屋敷跡第４地点江戸時代Ⅱｂ１期の遺構（2）
Fig. 33　Features belonging to Edo period (phase Ⅱ b1) at BK4 (2)

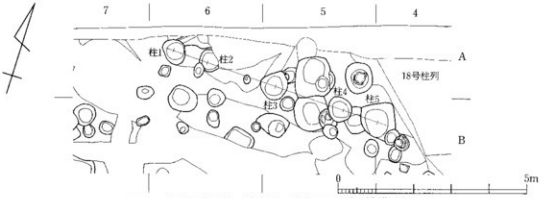


図34　武家屋敷跡第４地点江戸時代Ⅱｂ１期の遺構（3）
Fig. 34　Features belonging to Edo period (phase Ⅱ b1) at BK4 (3)

柱穴も比較的大きい。方向はＮ－３°－Ｅである。

⑦　Ⅱｂ２期の遺構

建物跡４ないし５棟、柱列２ないし５列がある。方向はＮ－０～４°－Ｗ。調査区東側に、建物跡３棟と、柱列１列が、重複して存在する。この内の16号建物跡が、今回検出された建物跡では、唯一礎石建物跡の可能性がある。調査区中央北側には、やや規模の大きな18号建物跡がある。１号井戸・３号井戸からは、比較的まとまった遺物が出土した。２号井戸は、出土遺物がなく、当期かどうか確証がない。

【14号建物跡】（図37、図版11）

Ｉ－７～９区で検出された建物跡で、東西２間以上、南北１間以上の建物である。柱間寸法は６尺３寸で、方向はＮ－0.5°－Ｗ。当期に含めたが、Ⅱｂ３期の可能性も残る。柱４が、12号土坑に切られている。

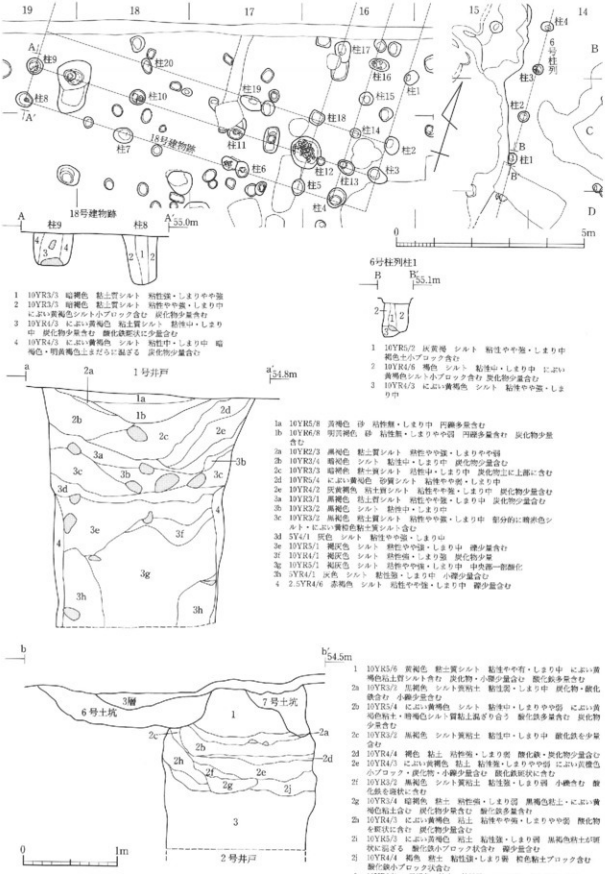
【15号建物跡】（図38）

Ｇ～Ｉ－３・４区で検出された建物跡で、東西２間以上、南北２間以上となると考えられる。柱間寸法は６尺３寸で、方向はＮ－0.5°－Ｗ。

【16号建物跡】（図38、図版11）

Ｈ・Ｉ－３～５区で検出された南北棟と思われる建物跡で、東西２間、南北２間以上となる。柱１・柱２の柱筋と柱３の間は６尺３寸の間隔であるが、他は６尺３寸を１間とした１間半の間隔である。方向はＮ－3.5°－Ｗである。柱穴は、１辺100cm前後の方形に近い形で、他の建物跡より大きく、礫が内部に多数入っているもの

図35　武家屋敷跡第4地点江戸時代II b2 期遺構配置図
Fig. 35　Distribution of features belonging to Edo period (phase II b2) at BK4



1 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘性強・しまりやや強
2 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまりや
によい黄褐色シルト小ブロック含む 炭化物少量含む
3 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり
中 炭化物少量含む 酸化鉄斑状に少量含む
4 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中・しまり中 暗
褐色・明黄褐色土ま だらに混ざる 炭化物少量含む

1 10YR5/2 灰黄褐 シルト 粘性やや強・しまり中
褐色ブロック含む
2 10YR4/6 褐色 シルト 粘性強・しまり中 にぶい
黄褐色シルト小ブロック含む 炭化物少量含む
3 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性やや強・しま
りや

1a 10YR5/8 黄褐色 砂 粘性無・しまりや 円礫多量含む
1b 10YR6/8 明黄褐色 砂 粘性無・しまりやや弱 円礫多量含む 炭化物少量
含む
2a 10YR2/3 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまりやや弱
2b 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性中・しまりや 炭化物少量含む
2c 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 炭化物に上部に含む
2d 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性やや強・しまりや
2e 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまりや 炭化物少量含む
3a 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり中 炭化物少量含む
3b 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中・しまりや
3c 10YR3/2 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり中 部分的に明赤色シ
ルト・にぶい黄褐色粘土質シルト含む
3d 5Y4/1 灰色 シルト 粘性やや強・しまりや
3e 10YR5/1 褐灰色 シルト 粘性やや強・しまりや 礫少量含む
3f 10YR4/1 褐灰色 シルト 粘性強・しまり強 炭化物少量
3g 10YR5/1 褐灰色 シルト 粘性やや強・しまりや 中央部一部酸化
3h 5YR4/1 灰色 シルト 粘性強・しまりや 小礫少量含む
4 2.5YR4/6 赤褐色 シルト 粘性やや強・しまりや 礫少量含む

1 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト 粘性やや有・しまり中 にぶい黄
褐色粘土質シルト含む 炭化物・小礫少量含む 酸化鉄多量含む
2a 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土 粘性強・しまり中 酸化物・酸化
鉄含む 小礫少量含む
2b 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト 粘性中・しまりやや弱 にぶい黄
褐色粘土・暗褐色シルト質粘土混ざり合う 酸化鉄多量含む 炭化物
少量含む
2c 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土 粘性中・しまり中 酸化鉄を少量
含む
2d 10YR4/4 褐色 粘土 粘性弱・しまり密 酸化鉄・炭化物少量含む
2e 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土 粘性強・しまりやや弱 にぶい黄褐色
小ブロック・炭化物・小礫少量含む 酸化鉄斑状に含む
2f 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土 粘性強・しまり弱 小礫含む 酸
化鉄を微粒に含む
2g 10YR3/4 暗褐色 粘土 粘性強・しまり弱 黒褐色粘土・にぶい黄
褐色粘土含む 炭化物少量含む 酸化鉄多量含む
2h 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土 粘性強・しまりやや弱 酸化物
を斑状に含む 炭化物少量含む
2i 10YR3/3 にぶい黄褐色 粘土 粘性強・しまり弱 黒褐色粘土が斑
状に混ざる 酸化鉄小ブロック状含む 礫少量含む
2j 10YR4/4 褐色 粘土 粘性強・しまり強 粒状粘土ブロック含む
酸化鉄小ブロック状含む
3 10YR3/1 黒褐色 粘土 粘性強・しまり密 炭化物少量含む

図36 武家屋敷跡第4地点江戸時代II b2期の遺構 (1)
Fig. 36 Features belonging to Edo period (phase II b2) at BK4 (1)

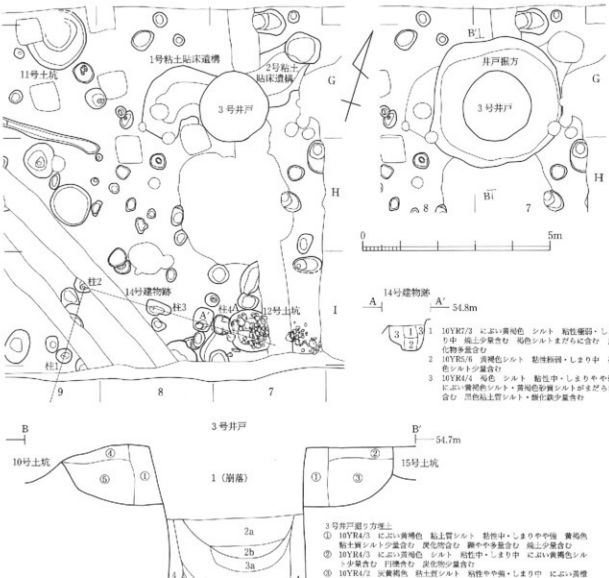


図37　武家屋敷跡第４地点江戸時代Ⅱ b2 期の遺構（2）
Fig. 37　Features belonging to Edo period (phase II b2) at BK4 (2)

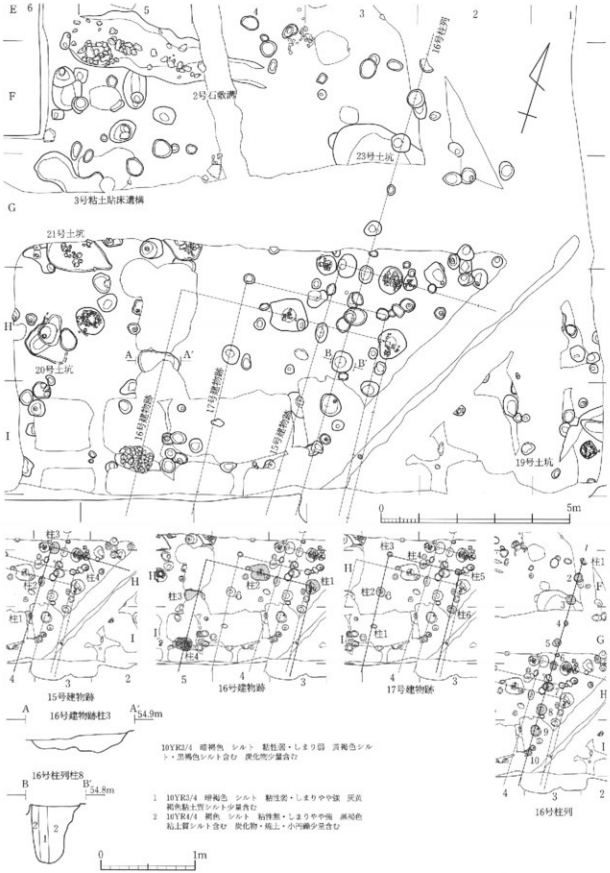


図38 武家屋敷跡第4地点江戸時代II b2 期の遺構 (3)
Fig. 38 Features belonging to Edo period (phase II b2) at BK4 (3)

もあり、礎石建物跡の根石の可能性がある。ただし、柱3では礫はほとんど入っておらず、問題が残る。

【17号建物跡】（図38）

H・I－3・4区で検出された南北棟と思われる建物跡で、東西2間、南北2間以上となる。柱間寸法は6尺3寸で、方向はN－4°－Wである。

【18号建物跡】（図36、図版11）

A・B－10～13区で検出された建物跡である。柱9・10・11・13・16が、底面に石を敷いた柱穴で、主要な柱筋になると思われ、6尺3寸を1間とした1間半の間隔で並んでいる。その両側半間ずつのところにも柱が並ぶ。外側の柱筋の柱穴は、底面に石は敷かないが、深さは逆に深い。方向はN－0°－EWである。

【6号柱列】（図36、図版13）

2号池のすぐ東側のB・D－14・15区で検出した南北方向の柱列で、3間分を検出した。4号石敷溝を切っている。柱間寸法は4尺で、方向はN－2°－W。

【16号柱列】（図38、図版15）

F～I－2・3区で検出した南北方向の柱列で、9間分を検出。柱間寸法は4尺で、方向はN－1°－W。

【2号石敷溝】（図38、図版24）

E・F－4・5区で検出した東西方向の溝で、IIb3期の1号石敷溝がほぼ同じ場所に造られているため、遺存状態は悪いが、底面に礫が多数残っており、本来は石敷の溝であった可能性がある。方向はN－4°－W。

【1号井戸】（図36、図版25）

調査区東端のD－1区で検出した、径2.2mの井戸である。明治時代に削平を受けている区域であるため、他の遺構との関係は不明。確認面から約2.5mのところで、周囲に川原石を組んで、直径を一回り小さくしているのが確認された。ここまで調査をして写真撮影を済ませた段階で、崩壊の危険が出てきたため、それ以上の調査は断念した。埋土からは、18世紀中葉の遺物が、まとまって出土している。動物遺存体の種類も比較的多く、ハマグリ・アサリ・アカニシ・アワビ・シジミガイ科・ヒメエゾボラが出土しているが、数はごく少ない。

【2号井戸】（図36、図版25）

D－3区で検出された、径約1.6mの井戸である。明治の削平を受けた部分の、壁のところに残っていた。断面図を作成した段階で崩壊し、危険なためそれ以上の調査は断念した。時期の判る遺物が出土しておらず、当期の遺構かどうか確証がない。

【3号井戸】（図37、図版25・26）

G・H－7・8区で検出された、径1.9mの井戸である。確認面から2.4mの深さまで調査したが、それ以上は危険なため断念した。埋土からは、18世紀中葉の遺物がまとまって出土している。動物遺存体では、アワビ・シジミガイ科・種類不明の二枚貝と巻貝があるが、数はごく少ない。この井戸には、径約3.5m、深さ60cmの、やや不整な円形の掘り方が伴っている。井戸本体は、この掘り方の部分と、その下で径が変わらない。何らかの有機質の施設が井戸の形状に合わせて造られ、その外側の掘り方が埋め戻されたものと考えられる。

【1～3号粘土貼床遺構】（図37・38、図版26）

3号井戸の周辺で、浅い皿状の掘り方に粘土を貼り付けた遺構が3基検出されている。平面形状は整った形をとらない。この内の1号・2号粘土貼床遺構は、3号井戸の掘り方埋土の上に造られ、3号井戸の東西にのびる。粘土を貼った構造と、位置から見て、3号井戸に伴う水回りの施設と考えられる。

【23号土坑】（図38、図版29）

F・G－3区で検出。16号柱列を切るが、IIb3期の1号石敷溝が上に造られることから、当期に含めた。

⑧　IIb3期の遺構

江戸時代の最後の段階と考えられる時期で、建物跡4ないし5棟、柱列3ないし4列がある。調査区北東側を

中心に、浅い溝で区画がなされている。その内、1号・3号石敷溝は雨落溝と考えられる。これらの溝と方向を合わせた建物跡と、方向の合わない建物跡がある。当該期の中でも、最終末段階には、土坑が多く造られており、屋敷の廃絶に関わる可能性がある。

【10号建物跡】（図40・41、図版10）

C～E－3～7区で検出された東西棟で、桁行5間以上、梁行2間の建物である。3号溝・19号溝・1号石敷溝に囲まれるような位置にある。ただし、3号溝・19号溝とは方向は似ているが、1号石敷溝とは方向がずれる。柱間寸法は6尺3寸で、方向はN－7°－W。梁の中間の柱7だけは柱穴が小さく浅いが、それ以外の柱穴は、60cm前後の深さを有し、底面に扁平な石を据えている。

【11号建物跡】（図43）

G～I－6～8区で検出された建物跡で、東西3間、南北3間以上になると思われる。柱間寸法は6尺3寸で、方向はN－14°－Wである。他のⅡb3期の遺構とは、方向が大きくずれるが、柱3がⅡb2期の3号井戸に伴う1号粘土貼床遺構を切っていることから、当期に含めた。

【12号建物跡】（図42）

A・B－9・10区で検出された。南北方向は1間分が検出され、柱間寸法は6尺3寸である。東西方向は、6尺3寸を1間とした2間分の間隔が開いているが、間に柱は検出されていない。方向はN－1°－Eである。

【13号建物跡】（図42、図版11）

B～D－9～11区で検出された南北棟である。梁行は2間で、柱間寸法は6尺3寸である。桁行は、6尺3寸を1間とした半間ごとに柱が存在し、8本分の範囲が検出されている。桁行の柱は、2本分を一つの掘長い柱穴に入れている部分が多い。桁行の柱は、1本おきに深さが変わっており、柱2・4・6・8・10・12・14が深く、その間の柱は浅い。柱2と柱14をつなぐ形で、間に柱15が入る。柱穴には礫が多く入っているが、柱の下に敷いたところはほとんどなく、柱の周りに詰めたような状況を呈する。方向はN－3°－Wである。建物跡の内部に入る形で、16号土坑が存在するが、土坑の長軸の向きが、ちょうど柱4と柱12を結ぶラインに近いところにくるため、16号土坑がこの建物跡に付随する施設の可能性もある。

【2号柱列】（図43、図版13）

F・G－11区で検出した柱列で、2間分の検出に留まる。中庭南壁の断面では、一部2号池の埋土に覆われているが、両者の関係は良くつかめていない。方向からⅡb期に相当すると考えたが、その中での細かな時期は不明であるため、Ⅱb1期～Ⅱb3期の全体図に記載した。柱間寸法は3尺6寸で、方向はN－0.5°－W。

【3号柱列】（図44、図版13）

E－14～16区で検出した東西方向の柱列で、2間分を検出した。2号池の埋土2層上面から掘り込まれている（図27）。柱間寸法は5尺で、方向はN－3°－Eである。

【12号柱列】（図42）

B～D－9・10区で検出した南北方向の柱列である。南側の柱1～3は直線的に柱穴が並ぶ。北側の柱4・柱5としたものは、方向がずれるが、柱穴の形状が良く似ているため、一連の柱列と考えた。したがって、方向不定で、柱間寸法も一定しない。柱列としたが、柱穴の大きさがきわめて小規模で浅いため、杭列のような簡素な構造を想定した方が良いであろう。

【13号柱列】（図40）

B・C－6・7区で検出した南北方向の柱列で、3間分を検出した。位置関係では、柱4が3号溝と切り合うが、撹乱のため前後関係は不明である。柱間寸法は4尺で、方向はN－9.5°－Wである。

【14号柱列】（図42、図版14）

B～D－8・9区で検出した南北方向の柱列で、4間分を検出した。7号溝のすぐ東脇に平行して並んでおり、

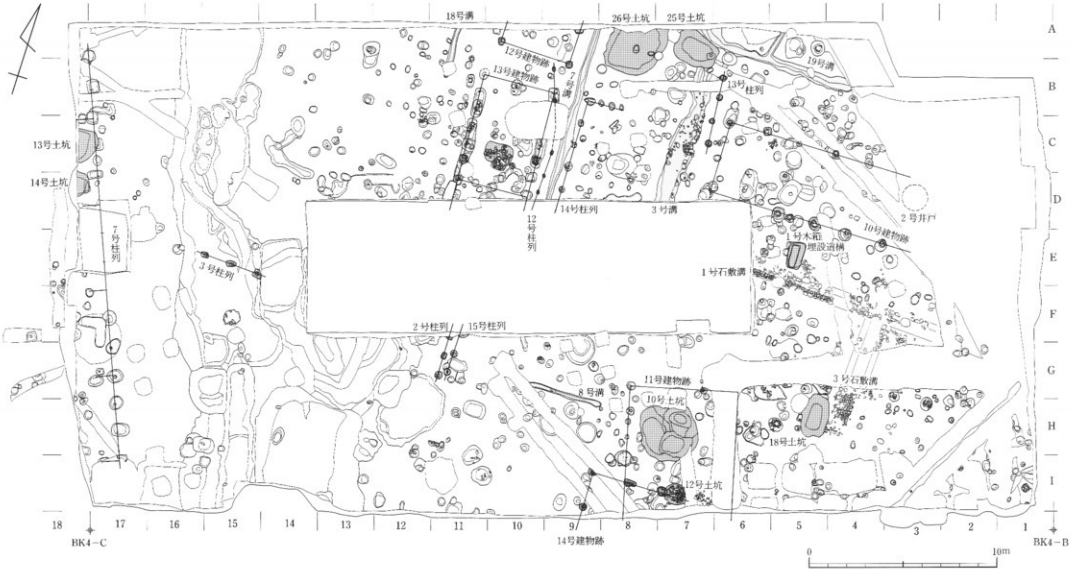


図39　武家屋敷跡第4地点江戸時代 IIb3 期遺構配置図
Fig. 39　Distribution of features belonging to Edo period (phase IIb3) at BK4

図40　武家屋敷跡第4地点江戸時代 IIb3 期の遺構 (1)
Fig. 40　Features belonging to Edo period (phase IIb3) at BK4 (1)

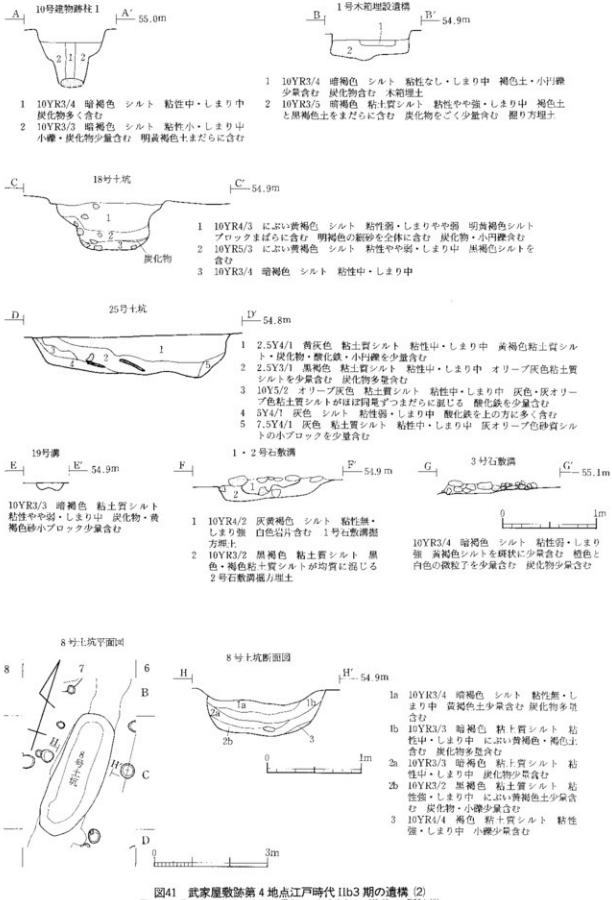
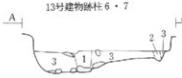
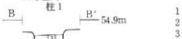


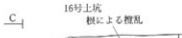
図41 武家屋敷跡第4地点江戸時代IIb3期の遺構 (2)
Fig. 41 Features belonging to Edo period (phase IIb3) at BK4 (2)



1 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり中 炭化物多量含む 小礫を少量含む
2 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり中 炭化物多量含む
3 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性中・しまりやや強 黒褐色・黄褐色土をまだらに含む 炭化物多量含む 全体的小円礫を少量含む他底部付近に径10cm程の礫を密に含む



1 7.5YR5/6 明褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり弱 褐色粘土質シルト粒含む
2 10YR6/6 明黄褐色 粘土 粘性強・しまり弱 混入物はほとんどない
3 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 黄褐色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルトブロック含む 炭化物少量含む

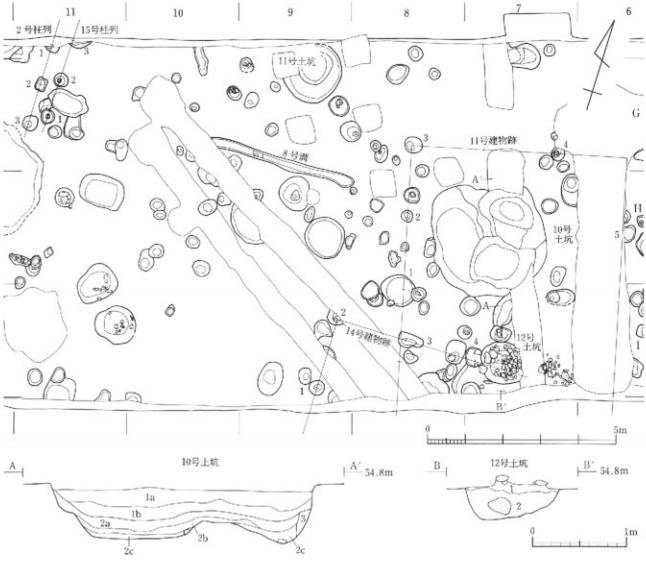


1 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性やや弱・しまり強 明黄褐色シルトを斑状に含む 小礫を全体的に含み径13cmの大きな円礫もみられる 炭化物少量含む
2 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト 粘性やや弱・しまり強 暗褐色粘土質シルト極少量含む 黒褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む
3 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 明黄褐色粘土質シルトを斑状に含む 小礫を全体的に含む 炭化物を少量含む
4 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり中
5 10YR4/4 褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり強 黄橙色シルトを斑状に少量含む 小礫を極少量含む
6 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性強・しまり強 黒色粘土質シルトを小ブロック状に少量含む 黄褐色砂質シルトを斑状に含む 小礫を全体的に含む

1 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中・しまり中 にぶい黄褐色砂質シルトを斑状に少量含む 炭化物を全体的に多く含む 礫含む
2 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性強・しまり中 にぶい黄橙色・褐灰色シルトの小ブロックを少量含む 炭化物少量含む
3 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性強・しまり中 灰黄褐色シルトの小ブロックを少量含む 酸化鉄が斑状にみられる 炭化物少量含む
4 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト 粘性強・しまりやや弱 炭化物多量含む 小礫含む
5 5Y5/2 灰オリーブ色 砂質シルト 粘性強・しまり弱

0 1m

図42 武家屋敷跡第4地点江戸時代 IIb3 期の遺構 (3)
Fig. 42 Features belonging to Edo period (phase IIb3) at BK4 (3)



1a　10YR4/4　褐色　シルト　粘性無・しまりやや強　にぶい黄褐色土を少量ブロック状に含む　褐色・暗褐色土をごく少量含む　炭化物・小円礫含む
1b　10YR3/4　暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　褐色土がほぼ同量含まれる　炭化物・小円礫少量含む
2a　10YR3/4　暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　暗褐色土をブロック状に含む　炭化物・小円礫をごく少量含む
2b　10YR4/4　褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　酸化鉄多量含む　小礫を少量含む
2c　10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　黒褐色・褐色土少量含む　小礫を少量含む
3　10YR4/6　褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　にぶい黄褐色土がほぼ同量混ざる　炭化物少量・酸化鉄多量含む

1　10YR4/4　褐色　シルト　粘性無・しまりやや強　酸化鉄多量含む　炭化物少量含む
2　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱・しまり強　褐色土ごく少量含む　炭化物多量含む　酸化鉄・小礫少量含む

図43　武家屋敷跡第４地点江戸時代 IIb3 期の遺構 (4)
Fig. 43　Features belonging to Edo period (phase IIb3) at BK4 (4)

同時に存在した可能性が高い。北端の柱５から東に折れる形で、３基のピットが存在し、一連のものである可能性もある。柱間寸法は４尺で、方向はＮ－１°－Ｗである。

【15号柱列】（図43、図版15）

Ｆ・Ｇ－11区で検出した柱列で、２号柱列のすぐ脇にある。２間分の検出に留まる。２号柱列同様、方向からＩＩｂ期に相当すると考えたが、その中での細かな時期は不明であるため、ＩＩｂ１期～ＩＩｂ３期の全体図に記載している。柱間寸法は３尺６寸で、方向はＮ－0.5°－Ｗである。

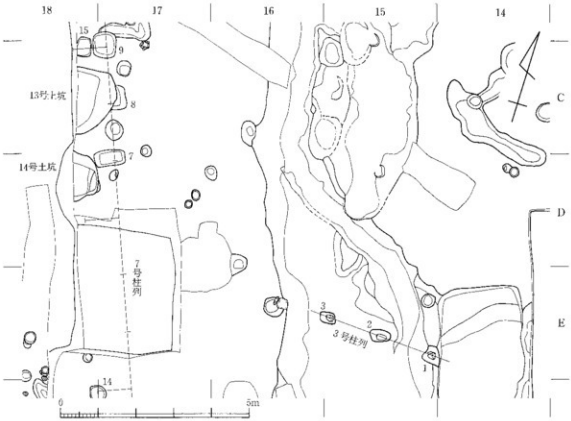


図44　武家屋敷跡第４地点江戸時代 IIb3 期の遺構 (5)
Fig. 44　Features belonging to Edo period (phase IIb3) at BK4 (5)

【３号溝】（図40、図版19）

Ｂ・Ｄ－６・７区で検出された南北溝で、北側は２つに分かれている。25号土坑と攪乱に切られているため判然としないが、19号溝とつながる可能性もある。場所によって規模が異なるが、もっとも広いところで、上幅130cm、下幅80cm、深さ10～15cm 程を測る。北側を除いた部分の方向はＮ－2.5°－Ｅである。

【７号溝】（図42、図版21）

Ａ～Ｄ－９区で検出された南北溝で、上幅25～45cm、下幅10～20cm、深さ15～20cm の細い溝である。方向はＮ－1.5°－Ｗである。

【８号溝】（図43）

Ｇ・Ｈ－９・10区で検出された東西溝で、東端は途切れる。上幅20～25cm、下幅15cm、深さ10cm 弱のごく細い溝で、方向はＮ－0.5°－Ｗ。IIｂ１期の７号建物跡に伴う溝を切っており、IIｂ２期かIIｂ３期と考えられる。

【18号溝】（図42、図版23）

Ａ・Ｂ－11区で検出された南北溝で、南端は攪乱で切られているが、それより南側にはのびず、途切れると考えられる。上幅30cm、下幅20cm、深さ10cm の細い溝で、方向はＮ－3.5°－Ｗである。

【19号溝】（図40・41、図版23）

Ａ・Ｂ－４～７区で検出された東西方向の溝であるが、途中で北側に細い溝が分かれている。25号土坑に切られる以外は、この区域の他の遺構を全て切っている。幅は場所によって変化し、西側は緩く屈曲している。平均的な部分で、上幅50cm、下幅25cm、深さ10cm 程度である。東側の直線的な部分の方向はＮ－0.5°－Ｅである。

【１号石敷溝】（図40・41、図版24）

良好に残存していたのはＥ・Ｆ－５・６区であるが、３・４列にも、この続きと考えられる礫が分布しており、

さらに東側へのびるものと考えられる。両側に扁平な礫を並べ、間に小振りな礫を敷いたものである。両側の礫の間の幅は20cm 前後である。その形態から、建物に付随する雨落溝の可能性が考えられるが、直接伴うような建物跡は確認できなかった。方向はN－2.5°－Eである。

【3号石敷溝】（図40・41、図版24）

1号石敷溝に直交する方向で、南北にのびる石敷溝である。残存状態は良くないが、1号石敷溝と同様の構造と考えられる。

【1号木箱埋設遺構】（図40・41、図版30）

E－5区で検出されたもので、140cm×80cm のほぼ長方形の土坑の中に、120cm×40cm の長方形の木箱を埋設したと考えられる遺構である。一部底面の木質が残存していた。1号石敷溝に斜めにつながるように、礫が分布しており、1号石敷溝と関連する遺構かも知れない。水回りの用途が想定できるであろう。

【土坑】

時期が限定できないものを除くと、当期では8基の土坑が確認された。8号土坑（図41、図版27）は、3号溝と同じ場所に造られたもので、これを埋めて3号溝が造られている。16号土坑（図42、図版28）は13号建物跡の内部にあり、位置関係から13号建物跡に伴う施設の可能性がある。壁と底面が激しく焼けており、埋土には礫が多数入っていた。10号土坑（図43、図版27）、13号土坑（図44、図版28）、18号土坑（図40、図版28）、25号土坑（図40、図版29）は、19世紀代の遺物が出土していることから当期に含めた。ややまとまって遺物が出土しているが、ゴミ穴と考えられる程は多くない。14号土坑（図44、図版28）は、13号土坑のすぐ南側で検出されたもので、形態や埋土が類似することから、13号土坑と同様の時期の可能性を考えた。26号土坑（図42、図版29）も、25号土坑のすぐ脇に位置し、埋土の状況が似ていることから、同様の時期の可能性を考えた。

(3) 4層上面の遺構

【畑跡】（図48、図版31・32）

13列より東側一帯で、溝で区画された内部に畝状の遺構が広がるのが確認され、畑跡と考えられる。図48に示したように、溝による畑の区画は、4ないし5区画が認められる。畝の高さは5 cm 前後が一般的で、残りの良いところでも10cm 程度である。

【集石遺構】（図46、図版32）

G－8区の区画溝の脇に、長軸110cm の大きな石の周囲に、小振りの石や陶磁器がまとめられているのが発見された。畑の耕作で邪魔になった石や遺物を、ここに集積したものと考えられる。

【道路跡】（図版31）

II期の2号池の西側にあたる、15～17列の標高が高い部分が、当期でも高いまま残されており、ここから多数の轍が検出され、道路として利用されていたと考えられる。D－17区で板材を敷き、杭で端を留めているのが検出されている。

【1号池】（図版31）

II期の2号池が存在したところの一部が埋まりきらずに残されている。断面の観察から、部分的に掘り直されていると考えられる。18世紀末葉から19世紀中葉の遺物が、ややまとまって出土している。

【10・11号柱列】（図46）

両柱列とも、畝状遺構を切って造られている。長方形の小型のピットが並ぶもので、柱列というよりは、もっと簡素な構造の施設を想定した方が良いであろう。

【6・7号土坑】（図47、図版32）

D－2・3区の、明治時代の削平による壁の部分で断面を確認し、2号井戸とともに断面図を作成したが、そ

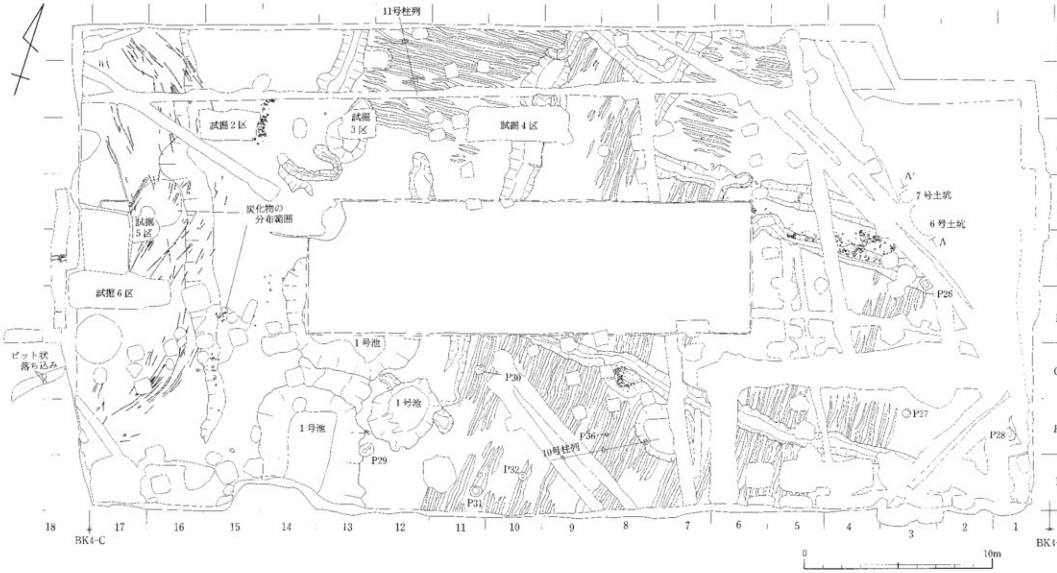


図45　武家屋敷跡第4地点4層上面遺構配置図
Fig.45 Distribution of features on the surface of stratum 4 at BK4

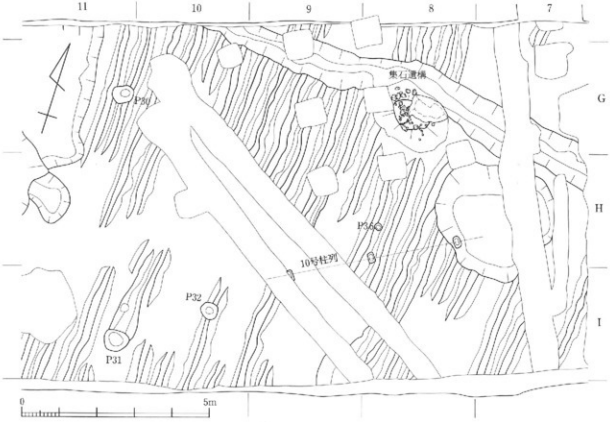


図46　武家屋敷跡第４地点４層上面の遺構（1）
Fig.46　Features on the surface of strarum 4 at BK4 (1)

図47　武家屋敷跡第４地点４層上面の遺構（2）
Fig.47　Features on the surface of strarum 4 at BK4 (2)

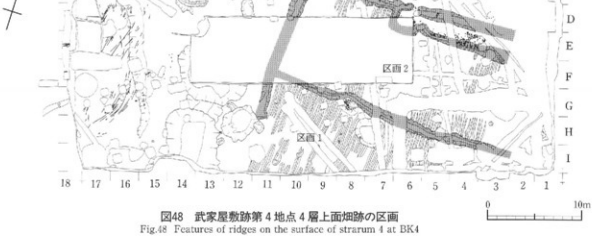


図48　武家屋敷跡第４地点４層上面畑跡の区画
Fig.48　Features of ridges on the surface of strarum 4 at BK4

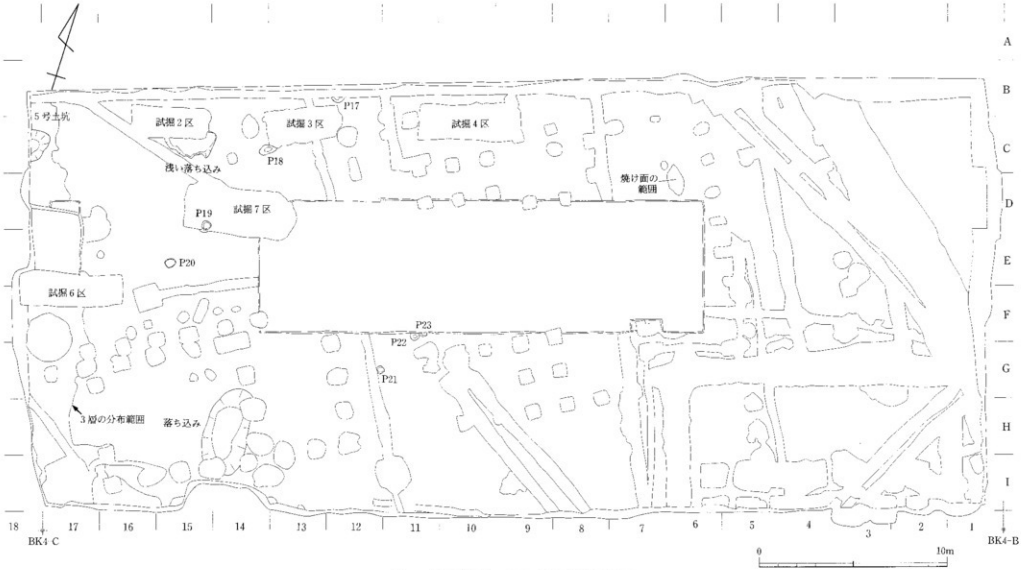


図49　武家屋敷跡第4地点3層上面遺構配置図
Fig.49 Distribution of features on the surface of strarum 3 at BK4

図50　武家屋敷跡第4地点2層上面遺構配置図

Fig.50 Distribution of features on the surface of strarum 2 at BK4

図51　武家屋敷跡第４地点２層上面の遺構（1）
Fig.51　Features on the surface of strarum 2 at BK4 (1)

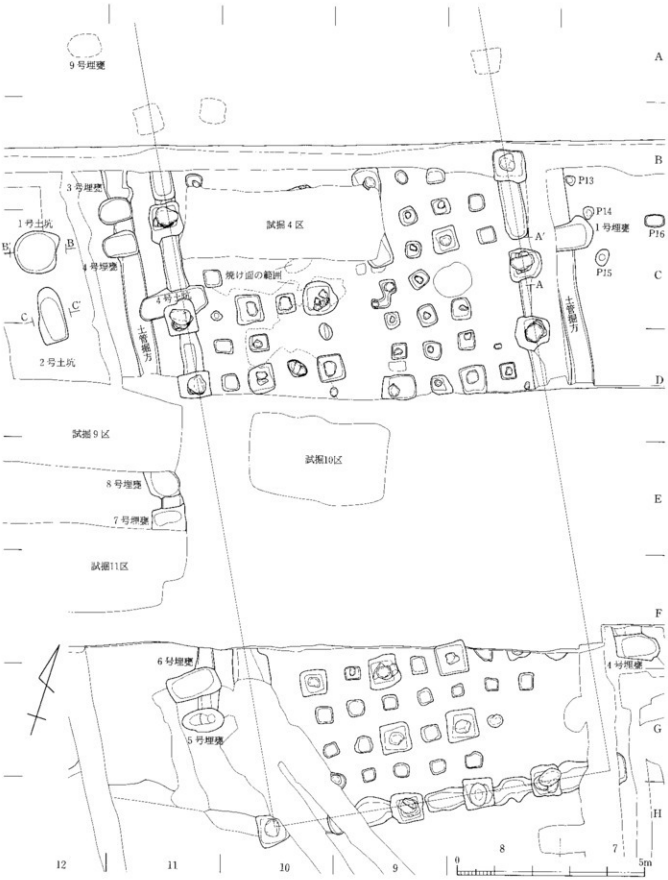


図52　武家屋敷跡第４地点２層上面の遺構（2）
Fig.52　Features on the surface of stratum 2 at BK4 (2)

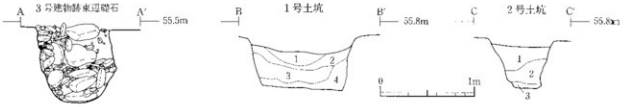


図53　武家屋敷跡第4地点2層上面の遺構 (3)
Fig.53　Features on the surface of strarum 2 at BK4 (3)

の段階で崩落してしまった。そのため平面位置も含めて、詳細は不明である。埋土を3層が覆っていたため、4層上面の遺構としたが、確認できておらず、より古い段階の遺構である可能性も残っている。

(4)　3層上面の遺構（図49、図版32）

3層上面で検出された遺構は、きわめて少ない。土坑1基（5号土坑）、ピット7基が検出された他、C－15区で浅い落ち込み、C・D－6区で焼け面、I－9区で礫が集中している部分が確認されている。5号土坑は、3層が分布しない範囲にあるため、4層上面の遺構である可能性も残る。しかし4層のこの付近は、道路として利用されていた部分なので、土坑の存在は不自然なので3層上面の遺構と判断した。

(5)　2層上面の遺構

【1～6号建物跡】

2層上面では、礎石建物跡6棟が検出された。方向は、全てN－27.5°－Wである。1号建物跡と2号建物跡（図51、図版33）は、位置が重なるが、攪乱によって切り合い関係が判らない。1号建物跡は、溝の中に川原石を詰め、その中に礎石を据えている。その他の建物跡は、柱穴の礎石のまわりに川原石を詰め込んでいる。実測図では、これらの詰められた川原石については図化せずに、礎石だけを示している。3～6号建物跡は、礎石が複数段重ねられているところもある。3号建物跡（図52・53、図版33・34）は、内部にも多数の柱穴を有する。4号建物跡と5号建物跡（図54、図版34）は重複し、5号建物跡が新しい。1・3・4・6号建物は、側面ラインを合わせており、その間隔も規則的であることから（図55）、同時に存在した建物と考えられる。

【1号石垣】（図51、図版34）

調査区の北東を斜めに横切るように、高さ2mの段差が造られており、その段差の下から検出されたものである。石の表側は方形に加工されている。1段分だけが残っていたが、本来は段差の擁壁として、さらに上まで続いていたものと考えられる。この1号石垣を伴う段差は、2層の整地後に削平して造られている。ただし、段差を造る以前にも、2層がこの付近で落ち込んでおり、3層段階で削平が一旦行われていた可能性もある。この石垣を撤去し、段差を埋めて平坦面を広げてから、1号・2号建物跡が造られている。

【1～9号埋甕】（図52、図版34）

3号建物跡の東西両側に土管を埋設した排水施設が造られているが、その途中に仙台市の堤で作られた大甕を埋設した遺構が9基確認されている。甕の両側には縁が敗かれ、その先が土管となっている。排水桝としての機能が考えられる。

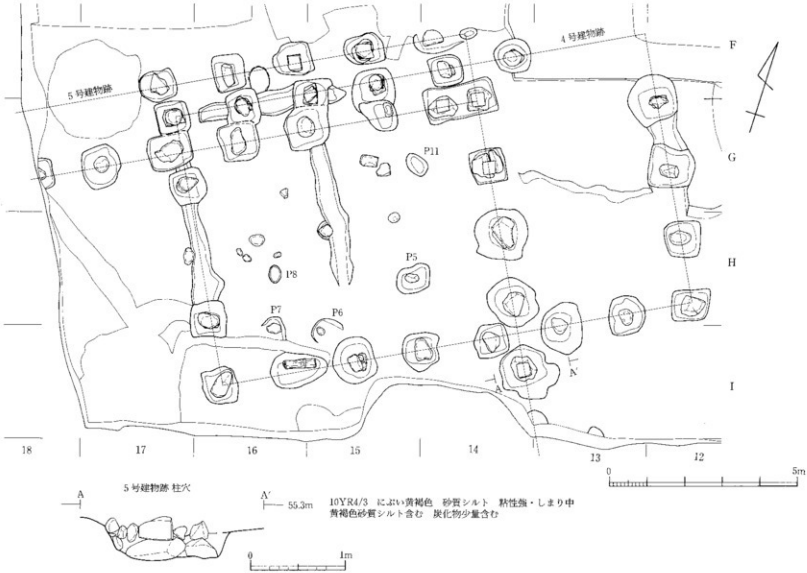


図54 武家屋敷跡第4地点2層上面の遺構 (4)
Fig.54 Features on the surface of strarum 2 at BK1 (4)

図55　武家屋敷跡第4地点1・3・4・6号建物跡の関係
Fig.55　A plot plan of buildings 1,3,4,and 6 at BK4

【10号埋甕】（図51、図版33）

C－5区で検出されたもので、堀産の鉄釉の大甕を埋設したものである。蓋と考えられる木の板が、内部に落ち込んで残っていた。1号・2号建物跡との関係は良く判らない。

【1～4号土坑】（図52・53）

2層上面では、土坑が4基検出されている。この内の3号土坑は、埋土に多量の瓦が含まれており、瓦を廃棄した土坑と考えられる。それ以外の土坑については、性格は不明である。

5．出土遺物

(1)　江戸時代以前の遺物

①　縄文土器・弥生土器（図56、図版35、表4・45）

本調査区では縄文土器・弥生土器が出土しており、特徴の判明する15点の弥生土器と1点の縄文土器を示した。

縄文土器（4）は、G－5区の6a層上面出土の深鉢の口縁部破片で、器厚は8㎜と厚手の土器である。口縁部は緩やかな大波状口縁、外面には太い直線が1条めぐる。その特長から縄文中期前葉の大型深鉢と考えられる。

弥生土器が少量ではあるが、まとまって出土した。出土資料には、弥生前期後半から中期中頃にかけての土器がみられる。前期後半の土器は2点出土している。1点は山王Ⅲ層式の高坏の口縁部破片である（1）。口縁部が強く屈曲し、典型的な高坏である。晩期からの伝統がよくうかがえる。従来、山形突起で飾られる類型と平坦口縁の類型が知られている。口縁端面に1条、口縁外面に3条の整った箆描沈線が施文されている。体部上半を飾る箆描文の意匠は、変形工字文C1型と推定される。その形態、箆描文の特徴から山王Ⅲ層式の古段階の高坏である。この型式の高坏は、宮城県北部の大崎耕地から北上川最上流域で多数出土しており、山王Ⅲ層式古段階のきわめて特徴的な土器である。これまで、仙台市船渡前遺跡、松島町福浦島貝塚などにおいてもこの型式の高坏が確認されている。福浦島貝塚の資料は、山内清男によって「福浦島下層式」と呼ばれた1群の土器に属する。他の1点（14）は、小型鉢の口縁部である。平坦口縁で、体部から口縁部まで直線的に広がる鉢である。口縁部外面に2条、内面に1条の太く浅い沈線がめぐる。文様帯には波状文、または連弧文が展開する。この土器は山王Ⅲ層式古段階に属すると考えられる。これらの資料は、弥生前期後半の資料であり、この時期に仙台地方でも稲作農耕がすでに開始され、農耕社会が出現し、新たな農耕文化が繰り広げられていたことがうかがえる。

次に中期前半の土器4点（8・10・12・15）が出土している。8と10は同一個体である。装飾深鉢の口縁部で、2条の太い箆描線で山形文が描かれる。意匠全体の構成は不明。体部にLR縄文が施されている。箆描文を施文

した後に区画線にそって縄文を磨り消し、装飾効果をあげている。この磨消縄文手法は前期後半から中期前半にかけて発達する。12は、装飾深鉢の体部有文破片である。阿武隈川流域の鹽沼式土器、仙台地方の寺下囲式などに盛行する入組文と類似した筵描文が展開する。磨消縄文手法がみられる。縄文はＬＲで、８よりも細い。

弥生中期中頃の桝形囲式土器が６点出土している（２・３・５・６・11・16）。甕３点、鉢１、大型壺１、小型壺１点がみられる。11の甕は、口頸部が外反する典型的な形態である。口頸部には布などで横方向に撫でた調整痕が鮮明に認められる。頸部には細く鋭い平行線が２条めぐる。体部には細く緻密なＬＲ縄文が施されている。典型的な桝形囲式土器である。５の甕は、軽く口頸部がくびれる。口縁部が欠ける。体部に縄文、頸部には無文帯が展開する。体部破片３は、甕の底部付近とみられる。縦方向にカナムグラの茎の回転圧痕が展開する。これはかつて山内清男が「植物の茎の回転痕」と指摘した擬似縄文である（須藤ほか1984）。茎の節は３条あり、剛毛の小さな刺突痕多数が筋のなかにみられる。底部付近は横方向に軽く箆で削られ、調整されている。この擬似縄文土器は桝形囲式に属する。２は小型の装飾鉢と推定される。蓋の可能性もある。平坦口縁で、外面に２条の平行沈線がめぐる。沈線は、細く鋭い。体部には連弧文が展開する。器面が風化し判定しにくいが、ＬＲ縄文が充塡されている。６は小型広口壺の肩部破片、やや細めの筵描線２条の連弧文が展開する。平行線間はかるいナデ調整である。16は、桝形囲式か円田式の大型壺体部破片である。細い筵描の平行線で直線的な文様が描かれ、丁寧な磨きが加えられている。体部にはＬＲの付加条縄文が施されている。他の土器は、縄文の施文された体部破片である。確定はできないが、土器の形態、縄文の特徴などから中期の前半から中頃のものと推定される。

東北大学の青葉山、川内キャンパスでは、弥生時代の土器がまとまって出土したのは、本調査がはじめてである。しかも桝形囲式土器については、多様な器形がみられ、その器種構成についても様相を捉えることができた。いずれも標識遺跡である多賀城市桝形囲貝塚、仙台市南小泉遺跡、中在家南遺跡出土資料と基本的によく共通するものである。今後、川内地区において注意深くこの時代の集落遺跡を追求していきたい。

② 石器（図57・58、図版36、表46）

今回の調査で出土した石器は374点である。石鏃、ポイント、石錐、石匙、スクレイパー、トゥール破損品、磨製石斧、石核、剥片、チップに分類した。

石鏃は６点出土した（図57－１～５・19、図版36－１～５・19）。１は透明な赤色の玉髄製である。先端は鈍く、横断面が丸みを帯びるなど、他の石鏃とタイプを異にする。２は、先端の破片である。半透明の赤色の玉髄を用いて、非常に鋭利に加工されている。３は、精巧な両面加工でつくられたもので、比較的珪化した白色の凝灰岩を用いている。４は、半透明の赤色の玉髄製で、調整は丁寧だが、素材の面を若干残していると考えられる。５は無茎鏃で、有茎鏃に比べてやや大きい剥離で整形されている。良質の珪化凝灰岩を用いている。19は透明な白色の玉髄製で、両端を折損している。逆刺は一方が丸く、一方が鋭利と、左右非対称である。

ポイントは１点出土した（図57－６、図版36－６）。比較的良く珪化した石英安山岩質凝灰岩を用いているが、先端部は石質の珪化が弱く、調整剥離の稜が摩滅している。先端部と側縁は丁寧に加工され、両面に素材の面を大きく残している。素材は縦長剥片と考えられる。

石錐は３点出土した（図57－７～９、図版36－７～９）。７は赤色の玉髄製で、図57－４の石鏃の石材と類似する。素材は、表面の凹凸が激しい剥片と考えられる。つまみ部は周縁を一部加工して整形され、錐部は短く作られている。８は流紋岩製である。入念な両面加工で棒状に整えられ、錐部の先端は丸みを帯びている。10は黄色の珪化凝灰岩で、素材には横長の剥片を用いている。つまみ部はほとんど加工されず、錐部は素材の折れ面を利用して断面三角形に作り出されている。

石匙は２点出土した（図57－10・11、図版36－10・11）。11は珪質頁岩製で、大きく折損している。つまみ部は丁寧に加工されている。10は、珪質凝灰岩の弯曲した縦長剥片を用いた縦型石匙である。刃部には入念な片面加

工が施され、つまみ部は両面からの剥離で作り出されているほかは、ほとんど加工はなされていない。

スクレイパーは3点出土した(図57－12～14、図版36－12～14)。13は良質な珪化凝灰岩の大型縦長剥片を用いたものである。両側辺に刃こぼれ状の剥離がみられる。12は石英安山岩質凝灰岩製で、素材の打面は除去されているが、縦長剥片を用いたものと考えられる。主に背面側の両側辺に細かい剥離がみられ、特に角度が急な図右側辺に多く観察できる。14は良質な珪化凝灰岩の横長剥片を用いたものである。素材の剥片の末端部に刃こぼれ状の細かい剥離が多くみられ、図左端には丁寧に調整された部分もみられる。

トゥールの破損品と考えられるものは2点出土した(図57－15・16、図版36－15・16)。16は褐色の玉髄製で、周縁を丁寧に加工している。15は珪質頁岩製で、同じく周縁を加工している。

リタッチドフレークは24点出土した。石材は頁岩10点(41.7%)、玉髄7点(29.2%)、流紋岩3点(12.5%)、珪化凝灰岩3点(12.5%)、鉄石英1点(4.2%)がみられた。火成岩が選択されにくい傾向があるといえるが、素材の大きさによる選択の偏りはみられない。

磨製石斧は1点出土した(図58－17、図版36－17)。頁岩製である。側面はほぼ平坦に整形され、両側面とも上半はよく研磨され、下半には敲打痕を多く残している。また、頭部にも敲打痕が多く観察できる。刃部は両刃で、刃こぼれと考えられる剥離がみられる。

石核は11点出土した(図58－18、図版36－18)。石材は流紋岩4点(36.4%)、頁岩4点(36.4%)、珪化凝灰岩2点(18.2%)、石英安山岩1点(9.1%)がみられた。流紋岩や石英安山岩には大型のものが多く、頁岩や珪化凝灰岩には小型のものが多い。18は流紋岩の石核である。打面転移がさかんに行われたと考えられ、ほぼ全ての面で剥片剥離が行われたと推定できる。

剥片は224点出土した。石材は、流紋岩51点(22.8%)、玉髄42点(18.8%)、鉄石英34点(15.2%)、石英安山岩31点(13.8%)、頁岩28点(12.5%)、凝灰岩20点(8.9%)、凝灰質頁岩11点(4.9%)、安山岩2点(0.9%)、玄武岩質安山岩1点(0.4%)、石英安山岩質凝灰岩1点(0.4%)、流紋岩質凝灰岩1点(0.4%)、粘板岩1点(0.4%)がみられた。これをトゥールの石材組成と比較してみる。トゥールの石材組成は、玉髄6点(35.3%)、珪化凝灰岩6点(35.3%)、珪質頁岩2点(11.8%)、石英安山岩質凝灰岩2点(11.8%)、流紋岩1点(5.9%)である。玉髄が多いことは共通するが、剥片に最も多い流紋岩はトゥールに1点みられるのみである。流紋岩は、石核にも多くみられるため、剥片生産はさかんであったと考えられるが、何らかの理由でトゥールの素材として選択されることがなかったと推定できる。次に石材別に大きさの分布をみると、流紋岩は大型の剥片が多く、玉髄、鉄石英、凝灰岩の剥片はほとんどが小型である。その中間に頁岩と石英安山岩の剥片が分布している。このことは、石核の大きさとほぼ対応している。原石の大きさなどが関係していると考えられる。また、どの石材にも3～4割程度折れた剥片がみとめられた。図57－9などのように折れ面を利用した石器製作技術の存在がうかがえる。

チップは97点出土した。石材は、凝灰岩30点(30.9%)、玉髄29点(29.9%)、鉄石英20点(20.6%)、流紋岩10点(10.3%)、頁岩7点(7.2%)、石英安山岩1点(1.0%)がみられた。これを上記のトゥールと剥片の石材組成と比較すると、玉髄が多いことは共通するが、石核や剥片に多くみられる流紋岩は少ない。チップの点数が少ないため比較には注意を要するが、凝灰岩系の石材が多いことも含めて、ほぼトゥールの石材組成を反映しているといえる。

今回の調査で出土した石器には様々な石材が用いられていた。しかし、トゥールにはほとんどみられない流紋岩や石英安山岩が剥片に多くみられたことから、多様な石材を活用していく中にも、何らかの選択性が働いたことがうかがえる。

③　須恵器(図56－18、図版35－18)

古代の須恵器の破片が1点のみ確認された。明治時代の整地層である2層からの出土である。頸部は不明だがあまり細くはなく、直立ぎみに開く長頸瓶と考えられる。推定される体部の最大径は12cm程の小型のものであ

る。焼成は堅緻で、断面で観察すると器壁の中心は紫褐色で表面近くのみが青灰色～黒色を呈する。外面肩部には暗緑色の自然釉の痕跡がみられ、釉のみられない体部は艶のある黒色である。内面の調整は凹凸が激しく方向も一定しないため、ロクロを用いないナデとみられる。肩の屈曲部内面には指でおさえたとみられるくぼみも認められ、成形にあたってロクロ調整のみで済ませるわけにはいかなかったようである。細かな年代比定は残存部分のみからでは無理だが、このような小型の瓶は奈良時代前半以前にはあまり例をみないものであることから、奈良時代後半以降のものと考えておきたい。

④　**古代の瓦**（図56－17・19・20、図版35－17・19・20）

17は軒平瓦で、17世紀代の３号池Ｇから出土した。瓦当面には半截管状工具による手描き重弧文、顎面には同様工具による手描き鋸歯文と２本の直線文が描かれる。平瓦の凹面には模骨痕とみられる凹凸と布目（一部で重複する）があり、布目を切ってナデおよび凸型台の端と木目の痕跡が認められる。顎面は縄叩き目がナデ消されている。平瓦部凸面は残存部分ではケズリが施されてそれ以前の調整は不明である。瓦当面・端面ともにケズリが施される。焼成は堅緻で灰色を呈する。胎土には砂粒を多く含んでいる。

これらの特徴から、17は本遺跡の北東15km程に所在する多賀城市 多賀城跡の　軒平瓦511－ａタイプで、８世紀前葉の多賀城創建期に作られたものであると考えられる（宮城県多賀城跡調査研究所1982）。511－ａタイプは遠田郡田尻町木戸窯跡群と加美郡色麻町の日の出山窯跡群Ｂ地点で生産されていたことがわかっているが、進藤秋輝氏のご教示では日の出山窯の製品であろうとのことである。

19・20は平瓦の小片で、各々明治時代の整地層である３層と２層からの出土である。19は凸面に縄叩き、凹面には布目が比較的明瞭に残り、かつそれを切るナデが観察される。側端面はケズリもしくはナデ調整されていると思われる。焼成はやや軟質で灰色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれる。20は凸面に縄叩き、凹面は布目らしい痕跡はあるが、ほどんどナデによって消されている。側端面は削られていると思われる。凸面の端部近くが屈曲しており、調整段階の凹型台の痕跡と考えられる。焼成は19よりは硬質で、灰色を基調として部分的に艶のある黒色、凸面にはさらに自然釉が認められる。胎土には砂粒が多く含まれる。以上の特徴から、19は多賀城跡の一枚作り平瓦ⅡＢ類－ａ、20は同ⅡＢ類－ｂに相当するものと考えられる（宮城県多賀城跡調査研究所前掲）。平瓦ⅡＢ類は多賀城政庁跡第Ⅰ期～第Ⅲ期にみられるが、Ⅰ期のⅡＢ類は詳細が明らかでなく、Ⅱ期にはⅡＢ－ａ類のみで、Ⅲ期にはⅡＢ類－ａ・ｂ両タイプが認められるとされている。進藤秋輝氏から19・20ともⅢ期のものによく似ているというご教示をいただいた。Ⅲ期の瓦の製作年代は８世紀末頃と推定されている。

上記のような古代瓦の出土は仙台城跡ではもちろん初めてのことである。多賀城政庁Ⅱ期以降の瓦は青葉区北部の窯跡や陸奥国分寺・尼寺など本遺跡から２～３ kmの比較的近い遺跡から出土するが、１期の瓦は生産地が宮城県北部であり、その主な分布は多賀城以北にある。江戸時代には多賀城跡の瓦を土産物としたり、硯に加工したりすることが流行していたことが文献により知られることから、17の軒平瓦が出土した時点では、江戸時代にそのようなものとして遺跡に持ち込まれたのではないかとも考えていた。しかしその後整理作業を進めていくうちに、明治時代に盛られた整地層からの出土で本来の包含地は本地点ではない可能性はあるが、18の須恵器や19・20のような瓦も存在することが明らかとなり、付近に瓦を用いるような性格の古代遺跡のあった可能性が高くなったといえ、今後注意していく必要がある。

⑵　江戸時代以降の遺物

①　**陶磁器**（図59～81、巻頭図版３～９・12、図版37～54、表５～10・23～28）

本調査地点では、16世紀後葉から幕末まで、各時期の陶磁器が出土しており、時期ごとにその概要を述べる。

【16世紀後葉】

本調査地点では、17世紀前半代を主体とした遺物を出土する遺構などから、16世紀後葉に遡る戦国期の陶器が

4点出土している。いずれも大窯の第3段階（藤沢良祐1993）に比定される美濃の製品である。4号溝から出土した灰釉折縁小皿（図70－27）は、体部内面に丸ノミ状工具による刻文を有する。口縁部端面の立ち上がりからみて大窯の第3段階の後半に位置づけられると考えられる。3号溝から出土した鉄釉灯明具（図73－26）は、口縁部に一カ所突起を有する。突起部に認められる焼成前にあけられた孔は、灯明具本体を柱などに引っかけるか、あるいは灯心を通すためのものであろう。類似する鉄釉の掛けられた灯明具は、天正18年(1590年)に落城した八王子城からも出土しており、第3段階の後半に位置づけられるものと思われる。16世紀末から17世紀前半代を主体とする遺物が出土する1号溝を壊している調査区南西隅の撹乱からは、大窯第3段階の美濃の灰釉小皿が2点出土している（図80－176、177）。

瀬戸・美濃大窯の第3段階、おそらくはその後半期に位置づけられるこれらの陶器に関しては、これまでの二の丸地区の調査では確認されておらず、その年代観が、本遺跡を理解する上で、重要な問題となる。大窯の編年上、第3段階後半（第6小期）は、定林寺東洞1号窯を指標とし、五期区分ではⅢ期に相当する。井上喜久男が、大窯Ⅲ期の年代観を1570年～1580年とするのに対して（井上喜久男1992）、藤沢良祐は第3段階の終末の年代を1590年前後におき、現在、10年程度の年代観のズレが生じている。本遺跡は、伊達政宗によって慶長5年（1600年）に行われた仙台城普請の縄張以前に遡る可能性は極めて少ない。本遺跡出土の大窯第3段階後半の資料は、いずれも雑器であり、長期間伝世するとは考えにくい。実際176の灰釉皿にはほとんど使用の痕跡が見られず、長期間使われ続けた可能性は低い。これらの資料は大窯製品の年代観を考えていくうえでも重要な資料といえる。

【16世紀末葉から17世紀前半】

1号溝、4号溝からこの時期の陶磁器がまとまって出土しているほか、17世紀後半代の遺物が主体を占める3号池など、より新しい遺構からも該期の陶磁器が出土しており、出土量は前段階に比べ飛躍的に増加する。

明の染付では景德鎮系の製品が多く、漳州窯系の製品は、芙蓉手の中皿（図64－108）などが僅かに見られる程度である。器種の上では、小皿が大半を占め、小坏がこれにつぐ、ほかに少量の碗と中皿がある。

後に陶磁器の産地別組成の項で詳述するように、本段階には、明の染付をはるかに上回る量の肥前産の磁器が出土している。いわゆる初期伊万里とよばれるこれらの磁器には、確実にⅡ－1期まで遡りうると考えられる製品は認められない。この点に関しては、二の丸地区においてもすでに確認されており、仙台城下では、寛永期に青花から肥前産磁器への移行があった可能性が高いと考えられる。

肥前産磁器には染付の碗、大・中・小の皿類、小坏が認められ、皿類が量的に卓越する。染付以外では、1号溝から、青磁部分掛け掻き落とし染付瓜文の大皿（図59－13）や青磁の香炉（図59－18）、4号溝から筐彫り文を有する青磁大皿（図59－19）、2号池からは、高台内無釉の青磁碗（図61－43、44）などが出土している。上記のもの以外にも、三方銀杏四方欅七宝繋文皿（図59－162）や岩に鳥を配した大皿（図63－8）など、伝世品に見られるような優品の部類に属する大皿・中皿の出土が目立つ。猿川B窯に類例の知られる、見込に船、周囲に獅子を配置した型打ちの小皿（図60－40）は、本遺跡から10個体以上出土しており、おそらくは屋敷内で組として使われていたものと考えられる。

陶器では、京都産と考えられる、白化粧地に緑釉を流しさらに透明釉を掛けた軟質施釉碗（図71－127、77－1）、黒織部杏茶碗（図70－15、図80－163）、瀬戸・美濃の天目碗（図70－37）、唐津の杏茶碗（74－121）、美濃の鉄釉手桶型水指（図74－35）、美濃の四耳壺（図70－21）、信楽産のいわゆる腰白茶壺（図70－22）などの茶陶が目立つ。1は、京都産の軟質施釉碗で、内面に黒釉、外面に白釉を掛け分け、外面胴部には緑釉が加飾される。これと同種のものが、福島県三春城下町B地点（平田禎文1995）、伏見城下町（土岐市美濃陶磁歴史館1991）、大坂城跡（土岐市美濃陶磁歴史館1993）などで出土しており、伏見城下町では、豊臣後期の整地層に含まれていた。127は、1に比べ、外面の釉調がいわゆる楽茶碗に近く、同種のものが京都市上京区宗町通椹木町下る大門町で出土している（土岐市美濃陶磁歴史館1991）。信楽産の腰白茶壺は、これまで18世紀代とされることが多く、遡っても

17世紀後半と考えられてきた。年代の推定可能な資料としては、従来、元禄16年（1703年）の火災に伴う遺物が一括出土した東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点537号遺構（東京大学埋蔵文化財調査室1990）出土の例が知られていたが、本遺跡出土例は、共伴資料からみて17世紀中葉以前に遡ることが確実であり、信楽産膳白茶壺が従来考えられていたよりも古くから存在することを示す事例として注目される。

茶道具以外では、華南三彩盤（図75－111）、絵志野向付（図77－８、図70－36）、赤織部向付（図70－28、図76－123）、総織部小皿（図80－175）、志野織部盤（図80－169）、唐津や備前の徳利（図70－20、図70－29）といった高級食器が比較的多く出土している。111と同種の華南三彩盤は、会津若松城三の丸跡（柳内ほか1986）、大坂城下町（土岐市美濃陶磁歴史館1993）、堺環濠都市遺跡（土岐市美濃陶磁歴史館1996）、京都市内（長谷部・今井1995、土岐市美濃陶磁歴史館1997）などから出土しており、16世紀末から17世紀第１四半期に位置づけられる。28、123の赤織部向付は、それぞれ同種のものが数個体確認できることから、組で使用されていた可能性が高い。なお、123は、同種の製品が、仙台城三の丸跡６号土坑の一括資料の中にも認められる。

日常雑器には、志野の小皿、瀬戸・美濃産灰釉小皿、美濃産の青釉流し掛け灰釉大鉢（図70－18、図75－178）、丹波産の擂鉢（図70－23、図77－10）がある。

【17世紀中葉から後葉】

３号池からこの時期の陶磁器がまとまって出土しているほか、17世紀末以降の遺物を主体とする２号池や、5b、5a、４層などの整地層からも該期の陶磁器が出土している。

幕末に形成された４層から出土した後赤壁之賦文鉢（図66－120、巻頭図版８）は、近年各地で出土事例が知られるようになってきたが、本品は、そのなかでも大振りで焼成の状態も良く、鮮明な呉須によりしっかりとした楷書体で詩文が書かれた優品である。全体が大きく破損しており、焼継ぎによる補修がなされている。この鉢は、17世紀後葉清朝康熙に製作された後、少なくとも焼継ぎの技法が始まった18世紀末葉までは大破することなく伝世したことが確実で、補修後も４層が形成される幕末まで使われつづけたと考えられる。製作されてから廃棄されるまで、実に150年以上の年月を経ている。

肥前産磁器では、網目文の碗（図59－20、図60－41、図63－３、図68－150）をはじめとする中碗や、小皿が前代に比べて多く見られるようになる。寛文から延宝期に作られた上手の中皿（図61－45、図65－110、図69－156）は、上層から18世紀以降の新しい遺物に混じって出土しており、伝世している可能性もある。本時期の肥前磁器で注目されるのは、色絵雲龍菊花文鉢（図66－121）、柿右衛門様式の色絵鉢（図69－161）をはじめ、各種型打ちの水滴や置物を中心に色絵の製品が多く見られるようになることである（巻頭図版９）。121の色絵鉢は、これと同じ伝世品が九州陶磁資料館に所蔵されている（「肥前の色絵「その始まりと変遷」展」図録42頁の作品番号47）。161の色絵鉢は、柿右衛門様式の製品の中で、染付を区画線として一部に用いるが、上絵とは併用しないタイプに属する。

陶器では、肥前産磁器の皿に押されるかたちで瀬戸・美濃産の皿類が激減し、灰釉小皿（図71－39）や、菊皿（図71－49）、織部三足鉢（図71－66）が僅かに残る程度となる。66の織部鉢は、類例が土岐市八幡窯にあり、織部最末期の製品と考えられる。茶陶関係でも、瀬戸・美濃製品は僅かに天目碗（図75－91）が存在する程度にまで減少し、かわって肥前産の呉器手碗（図70－30）が登場する。肥前産陶器では、高台内に刻印を有する京焼写しの碗（図72－50、56、図76－113、図78－133）や、白化粧地に菊花・渦・雷文などの鉄絵を施した鉢（図71－46）が存在する。後者は、大坂城下調査地30地点に類例が存在する（土岐市美濃陶磁歴史館1994）。瀬戸・美濃製品は、茶道具や食器がほとんど見られなくなった一方で、瀬戸の旧赤津村産と考えられる補鉢（図71－43、図72－68）が新たに登場する。瀬戸の製品では、生産地の動向を反映して、捕鉢、煙硝壺（図76－119）、や漫瓶（図79－152）などいわゆる荒物の部類に属する器種が多くなる傾向が見られる。

該期の陶器で最も注目されるのは、福島市飯坂に所在する岸・大鳥丘陵窯跡群の製品が新たに加わることであ

る。岸窯系陶器（178頁の註２を参照）は、本段階から次の17世紀末から18世紀前葉の段階にかけて認められ、本段階では、香炉（図71－41、47）、擂鉢（図71－42）、猿型水滴（図71－44）を確認することができる。

【17世紀末葉から18世紀前葉】

２号池埋土６～４層出土の陶磁器が該期の資料としてまとまりを有している（巻頭図版４）。

肥前産磁器は、中碗や小・中皿が多い。青磁釉裏染付牡丹文三足大皿（図59－26）は、長崎県波佐見町長田山窯の製品である。碗皿以外では、青磁仏花瓶（図59－28）や、色絵鴛型水滴（図61－51）がある。

陶器では、肥前呉器手碗、京焼写しの碗、岸窯産香炉（図72－64）、同じく擂鉢（図72－58）が前代から引き続き出土する。肥前製品には新しく刷毛目文碗（図72－51、55）が加わる。岸窯系陶器には、このほかに鉢（図72－57）、中壺（図72－52）が認められる。最も注目されるのは、大堀相馬焼の灰釉丸碗や小野相馬焼の灰釉丸碗、見込蛇ノ目釉剝ぎ小皿（図72－81）、仏飯器（図72－53）、仏花瓶といった相馬産の陶器が加わる点である。京焼では、金・青・緑・赤など多彩な上絵付けをした色絵碗（図72－80）が見られるようになる。

【18世紀中葉】

１号井戸ならびに３号井戸から該期の陶磁器がまとまって出土している（巻頭図版５）。

肥前産磁器は、前代に続き中碗や小・中皿が多いが、猪口（図62－65・71）や紅皿（図62－66・74）も目立つようになる。中碗は半球形のもの（図62－62・63）、小皿は見込の釉を蛇ノ目状に剝いだ波佐見産の皿（図62－72）が多い。

陶器は大堀相馬焼が目立つ。大堀相馬焼には、灰釉丸碗、同腰折碗、鉄釉流し掛け灰釉丸碗、同腰折碗、鉄釉・灰釉掛け分け丸碗、同筒形碗など多様な碗類の他に、灰吹（図75－96）などの器種が加わる。大堀相馬焼に比べ量的にはすくないものの、京焼の色絵の碗（図74－87）や色絵の灰吹なども見られる。小野相馬焼は、碗や小皿といった小型製品が減少し、片口鉢（図74－88）や見込蛇ノ目釉剝ぎ灰釉大鉢など比較的大型の器種が主体となる。二の丸地区では、この時期、瀬戸の製品は少量の小碗（小坏）以外ほとんど出土していないが、本調査地点では、片口鉢（図77－９）、水盤（図76－128）、摩曾碗（図80－167）などの器種が確認できる。

１号井戸から出土した図74－89の擂鉢は、器形や釉薬の用い方が18世紀中頃の小野相馬焼と共通するものの、筋目を弧を描くように斜めに入れている手法は小野相馬焼の擂鉢には見られず、小野相馬焼と系統的に近い東北南半部の未確認の窯の製品である可能性がある。他に擂鉢には、１点堺産のもの（図75－95）が認められるが、産地不明のもの（図75－94）も多く存在する。18世紀中葉には、擂鉢や壺・甕などの荒物に関しては在地化が進んだと見るべきで、今後旧仙台領内においても生産窯の発見に努める必要がある。

【18世紀後葉から19世紀中葉】

10号土坑から、18世紀後葉から19世紀前半の資料が出土する（巻頭図版６）。13号土坑は19世紀中葉の遺物が主体を占める。墓未に形成された４層と、４層上面から掘り込まれた１号池の埋土には、17・18世紀の古い遺物も含まれてはいるが、18世紀末葉から19世紀中葉の資料が多い。

磁器は、19世紀中葉になると、肥前産のもの以外に、瀬戸、切込、平清水の製品が新たに加わる。瀬戸産の磁器の大部分は小型端反碗（図64－101～104、図68－141・146）であり、それ以外は小型筒形碗（図64－106）、や広東碗（図68－140）、型打ちの角皿（図69－154）が僅かに見られる程度である。切込焼では、染付の徳利（図67－130）や三彩あるいは二彩の瓶（図版43－164・173）が出土している。切込三彩（二彩）は、僅かな伝世品を除けば、切込西山工房址（芹沢長介編1978）、同中山窯下方平場（佐藤広史1990）で少量発見されているに過ぎず、消費地遺跡では未発見であった。164、173の資料は、切込三彩（二彩）が、仙台藩の500石クラスの武家屋敷で実際に使われていたことを示しており、切込三彩の受容者層を具体的に知ることができた。平清水焼と考えられる磁器には、蛇ノ目凹型高台の小皿（図65－112）と型打ちの白磁角皿（図65－119）がある。陶器は、引き続き大堀相馬焼が多い。大堀相馬焼では鐵白色を呈する灰釉と銅緑釉が新たに加わる。前者は、小型端反碗（図75－104、

図78－140)、小坏（図75－101、図78－142・143、図80－165)、土瓶（図79－150）などの下地釉として多く用いられ、後者は、肯土旗（図75－106）に使われる他、図80－166の小瓶のように灰釉の上に流し掛けされる場合もある。また、大堀相馬焼には、鉄白色の灰釉を下地としてその上に鉄絵を施すものが現れる。鉄絵の文様では、走馬文（図78－138、図80－170）や省略化の進んだ山水文（図80－164）が多い。大堀相馬焼の鉄釉製品は、土鍋（図75－98)、灯明受皿（図79－155）など火と関連する器種に多い。仙台城下で作られていた堤焼では、漦瓶（図75－107)、水滴（図75－108)、土鍋（図76－115)、灯明皿（図76－122）油徳利（図79－153）が確認される。江戸時代の堤焼の揺鉢については不明な点が多く実体がよく判っていないが、堤焼の擂鉢の可能性のあるものとして図73－25を挙げておきたい。瀬戸の製品では、僅かに、白泥鉄絵の碗（72)、菊花型水滴（109)、手水鉢（149）が確認されるに過ぎない。これらはいずれも大堀相馬焼には見られないタイプの製品であり、そうしたものだけが選択されて入ってきていると思われる。図78－11の大甕は、常滑のいわゆる真焼と呼ばれる製品で、高温で焼き締められている。肩部には、常滑焼の井戸枠などの装飾によく用いられるタガ文が巡る。口唇部には焼台の痕跡が残る。体部下半から底部にかけては、上半部に比べ極端に焼成不良である。これらの点に自然釉の流れた方向を加味して考えると、この甕は、同種の製品と合口にして倒立させ、さらに倒立させた別の製品を上から被せた状態で焼成された可能性が高い。近世常滑焼の甕の編年観（中野晴久1986）に照らし合わせれば、18世紀末から19世紀前葉の時期に相当すると考えられる。

【明治以降】

本調査地点は、4層上面で検出された畝状遺構が示すとおり、明治の初めの頃は畑として利用されている。従って、二の丸地区とは異なり、明治維新以降、2層上面に第二師団の建物が造られるまでの期間、すなわち、二の丸跡に勧政庁や東北鎮台（仙台鎮台）が置かれていた期間の陶磁器（註）がほとんど出土しない。第二師団期の陶磁器は江戸時代のものに比べ少ないが、基本的に二の丸跡第12地点の3～4層出土資料（年報11）に共通する。なお、2層上面で検出された師団の礎石建物の雨水桝に用いられていた埋甕（図81－181）と、同じく便槽として使用されていたと考えられる10号埋甕は、ともに堤焼の大甕である。

（註）二の丸跡に勧政庁や鎮台が置かれていた時代、すなわち1870年代から80年代の資料としては、二の丸第第2地点石敷遺構出土資料（年報1）や、同第10地点Ⅲ－3層出土資料（年報9）がある。ともに二の丸殿舎の大半を焼いた明治15年（1882年）の火災層の直下で発見されており、戊辰戦争後、明治4年（1871年）の廃藩置県までであった勧政庁あるいは鎮台初期の遺物と考えられる。この時期の陶磁器の組成は、瀬戸産の磁器小型端反碗に加えて、切込焼や平清水焼の碗皿類や大堀相馬焼の山水土瓶が卓越するという特徴が見られる。

② 軟質施釉土器（図82、図版55、表15・33）

透明な鉛釉の掛かる実用的な器のみを軟質施釉土器に分類した。白釉や緑釉の用いられる楽系の初期京都産軟質施釉製品に関しては陶器に含めている。また、鉛釉のみが掛かる軟質低火度焼成製品であっても、非実用的なミニチュア製品については土製品の項で扱い、ここでは省いている。器種別にみた場合、焙烙401点、鍋の身13点、鉢2点、片口鉢2点、蓋1点、蚊遣り2点、水滴2点、不明346点となる（接合、同一個体の識別後の破片数）。大部分が幕末に形成された4層より上の層から出土しており、4層より下では、10号土坑など19世紀代の遺構に少量認められるに過ぎない。軟質施釉土器の大半を占める焙烙は、すべて中空の把手が付くフライパン形を呈しており（図82－CN3）、これらと器形、胎土の近似するものが、地元仙台の堤焼に伝世品として遺されている。焙烙以外の器種についても、胎土や釉調が概通っており、19世紀代に堤で製作されたと考えられる。

③ 土師質・瓦質土器（図82～86、図版55～57、表20～22・29・30）

土師質土器は、皿4437点、焙烙24点、焼塩壺22点、火消壺の身19点、同蓋4点、天徳18点、鉢9点、植木鉢4点、さな4点、蚊遣り3点、灯心受付灯明皿2点、有脚灯明皿1点、器種不明1742点が出土した（接合、同一個体の識別後の破片数）。18世紀以前に遡って存在を確認できるのは、皿、焙烙、焼塩壺のみである。

皿については、口縁もしくは底部外周の6分の1以上が残存し、なおかつ器高が判明するもの、すなわち口縁端部から底部までが残っており、口径・底径の復元および器高の計測ができるもの、95点を抽出し、諸属性の観察を行った。95点のうち、年代を特定できる資料となると、さらに数が限られてくるため、今回は時期的な変遷を検討することができなかった。土師質土器の皿は、全てロクロ成形で底部は回転糸切りされており、手づくねのものは存在しない。また、基本的に体部外面から内面にはロクロナデがなされるものの底部は無調整で、ミガキによる調整が施されたものは確認されない。95点の抽出資料のうち、45点（47.4%）には、大きさに関係なくススの付着が認められた。二の丸地区出土の土師質土器の分析（年報9の図89）では、資料群ごとに若干のバラツキはあるものの、皿へのススの付着率は、3割以下のものがほとんどであり、本地点出土のものには灯明皿として使われたものが多いことが判る。破片資料については、本当にススの付着がなかったとは言い切れないため、実際には、本地点から出土した土師質土器の皿の半数以上が、灯明皿であったと考えられる。二の丸地区では、17世紀末以降の層から、ミガキ調整を施したものが出土しており、それについてはススの付着率が低いため、宴会の席上使われる「ハレ」の器である可能性が考えられている。本調査地点では、白木の箸を置くのに用いたと考えられる耳皿や、それらとセットになる御敷きも出土していない。以上の点からみて、本武家屋敷内での「かわらけ」を用いた宴会の頻度は、二の丸地区のそれに比べ、格段に低かったものと評価される。

焙烙では、2号池埋土3b層から出土した内耳のもの（図82－CH46）が注目される。ロクロ成形の平底形で、耳は実用に適さないと思われるほどまで退化している。年代的には、共伴した陶磁器からみて、18世紀前半と考えられ、その時期まで、中世以来の伝統的な形態が残っていたことが今回確かめられた。

焼塩壺は、身だけが出土しており、蓋は確認できない。これらは全て、ロクロによりコップ状に成形され、底部に回転糸切り痕、体部外面下半部に格子タタキを有する（図82－CH48）。このタイプは、地元産と考えられる焼塩壺の中では最も後出なものと考えられている（年報9）。その年代に関しては、これまでの指摘通り、17世紀末・18世紀初頭から18世紀前葉と考えられる。

瓦質土器は、火鉢137点、炭櫃61点、五徳43点、鉄瓶32点、擂鉢32点、十能13点、火消壺の身3点、同蓋2点、焜炉1点、蓋1点、器種不明562点が出土した（接合、同一個体の識別後の破片数）。

瓦質の擂鉢は、1号溝から多く出土していることから判るように、16世紀末葉から17世紀前半代の所産であろう。いずれも体部は直線的に開き、4ないし6本単位の筋目が粗い間隔で施されている。装飾を持たないものが多いが、内面の口縁に近い位置に横方向の波線を数条入れるもの（図84－24）も存在する。これら中世以来の伝統的な瓦質擂鉢は、仙台周辺にあっては、17世紀中頃までは、丹波、瀬戸・美濃、唐津などの陶器製の擂鉢と併用されていたが、岸窯系陶器擂鉢が広く流通するのに伴い、急速に姿を消したと考えられる。なお、瓦質の擂鉢のなかには、内外面に炭化物が付着し、明らかに火に掛けられたと思われるものが含まれている（図84－2）。中世の瓦質擂鉢には、火に掛けられた痕跡を残すものが多く知られている一方、陶器の擂鉢は、基本的に火に掛けることはないと思われる。本地点出土の瓦質擂鉢は、17世紀中頃まで瓦質擂鉢自体とともに、それを用いた伝統的な調理方法もまた、維持されていたことを示している。

瓦質の火鉢は、形態の違いから5類型に分類した。A類としたものは、口径に対して器高が低く、体部の立ち上がりが緩い。A類は口縁部直下の外面に縄状の貼り付けを有するA1類（図85－10、11）と、貼り付けを持たないA2類（図84－8、図86－14）に細分できる。A類は基本的に全て有脚で、底部内面に強く熱を受けた痕跡が見られることから、屋内で火鉢として用いられた可能性が高い。口縁部の形状では、内側にやや張り出すタイプ（8）から、内傾して立ち上がり外側に折れるタイプ（10、11）へ、さらに口縁部がT字状を呈するもの（14）へと変化すると考えられる。口径に対して器高が高く、体部が直立気味のものをB類とした（図85－12）。

B類も有脚で、A類と同じように、屋内で火鉢として用いられた可能性が高い。C類としたものは、口縁部が幅広く鍔状に折れ、体部は直線的に立ち上がるものである。一応火鉢に分類したが、二の丸地区では、口縁部に

赤色顔料を塗布したものも確認されていることから、火鉢以外の用途も考えられる。D類としたものは、体部にくびれを有する（図86－17）。底部には、型を用いて成形した鐙子の面が3カ所、脚としてつけられている。底部内面は強く熱を受けて変色している。A、B類同様、屋内で火鉢として用いられた可能性が高い。3号池Fから、脚部（図84－9）が出土しており、17世紀代から存在したことが判る。

④　**土人形・土製玩具**（図87～90、巻頭図版14、図版58・59、表32・33）

陶器・磁器質ではない人形類と、土師質土器と軟質施釉土器のうち実用品ではないとみられる器類、小型の土製品を玩具としてまとめた。人形の分類はモチーフによって大別し、表現様式と製作技法で細別した。製作技法をみると、型作りと手づくねがあり、型作りのものには前後または左右を別々に作り接合するものと片側のみに型を使用するものがある。合せ型のものには中実・中空両者が認められ、底面開口の有無、穿孔の有無など細かな違いがある。器類の分類は器種により大別し、細部形態の違いにより細別した。器種は碗・皿・鉢・器台・瓶・壺・甕・合子・急須・茶釜・おとし蓋・擂鉢・鍋（身）に分類した。鉢・甕・合子・急須については残存不良のため資料化していない。器類はすべて轆轤を用いて作られたもので、透明釉等を施釉した軟質施釉のものと土師質のものがある。その他の土製品については特定名称を付し難いものも多く、形状を記述的に表現した名称で仮称して集計した。

胎土は橙色に近い褐色のものが多く、土師質土器の皿に近い肌色の色調のものがこれに次ぐ。図88－77と図90－80の2点のみが白色で緻密な胎土のものである。人形は現状では土師質のものが圧倒的に多いが、図89－10の鳥帽子と頭髪部分、図89－2の目と眉の部分に黒色の彩色が残っている。また白色胎土の77は両面に赤の彩色があり、80は薄い緑色が外面に認められ、緑釉が施されていた可能性がある。

【人形】

七福神A（図88－11・23）は片面に型で顔を表現し、反対側には中央に横方向の櫃状の部分が作り出され、その中央に1箇所穿孔される。B（図87－4・図88－12・図90－30）は前後合せ型作りで中空になるもので、全体が明らかになったものはない。Cは前後合せ型作りで中実のもの、土師質と施釉のものがある。図88－13は土師質で底面に盲孔がある。Dは片面型作りのもので、底面に穿孔のある大黒天が1点出土している。

天神Aは前後合せ型作り中実のもので穿孔はない。全体に施釉される。褐色釉で図90－35と同笵のものが4層から出土している。Bは片面型作りのものを一括した。穿孔は有るものと無いものがある。図89－10は烏帽子と頭髪にあたる部分に黒色の彩色がある。笏を持っていない点が気になるが、その他の表現の共通性から天神と考えた。Cは破片しかなく図化したものがないが、前後合せ型作り中空で、A・Bより大型である。

旅姿の法師で、風呂敷に包んだ荷物を背負うものを西行法師とした。A・Bは前後合せ型作り中空で底面を大きく開口するもので、Aは小型、Bは大型のものである。Aはすべて右膝をたてて座り、左手には開いた傘を持った姿でこころもち上方を見ている形に表現されている。4個体の出土があり、大きさは比較的そろっているが、内部の中空の程度にはばらつきがある。図89－2は比較的中空部分の大きい例である。Bは傘の部分しかなく詳細は不明である。Cは前後合せ型作り中空で底面開口するものだが、左足を立てて座り、傘をもたないタイプである。D（図90－21）は型を使用していないと思われる。所謂瓦質ではなく屋瓦と全く同質のもので、図示した2点のみの出土で同一個体と考えられる。座った形で21aは傘の部分、21bは背面の裾部分の破片である。傘の骨や着物の襞はへら状工具で描かれている。中空で底部は閉じられており中心に1箇所穿孔がある。

法師？は頭髪の表現がない人物像でモチーフを特定できなかったものである。A・Bは表現の細部の違いである。山伏？は図示した1点ずつの出土で、A（図88－15）はほら貝でも持った人物かと思われこのような名称にしたが、恵比寿かもしれない。片面型作りで穿孔がある。B（図90－29）はふんどしをしめた奴さんとのご教示を頂いた。前後合せ型作りで中実と思われる。施釉である。鯉つかみ（図88－24）は前後合せ型作り中空とみられる。人物の顔の脇に魚の鱗が表現されているものである。その位置関係から魚に乗っているというよりはつか

んでいるのではないかと考え鯉つかみとしたが、小片のため異なったものの可能性は残る。花髷は完形品がないが、前後合せ型作り中空のものである。すべてを厳密に花髷と限定したわけではなく、便宜的に図88－25のような髻を結った女性像を一括している。大きさにはばらつきがある。童子？は図88－22の１点のみの出土で、前後合せ型作り中空のものである。人物は全く詳細不明のものでＡは前後合せ型作り中実のもの、Ｂは前後合せ型作りで中空のものを一括している。Ｂのうち図88－28は着物の表現から唐子の可能性が高い。底面は閉じており中央に１箇所穿孔がある。

魚（図88－20）は左右合せ型作りで尾鰭部分のみの出土である。

鳥Ａ（図90－34）は台に乗った鳥で、左右型合せ中実、１箇所穿孔がある。尾の部分はくの字に屈曲しており、鶏かと思われる。鳥Ｂ（図90－36）は山形の台に鳥の足が乗っている状態のもので、型作り中空で底面は開口し、頂部の足の間に１箇所穿孔がみられる。上面には円形に剥落した痕跡がある。これに非常によく似たものは名古屋城三の丸跡から出土している（愛知県埋蔵文化財センター1990ｂＰ137の1526）。名古屋城例は両足に各１箇所計２箇所の穿孔がある点が異なるが、さらに鳥の胴体等が接合していたわけではなく、足のみで完形である。この例を参考にすれば36も鳥の足のみで完形であった可能性が高い。別個に作った胴体や異なった材質のものを穿孔を利用して組み合わせて用いたものであろう。

狐は図90－33の１点しか確認されなかった。左右合せ型作り中実で表面は黒色を呈する瓦質である。

狸犬（図88－16・26）は前後合せ型作りで、16は中空で底面開口する横向き。26は中実で底面をややくぼめる。正面を向く。

犬は猿に次いで出土量が多いモチーフである。Ａ（図90－39）・Ｂ（図90－40）は左右合せ型作りで四肢は別に貼り付けていると思われる。小型で巻き尾、正面を向き四肢をやや開きぎみに立つという表現は共通するが、Ａは中実、Ｂは中空に作るという違いで分けている。Ｃは大型のもので左右型合せ中空である。接合した例はないものの、四足動物とした図87－３はこの犬Ｃの体部である可能性が高いと考えており、モチーフとしての犬の出土量はさらに多いことになる。３には腹部に１箇所穿孔がある。

猪Ａ・Ｂは左右合せ型作りの小型のものである。Ａ（図88－19）は中実、Ｂは中空である。二の丸跡第９地点でも細部は異なるがＡと同様のものが数点出土している。Ｃ（図90－８）は大型の中空のもので、１点のみの出土である。成形は左右合せ型作りと思われるが、体毛を表現した沈線はへら状工具で手描きされている。

猿は出土量の最も多いモチーフである。Ａ（図87－５、図89－７・９・１、図90－32・38）は手づくねのもので、倒卵形の体部に頭部・手足・尻尾を貼り付けて様々なポーズを自由に形作っている。頭部は顔の細部表現のため型を使用した可能性がある。櫛状の工具による沈線で体毛を表現する。ポーズにはしゃがむもの、あぐらをかくもの、横座りして肘をつくものなどがある。５は左手に球状のものを持っている。32は鉄鏃を構えている。38はびくを担いでおり、釣りをしているのであろう。これらは胎土や焼成は一様でないものの、胴体の形状や体毛・手足の表現、尻尾となる粘土塊を貼り付けた後指で押圧して断面Ｌ字状に作る点など、その作り方において斉一性が高い。Ｂは手づくね中実だがＡより小振りで体毛が表現されていないものである。猿Ｃは前後合せ型作り中実のもので図88－18は底部に１箇所穿孔がある。猿Ｄは前後合せ型作り中空で大振りな頭部１点のみ出土している。猿Ｅ（図90－37）は型作りで子猿？を抱いている。１点のみの出土である。

図88－27は一端にほぞ状の突出部が作り出されており、動物の腕の部分や焙烙の耳の破片ではないかと考えられる。図88－17はモチーフ不明だが合せ型作り中空の人形の一部と考えられる。型によると思われる陽刻で「庄子」と読める文字が表されている。

【土製玩具】

碗には図87－45と図89－51の２形態がある。45は大振りな丸碗で、51は腰の張りが強い形である。いずれも高台は中実円柱状に作られている。皿の場合かなり小さいものでも煤が付着していて実用に供された例があり、法

量でどこからが玩具であると線を引くことは難しく、実用品と同じ形態の図87—44や図88—56の場合、ここに含めているのは石干作りが粗雑であるのと全面施釉であることによる。図87－46は直径9 cm もあるが、内面見込にカキメが広く施され、周辺部に鉄釉による円形文が配置されるという装飾が、後述する茶釜や壺に共通することから、玩具であると考えられる。浅く受け口状の体部に中実円柱状の高台がつけられる珍しい形態のもので、皿というよりは器台のようなものかもしれない。器台としたものには広い鍔のついた器状のA（図87－48、図88—59）と、浅い皿に中実の截頭円錐形の台がつけられるB（図89－49）がある。瓶は2点図示したが図89—54と55とでは体部最大径の位置に違いがある。二の丸跡第9地点では口縁部が受け口状になるものが出土しており、頸部上端が開きぎみになっている55は同様のものかもしれない。壺は直口のものが多い。図89－42は双耳で器面全体に鉄釉による円形文が散らされている。図89—52・53、図90—60は茶釜とした。52は口縁端から鍔の上面までカキメを施し、口縁部を縁取るように鉄釉が施される。53は双耳で口縁部近くに鉄釉で円形文が描かれる。60は双耳で体部の大部分にカキメが施され、鉄釉で相対する2箇所に模文が描かれるものである。蓋は落とし蓋で、図88－43は上面全面にカキメが施される。図90—61は上面に型による菊花状の陰刻文様が施されている。図87－47は蓋としたが、つまみがなく落とし蓋としては使いにくい形態で、あるいは皿と考えた方がよいのかもしれない。擂鉢（図89－50）は口縁端部が三角形状になるもので、卸目は密ではない。鍋（図89－41）は紐状の取手が貼り付けられる。

鈴は最も多量に出土している。大きさには大小様々あるが、形態的には比較的斉一性があり、二の丸跡でこれまで出土していたものとほとんど同様である。体部は比較的球に近く、薄手の作りで、内面上部にはつまみ部分の成形の際に生じたとみられる絞り目が顕著に観察される。切れ目の切り口は非常に鋭利である。碁石（図90－79）は直径2 cm 前後で断面レンズ状のものである。碁石ではない無文の円盤状のものを面子としたが、図87－64と図88－72の2点のみの出土である。有文円板（図88－75）は薄手のもので片面に型によって花弁のような文様が表され、一段低くなった部分には同じ型によるとみられる陰刻文字が認められる。3文字あるようにみえるが、明らかなのは右端の「仙」の1字のみである。菊花状円板（図88－73・74）は片面に型によって菊花のような文様が表されたもので、中央部は突出しており、穿孔がある。文様のない側の作りは73が平坦にならすが、74は凹凸が激しいままという違いがある。同様のものは二の丸跡でもこれまで数点出土しているが、その用途については未だ手がかりがない。建造物を模したものとしては、多層塔・屋根・民家がある。多層塔は五重の塔などのミニチュアと考えられるもので、完形品がないために何層なのかは確実にできない。いずれも屋根の棟の部分で2分した型を用いた型作り中空で、A（図87－67）は残存部分から3層以上で、屋根には方形の端部をもつ工具による押圧で文様が施される。壁には円形または三角形？の窓があけられている。B（図89－70）は2層以上で、無文である。壁には三角形？の窓の部分と連子窓風になる部分とがあるようである。屋根（図87－69）は屋根のみを単体で作ったものとみられ、下り棟に沿った沈線が施されている。民家（図90－78）は屋根部分しか残っていないが、縦方向の沈線で草葺きが表現され、緑釉が施されている。棟には桁行方向に穿孔が認められる。方形囲としたものは、板状の部分で方形に囲むように作られているもので、上下の両方あるいは少なくとも一方は開口しているものである。A（87－65）は型作りとみられ、外面に亀甲襷ぎ文様が施される。Bは板状に作った各面を接合しているもので、相対する2面に台形？の窓があけられるようである。C（図87－66）も板状に作った各面を接合する。一面に曲線を描く窓があけられる。図88—76は平たい棒が組み合わされる瓦質のもので、何かに接合していた痕跡がある。図88—77は凸面に型による細密な文様があり、凹面は平滑である。内外面に彩色がみられることから器状のものであろう。図89—62は花のようなもので、猿Aの持ち物であろうか。図89—63は宝珠であろう。何かに接合していた痕跡があるので、稲荷などの一部であろう。図90—80は額縁？としたが、突帯によって区画した中に刃をつけた紐状のものが表現されている。一面に剥落した痕跡があることから、水滴などを模したものの一部の可能性がある。

⑤ **瓦**（図91・92、図版60・61、表34）

瓦の分類・集計の方法は年報８に準じているが、桟瓦類は平瓦と丸瓦をなめらかに接合したいわゆる桟瓦のみとし、軒瓦以外では基本的にすべての計測が可能なものと特殊なものを抽出して資料化している。総計4154点392kgの出土で、二の丸跡に比べると少ない。基本層では４層以上からの出土が大部分で、江戸時代の整地層からはわずか37点3686ｇである。遺構では明治時代の３号土坑が特に多く瓦溜めのような様相を呈する他、10号堀甕からも多い。江戸時代の遺構で注目されるのは１号溝とその上から掘り込まれた７号柱列からまとまった出土がある点である。それ以外では２号池・３号井戸での出土がやや目立つ。江戸時代の整地層・遺構からの出土に限ってみればその種類は軒丸瓦・軒平瓦・平瓦１類・丸瓦・桟瓦・板塀瓦がある。

軒丸瓦の瓦当文様には三巴文・連珠三巴文・九曜文が確認された。巴文はいずれも左巻き（重が右で尾が左に延びる）である。図91－１が唯一瓦当面完形の資料で、丸瓦の接合部には円周方向に沿った櫛状工具による刻みが施されている。軒平瓦の瓦当文様には、三葉文＋唐草４類（図91－５）、隅切折敷に三文字？＋唐草１ａ類（図91－６）、中心飾り不明の唐草３ｂ類（図91－７）、唐草３ａ類または３ｂ類がある。軒桟瓦では、小巴部垂れ部ともに無文で平坦な石持と（図91－９）、小巴部は不明で垂れ部分が三引両＋唐草１ａ類（図91－８）があり、いずれも２層以上の出土である。菊丸瓦が１点のみ出土している（図91－４）。年報９で菊花文Ｃ類とした浮彫り状で弁端が角張る形である。平瓦１類では、全体が明らかになったものは図92－14の１点のみである。３号井戸埋土２層の出土で、共伴する陶磁器から18世紀中葉以前のものと考えられる。図91－15は尻側を除いて両面に鉄釉が施されたもので、胎土自体もにぶい赤褐色を呈するものである。丸瓦でも全体が明らかなものは図91－10のみである。図92－11は玉縁部に段差をつけず、ややすぼめる形態のものである。図92－12は小片だが外面に斜格子叩き痕が認められ、断面形は多角形を呈する。図化していないが、施釉のものも２号池埋土３ｂ層・２層・攪乱から各１点出土している。桟瓦は３号土坑でまとまって出土している。なお１号溝から図92－18の桟瓦が出土していることになっているが、色調や櫛目、釘穴が丸いことなどから近代のものと思われ、試掘時の出土でもあることから混入の可能性が高い。図92－19は桟の部分の屈曲が弱く、切り込みのないタイプで、尻側に面戸瓦を合体させた形態のものである。二の丸跡第９地点で出土例がある。図92－18は全長の３分の１を越す長い切込みをもちその角を面取りする。３号土坑から多数出土した桟瓦も切込みの長さには多様性があるが、形態的にはこれに似たものが多い。図91－21は雲形の立体的な貼り付けがあるもので、鬼瓦の一部であろう。図91－22は鬼瓦の背面の取手と考えられる。このような取手の例はこれまでの仙台城の調査では二の丸・三の丸造営以前の古い段階の例のみが知られている。図91－23は飾り瓦で、青海波状に表現された波の上に亀が乗っている。亀の首は欠損。青海波は三角刀状の工具で深く刻まれ、亀甲文様は型もしくは亀甲形の工具を押圧して施文しているようである。残存部分は波の部分、亀の下半（背の下部と甲羅の周縁部）、亀の上半（首の上部と甲羅の亀甲文様部分）の３つの部分を接合して形成されている。接合面には櫛状の工具で平行沈線が刻まれている。首の向かって左下に釘穴がある。青海波部分の下面が弯曲していることから、下り棟などの丸瓦列の上に据えられたものではないかと考えられる。刻印は丸瓦（図91－13）に「〇」、近代桟瓦の可能性が高い平瓦１類（図91－16・17）に「四角に富」、　桟瓦（図91－20）に「丸に山に守」が認められた。

これらの瓦の出土量と種類からは、本遺跡に営まれた武家屋敷の建物に全く瓦が使用されていなかったとは言えないが、すべての建物に使用されたとするには少なすぎるといえる。まとまって出土しているのが１号溝や７号柱列・２号池という西側の武家屋敷との境界近くであることから、これらは隣の屋敷の瓦である可能性もある。軒瓦の瓦当文様が家紋系ではなく巴文系が主体であることからは、軒瓦が葺かれたのは比較的古い時期のことであった可能性が高い。ただしここは武家屋敷なので伊達家の家紋のついた瓦がそもそも使用できたのかという点から１点の九曜文は二の丸からの紛れ込みで、当屋敷ではずっと巴文が使用されたのかもしれない。

⑥ **金属製品**（図93～96、図版62～65、表17・18・35・36・38～40）

古銭は、照寧元寶１点、至道元寶１点、永楽通寶23点、不明渡来銭２点、寛永通寶73点（古寛永17点、文銭３点、新寛永51点、不明２点）が出土した。地鎮道構１と３では、埋納されていた合わせ口のかわらけのなかから、永楽通寶がそれぞれ12枚、11枚一括出土している。地鎮に用いられた永楽通寶23枚は全て本銭であり、模鋳銭は含まれていない。また、１号池の底面からは、古寛永２枚と新寛永18枚が緡の状態で出土した。

煙管は、雁首34点、吸口32点、雁首か吸口か判断できないもの６点出土した。煙管の多くは幕末の整地層である４層から出土しており、型式学的にみても19世紀代のものが多い。複数の金属を使い分けたもの（図95－３、４のセット）や、断面が方形を呈するもの（図95－８、23のセット）、梅の花の文様を彫金したもの（図95－17）など凝った作りのものも存在する。

古銭、煙管以外の銅系金属製品としては、雁首銭、簪、文鎮、目貫、切刃、鈎、鋲、各種金具類がある。

鉄製品には、釘、包丁、小刀、楔、火打金、鎌、火箸等がある。

鉛製品には、錘と銃弾がある。鉛の錘は３点出土しており、いずれも「簞笥の引き手」状の形態をとる。うち２点は両端付近に孔を有する。このような形態の錘は投網用とされ、それをつくるための鋳型が丸の内３丁目遺跡や国立大阪病院敷地内遺跡から出土している（久保和士1995）。本調査地点出土のものは、出土層位からみて、17世紀末以降の所産と考えられる。銃弾は、通常の火縄銃に用いる球形弾21点、ミニエ銃に用いる蛋形弾（ミニエ弾）２点が出土した。このうち、球形弾11点とミニエ弾２点は、幕末の整地層である４層から出土している。ミニエ弾はフランスのミニエ大尉が発明し、1850年代に実用化されたとされる（前田宣裕1997）。ミニエ弾は底部が中空で、発射薬の爆発に伴い栓が中空部に押し込まれ、弾丸の裾が広がってライフルに食い込み、回転しながら発射される。また、幕末の整地層である４層からは、これらの弾丸とともに、溶解した鉛の塊が２点出土している。調査区内からは、鉛の塊10点に加え、先端が溶解した鉛管（図96－44）も出土しており、屋敷内で低融金属である鉛の加工が行われていた可能性は高い。屋敷の主である大松沢氏が、最新式のミニエ銃をはじめとする火器類の使用・保管に携わるとともに、邸内でそれらの弾丸の製作を小規模ながら行っていたと思われる。

このほかに、金を主成分とした輪宝？（図96－24）が５ａ層中から１点出土している。これは、直径約23㎜厚き約0.9㎜の金の薄い円板を素材としており、透かしと線刻による「車輪」状の表現が認められる。「車輪」状の文様は、片面にのみ施されており、径2㎜程の円形を中心に、３重の渦状の構成をとる。内帯は、幅約6㎜あり、12分割され、交互に６カ所透かしが入る。中心部の円と内帯の構成は、丁度「六ツ目足文」状となる。中帯と外帯はともに、幅約4㎜で、２本１組の線刻により６分割されている。中帯と外帯の線刻の位置は30度づつずれており、一直線上に重なることはない。この資料の用途については断定できないが、形状、素材からみて実用品とは考えがたく、密教法具の輪宝を模したものと見なした。輪宝は、本来古代インドにおいて敵に投げ込み殺傷させる武器として生まれ、密教では敵や災いを破る摧破の効力になぞらえ、密教修法の地鎮、鎮壇具に利用される。古代では青銅製の輪宝が地鎮、鎮壇に用いられるが、中世以降は、それら金属製の輪宝に加え、礫やかわらけの内面に輪宝を墨書した「代用品」が多く見られるようになるようである。近世の地鎮具では、これまでのところ圧倒的に輪宝墨書土器が多く、金属製のものは江戸城や和歌山城などの城館で発見されているに過ぎない。輪宝墨書土器は、近世農村内の建物の地鎮などにも見られることから、城館の地鎮に使われる金属製の輪宝に比べ地鎮具としての格は下がるものと思われる。本遺跡出土のものは、金を素材としているとはいえ、江戸城や和歌山城出土のものに比べ小さく、厚みも薄く、輪宝の表現も極めて簡略化されている。本資料は、出土層位から17世紀～18世紀前半代のものと考えられるが、その当時の中級武家住宅における地鎮のあり方を示す例として、貴重な資料といえる。

⑦　**石製品**（図97・98、図版66、表19・41）

硯127点、玉石118点、砥石55点、碁石32点、火打石23点、温石10点、茶臼１点、印鑑１点、石板１点、銀葉１点、琥珀１点、不明15点が出土した。二の丸地区に比べ、調査面積の割には、出土量も多く、種類も豊富である。

出土した石製品は日常生活に密着したものが多く、武家屋敷という場所の性格を良く反映している。

1号溝から出土した茶臼の下臼（図98－SO30）や聞香に使われたと考えられる銀葉は、共伴した黒織部沓茶碗、美濃や信楽の葉茶壺とともに、17世紀前半における500石クラスの武士が有する茶道具のセットを復元する上で貴重な資料といえる。碁石としたものでは、粘板岩製の黒石（図98－17～19）が多く、白石は凝灰岩質頁岩製のもの（図98－23）が僅かに見られるだけである。黒石と白石の数には著しい不均衡がみられることから、黒石に分類したものの中に、碁石以外のものが含まれている可能性もある。砥石には石英安山岩と石英安山岩質凝灰岩が、火打石には石英が多く用いられている。「封」と彫られた印鑑（図98－28）は封書印であろう。

⑧　**その他の遺物**（図99、図版67、表16・19・37・42～44）

その他の遺物としたものには、木製品、竹製品、漆製品、ガラス製品、骨角製品、革製品、スラグ、炉壁、羽口、漆紙がある。このうち、革製品、スラグ、炉壁、羽口は、出土層位からみて、明治以降の所産と考えられる。

木製品、竹製品、漆器などの有機質遺物は、出土点数も少なく、概して保存状態も良くない。木製品は加工木がほとんどで、製品名を特定できるものは出土していない。竹製品も、煙管の羅宇が出土しているに過ぎない。

漆器のほとんどは漆膜のみが残ったもので、図化できたものは碗1点のみであった（図99－W1）。この漆碗は、3号井戸から出土しており、18世紀のものと考えられる。内面赤色で、外面には黒地に石黄で家紋が描かれている。製作後、口縁部に近い箇所に、横一列に貫通孔が3つほどあけられているのが確認できる。3号井戸からは、この他に、赤地に金色で草花文が描かれた漆膜（図版67－W4）や、黒地に赤で三引両文が描かれた漆膜（図版67－W5）などが出土している。

ガラス製品のうち、江戸時代に遡るものには、簪と容器がある。ガラスの簪には、色と形状に多様性が認められる（巻頭図版13）。江戸時代のガラス容器のうち図99－G1は、青色の菊形向付と考えられ、型吹きで作られている。

骨角製品には、ベッコウ製の櫛（図99－B1）、同じく簪、骨製のヘラ？とボタンがあるが、出土層位よりみて、ヘラ？としたもの以外は全て明治以降のものと思われる。

漆紙（図99－01、巻頭図版10）は、19世紀前半代の遺構と考えられる26号土坑から、3重に折り畳まれた状態で出土した。一部欠損があるものの、開いた状態では、直径約15cmの円形を呈する。文字の書かれた面の裏側に漆が付着しており、文字の有る面を上にして、径5寸程の円形の漆容器に被せていたと考えられる。折り目は中心から8方向に放射状にのびている。折り畳まれた状態から見て、初めに漆の付着した面を内側にして半分に折り、それをさらに半分に折り、次に輪になった二辺が重なるように折り畳み、耳側から付着した漆を絞り出した後、廃棄されたと考えられる。古代の漆紙同様、漆の付着していない部分が腐食した結果、今の円形になったわけである。肉眼では墨書の文字は全く見えないが、赤外線を照射した結果、近世のくずし字が縦に3行書かれていることが判った（図版68－O1）。一番左の行は、「と可被申」と読める可能性があるが、確定はできない。右2行に関しては、解読不能である。管見では、これまでに近世の漆紙文書の出土報告例はない。漆紙文書といえば、古代のものだけを連想しがちであるが、反古紙を漆容器の蓋に利用した事例は、民俗資料として今日まで遺されており、当然近世遺跡からも漆紙文書が出土するはずである。近年全国各地で近世遺跡の発掘調査が行われるようになったにもかかわらず、これまで近世の漆紙文書が発見されていなかったのは、出土していても肉眼では文字を確認しにくいため、漆紙文書として認識できず、革製品と誤認したり、正体不明の遺物として扱われてきたからではなかろうか。今後、十分な注意を払う必要がある。

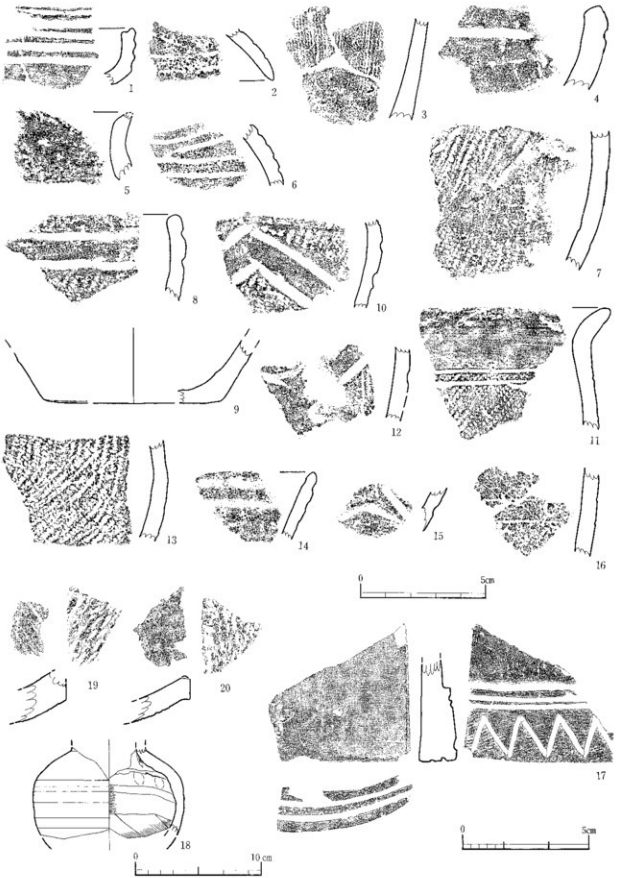
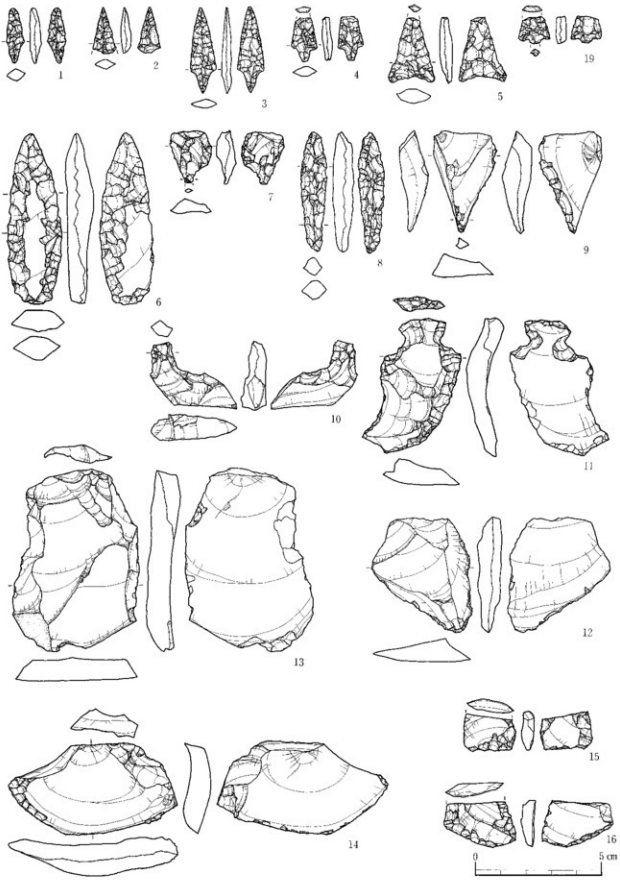
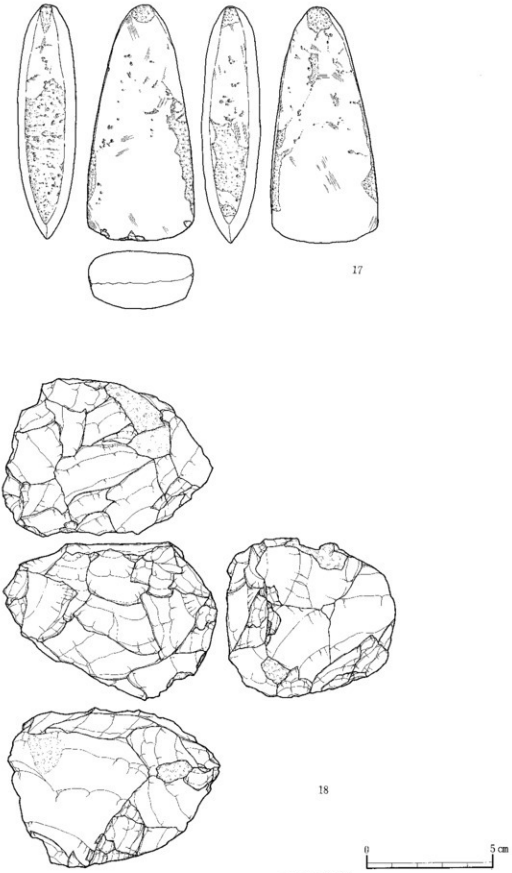


図56　武家屋敷跡 第4地点出土縄文・古代の遺物
Fig.56　Prehistric and ancient implements from BK4



1～5・19石鏃　6ポイント　7～9石錐　10・11石匙
12～14スクレイパー　15・16トゥール破損品

図57　武家屋敷跡第4地点出土石器（1）
Fig. 57　Stone tools from BK4 (1)



17 磨製石斧 18 石核

図58　武家屋敷跡第4地点出土石器 (2)
Fig. 58　Stone tools from BK4 (2)

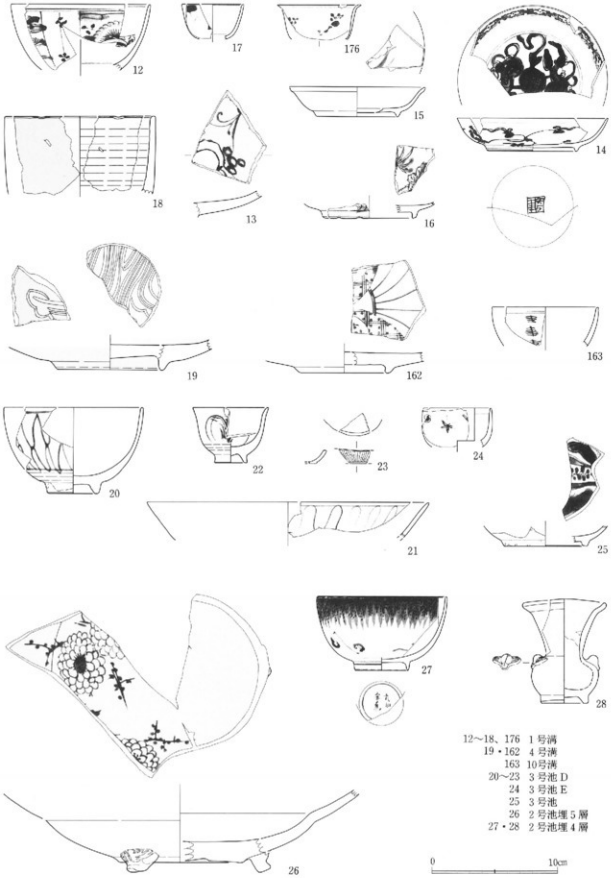
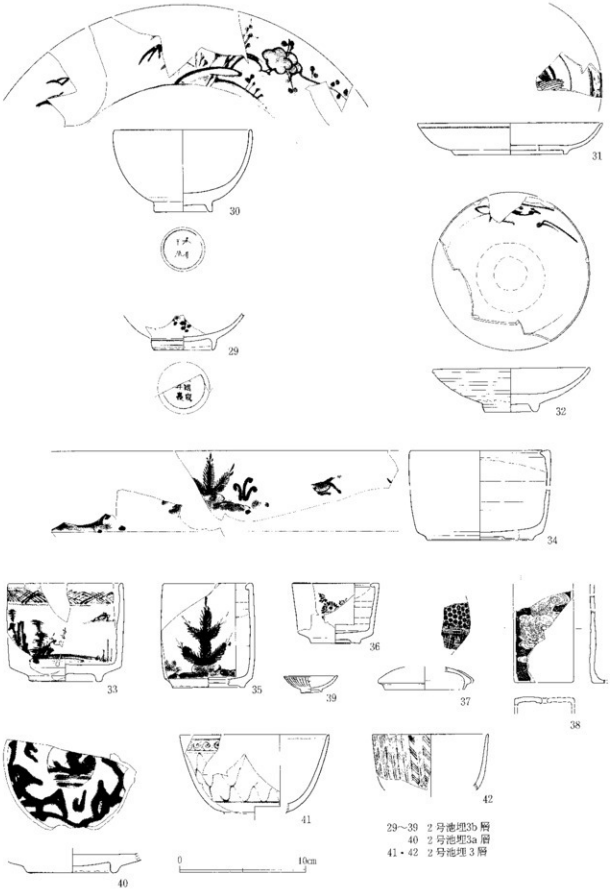


図59　武家屋敷跡第4地点出土磁器（1）
Fig.59　Porcelains from BK4 (1)



29～39　2号池埋3b層
40　2号池埋3a層
41・42　2号池埋3層

図60　武家屋敷跡第4地点出土磁器 (2)
Fig.60　Porcelains from EK4 (2)

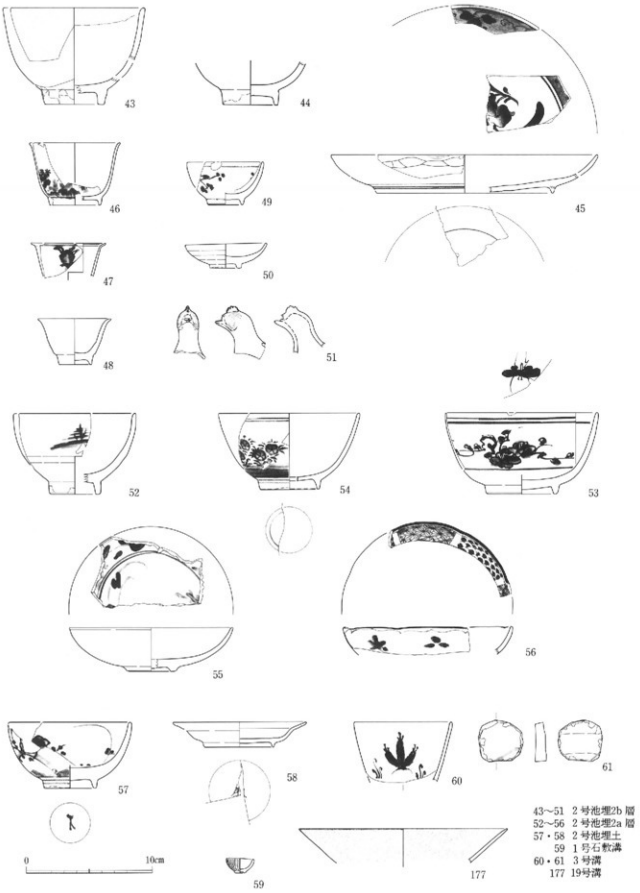


図61　武家屋敷跡第4地点出土磁器（3）
Fig.61　Porcelains from BK4 (3)

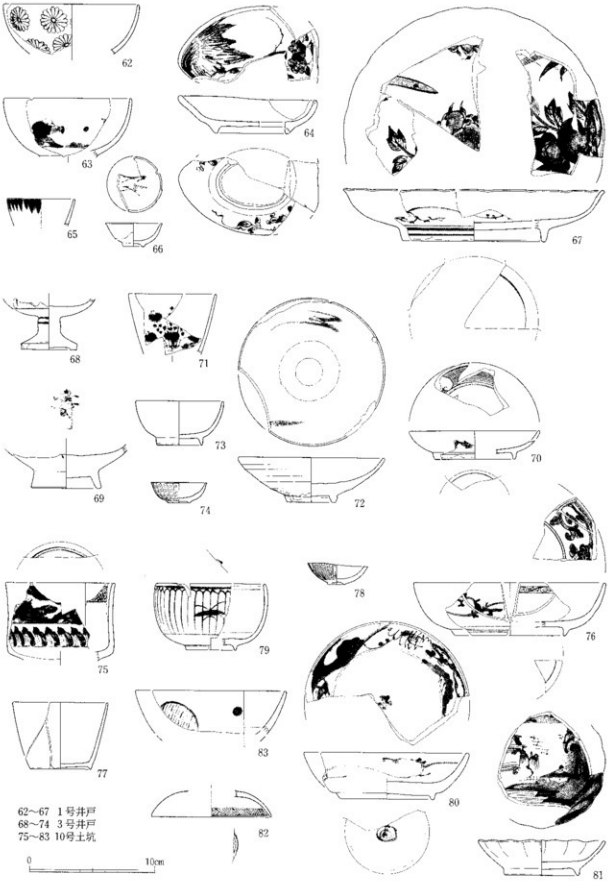


図62　武家屋敷跡第4地点出土磁器 (4)
Fig.62 Porcelains from BK4 (4)

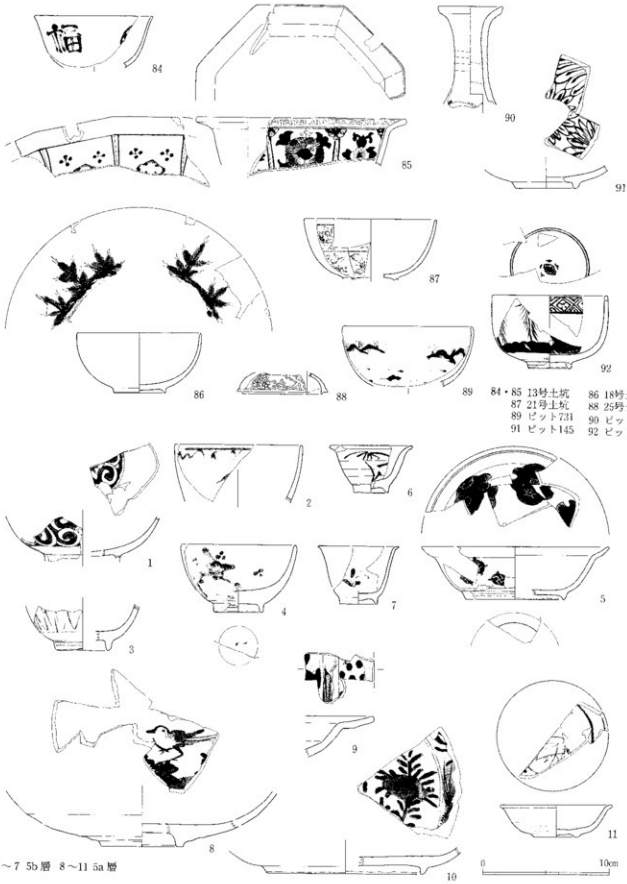


図63　武家屋敷跡第４地点出土磁器 (5)
Fig.63 Porcelains from BK4 (5)

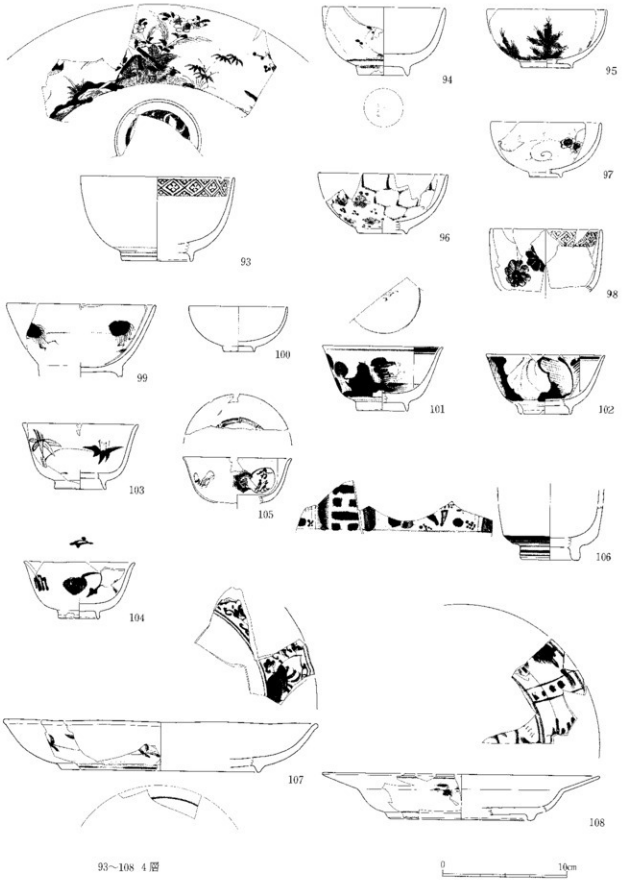
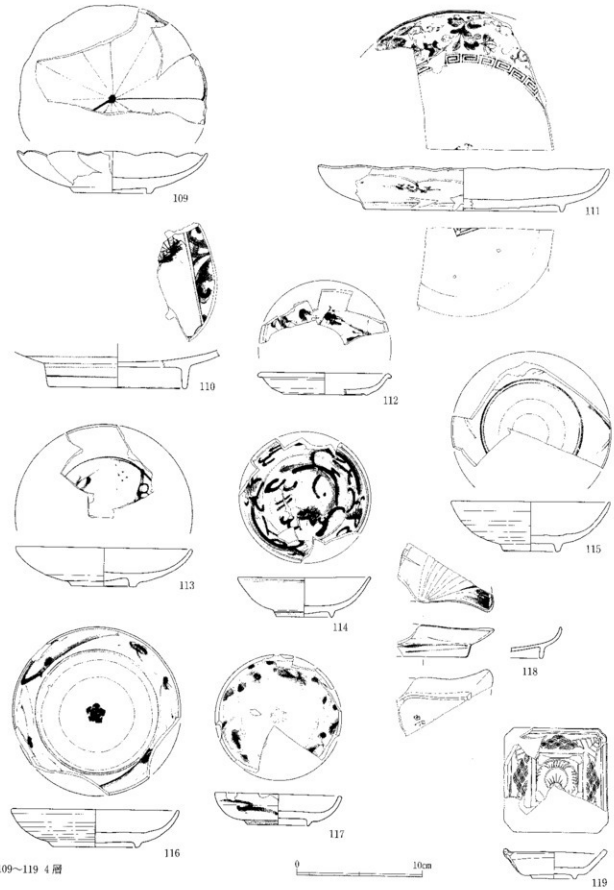


図64　武家屋敷跡第4地点出土磁器（6）
Fig.64 Porcelains from BK4 (6)



109～119 4層

図65　武家屋敷跡第4地点出土磁器 (7)
Fig.65 Porcelains from BK4 (7)

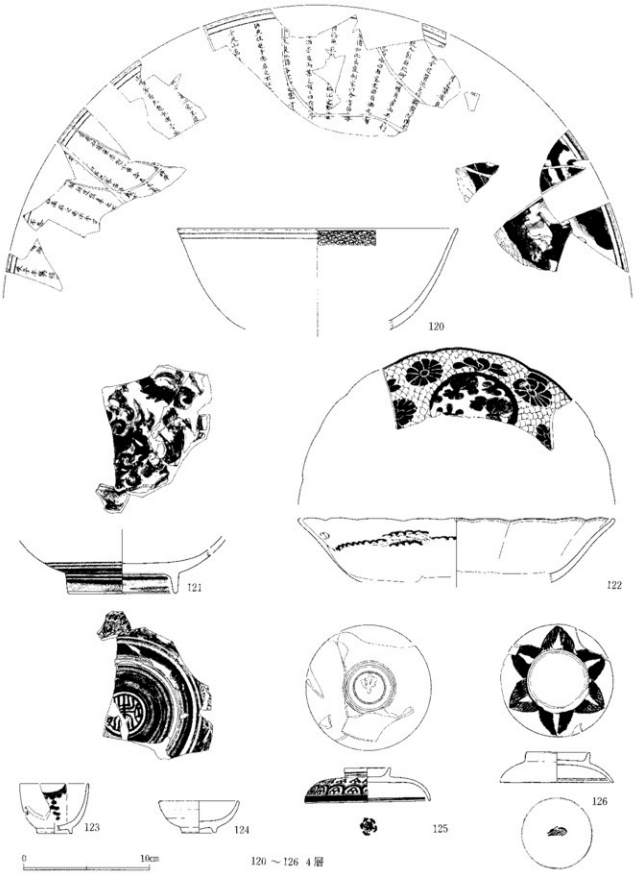


図66 武家屋敷跡第4地点出土磁器 (8)
Fig.66 Porcelains from BK4 (8)

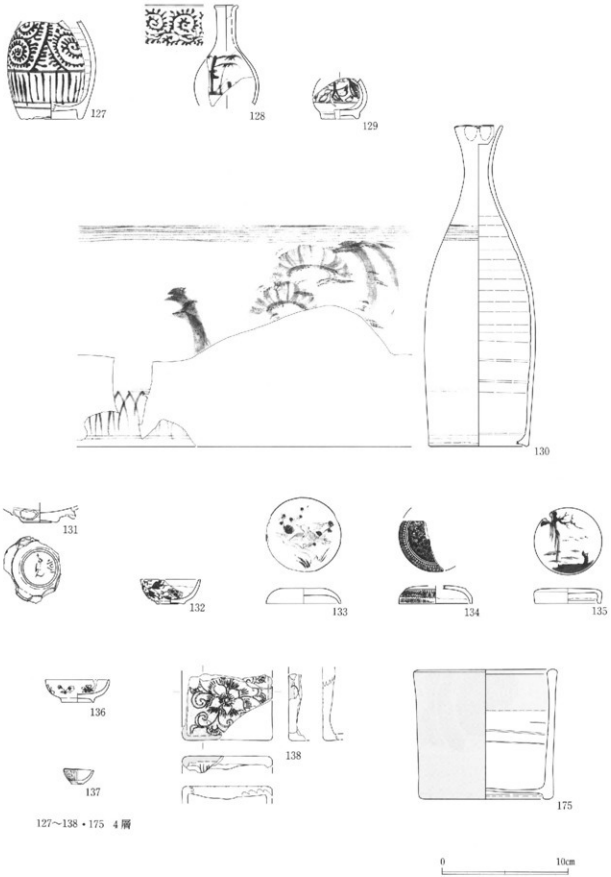
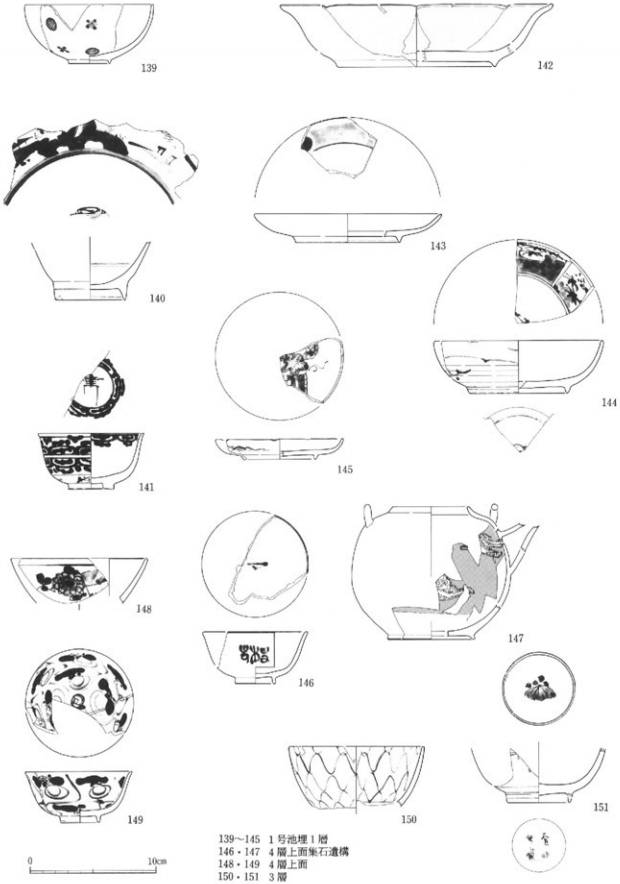
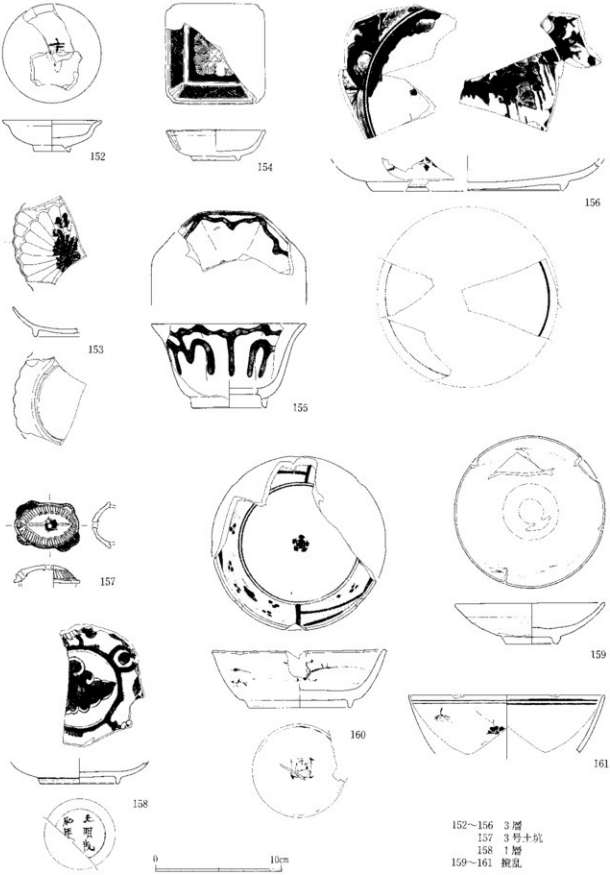


図67　武家屋敷跡第4地点出土磁器 (9)
Fig.67　Porcelains from BK4 (9)



139～145　1号池埋1層
146・147　4層上面集石遺構
148・149　4層上面
150・151　3層

図68　武家屋敷跡第4地点出土磁器 (10)
Fig.68　Porcelains from BK4 0#



152～156　3層
157　3号土坑
158　1層
159～161　撹乱

図69　武家屋敷跡第4地点出土磁器 (11)
Fig.69 Porcelains from BK4 (11)

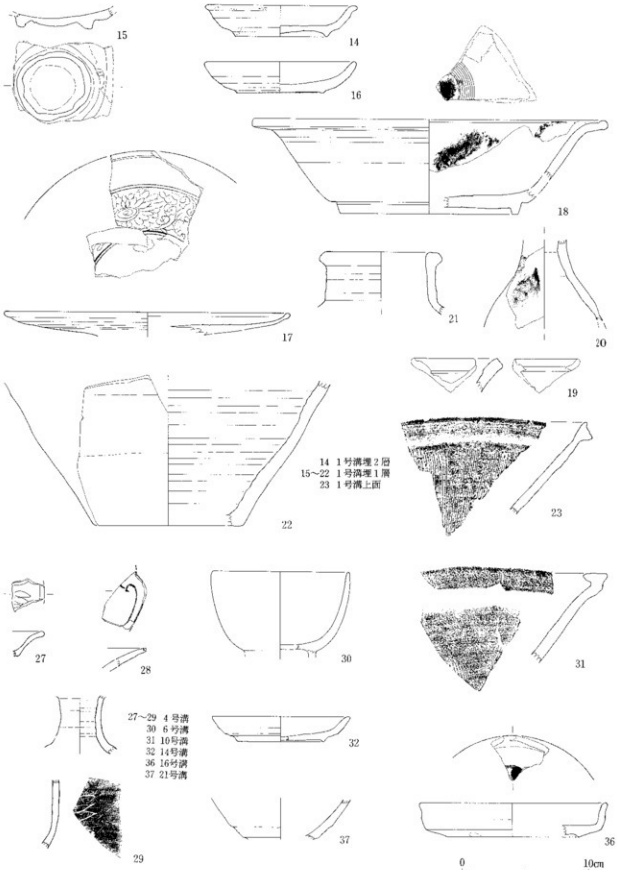


図70 武家屋敷跡第4地点出土陶器 (1)
Fig. 70 Glazed ceramics from BK4 (1)

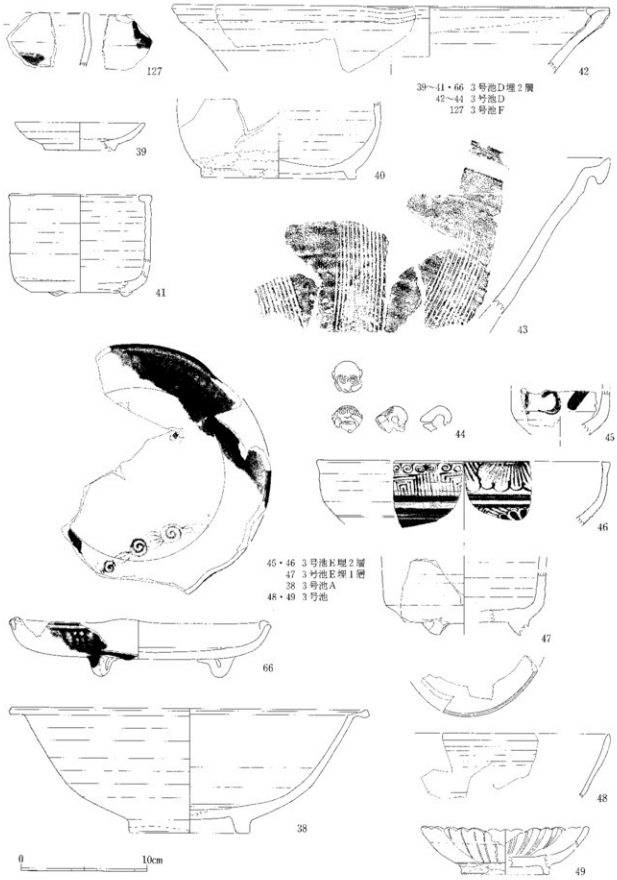


図71 武家屋敷跡第4地点出土陶器 (2)
Fig. 71 Glazed ceramics from BK4 (2)

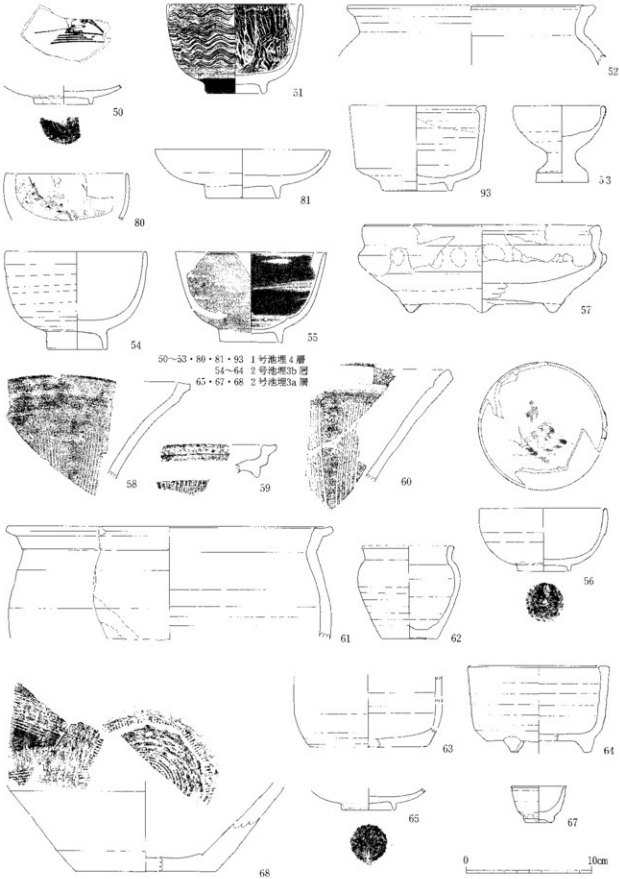


図72　武家屋敷跡第4地点出土陶器 (3)
Fig. 72　Glazed ceramics from BK4 (3)

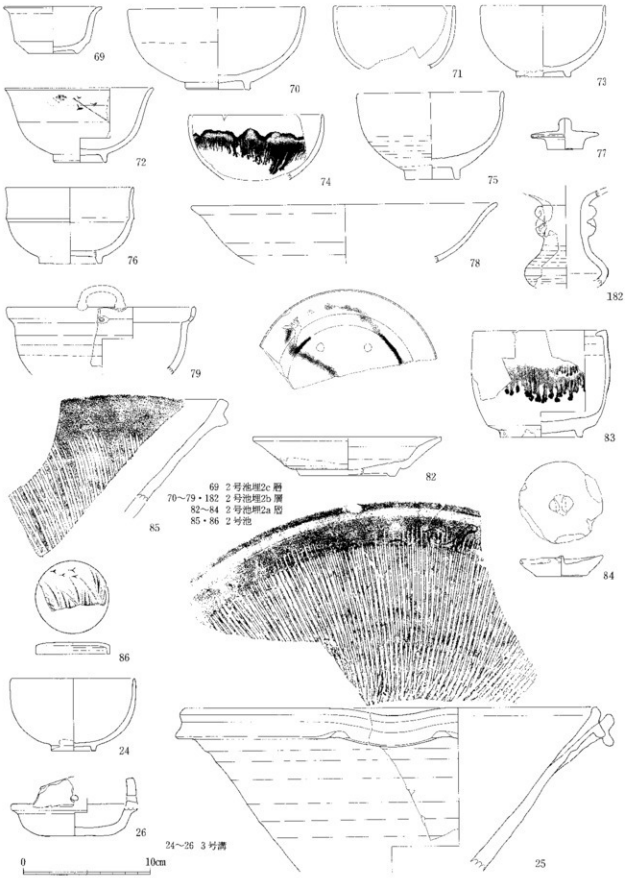
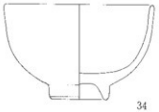


図73 武家屋敷跡第4地点出土陶器 (4)
Fig. 73 Glazed ceramics from BK4 (4)

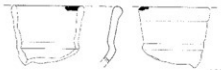


34

34・35 2号石敷溝

35

126



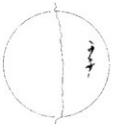
121

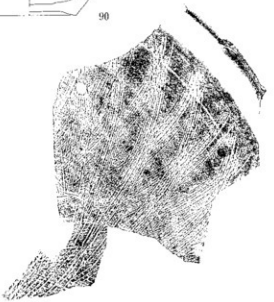
121 7号柱列
126 20号建物跡

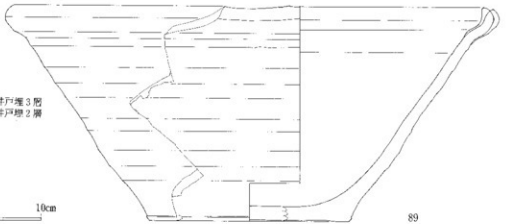
90

87

88







87～89 1号井戸埋3層
90 1号井戸腰2層

0 10cm

89

図74 武家屋敷跡第4地点出土陶器 (5)
Fig. 74 Glazed ceramics from BK4 (5)

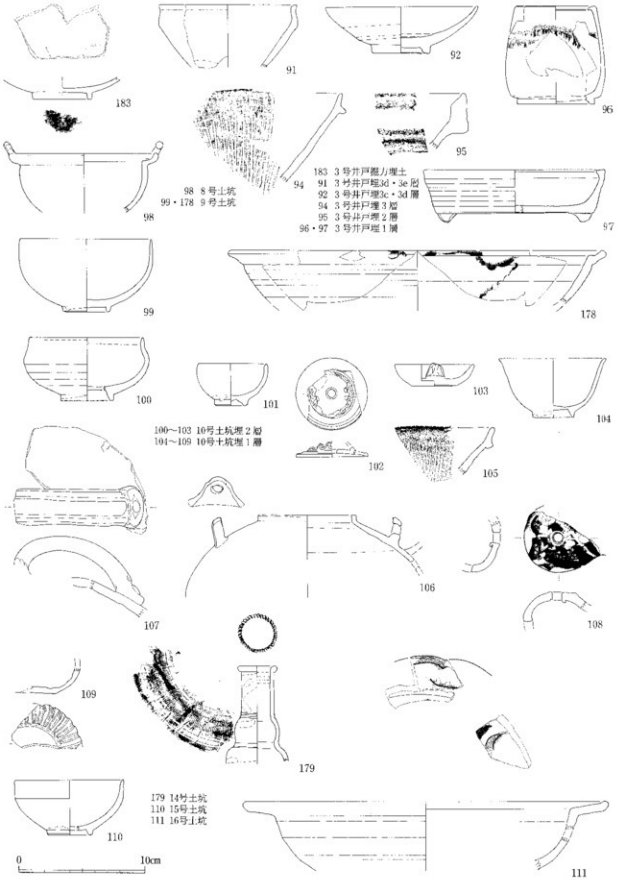


図75　武家屋敷跡第4地点出土陶器 (6)
Fig. 75 Glazed ceramics from BK4 (6)

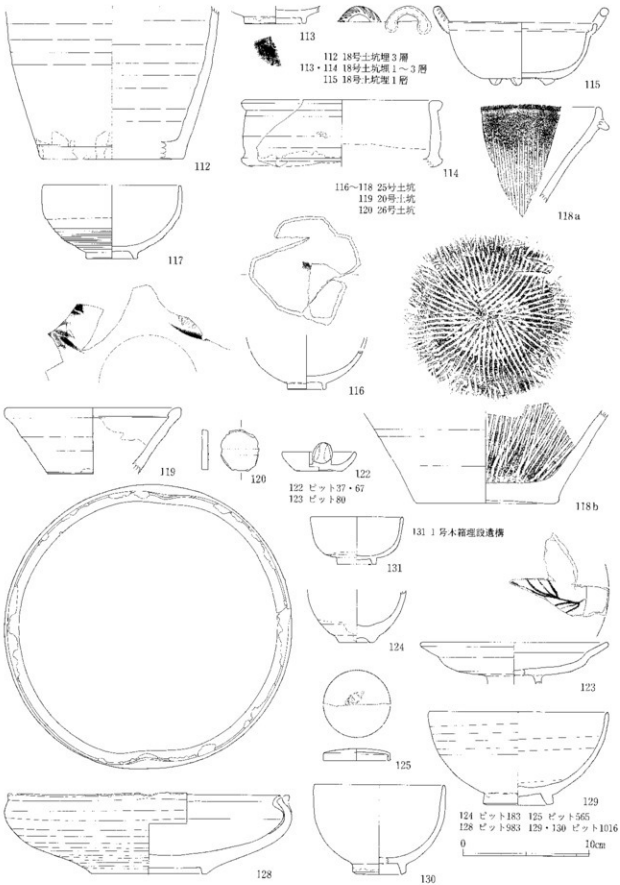


図76　武家屋敷跡第4地点出土陶器 (7)
Fig. 76　Glazed ceramics from BK4 (7)

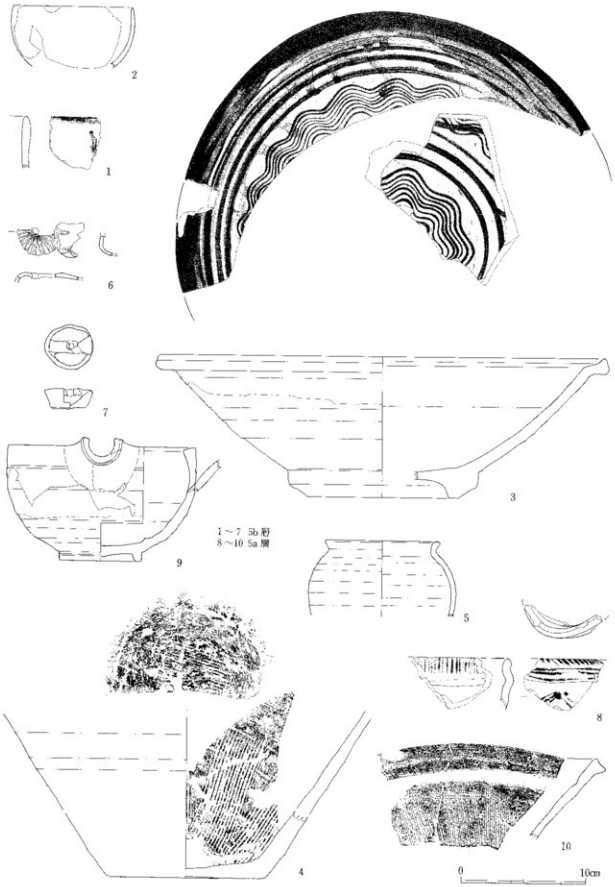


図77　武家屋敷跡第4地点出土陶器 (8)
Fig. 77　Glazed ceramics from BK4 (8)

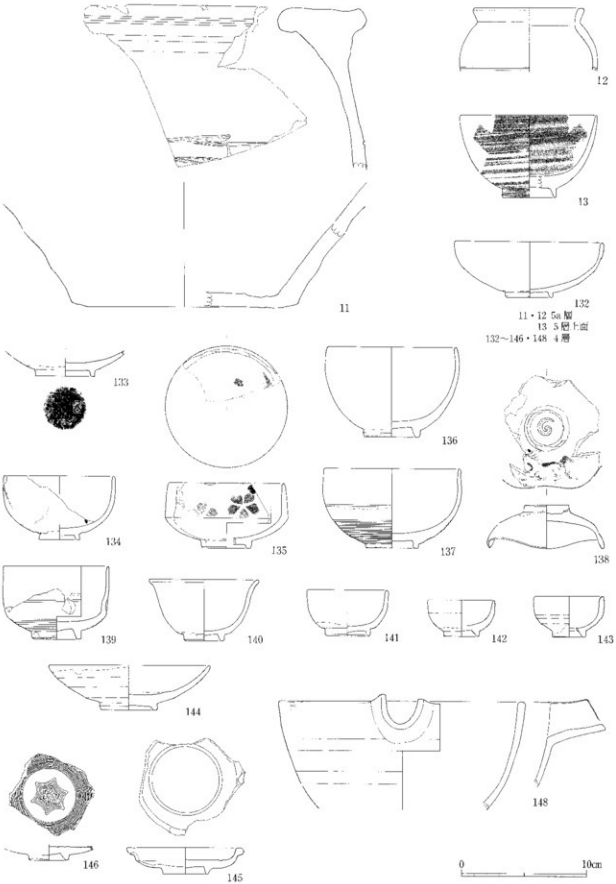


図78　武家屋敷跡第４地点出土陶器 (9)
Fig. 78　Glazed ceramics from BK4 (9)

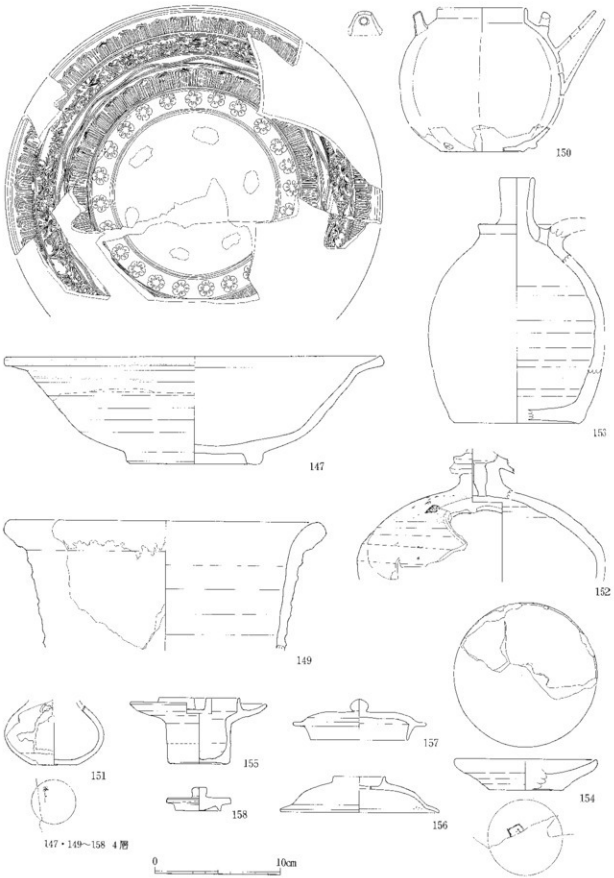


図79　武家屋敷跡第4地点出土陶器 (1)
Fig. 79　Glazed ceramics from BK4 (1)

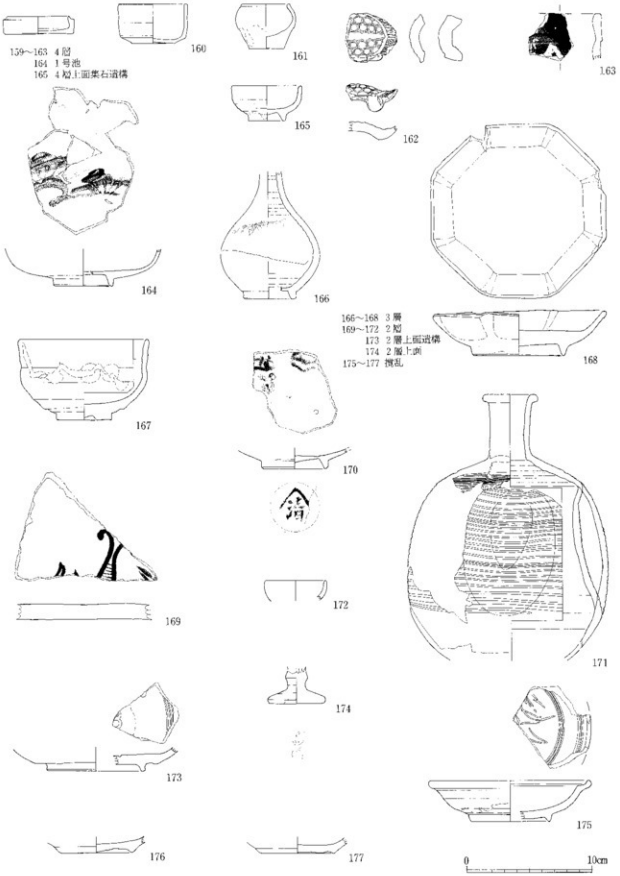


図80　武家屋敷跡第４地点出土陶器 (11)
Fig. 80　Glazed ceramics from BK4 (11)

180 10号埋甕
181 1号埋甕

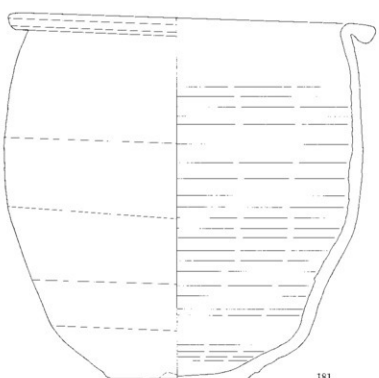


図81　武家屋敷跡第４地点出土陶器 (2)
Fig. 81　Glazed ceramics from BK4 (2)

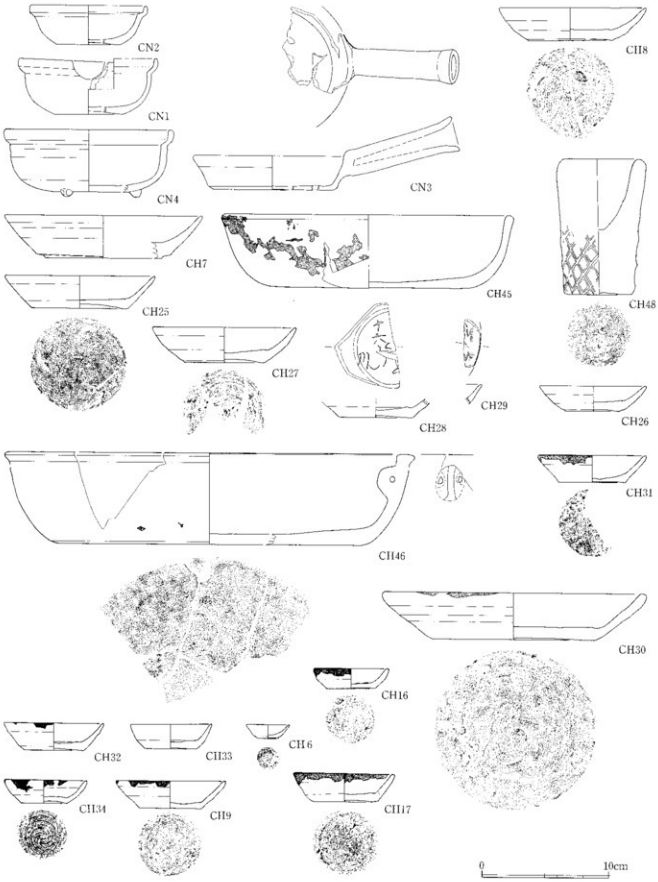


図82　武家屋敷跡第４地点出土土器 (1)
Fig. 82　Ceramics from BK4 (1)

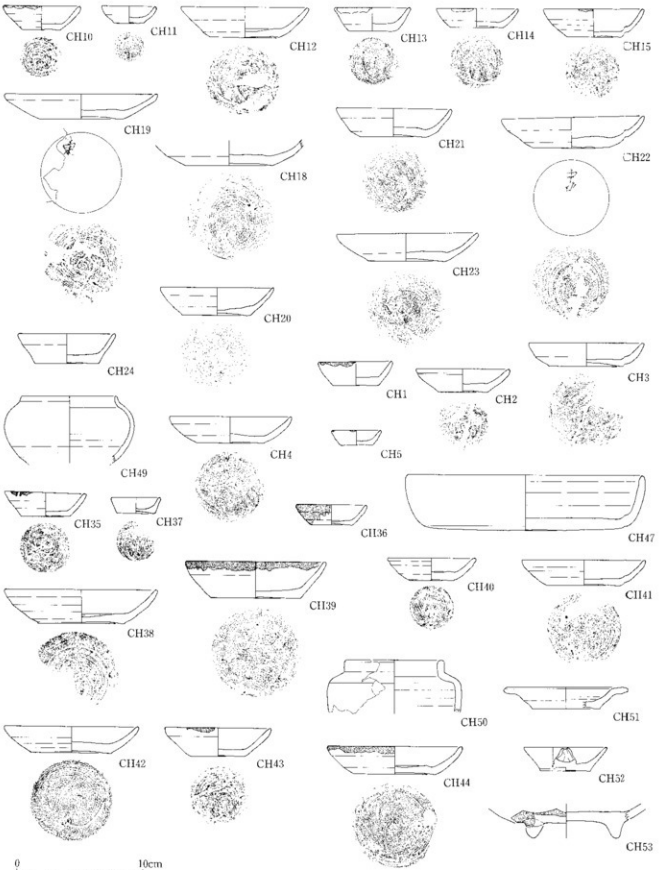
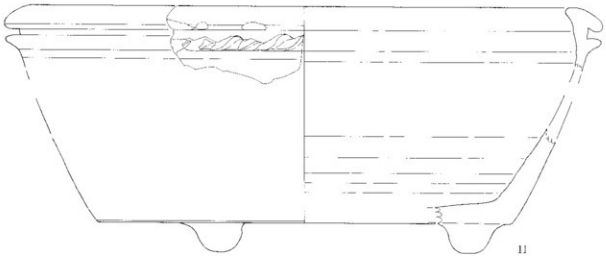
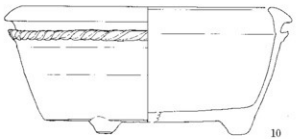
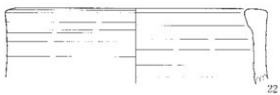


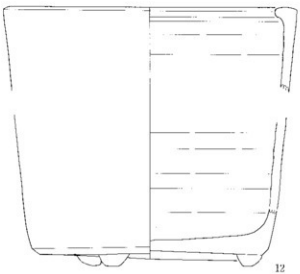
図83　武家屋敷跡第４地点出土土器 (2)
Fig. 83　Ceramics from BK4 (2)

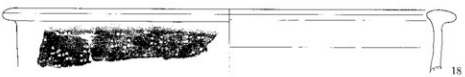
図84　武家屋敷跡第４地点出土土器 (3)
Fig. 84　Ceramics from BK4 (3)

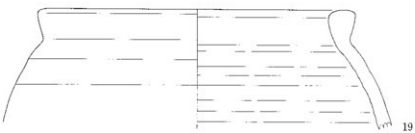












0 10cm

図85　武家屋敷跡第４地点出土土器 (4)
Fig. 85　Ceramics from BK4 (4)

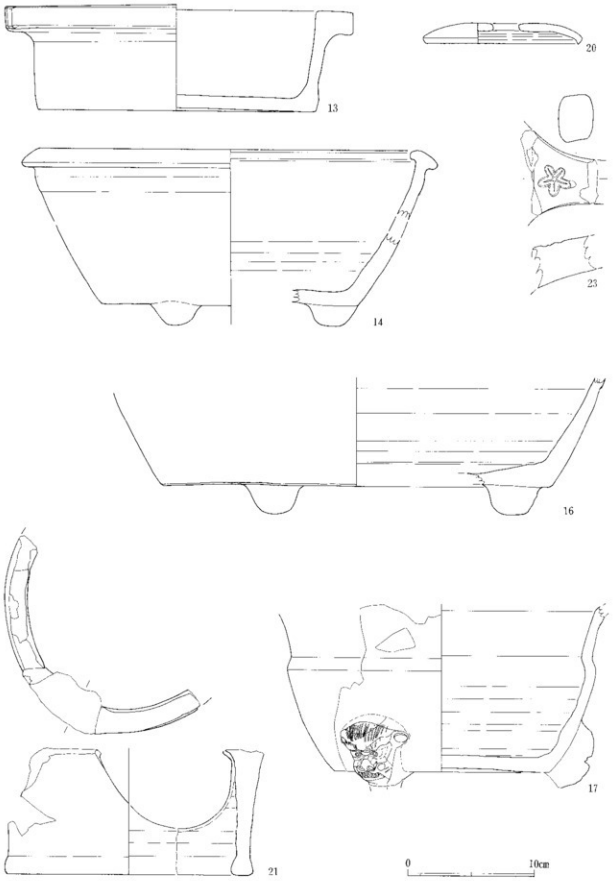


図86　武家屋敷跡第４地点出土土器 (5)
Fig. 86　Ceramics from BK4 (5)

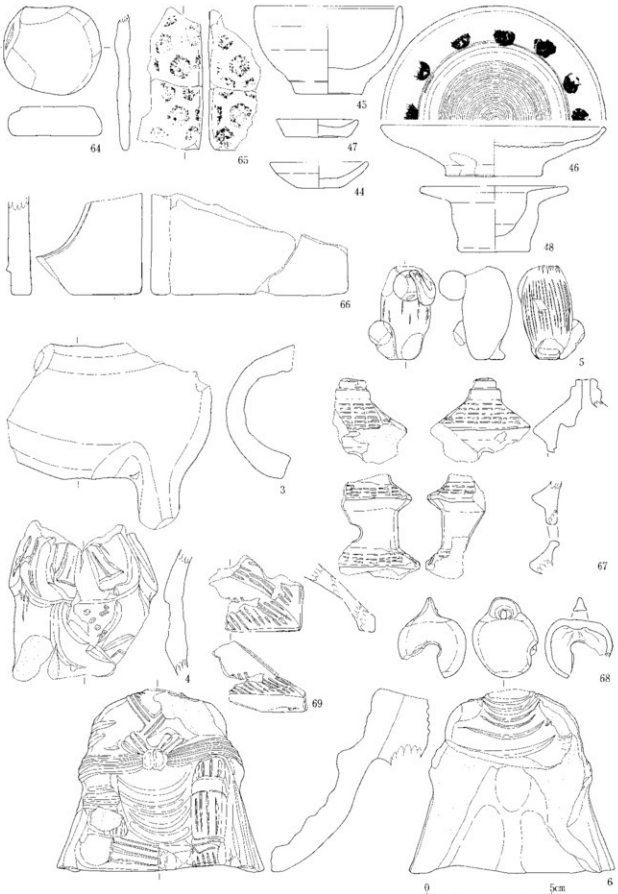


図87　武家屋敷跡第4地点出土土人形・玩具 (1)
Fig. 87　Clay figures and clay objects from BK4 (1)

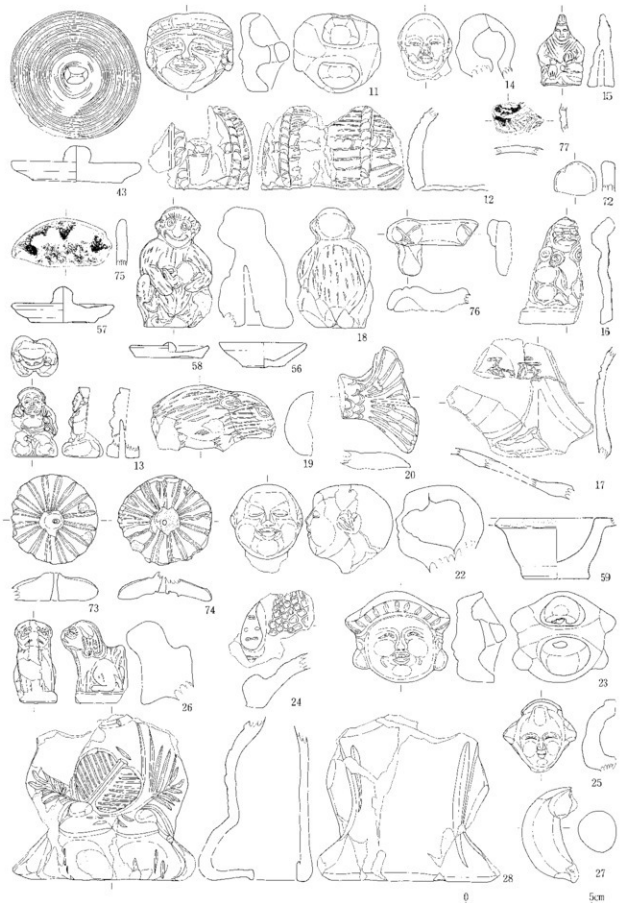


図88　武家屋敷跡第4地点出土土人形・玩具 (2)
Fig. 88　Clay figures and clay objects from BK4 (2)

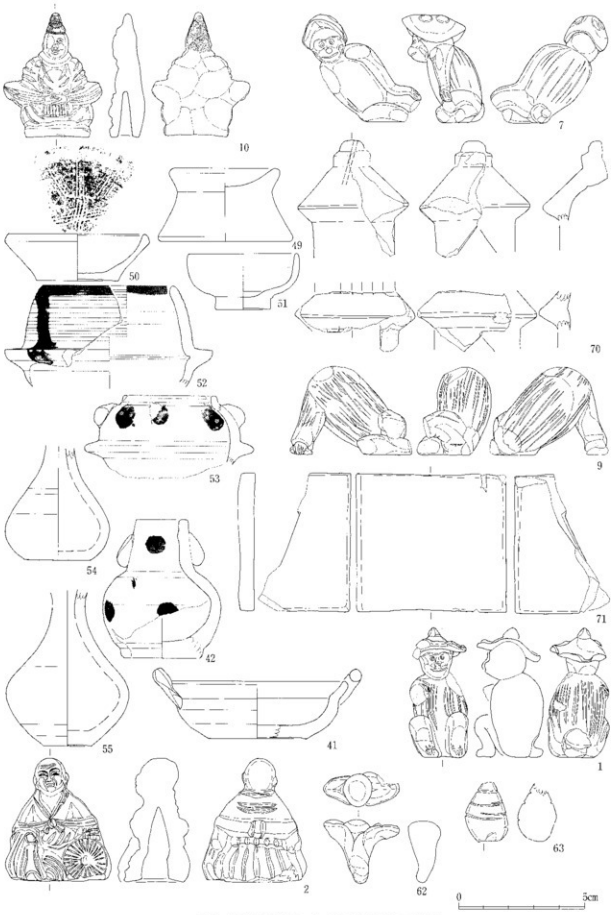


図89　武家屋敷跡第４地点出土土人形・玩具 (3)
Fig. 89　Clay figures and clay objects from BK4 (3)

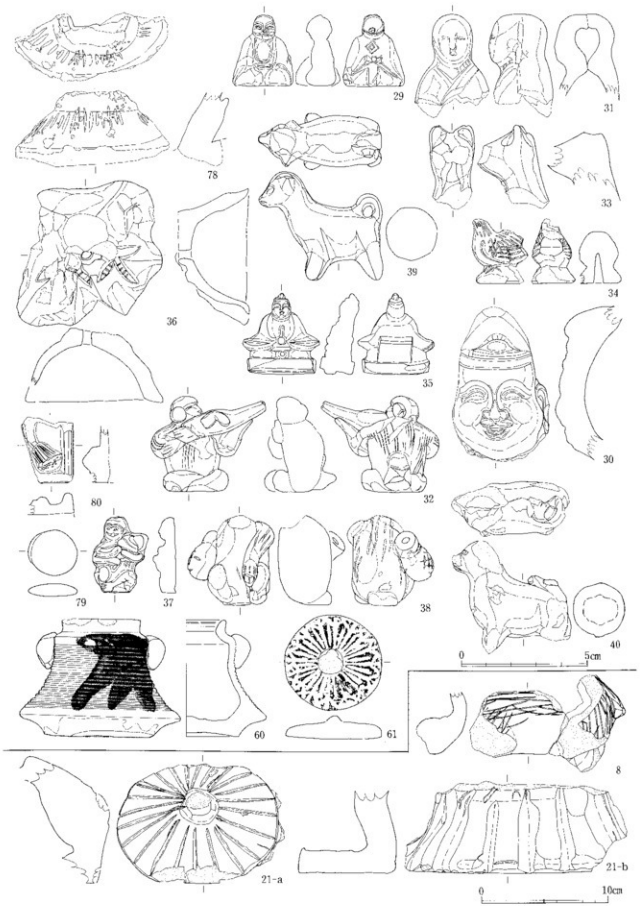


図90　武家屋敷跡第４地点出土土人形・玩具 (4)
Fig. 90　Clay figures and clay objects from BK4 (4)

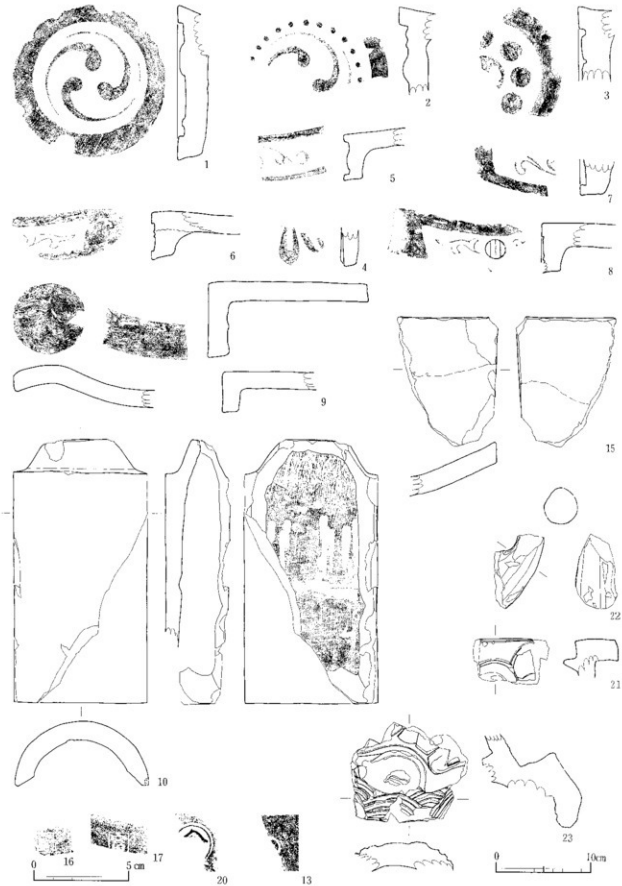


図91　武家屋敷跡第４地点出土瓦（1）
Fig. 91　Roof tiles from BK4 (1)

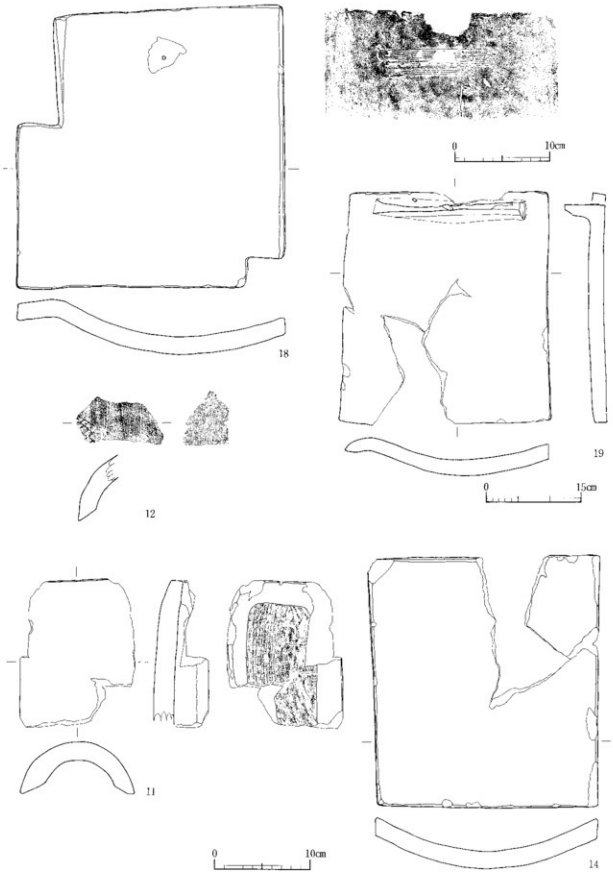


図92　武家屋敷跡第４地点出土瓦（2）
Fig. 92　Roof tiles from BK4 (2)

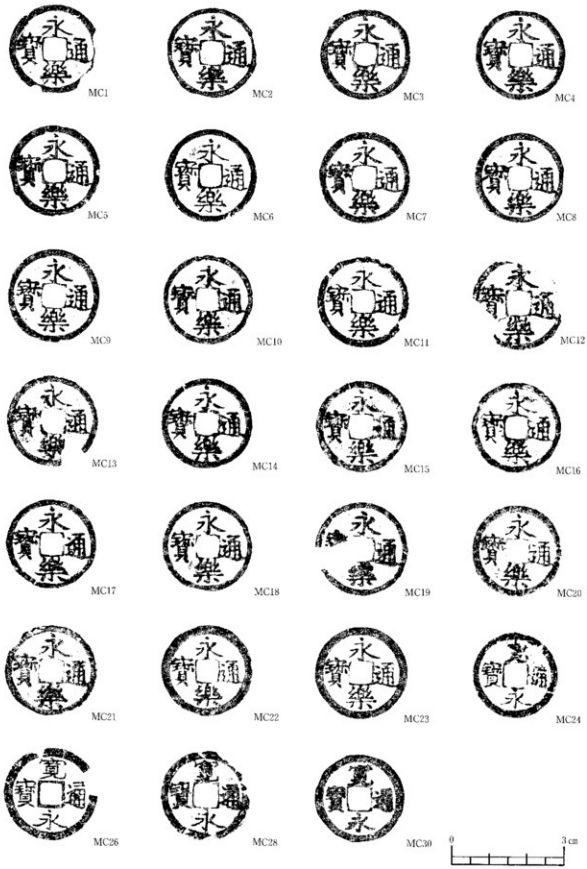


図93　武家屋敷跡第４地点出土古銭（1）
Fig. 93　Coins from BK4 (1)

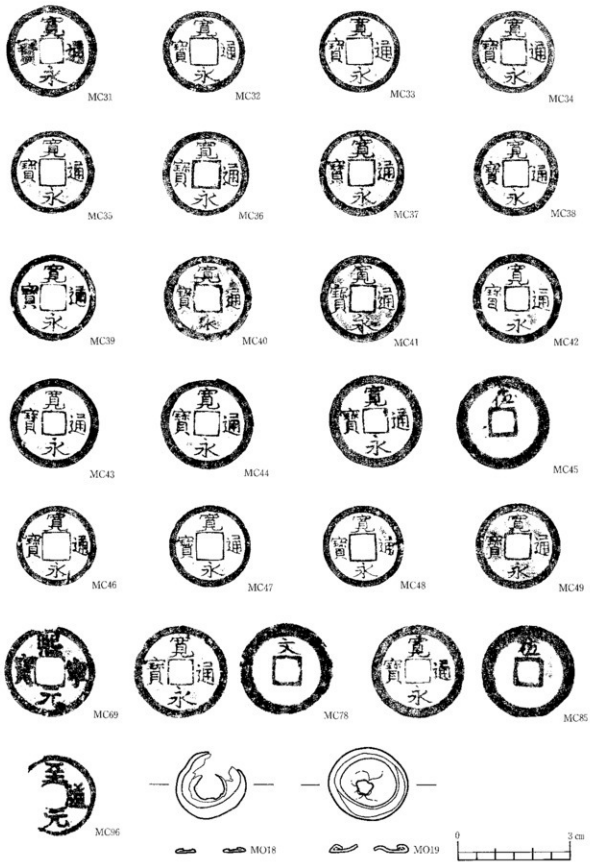


図94　武家屋敷跡第４地点出土古銭 (2)
Fig. 94　Coins from BK4 (2)

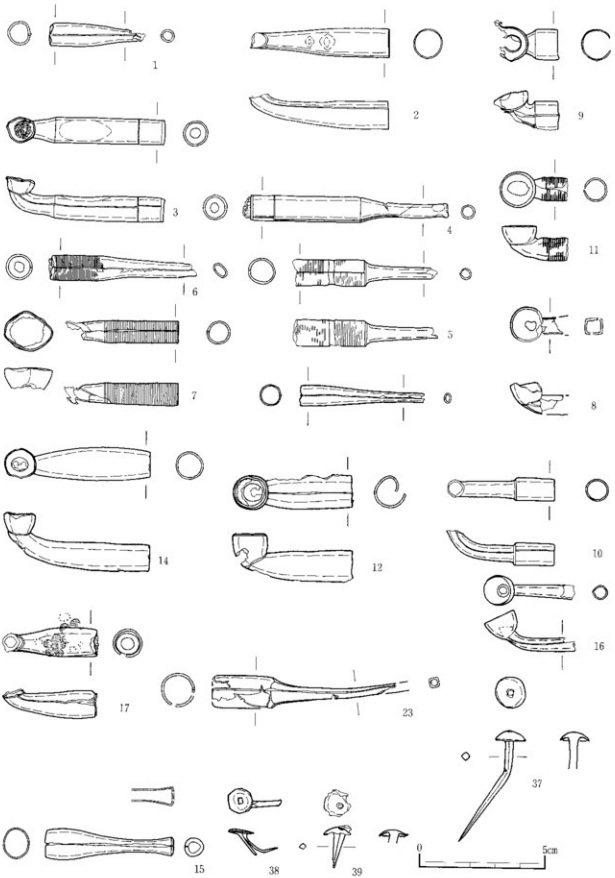


図95　武家屋敷跡第4地点出土金属製品 (1)
Fig. 95　Metal implements from BK4 (1)

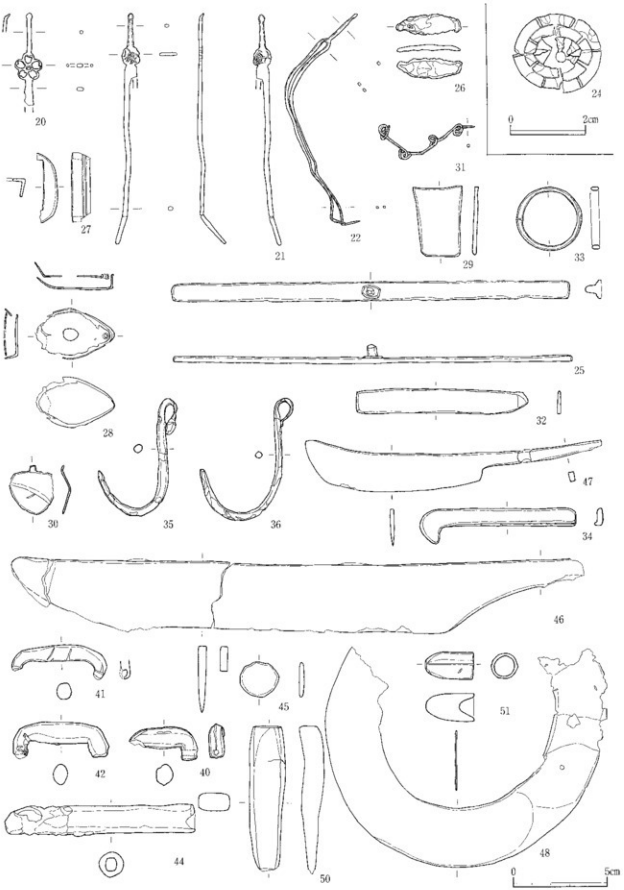


図96　武家屋敷跡第４地点出土金属製品（2）
Fig. 96　Metal implements from BK4 (2)

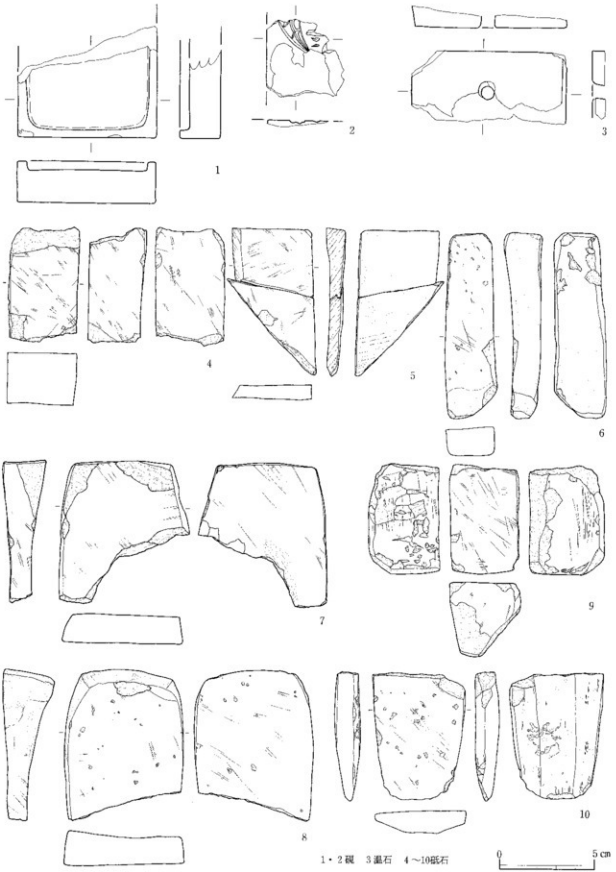


図97　武家屋敷跡第4地点出土石製品（1）
Fig. 97　Stone implements from BK4 (1)

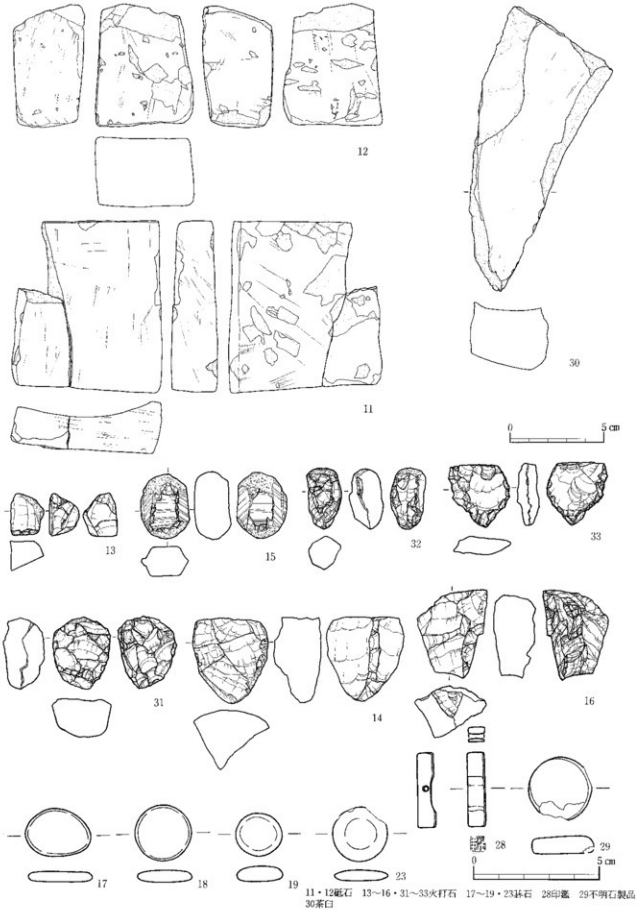


図98　武家屋敷跡第４地点出土石製品 (2)
Fig. 98　Stone implements from BK4 (2)

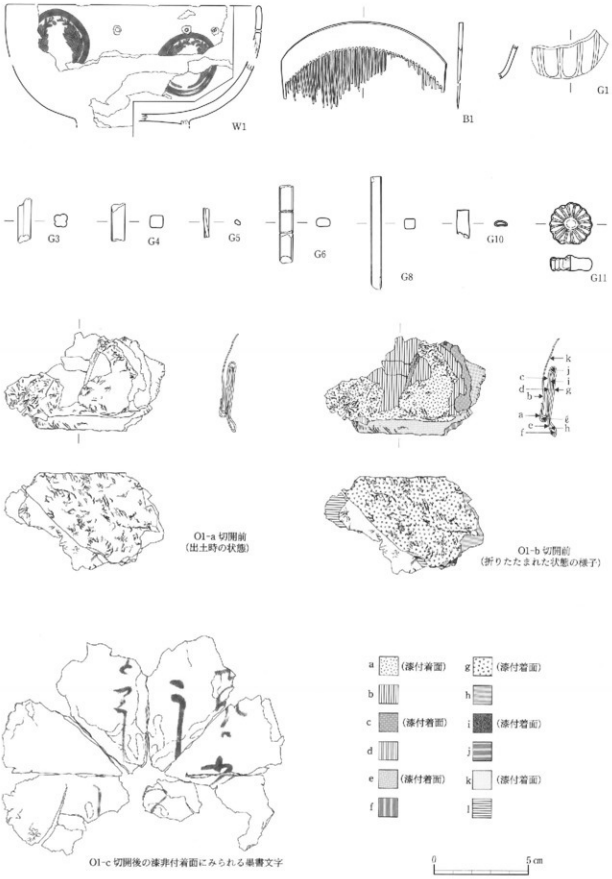


図99　武家屋敷跡第４地点出土その他の遺物
Fig. 99　Various implements from BK4

第4表　武家屋敷跡第4地点出土原始・古代の遺物集計表

Tab.4　Distribution of prehistric and ancient implements at BK4

	縄文土器 弥生土器	須恵器	古代の瓦 軒平瓦	平瓦	石器 トゥール	石核	剥片	チップ
85年試掘								
外灯電気立会い								
1層								
1層・2層上面								1
2層下面								
2層	4	1		1	スクレイパー1トゥール破損品1リタッチドフレーク3		13	4
3層	11			1	トゥール破損品1リタッチドフレーク1		14	10
4層上面								
4層	14				石錐2ポイント1リタッチドフレーク4磨製石斧1	5	46	46
5層上面	3							3
5層					リタッチドフレーク1		2	
5a層	5				リタッチドフレーク1		14	2
5b層	6				石錐1石鏃1スクレイパー1リタッチドフレ．ク1		31	5
5b'層						2	1	
6層上面	4							6
6a層	6				石錐1石鏃1リタッチドフレーク2	1	12	
6層	5				石錐1		12	5
攪乱								
不明	5							1
1号池	2						1	
2号池　埋土1層								
2号池　埋土2層								
2号池　埋土2a層	1							2
2号池　埋土2b層	2				リタッチドフレーク1		8	1
2号池　埋土2c層							1	
2号池　埋土3層								
2号池　埋土3a層	1				石錐1			
2号池　埋土3b層	1				リタッチドフレーク1		3	
2号池　埋土4層							1	
2号池　埋土5層							1	
2号池　埋土6層								
2号池　埋土不明								1
3号池D	1				スクレイパー1		2	
3号池G			1					
1号溝	1				リタッチドフレーク1		4	
3号溝	2						1	
5号溝	2						3	1
6号溝							1	
7号溝	3						1	
9号溝	1							
14号溝							1	
15号溝	1							
1号石敷溝							2	
1号建物跡					リタッチドフレーク2		1	
8号建物跡	2						2	
13号建物跡	4				石鏃1リタッチドフレーク1		2	
16号建物跡							1	
18号建物跡								1
19号建物跡							1	
22号建物跡							1	
23号建物跡	1							
24号建物跡						1		
7号柱列	1							
8号柱列	1							
14号柱列								1
18号柱列							1	
20号柱列							1	
9号土坑							1	
10号土坑	1						2	1
15号土坑							1	
16号土坑	1							
18号土坑							1	
19号土坑							1	
23号土坑					リタッチドフレーク1			
24号土坑					リタッチドフレーク1		1	
25号土坑							1	
26号土坑	1				石錐1		1	1
1号井戸								1
3号井戸					石錐1	1	7	
その他のピット	11				リタッチドフレーク3	1	24	4

表5　武家屋敷跡第4地点出土磁器集計表 (1)

Tab.5　Distribution of porcelains at BK-4 (1)

	大碗	中碗身	中碗蓋	小碗	碗不明	大皿	小中皿	極小皿	皿不明	鉢	水注類	瓶類	徳利不明	その他	銅板	擂鉢	不明
85年試掘		11	1	12	6		15					小瓶1中瓶1 瓶徳利1	2	猪口2小坏2紅猪口2壺蓋1 合子(蓋)1盃物(身)1		3	31
外灯電気立会い															1		
1層		15	3	8	10	4	13	2				中瓶1	1	紅猪口1猪口1盃物(身)1小坏2	2	4	39
1層・2層上面		31	2	35	16		30	3			土瓶・急須(身)1	小瓶1燈徳利6	6	木魚1紅猪口1尊子1猪口5 小坏2盃物(蓋)1合子(蓋)1 壺蓋1香炉1灰吹1盃物(身)2	1	3	142
2層上面		26	2	30	41	3	27	3			土瓶・急須(蓋)1	中瓶3仏花瓶1 小瓶2燈徳利3	5	木魚1紅猪口3猪子3猪口9 合子(蓋)1香炉1小坏4	4	10	101
2層		7	164	22	236	113	5	157	16	3	5	土瓶・急須(蓋)4 土瓶・急須(身)4	大瓶5中瓶11 小瓶8 燈徳利20 仏花瓶1	49	木魚1紅猪口17猪子1猪坏2 戸車1尊子1猪口10仏飯器6 盃物(蓋)4香炉2合子(蓋)6 合子(身)2盃物(身)15段重2灰吹3 小坏12火入1水魚or置物1		7	671
3層			115	10	109	112	13	133	18		3	水注(身)3 水注(蓋)2 土瓶・急須(蓋)2 土瓶・急須(身)1	大瓶3中瓶15 小瓶7 燈徳利13	21	木魚3紅猪口7火鉢2湯呑1 猪坏2猪子1猪口13仏飯器4 盃物(蓋)5合子(蓋)1合子(身)1 壺蓋2薬物(身)2香炉1段重1 灰吹3火入3人面転用品1 小坏23水魚or置物2中国小坏1		1	330
4層上面			1		3	2		2	1				小瓶1				8
4層		1	152	10	102	123	19	179	5	1	6		大瓶1中瓶8 小瓶6 燈徳利9 仏花瓶8	48	木魚9紅猪口28火鉢2湯呑1香炉6 猪口35仏飯器4盃物(蓋)2 合子(蓋)3合子(身)1薬物(身)9 灰吹5小坏4火入1水魚or置物5		568
5層上面			2		1	2		4							1	紅猪口1猪口2小坏1		9
5層																	
5a層			5		2	6	2	4	2		2				2	木魚1紅猪口1猪口2小坏1		17
5b層		1	7		2	1		3			1		大瓶1		2	木魚1猪口3小坏3		9
5b下層								1									
6層上面																	
6a層																	
6層																	2
撹乱		1	56	1	67	61	4	78	6		7	土瓶・急須(身)1	大瓶1中瓶3 小瓶9 燈徳利5	11	紅猪L16火鉢1湯呑2衝生陶器2 猪子2猪口8仏飯器1薬物(蓋)2 合子(蓋)1合子(身)1盃物(身)2 灰吹1小坏9	6	19	212
不明			21	1	13	23	2	17			2		小瓶1燈徳利2 仏花瓶1	6	木魚1紅猪口2湯呑1陶生陶器1 猪口2薬物(蓋)1合子(蓋)1小坏3		4	29
1号窯			10	1	2	12		11							3	猪口3香炉1小坏3水魚or置物1		21
2号窯　埋土1層			1			1			1								
2号窯　埋土2層			3					1							2	猪口1	
2号窯　埋土2a層			13			4	2	7					中瓶1小瓶1		3	紅猪口1小坏3水魚or置物1		11
2号窯　埋土2b層			21		2	8	6	11			1		中瓶2仏花瓶1		2	木魚1紅猪口1猪1香炉1小坏7		28
2号窯　埋土2c層																		1
2号窯　埋土3層			2													小坏1		1
2号窯　埋土3a層			2			2	2	3							1	木魚1木魚or置物1		4
2号窯　埋土3b層			7		2	2	2	10	1				小瓶1			木魚2紅猪口2猪口3盃物(蓋)1 合子(蓋)1薬物(身)1香炉1灰吹2 小坏6火入2水魚or置物1		24
2号窯　埋土4層			2			1		6					仏花瓶1					
2号窯　埋土5層			4				3											
2号窯　埋土6層			1															
2号窯　埋土不明			9			6	1	8	2							紅猪口1香呑1仏飯器1盃物(身)2		9
3号窯			1		2	3		1										1
3号窯A																		1
3号窯D			2			3		5								紅猪口2小坏2		5
3号窯E																盃物(身)1		
3号窯F																		1
1号調			3			3	1	10			1					猪L1香炉1小坏1中国小坏1		12
3号調			1			1		2								猪口1大皿転用品1		2
4号調						1	1	2								紅猪口1猪口1		
6号調			1													猪口1		1
7号調								1								猪口3		
9号調								1										
10号調			2		16	7	1	1										
14号調						1												
21号調						1		2										
廻反廻調								4										
1号石敷遺			4													紅猪L1盃物(蓋)1		
2号石敷遺			3			3		1										
1号建物跡			4		5	4		3					中瓶1			紅猪口1仏飯器1小坏1		4
2号建物跡			3		5	3			1						1	小坏1		10
3号建物跡			3		5	2		1					中瓶1燈徳利1				1	5
4号建物跡			6		8	3		7	2			土瓶・急須(蓋)1	燈徳利1		1	猪坏1盃物(蓋)1灰吹1小坏1		15
5号建物跡			41		7	13		28	2		1		中瓶2燈徳利2		4	紅猪口1小坏1	4	26
6号建物跡																		1

表6　武家屋敷跡第4地点出土磁器集計表 (2)

Tab.6　Distribution of porcelains at BK4 (2)

	碗類				皿類				鉢	水注類	瓶類	廃物不明	その他	硯	擂鉢	不明
	大碗	中碗 身	中碗 蓋	小碗	碗不明	大皿	小中皿	稜小皿	皿不明							
7号建物跡																1
12号建物跡	1	1														
13号建物跡	1															1
18号建物跡						1										
20号建物跡	2		1	2	1											
22号建物跡							1									
30号建物跡	1															
33号建物跡	1															
7号柱列	1								1				壺1 猪口1			2
1号土坑	5		2			3					小瓶1		猪口1 蓋物(身)1			4
2号土坑	3					2									1	
3号土坑	1		2			1						1	水注1			
4号土坑				2		1										
8号土坑	1					1										
9号土坑						3										
10号土坑	2	3	1		2	10	1						紅茶碗1 瓶水注1 猪口2 香炉1 小坏1			16
13号土坑	2		1	2		2			1			1				1
14号土坑										蝋燭立1						
15号土坑				1		1										1
18号土坑	3		2		1	3						2	猪口1			3
19号土坑	1															
20号土坑						1										
21号土坑	1															
23号土坑	1					1										1
25号土坑	1		2			1					仏花瓶1		猪口1 合子(蓋)1 小坏1 水注1			2
26号土坑	1					1										2
1号井戸	10		7	9		15			1		中瓶1		紅茶碗1 小坏2 猪口3			8
3号井戸	11		4	2	3	9						2	紅茶碗2 猪口3 瓜版器2 香炉1 灰吹1 小坏2			10
その他のピット	11		1	2	2	11					中瓶1		小坏3 猪口2 瓜版器1 水注1 蓋物1			17
集石遺構	1	1	4			1				土瓶・急須(身)1						
1号木組埋設遺構	1		1													4
1～9号埋墓	1		1	1		2							猪口1 蒔子1 蓋物(身)1	1	1	4
10号埋墓			1													1

表7　武家屋敷跡第4地点出土陶器集計表 (1)

Tab.7　Distribution of glazed ceramics at BK4 (1)

	碗類				鉢類				皿類					小坏	土瓶	急須		水注	壺類		
	大碗	中碗 身	中碗 蓋	小碗	碗不明	大鉢	小中鉢	口鉢	擂鉢	大皿	中皿	小皿	稜小皿	向付	皿不明		身	蓋		大壺	中壺	小壺
83年試掘		25		2	24	2			6		1	11			1	6	11			1		2	
外耳地気立会い																							
1層		32		5	36	1		1	4	1		1				6	13	1			2		
1石・2層上面	1	44		1	25			1	4	1		4			1	10	24	2					
2層上面		67		6	41	1		1	11	1	1	12		1	2	12	32	5			1		
2層	3	292		92	513	9	4	10	121	3	5	77		4	5	101	353	45	3	1	7	8	9
3層	2	290		35	196	7	4	5	82	1	6	57		6	1	37	121	25		1	4	5	4
4層上面		5		1	9				1			1				4	4	1					
4層	4	490	1	35	392	12	9	6	67	4	5	85		6	1	101	109	15		5		7	
5層上面		17			11							4					5						
5層																							
5a層		15			4	1		1	11		1	7		2			2	2	1		1		2
5b層		15				2	1		1			3		2				1	1				1
5b層																							
6層上面																	1						
6a層																							
6層																							
攪乱	3	129		5	104			1	17		2	19		3	1	23	53	6	1		2	4	
不明		41		3	40				2		1	5			1	11	13	2					
1号池		9		2	7	1			8	2		3		1	1	1	3						
2号池　埋土1層		1										1											
2号池　埋土2層											1												
2号池　埋土2a層		23			4		1		9			5											
2号池　埋土2b層	1	34			9	2		2	9	1	2	3		1		1	1						
2号池　埋土2c層		1				1										1							
2号池　埋土3層		1										3											
2号池　埋土3a層		5			1				4		1	3				1							
2号池　埋土3b層		34		1	7	2	1		11			7								1		1	
2号池　埋土4層		8			1							2	1									1	
2号池　埋土5層		8			1							1					1						
2号池　埋土6層																							
2号池　埋土不明		20			15			2	4		1	2			1	1	1				1		
3号池		3			1				1			5				1							
3号池A						1			2														
3号池D		1							2			2									1		
3号池E		1					1																
3号池F		2							1														

表 8　武家屋敷跡第 4 地点出土陶器集計表 (2)
Tab. 8　Distribution of glazed ceramics at BK1 (2)

	碗類							鉢類							皿類							小坏	L瓶		急須		水注	壺類		
	大碗	中碗身	中碗蓋	小碗	碗不明	大鉢	小鉢	中鉢	小鉢	鉢鉢	大皿	中皿	小皿	縁小皿	向付	皿不明	坏	瓶身	瓶蓋	急須身	急須蓋		大壺	中壺	小壺
1 号溝	1	1		1		1				3	1	1	11			3		1							
3 号溝		13			7					3			1				2								
4 号溝										2			1		1	1									
6 号溝															2										
9 号溝										1															
10 号溝						4				1					1		1								
14 号溝													14					1							
18 号溝						1																			
1 号石敷溝		2			1																				
2 号石敷溝		2											1												
1 号建物跡		3		2	4					1			1												
2 号建物跡		9		1	6	1				2							2	4	1						
3 号建物跡		1			2					1			1	1			1	5							
4 号建物跡		13			10	1				2			2				2	12							
5 号建物跡		3		3	8	1			1	1			2					13	2						
7 号建物跡													1												
8 号建物跡		1																							
10 号建物跡		1																							
13 号建物跡		1			1					1															
16 号建物跡																1									
20 号建物跡		2																							
21 号建物跡			1	1																					
23 号建物跡															1										
28 号建物跡													1												
29 号建物跡						1				1															
30 号建物跡																		1							
7 号柱列		2								1			1												
8 号柱列													1												
26 号柱列					1																				
1 号土坑		1																5							
2 号土坑		1															1	2							
3 号土坑		1											1												
4 号土坑		1																							
5 号土坑																1			1						
8 号土坑		1			2																				
9 号土坑		3				1																			
10 号土坑		18		6	14					4	1		4		1		2	16	1						
13 号土坑		3								1															
14 号土坑		1																							
15 号土坑		2		1	1					1		1													
16 号土坑											1														
18 号土坑		2											2			1								1	
23 号土坑		2								1															
25 号土坑		13			5					1	1		1												
26 号土坑						1						1	1												
1 号井戸		44			23				2	3		1	5			1	2	3							
3 号井戸	17				4					4		1	9					1						1	
その他のピット	1	22		1	14					8			5			2		3	10						
1 号木棺埋設遺構		3			3													1	1						
10 号埋甕		9			1								1					2					10		

表 9　武家屋敷跡第 4 地点出土陶器集計表 (3)
Tab. 9　Distribution of glazed ceramics at BK1 (3)

	壺	壺蓋不明	瓶類中瓶	瓶類小瓶	燈明皿	灯火具	仏具仏花瓶	仏具仏飯器	香炉	線香立て	土鍋身	土鍋蓋	行平鍋身	その他	不明
85年試掘	2	1	2	1	1	灯明皿1				2		1		茶入1植木鉢1	31
外灯建気立会い															
1 層		1		1		灯明皿1		1		1				本瓶1火鉢1瓶口1不明盆1	31
														弁子(身)1灰吹1	
1 層・2 層上面		4	1	2	1									硝酸瓶1花生1	45
2 層上面			2		1	灯明皿1		2		2		1		植木鉢1鳥餌1火鉢1猫1 12	81
														人形or水滴1筆洗1	
2 層	1	49	19	10	5	灯明皿15	1	15		20		20	2	以建1植木第5鳥餌3猫香1煙硝瓶1	1152
						灯明受皿3								鳥餌3果備4豆鹿3碍碁口3碁口37	
						油徳利4								不明盃3銚子2合子(身)2	
														合子(蓋)1灰吹1人形or水滴2	
														水滴4(ガモ)	
3 層	2	27	12	3		灯明皿4	1	5		10		14	1	1 植木鉢23瓢水入れ1火消壺1	356
						灯明受皿3								鳥餌1鳥猫1口猫1口豆鹿5	
						油徳利2								不明盃2段重1合子(身)1灰吹1	
														人形or水滴1水滴3筆洗1	
4 層上面						灯明皿1						1			13

表10　武家屋敷跡第４地点出土陶器集計表（4）

Tab.10　Distribution of glazed ceramics at HK4 (4)

	壺	甕類不明	瓶類中瓶	瓶類小瓶	瓶類徳利	灯火具	仏具 仏花瓶	仏具 仏飯器	仏具 香炉火入	仏具 線香立て	土鍋	土鍋 蓋	行平鍋 身	その他	不明
4層	2	26	10	4		灯明皿10 油受け皿1 灯明受皿6 油徳利2	2	6	20		7	3	1	植木鉢8鳥鉢1切立1水盤1 製水入1陶硯1墨壺1鉢1口2 火鉢1小明盛4土製3合子(身)7 合子(蓋)3不明3人形or水滴3 水滴5花生2筆筒4手水鉢1	573
5層上面		1							2						9
5層															3
5a層		1									1				14
5b層										1		1		水滴1	3
5b'層															
6層上面															
6a層															
6層															
撹乱		3	6			灯明皿2		4	5		3			植木鉢1鳥鉢1火鉢4壺11不明盛1 合子(蓋)1人形or水滴1水滴1	117
小明		1				油徳利1		1	1		1			茶碗1茶筒1	67
1号池														猪口1不明盛1	17
2号池　埋土1層															2
2号池　埋土2層															
2号池　埋土2a層							1		1					不明蓋1	7
2号池　埋土2b層		1					1		3		1			植木鉢2不明蓋1水滴1	16
2号池　埋土2c層															
2号池　埋土3層															
2号池　埋土3a層															4
2号池　埋土3b層		2				灯明皿1			2					灯明3	12
2号池　埋土4層		1					1	1	2						6
2号池　埋土5層															2
2号池　埋土6層															1
2号池　埋土不明									2			1		合子(蓋)1	9
3号池															3
3号池D			1						1					水滴1	1
3号池E									1						
3号池F															1
1号溝	3	1	1												3
3号溝				1											3
4号溝			1						1		1				1
1号石敷溝									1						3
2号石敷溝														水指1	
1号建物跡		1													4
2号建物跡		2	1				1		1						10
3号建物跡		2													2
4号建物跡		1	1								1				22
5号建物跡			2			油徳利1					1			猪口2	16
13号建物跡															1
20号建物跡		1													1
21号建物跡			1												2
7号土坑		1	1												1
1号土坑															3
3号土坑				1											
4号土坑		1						1							
5号土坑															1
8号土坑											1				1
9号土坑				1											
10号土坑	1	2				灯明皿1			香炉(蓋)1					水滴1花生1器物(身)1浸瓶1 人形1	24
13号土坑															
14号土坑		1													
15号土坑															1
18号土坑									1	2	1				5
19号土坑															1
20号土坑														陶硯皿1	
24号土坑															1
25号土坑									1						6
26号土坑														筆筒1円盤状加工品1	
1号井戸	1		2			灯明皿1		1	2					灰吹1	14
3号井戸									1					陶硯皿1豆板3灰吹1人形1	3
その他のピット		2				灯明皿1			2		2			合子(蓋)2水盤1灰吹1	16
集石遺構														植木鉢1	
1号木箱埋設遺構															1
10号埋甕															2

表11　武家屋敷跡第４出土土人形・玩具集計表 (1)

Tab.11　Distribution of clay figures and clay objects at BK4 (1)

器種	鍋			皿			鉢	器台A		器台B			瓶	壺		甕			合子蓋		合子身			急須	茶筒	おとし皿			碗鉢		鍋(身)			陶錘			的不明	その他の土製品
旅籠の有無	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	施釉	土師質	○印みは施釉のもの
85年試掘					1																															2		
外灯電気工会い																																						
1層																												1									1	
1層・2層上面																																					1	
2層上面					1																					1												
2層			1	1	6		3				1	1	2				1		1							2		2	1			6	3	21	碁石1鞍縁？1 いちょう形板(状製品)1
3層				1	5			1																					2		1	5	3	2	土A(鈴用？)1民家(1)
4層上面																																						
4層	2			2	7		1		1			1	1						2						4	4	2			1		11	5	28	土A(鈴用？)2碁石2 面子(無文円板)1 菊花状円板2板文円板1 方形囲いC2多層塔の壁？1
5層上面																											1											有文円板1
5層																																						
5a層				1								1															1			1			3	3	土珠？1
5b層														1																1	1	1	1	1		
5b'層																																						
6層上面																																						
6a層																																						
5層																																						
瓦礫					1								1												3	1	1					1					碁石1
不明					2													1																				
1号池								1																						1					1	1		
2号池　埋土1層																																						
2号池　埋土2層				1																									1								1	
2号池　埋土2a層				1																																		
2号池　埋土2b層				1									1													1							2	2	多層塔A1方形囲いC1
2号池　埋土2c層																																						
2号池　埋土3層																																						
2号池　埋土3a層																																						
2号池　埋土3b層		1		1								1																							1	1	方形囲いA1
2号池　埋土4層																																						
2号池　埋土5層																																						
2号池　埋土6層																																						
2号池　埋土不明				1									1																								屋根？1方形囲いB1
3号池				1																		1							1								
3号池D																																	1					
3号池E																																	1					
1号溝																																						面子(無文円板)1
3号溝													1																									
4号溝																																	1					
1号石敷溝				1																													1	2	1			
1号建物跡																																	1	1				
2号建物跡							1																										1					
4号建物跡																																		1				
20号建物跡																																		1				
8号土坑					1																																	
10号土坑													1																								3	多層塔B1
15号土坑	1				2																												1		1			
18号土坑												1														2												
21号土坑																										1												
24号土坑				1																							1											方形囲いB1
1号井戸																																		1	1			
3号井戸								1	1					1					1										1		1		1				
その他のピット											1	1			1				1																1			多層塔の壁？1
集石遺構	1																																					

表12　武家屋敷跡第４山土土人形・玩具集計表 (2)

Tab.12　Distribution of clay figures and clay objects at BK4 (2)

	七福神			大御			法螺	人別		犬			猿			猫			その他の人形	鹿	不明人形		不明土製品		
	A	B	C 上師質	D 無釉	A 無釉	B	C 内行法師	A	B 亀	A	B	C	A B不明	A 付属品	B	その他	A	B	C	○印のみは施釉のもの	物不明	上師質	無釉	土師質	瓦	彩色
85号試掘												1				1					1					
外灯電気ひ合い																										
1層															1	1						1				
1層・2層上面														1								1				
2層上面																										
2層	2	2		1	1	1	1		1			5	1		4					山伏？B①馬A1	9	46		54		
																				鉄(相撲)1						
3層	1	1				1		B1		3		1	3			2	1		3	鉄犬1鎖つかみ1	9	33		29		
4層上面													2				1					2		2		
4層	1	3	1	1		1		A3	3	1		1	2	6	6	1	1	5	1	1	3	1	2	山伏？A1馬1	37	133	2	264	1	1
5層上面																										2				
5層															1															
5a層								A1				1				4					4	6		67		
5b層									1						1	1			1		1	3		20		
5b層																										
6層上面																										
6a層																										
6層																										
攪乱															1	1					1	2		6		
不明													1								3	3		35		
1号池								D1														2		2		
2号池　埋土1層																										
2号池　埋土2層															1									1		
2号池　埋土2a層	1												1		1							2		77		
2号池　埋土2b層																						7		35		
2号池　埋土2c層																										
2号池　埋土3層																								5		
2号池　埋土3a層																					2			3		
2号池　埋土3b層										2						1								35		
2号池　埋土4層																								2		
2号池　埋土5層																						1		1		
2号池　埋土6層																										
2号池　埋土不明					1			C1										1			1	5		8		
3号池D																								3		
1号溝																					1			14		
3号溝														1							1			1		
4号溝																								13		
5号溝																					1					
9号溝																								1		
10号溝																								7		
1号石敷溝														1	1						1			29		
2号石敷溝						1										1					3			3		
1号建物跡																						1				
2号建物跡																						3				
3号建物跡																						1		1		
4号建物跡																						1		1		
5号建物跡													1													
6号建物跡																								1		
29号建物跡																								2		
7号柱列																						1		2		
8号柱列																								1		
1号土坑																						1		1		
3号土坑										1																
10号土坑										1						1					1	13		19		
15号土坑														1							1					
18号土坑														2			1				2					
23号土坑																								2		
24号土坑																								2		
25号土坑														1												
26号土坑																								15		
3号井戸								B1						2							1	1		1		
その他のピット													1								3	2		4		
柴石遺構																				犬イ？1						
転上出床遺構																			1							
1号本瓶埋設遺構						1																				
10号埋甕					1																					

表13　武家屋敷跡第４地点出土近世・近代瓦集計表 (1)

Tab.13　Distribution of roof tiles belonging to Edo and modern period at BK4 (1)　　(　)内は重量g

	平瓦１類	平瓦２類	丸瓦類	桟瓦類	板葺瓦	割平瓦	軒丸瓦類	道戸瓦	輪違い	その他の瓦	不明
85年試掘	36(859)		11(2132)	6(947)	6(2341)		1(420)				7(271)
外灯電気工会い	2(55)			2(281)							
1層											
1層・２層上西	55(3432)	1(422)	4(250)	16(1010)						桟瓦1(215)	4(9)
2層上南	112(12123)	1(270)		9(1014)						熨斗瓦1(350)	49(532)
2層	183(16795)	11(1499)	129(11845)	21(1718)	20(4480)	1(60)	4(589)			熨斗瓦2(150) 熨斗瓦4(2533) 桟瓦3(867)	99(1030)
3層	268(25071)	19(1850)	152(18985)	26(8542)	22(5711)	4(285)	4(685)		1(62)	桟瓦1(405) 熨斗瓦1(401)	191(2233)
4層上面		1(38)									1(12)
4層	82(7902)	24(1685)	138(14545)	5(944)	10(1554)	2(481)	1(10)		1(255)		109(868)
5層上面	6(663)										1(38)
5層											
5a層	8(874)		9(713)		1(188)		1(57)				6(178)
5b層	4(563)		8(1142)								
5b'層											
6層上面											
6a層											
6層											
瓦礫	348(29684)		11(2427)	101(15627)	3(246)		1(110)			桟瓦1(64) 袖瓦1(53)	69(631)
不明	33(3283)		6(430)	6(786)						熨斗瓦1(137) 桟瓦2(58)	3(21)
1号池	14(2415)	1(181)		25(2624)	2(258)	1(172)					9(882)
2号池　埋土１層	1(57)		1(318)								2(3)
2号池　埋土２層	1(370)										
2号池　埋土２a層	2(313)		13(2735)								10(38)
2号池　埋土２b層	13(979)		28(4618)								5(13)
2号池　埋土２c層			1(107)								
2号池　埋土３層											
2号池　埋土３a層	1(180)		9(1662)								1(2)
2号池　埋土３b層	8(1169)		24(3433)				4(272)				2(3)
2号池　埋土４層	2(206)		4(454)								
2号池　埋土５層	2(92)	1(203)	2(301)								2(137)
2号池　埋土６層											
2号池　埋土不明	1(28)		3(513)								
3号溝A			1(57)								
3号溝D	1(108)		2(123)				1(182)				5(46)
3号溝E			4(456)								
1号溝	144(19538)	1(54)	27(3532)	1(2306)	1(206)	2(336)	4(1502)				74(757)
3号溝	1(150)		3(179)								3(17)
4号溝	3(298)		5(636)								5(13)
5号溝			1(90)								
8号溝			1(308)								
9号溝											2(31)
10号溝			1(17)								
14号溝			1(114)								
1号石敷溝	5(1640)						1(87)				3(201)
2号石敷溝			2(913)								
3号石敷溝	1(60)	1(91)	1(39)								
1号建物跡	4(250)		1(288)	1(84)		1(140)					
2号建物跡	19(2002)		2(241)	3(194)							5(38)
3号建物跡	8(890)		2(483)								3(16)
4号建物跡	12(675)		3(565)	1(42)							3(30)
5号建物跡				1(114)							3(166)
6号建物跡			2(376)								
7号建物跡			3(346)								
13号建物跡	3(787)		1(99)								
20号建物跡	9(1298)		4(263)								3(16)
25号建物跡	1(44)										
33号建物跡			1(106)								
7号柱列	61(5117)		14(1769)			1(216)					15(137)
17号柱列			2(355)								
22号柱列				1(721)							
1号土坑											1(6)
2号土坑				1(107)							
3号土坑	334(24131)			115(32429)							127(5517)
4号土坑	2(342)			1(198)							1(1)
8号土坑	1(87)										
9号土坑			1(369)								
10号土坑	4(259)		6(815)		2(255)						5(76)
13号土坑	1(68)										2(59)
14号土坑	3(60)										
16号土坑			1(183)								
18号土坑	2(125)		9(2258)				1(227)				
19号土坑											1(13)

表14　武家屋敷跡第４地点出土近世・近代瓦集計表 (2)

Tab.14　Distribution of roof tiles belonging to Edo and modern period at BK4 (　)内は重量g

	平瓦１類	平瓦２類	丸瓦型	桟瓦類	板棧瓦	軒平瓦	軒丸瓦類	面戸瓦	鳥違い	その他の瓦	不明
22号土坑			1(34)								
23号土坑	2(450)										1(23)
24号土坑	1(109)		2(160)								
25号土坑			1(372)								
26号土坑											1(33)
1号井戸			1(90)								
2号井戸			1(379)								
3号井戸	22(8762)	2(179)	19(2789)				1(50)				4(15)
その他のピット	19(1569)		15(1312)						1(48)		7(41)
焼土遺構			1(64)								
粘土貼床遺構	5(879)										
1号水路埋設遺構		1(118)									
1～9号埋甕	10(470)		1(112)	4(143)							4(80)
10号埋甕	172(8634)			57(3291)						鼎型斗瓦1(60)	11(57)

表15　武家屋敷跡第４地点出土硬質陶器・軟質施釉土器集計表

Tab.15　Distribution of "Iron stone china" and lead glazed soft cermics at BK4

	硬質陶器			軟質施釉土器		
	碗	皿	不明	燈明具(灯)		その他
85年試掘				2		
外灯電気立会い		1	1			
1層			1	6		
1層・2層上面				13		不明2
2層上面			1	1		
2層		1		199	2	鉄1片口鉢1 不明149
3層			1	28		瓶1不明31
4層下面				4		不明2
4層				96	2	鉄瓶り1片口鉢1 不明89
5層上面					1	水瓶1不明1
5層						
5a層					1	不明5
5b層					2	不明2
5b層						
6層上面						
6a層						
6層						
撹乱	1	1	3	16	1	不明6
不明						不明15
1号池　埋土1層				1		不明3
2号池　埋土2層						不明1
2号池　埋土2a層						不明2
2号池　埋土2b層						広口鉢1
2号池　埋土2c層						
2号池　埋土3層						
2号池　埋土3a層						
2号池　埋土3b層						不明10
2号池　埋土4層						
2号池　埋土5層						
2号池　埋土6層						
2号池　埋土不明				1	1	不明2
3号池				1		
3号池D						不明1
3号溝						不明1
1号円敷跡					1	
1号建物跡				2		不明1
2号建物跡				2		不明1
4号建物跡			1	7		不明1
5号建物跡				7		不明1
20号建物跡						鉢型り1
35号建物跡						不明1
7号柱列						不明6
14号柱列						不明1
10号土坑				7		不明4
15号土坑				1		
18号土坑				1	1	
19号土坑				1		
1号井戸						不明1
3号井戸					1	不明4
その他のピット				2		不明2
1～9号埋甕						不明1

表16　武家屋敷跡第４地点出土木・竹・漆塗製品集計表

Tab.16　Distribution of wooden implements at BK4

	漆器		柱	加工木			木製品	竹製品
	椀	不明		板材	角材	丸材	小材	
85年試掘								編字1
外灯電気立会い								
1層								
1層・2層下面								
2層上面								
2層					1		5	
3層			1		1		4	編字4
4層上面								
4層			8					
5層上面								
5層								
5a層			1					
5b層			2					
5b層								
6層上面								
6a層								
6層								
撹乱				3		1		編字1
不明								
1号池			2		1			
2号池　埋土1層			1					
2号池　埋土2層			1					
2号池　埋土2a層			1					
2号池　埋土2b層			2		1			
2号池　埋土2c層								
2号池　埋土3層								
2号池　埋土3a層								
2号池　埋土3b層			5				1	
2号池　埋土4層			2					
2号池　埋土5層			1					
2号池　埋土6層								
2号池　埋土不明			1					
3号池D			1					
1号溝			3					不明1
3号溝			2					編字1
5号溝			1	1				
19号溝			1					
2号建物跡				1				
6号建物跡				1				
14号柱列								編字1
8号土坑			1					
10号土坑				1				
15号土坑			3					
25号土坑			1		1			
1号井戸			1		1			
3号井戸	2	5	10	4	1	38	木刀8	鼎ヶ1
その他のピット			4	1				
粘土貼床遺構			1					
1号水路埋設遺構				1				
1～9号埋甕				1				
10号埋甕				1				

表17　武家屋敷跡第4地点出土金属製品集計表 (1)
Tab.17　Distribution of metal implements at BK4 (1)

	古銭										その他の銅系製品										鉄製品								鉛製品	その他
	渡来銭	寛永通宝				開元通宝	開元通宝	開元通宝	開元通宝	不明	鐸									不明	釘			鋲				不明		
		古	文	銭	詳	不	料	口	明		鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	その他	不明	和	洋	不明	その他									
85年試掘																	1	2											弾丸1	
外打出気立会い															1															
1層														1			1	1											1	
1層・2層上面								1				1					1	2	7	2	ボルト1 ねじ1								6	
2層上面		1						1				1					3	1	18	10									3	
2層		3		4	1	5	3	2	3	1	2	刻状1切刃1					29	40	17	14	かなのこ1 統の金具1 火箸1								18	鏃1
3層		3	2	2		7	3	1	2			切刃2鞭1					13	13	11	28	鎹?1								22	塊2
4層上面				5																									2	
4層	1	3		14		18	16	2	3			鎹9鎹3釘1目貫1 環1U環1鋲1 飾金具1					27	118	4	20	楔2火打金1 鎹?2鏃1								41	弾丸11鏃1 ミニエ弾2 円板1塊2
5層上面												鎹1						3	1	10									1	
5層																														
5a層				2	1							釘1鋲2					2	9	2	6									13	弾丸1	輸送?1
5b層												鋲頭鏃1					1			3									3		
5b'層																	1													
6層上面																														
6a層																														
6層																														
掘丸	1		1	1		1	3			3	3	鞍乗1鞍頭鏃1 鏃1バックル1					2	2	29	1	金槌1ばね1 ねじ2 はりがね6								14	弾丸1	
不明	1	1		2		1	2					1					2	3	2	4									2		
1号池		2		18													1			2									3	円板1	
2号池　堀土1層																		7											1		
2号池　堀土2a層																															
2号池　堀土2b層		1				1											2	5	1	1									2	弾丸1	
2号池　堀土2c層		1								1		刻状1					1	20	1	2									5	弾丸1	
2号池　堀土3層												文鎮1					1			1											
2号池　堀土3a層																	1														
2号池　堀土3b層	1																6												1		
2号池　堀土4層												ヘラ状1					2	26		6	小刀1							7	塊3	
2号池　堀土5層																		2		1									1	弾丸1鏃1	
2号池　堀土6層											1									1									2		
2号池　堀土不明												門貫1					1	4		1										塊1	
3号池D												切刃1								1									2	弾丸1	
1号溝																		3		5									2		
3号溝				1				1																							
4号溝		1																1											2		
10号溝																		1													
1号石敷遺																	1	2		1									5	弾丸1	
1号建物跡				1			2											1													
2号建物跡																			3										1		
3号建物跡																			6											塊1	
4号建物跡																	1	1	3												
5号建物跡											1								1	2											
10号建物跡																	1														
8号林例																				1											
14号柱列							1																								
1号土坑				1																											
2号土坑																			1												
3号土坑																				2											
4号土坑																		4	10	1											
8号土坑																		1		4	鎹1								2	塊1	
10号土坑																		41		19									13	管1	
13号土坑																														弾丸1	
15号土坑																		2		2											
18号土坑																		6	2	3											
20号土坑																			2												
22号土坑																		1											2		
23号土坑																		1													
24号土坑																		5													
25号土坑												鋲頭鏃1																			
26号土坑		1															1	1													
1号井戸												釘1																			
2号井戸																	1														
3号井戸						1											2	5	2	10	小刀1									弾丸1	
ピット887(地鎮1)	12																														
ピット799(地鎮3)	11																														
その他のピット												切刃1					1	26	1	11	包丁1							26		
焦石遺構																				1											

表18　武家屋敷跡第４地点出土金属製品集計表（2）

Tab.18　Distribution of metal implements at BK4 (2)

	古銭				煙管			その他の銅系製品					鉄製品						鉛製品	その他
	渡来銭	寛永通宝			雁首	吸口	不明	鐸	銃弾	薬莢	その他		不明	釘			その他	不明		
		古	文	新	不明									和	洋	不明				
鉛土貼床遺構																2				
1～9号埋甕									1	1			1	2	6	12		3		
10号埋甕													1	11	20					

表19　武家屋敷跡第４地点出土その他の遺物集計表

Tab.19　Distribution of various implements at BK4

	石製品					ガラス（ ）内は溶融(小数)			骨角製品	その他					
	硯	砥石	火打石	碁石	その他	板	容器	その他		皮革	スラグ	炉壁	羽口	磁紙	不明
85年試掘	2	1				1(0)	1(0)	不明1							
外灯電気立会い															
1層	1							不明2							
1層・2層上面						10(2)	5(0)	不明1							
2層上面	1	2				17(2)	6(2)								
2層	28	15	4	3	温石2	7(0)	11(3)	鐸2不明2	櫛1	1			1		
3層	23	10	3	6	温石1	9(1)	10(1)	ボタン不明1	笄1			1			
4層上面									骨ヘラ?1						
4層	48	11	10	6	温石2印鑑1 不明2	3(0)	2(0)	鐸5不明2			2				1
5層上面	1	1				2(0)									
5層															
5a層				3	不明1									1	
5b層	1	1		1											
5b'層															
6層上面															
6a層															
6b層															
攪乱	2	1		1	温石1	16(2)	11(0)	ボタン不明1							
不明		2				1(1)	1(0)								
1号池	2														
2号池　埋土1層															
2号池　埋土2層															
2号池　埋土2a層	3	2	1		温石1										
2号池　埋土2b層	3		2	1	石板1	1(0)									
2号池　埋土2c層		1													
2号池　埋土3層															
2号池　埋土3a層				1											
2号池　埋土3b層				2											
2号池　埋土4層		1			コハク1										
2号池　埋土5層															
2号池　埋土6層															
2号池　埋土不明	1														
1号溝	1			2	茶臼1不明1										
3号溝	1											1			
5号溝		2	1												
19号溝	1														
1号石敷溝				1											
1号建物跡		1											1		
2号建物跡		1			温石2不明1		3(3)								
3号建物跡	1		1	1		1(0)									
4号建物跡						3(0)	3(0)								
5号建物跡	1					1(0)	3(0)		骨製ボタン1						
6号建物跡						1(0)	1(0)								
20号建物跡					温石1										
7号柱列					不明1										
1号土坑	1						1(0)								
3号土坑	1					2(0)									
4号土坑						1(0)									
5号土坑						1(0)									
9号土坑							骨笄1								
10号土坑	3	1	1				1(0)	不明1							
18号土坑		1													
26号土坑															1
3号井戸				1	不明2										
その他のピット	1	1		2	銅製1不明1							1		1	
墓石遺構					不明1										
鉛土貼床遺構					玉石118										
1号人間埋設遺構				1											
1～9号埋甕							3(0)	キャップ?2							
10号埋甕						48(22)	5(5)	不明1							

表20　武家屋敷跡第4地点出土土師質土器・瓦質土器集計表 (1)
Tab.20　Distribution of unglazed ceramics and fumed ceramics at BK4 (1)

	土師質土器										瓦質土器							
	皿	焼塩壺	火消壺 身	火消壺 蓋	鉢	五徳	焙烙	その他	不明	火鉢	板辺り	擂鉢	十能	五徳	灰櫃	その他	不明
85年試掘	15		1						1	1							6
外灯電気立会い																	
1層	28								2	1							3
1層・3層上面	15								1	2							3
2層上面	43						1		14	1				1			2
2層	933	4	9	1	3	4	4	さな1 灯心受け石臼2	143	22	12	1	2	13	7	瓶形1	183
3層	508	5	4		1	3	5	鼓通り植木鉢2	252	24	9	1	2	6	14	碁盤不明0蓋1 火消し壺(蓋)1 火消し壺(身)1	110
4層上面	15							さな3	35	2	1						1
4層	1376	4	3	2	1	7	4	蚊遣り2	465	38	9	3	5	16	30	火消し壺(蓋)1 火消し壺(身)1	133
5層上面	18								46			1					2
5層																	
5a層	57		1						69	2					1		4
5b層	52				2		1		59	2							1
5b層									1								
6層上面									1								
6a層																	
6層																	
撹乱	71	2				2			21	4	1		1	1			13
不明	66	1					1	有脚灯明皿1	11	2					2		3
1号池	66				1			植木鉢1	32	3			1	2			10
2号池　埋土1層	5																
2号池　埋土2層																	
2号池　埋土2a層	71								82	3							2
2号池　埋土2b層	99						2		80	3							7
2号池　埋土2c層	4								7								
2号池　埋土3層	6								5								
2号池　埋土3a層	23								13								3
2号池　埋土3b層	154						1		82	4							9
2号池　埋土4層	28	1							3								1
2号池　埋土5層	24								6								
2号池　埋土6層									1								1
2号池　埋土不明	25					1	1		18	1							2
3号池	25								11								
3号池A	3								6	1							
3号池D	39						1		18								
3号池E	6								5								
3号池F										1							
1号溝	28								18	2		7				火消し壺(身)1	9
3号溝	24			1					9								
4号溝	16								15								1
5号溝	4								4								
6号溝	1																
7号溝	6								3								
9号溝	2								3								
10号溝	14								7								
14号溝	2											2					
16号溝	1								2								1
19号溝	3									1							
1号石敷溝	11								37	1		1					1
1号建物跡	12								1	1				2	2		5
2号建物跡	13								2	1							6
3号建物跡	2					1	1										2
4号建物跡	18							植木鉢1	1						1		7
5号建物跡	12								3	2		1					1
6号建物跡																	1
7号建物跡	1																
8号建物跡									3								
10号建物跡	2																
12号建物跡	1																
13号建物跡	5								2								
19号建物跡	2								2								
20号建物跡	5								2								
24号建物跡																	1
26号建物跡	1								3								
29号建物跡	1								1								
31号建物跡																鉢1	
32号建物跡	1											1					
7号柱列	16								6	1		1					3
8号柱列	7																
14号柱列	1								2								
17号柱列	1	1							1								

表21　武家屋敷跡第４地点出土土師質土器・瓦質土器集計表 (2)

Tab.21　Distribution of unglazed ceramics and furned ceramics at BK4 (2)

	土師質土器								瓦質土器							
	皿	燈篭台	火消壺 身	火消壺 蓋	鉢	五徳	羽釜	その他	不明	火鉢	渦巻り	擂鉢	土鍋	五徳	炭櫃	その他	不明
18号柱列	1																
26号柱列	2								2								
1号土坑																	1
3号土坑	1																
4号土坑									3								
8号土坑	6								1								3
9号土坑	8								3								2
10号土坑	17								18	4			1	1	2		7
12号土坑	3								1								
13号土坑	1																
14号土坑									1								
15号土坑	14	1							12			1					
16号土坑	2																
18号土坑	13								5			1					2
19号土坑	1								2								
20号土坑	1																
21号土坑	5								4								
22号土坑	4								11								
23号土坑	7								5	1							
24号土坑	7													1			
25号土坑	14									3							
26号土坑	16								2								
1号井戸	6																
3号井戸	41	1							11								4
ピット487(地鎮1)	2																
ピット797(地鎮2)	2																
ピット790(地鎮3)	2																
その他のピット	61	1	1				2		39	3							5
集石遺構	2				1				1						1		
粘土貼床遺構	4																
1号木箱埋設遺構	6								3						1		
2号石組									1								
10号埋甕	1	1															1

表22　武家屋敷跡第４地点出土瓦質土器観察表

Tab.22　Notes on furned ceramics at BK4

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考	図	図版番号
CG001	H17G, 1号梁 埋土層	擂鉢	36.4	－	－	橋目４本単位　体部下半使用による擂鉢調整	84	56
CG002	H17G, 1号梁 埋土層	擂鉢	18.0	7.8	9.5	橋目６本単位　体部下半使用による擂鉢調整 内面に凹凸部分有 外面擂鉢による小刻調整	84	56
CG003	C17E, 1号溝 埋土層	擂鉢				片口部分	84	56
CG004	12号側溝 24地点4層	火消C壺	36.2	－	－	外面一内面口縁部付近に分けて ミガキ	84	56
CG005	H17G, 1号溝 埋土層	火消壺	19.0	9.3	－	高台を欠いてミガキ	84	56
CG006	G-H12F, 1号溝 埋土層	不明	14.8	13.3	5.4	外面タテ方向のケズリ 内面ヨコナデ 内外面に炭化物付着	84	56
CG007	14号歯	擂鉢	－	－	－		84	56
CG008	3号地A	火鉢A型	23.8		－	外周縁部による小刻調整	84	56
CG009	3号地F	火鉢D型	－	－	－	脚手部破損部分	84	56
CG010	H18G, 2号池 埋功層	火鉢A型	22.8	16.6	10.1	全面ミガキ	85	57
CG011	E14F, 2号池 埋功層	火鉢A型	47.6	32.4		外面タテ方向のミガキ 内面ヨコナデ 外周下半部縦筋による小刻調整	85	57
CG012	E14G, 2号池 埋功層	火鉢B型	29.3	18.8	20.6	外面ミガキ 内面ヨコナデ	85	56
CG013	10号土坑 底面	足鍋	27.6	27.0	8.4	底面径27.0cm 底面幅22.5cm 外面ミガキ 内面ナデ 脚部すべて剥離	86	57
CG014	19ヶ井戸 24地点 埋土層	火鉢A型	33.0	20.3	14.0	外面ミガキ 内面ナデ 外部下半部縦筋による小刻調整	86	57
CG015	3号井戸14層地鎮埋土	鉢	15.9	－	－	口縁部のみミガキ 内外面ヨコナデ	84	56
CG016	ピット516 E3区 1層	火鉢A型	－	21.0	－	外面ミガキ 内面ナデ 外周下半部縦筋による小刻調整	86	57
CG017	ピット565 D9-15 4層	火鉢D型	－	17.0	－	外面ミガキ 内面ナデ	86	57
CG018	B8区 1層	火鉢？	36.9	－	－	口縁部に炭化物付着 内外面ナデ	85	57
CG019	F15R 4層	火消壺？	25.3	－	－	外面ミガキ 内面ヨコナデ	85	56
CG020	E15-16区 4層	蓋	12.6	－	1.6	外面ミガキ 内面ナデ	86	57
CG021	E15-16区 4層	足鍋		19.7	－	外周ミガキ 内面ヨコナデ	86	57
CG022	B5区 4層ト面	火鉢B型	20.8	－	－	外面ミガキ 内面ヨコナデ	85	56
CG023	G18区 1号池 埋土層	十能	－	－	－	柄部に梅花のスタンプ文	85	56
CG024	E-F11F, 1号溝	擂鉢	－			橋目１本単位　口縁直下内部に縦状沈線２本	84	56

表23　武家屋敷跡第４地点出土磁器観察表 (1)

Tab.23　Notes on porcelains at BK4 (1)

図版番号	出土地点	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	釉上	生産地	製作年代	備考	写	図版
C1001	F4 焼溝付近	大型丸碗	－		－	若葉唐文 見込花詰草文	染付	中国	明末 17C前半		62	59
C1002	K3 土層	小型丸碗	10.2	－	－	唐草文	染付	中小型	17C前～中		63	59
C1003	F・G2 土層	中型丸碗	－	4.3	－	網目文	染付	中小型	17C前～中	波佐見焼に特有	62	59
C1004	G5 土層	中型丸碗	9.3	4.0	5.4	蜻蛉に梅花紋文	染付	肥前	肥前(波佐見) 18C	くらわんか手	63	59
C1005	F・G4 土層	鉢	14.9	7.7	4.2	内等文形文 外面雷紋ら二文	染付	中小型	肥前	17C後	63	59
C1006	F・G4 土層	小皿	6.6	2.8	3.8	竹文	染付	肥前	肥前	17C	63	59
C1007	C4 土層付近	小皿	6.4	3.0	2.6	草花文	染付	肥前	肥前	17C	63	59
C1008	C6 土層付近	大皿	－	6.3	－	花に鳥文	染付	肥前	肥前	17C後半	63	40
C1009	A・B10 焼溝付近	大皿	－	－	－	山水文 蓮華文	染付	肥前	肥前	17C前～中	63	41
C1010	F5 土層付近	中皿	－	12.4	－	山路平花文	染付	肥前	肥前	17C後	63	40
C1011	F5 土層付近	陽小皿	8.9	3.5	2.6	草花文	染付	中小型	肥前	17C	63	40
C1012	E17 11層 遺物層	中型丸碗	11.1	－	－	山路紋竹梅文 見込文様あり	染付	肥前	肥前	17C後半	59	37
C1013	G17 3層 遺物層	大皿	－	－	－	唐草紋沢瀉紋 見込文様あり	染付	肥前	17C前～中		59	37
C1014	E16 11層 遺物層	小皿	12.0	7.3	2.6	五弁菊子文 胴部雷文 外面沢瀉文 見込内面文様線形紋	染付	中小型	中国	明末 17C前半	59	37
C1015	H17 3層 遺物層	小皿	10.8	6.4	2.4	竹等	染付	肥前	中国	明末 17C前半	59	37
C1016	H17 11層 遺物層	小皿	－	7.5	－	蜻蛉文	染付	肥前	中国	明末 17C前半	59	37
C1017	H17 11層 遺物層	小坪	4.9	－	－	草花文	染付	中小型	中国	明末 17C前半	59	37
C1018	15層 遺物層	有柄	12.9	－	－	蓮弁	染付	肥前	肥前	17C前～中	59	37
C1019	4層 遺物層	大皿	－	8.2	－	唐草蓮華花文？	染付	中小型	肥前	17C前～中	59	37
C1020	3層目 遺物層付近	中型丸碗	11.1	4.1	6.9	蜻蛉文	染付	肥前	肥前	17C前～中	59	37
C1021	3層目 遺物層	中皿	22.4	－	－	網目文	染付	肥前	肥前	17C後	59	37
C1022	3層目	小坪	6.0	2.6	4.4	草花文	染付	肥前	肥前	17C前～中	59	37
C1023	3層目 遺物層	鉢底	－	3.1	－	石畳模様	染付	肥前	肥前	17C後半	59	37
C1024	3層目 遺物層	蓋物(香)	5.4	－	－	色絵(赤) 若芝文	色絵	肥前	肥前	18C	59	37
C1025	G14 3層目 遺物層	小皿	－	6.6	－	芝用鶴唐草文	染付	中国	明末 17C前半	波佐見焼に特有	59	37
C1026	H15 3層目 遺物層	大皿	－	9.7	－	唐草蓮華文 蓮弁文 ～波状紋／鳥・蝶模様	染付	中小型	肥前(波佐見) 17C末～18C前	波佐見焼(広東系)	59	37
C1027	G15 3層目 遺物層	中型丸碗	10.2	4.2	5.9	四隅不文 蓮文 四角 四角内 ～大柳草紋 鳥・蝶	染付	肥前	17C後～末	唐人屋敷	59	37
C1028	H15 3層目 遺物層	仏花瓶	6.7	3.8	8.3	蓮弁	色絵	肥前	17C後～18C前	唐人屋敷	59	37
C1029	G15・16 3層目 遺物層	中型丸碗	4.8	－	－	格子文 菊の花 ～大柳草紋 ～鳥	染付	中小型	中国	明末 17C前半	59	37
C1030	G15 3層目 遺物層	中型丸碗	11.0	4.6	6.3	竹梅文 千鳥文 菊の花 ～大柳草紋 ～鳥	染付	肥前	肥前(波佐見)	17C末～18C前	59	37
C1031	H15 3層目 遺物層	小皿	11.7	6.8	2.6	見込雷紋文 外面蓮文	染付	中小型	明末 17C前半	唐人屋敷に特有	59	37
C1032	G16 3層目 遺物層	皿	12.6	6.5	3.3	蓮文 見込ふめ／鳥蝶手	染付	肥前	肥前(波佐見) 17C末	唐人屋敷に特有	59	37
C1033	C15 3層目 遺物層	香炉	9.2	5.8	2.8	山水文 四方模文	染付	肥前	肥前 17C前～中	官窯風に整理	60	37
C1034	3層目 遺物層付近	丸火入	11.2	8.5	7.1	四方文 蓮文 蝶／蜻蛉文	染付	肥前	肥前 18C	CH18と同じ？	60	37
C1035	G13 3層目 遺物層	水滴	7.2	5.8	8.3	蜻蛉文 蝶／花詰草紋	染付	肥前	肥前 18C	CH14と同？	60	37
C1036	G12 3層目 遺物層	酒徳利	6.9	3.9	4.8	鳥獣戯画 雷紋 蝶文 蜻蛉	染付	肥前	肥前 18C		60	37
C1037	H15 3層目 遺物層	金子(蓋)	6.7	－	－	雷紋 蜻蛉文	染付	肥前	18C前半		60	37
C1038	G15 3層目 遺物層	水滴	－	－	－	鳥月獣下文	染付	肥前	18C	陶器？	60	37
C1039	G15 3層目 遺物層	皿底	4.3	1.7	1.4	石畳模様	染付	肥前	18C		60	37
C1040	F15 3層目 遺物層	小皿	－	7.2	－	雷紋 蓮子文 草花蝶文	染付	中小型	肥前	17C前～中	陶器は定之数字あり	60	37
C1041	E15 3層目 遺物層	中型丸碗	11.8	－	－	蜻蛉文 蝶文	染付	中小型	肥前	17C前～中	唐人屋敷	60	37
C1042	K16 3層目 遺物層	小型丸碗	9.2	－	－	文様不文	染付	中小型	肥前	18C後半		60	37
C1043	E14 3層目 遺物層	中型丸碗	11.3	4.7	－	唐草1 沢瀉紋 四角内無地	染付	肥前	肥前 17C前～中	天竺徳兵衛に関係あり	61	38
C1044	C15 3層目 遺物層	小型丸碗	－	4.3	－	唐草 四角内無地	染付	肥前	肥前 17C前～中		61	38
C1045	C15 3層目 遺物層	中皿	21.2	16.0	3.2	見込唐草文 外面草文 蝶ボケ	染付	肥前	肥前 17C後	ハ手ボキ文	61	38
C1046	3層目 遺物層	鉢口	7.2	4.0	5.6	竹に松文	染付	中小型	肥前	17C末	61	38
C1047	G16 3層目 遺物層	小坪	6.0	－	－	蓮花文	染付	肥前	中国	明末 17C前半	61	38
C1048	G16 3層目 遺物層	小坪	5.8	2.6	3.7	竹梅？	染付	中小型	肥前	17C前～中	61	38
C1049	H13 3層目 遺物層	小坪	6.1	2.8	3.4	梅花文	染付	中小型	肥前	17C後？	61	38
C1050	C16 3層目 遺物層	鉢底	6.5	3.5	2.1	石畳	染付	肥前	肥前(波佐見)	18C	くらわんか手	61	38
C1051	3層目 遺物層	香炉	－	－	－	蜻蛉文様 色絵(赤)文様	色絵	肥前	肥前	17C末～18C前		61	38
C1052	F13 3層目 遺物層	中型丸碗	9.7	4.1	6.1	山水文 蓮弁四角無	染付	中小型	肥前	17C前～中		61	38
C1053	E15 3層目 遺物層付近	中型丸碗	12.2	5.7	6.5	梅花紋文 見込蝶文	染付	肥前	肥前	17C後	唐人屋敷	61	38
C1054	F16 3層目 遺物層付近	中型丸碗	11.2	4.6	6.1	鳥獣戯画 ～鳥文	染付	肥前	肥前	17C前～末		61	38
C1055	F16 3層目 遺物層	小皿	12.0	4.0	3.5	草花文	染付	中小型	肥前	17C前～中	唐人屋敷 東インド会社付属	61	38
C1056	E15 3層目 遺物層	小皿	12.5	－	－	山水蓮弁七宝文・唐草文 口縁 外面蓮文・蝶文	染付	肥前	肥前	17C前～中		61	38
C1057	A・B15 3層	中型丸碗	9.8	4.2	5.3	蜻蛉に草花文 菊の内鳥あり？明	染付	肥前	肥前(波佐見)	くらわんか手	61	38
C1058	A・B15 3層	小皿	10.5	5.3	2.8	菊の内鳥あり？明	染付	肥前	中国	明末 17C前半	唐人屋敷	61	38
C1059	14石垣裏 盛土取土	紅皿	2.2	0.9	1.2	宮廷図形	染付	中小型	肥前	18C		61	38
C1060	3層	蓋C	7.8	－	－	石松文 鳳文	染付	肥前	肥前	18C		61	38
C1061	3層	円形状加工品	－	－	－	文様あり不明	染付	中小型	肥前	17C前～中？	大山崎に類似品	61	38
C1062	1層目・7層	中型丸碗	10.8	－	－	梅花文	染付	中小型	肥前	18C		62	38
C1063	1層目・7層	中型丸碗	10.2	－	－	蜻蛉文	染付	中小型	肥前	18C		62	38

表24　武家屋敷跡第4地点出土磁器観察表 (2)

Tab.24　Notes on porcelains at BK4 (2)

遺構番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様	的土	生産地	製作年代	備考	図	図版
C2064	3号井戸 埋土	小皿	11.1	6.8	3.0	梅花紋縁 梅花紋文 蝶文 外面草花文	陶器	肥前	18C前半		62	28
C2065	3号井戸 埋土	鉢口	5.6	—	—	雨降文	陶器	肥前	18C前半	貿入碗蓋	62	28
C2066	3号井戸 埋土	鉢底	4.5	1.8	1.9	松葉文	陶器	肥前	18C前半		62	28
C2067	3号井戸 埋土	中皿	20.9	11.2	4.1	牡丹文 外面唐草文	陶器	肥前	18C		62	28
C2068	3号井戸 掘方埋土～3層	仏餉器	—	4.4		菊文	陶器	肥前	18C		62	29
C2069	3号井戸 埋土～3層	徳利	—	8.5	—	宝品「唐」字文 外面文様あり不明	中半磁	肥前	17C前		62	29
C2070	3号井戸 埋土～3層	小皿	10.4	6.4	2.3	菊文 外面草花文	陶器	肥前	17C末～18C前		62	29
C2071	3号井戸 埋土	碗口	7.8	—	—	草花文	陶器	肥前	18C		62	29
C2072	3号井戸 埋土	小皿	11.7	3.9	2.6	水文 見込み二重圏線	陶器	肥前(波佐見)	17C末～18C前		62	29
C2073	3号井戸 埋土	小皿	11.8	7.0	3.5	山水	陶器	肥前	17C末～18C前		62	29
C2074	3号井戸 埋土	鉢底	4.4	1.7	1.6	竹笹図打	陶器	肥前	18C	貿入碗蓋	62	29
C2075	10号土坑 埋土	中皿口縁	8.8	—	—	雲文 蝶花文 縁内四方襷文	中半磁	肥前	18C末～19C前		62	30
C2076	10号土坑 埋土	小皿	15.3	8.8	4.2	内外草花唐草文	陶器	肥前	18C	瓶敷ガ	62	30
C2077	10号土坑 埋土	碗口	7.6	4.0	2.3	梅鉢	中半磁	肥前	18C後～19C前		62	30
C2078	10号土坑 埋土	鉢口	4.9	1.4	1.7	梅鉢図打	中半磁	肥前系	18C		62	30
C2079	10号土坑 埋土	小皿高台縁	8.4	4.0	2.3	鉄錆文 蝶文 見込文様あり不明	陶器	肥前	18C後～19C前		62	30
C2080	10号土坑 埋土	小皿	13.3	7.5	3.7	雷鳴紋 草花文 見込コンニャク印刊印手法 外面唐草文 高台内圏線線	陶器	肥前(波佐見)	18C後	くらわんか手	63	30
C2081	10号土坑 埋土	小皿	10.2	6.0	2.8	一重山水文 三足	陶器	肥前	18C中		62	30
C2082	10号土坑 埋土	中碗口	9.5	—	—	外面唐草 縁内格子文 見込文様あり不明 口縁	陶器	肥前	18C後		63	30
C2083	10号土坑 埋土掘方	中型丸皿	12.0	—	—	丸文繋ぎ	陶器	肥前(波佐見)	18C	くらわんか手	62	30
C2084	13号土坑 埋土	小型端反皿	9.6	—	—	「梅」字文	磁	瀬戸	19C中		63	30
C2085	13号土坑 埋土	碗	17.6	—	—	八方山水 区画間十万文 雷文	陶器	肥前系	19C中	瓶敷ガ	63	30
C2086	13号土坑 埋土～3層	中型丸皿	9.9	4.1	4.8	花紋文	陶器	肥前	18C	海鼠ガ 無絵ガ	63	30
C2087	21号土坑 埋土	中型丸皿	10.6	—	—	色絵（赤・緑・黄・黒） 唐草図	陶器	肥前	19C前		63	30
C2088	25号土坑	小丸皿	6.4			梅鉢鬼灯 松竹梅文	陶器	肥前	18C後半		63	30
C2089	ピット231	中型丸皿	10.4	—	—	山水文	陶器	肥前	17C末		63	30
C2090	ピット422	碗口	5.2			文様あり不明	陶器	肥前	17C		63	30
C2091	ピット145	小皿	—	4.8	—	菊紋文	陶器	肥前	17C前	高台畳付砂粒付着	63	30
C2092	ピット89	中型端反碗	9.1	3.4	5.8	梅文 縁内四方襷文 見込み雷鳴五弁花	陶器	肥前	18C後		63	30
C2093	4B 4層	大型丸皿	12.2	5.6	6.7	竹梅文 草花文 縁内四方襷文 見込み雷鳴の不明	中半磁	肥前(波佐見)	18C後半		66	40
C2094	C7 4層	中型丸皿	—	4.0	2.5	唐花文 菊白内紙あり不明	中半磁	肥前(波佐見)	18C後半	くらわんか手	64	40
C2095	B6S 4層	小型丸皿	9.5	4.2	4.6	菊紋文	陶器	肥前	18C	貿入碗蓋	64	40
C2096	4層	中型丸皿	10.4	5.9	4.8	雷鳴文 C海花文	中半磁	肥前	18C後半		64	40
C2097	B+B7S 4層	中型丸皿	9.8	4.7	4.4	色絵（赤・黄） 雷鳴文	陶器	肥前	18C	貿入碗蓋	64	40
C2098	4層	中型端反碗	9.8			花文繋ぎ 縁内四方襷文	中半磁	肥前	18C後半		64	40
C2099	A+B16 4層	中型八角碗	11.8	—	—	唐草文	陶器	肥前	18C前		64	40
C2100	B16 4層	小型九皿	7.8	2.6	2.6	白磁	中半磁	肥前	18C後～19C前	瓶敷ガ	64	40
C2101	B8 4層	小型端反碗	9.6	4.0	5.2	山水文 見込「福」字文	磁	瀬戸	19C中		64	40
C2102	B8 4層	小型端反碗	9.6	4.1	4.7	花菊文文	磁	瀬戸	19C中		64	40
C2103	B9 4層	小型端反碗	9.2	4.1	5.2	雲文	磁	瀬戸	19C中		64	40
C2104	D4+7S 4層	小型端反碗	8.8	3.3	4.9	蝶紋唐文 唐花文 見込み梅文	磁	瀬戸	19C中		64	40
C2105	B5J 4層	小型端反碗	8.7	—	—	三蝶らし文 外面雲文	陶器	肥前系	18C中		64	40
C2106	B 4層	小型陶器碗	—	4.6	—	沢潟風人文・菊紋文	磁	瀬戸	19C前～中	瓶敷ガ	64	40
C2107	B3 4層	大皿	35.0	15.6	3.9	内外花唐草文	陶器	肥前	18C		64	40
C2108	4層	中皿	22.2	11.7	3.6	沢潟図花文	中半磁	伊万里	明和 17C前半	茶碗ガ	64	40
C2109	B 4層	中皿	15.3	6.2	—	菊花文	陶器	肥前	17C前半		65	40
C2110	F14 4層	中皿	—	11.0	—	梅鉢唐草文	陶器	肥前	17C末～後		65	40
C2111	D8 4層	中皿	23.3	13.6	—	内外花唐草文 蝶文 見込み雷鳴五弁花 菊白内紙あり 胎土目	中半磁	肥前	17C末～18C前	バラ文文様	65	41
C2112	C9 4層	小皿	10.8	6.7	1.9	草花文 蝶ノ目三脚高台	陶器	平戸オランダ	18C中		65	41
C2113	A+B14 4層	小皿	14.1	5.2	5.1	菊花文	中半磁	肥前	17C前～中	瓶敷ガ 口縁外打撃	65	40
C2114	C8 4層	小皿	10.8	4.5	3.3	雷鳴紋文	陶器	肥前	17C末		65	40
C2115	B6 4層	小皿	12.7	4.5	4.0	雷鳴繋ぎ 見込蝶ノ目脚付	陶器	肥前(波佐見)	18C	くらわんか手	65	41
C2116	A+B13 4層	小皿	13.4	6.9	3.0	草花文 見込コンニャク印刊五弁花 見込蝶ノ目脚付	陶器	肥前(波佐見)	18C	くらわんか手	65	41
C2117	C10 4層	小皿	10.0	4.9	2.6	唐花文 見込コンニャク印刊五弁花	陶器	肥前(波佐見)	18C	くらわんか手	65	41
C2118	D15 4層	端小皿	—	—	2.5	蝶打出形？ 菊白内紙あり不明	陶器	肥前	18C		65	40
C2119	E14 4層	端小皿	8.3	3.5	2.4	雷鳴紋文・青海波文 内面はボロ釉等	磁	平戸系	18C中		65	41
C2120	4層	碗	22.3	—	—	梅小花紋文	陶器	中国	17C中	瓶敷ガ	66	41
C2121	C14 4層	碗	—	8.7	—	色絵（青・黄・黒・赤） 雷鳴唐文 蝶ノ目脚高	中半磁	肥前	1660年代	瓶敷ガ	66	41
C2122	C16+18 4層	碗	25.2	—	—	波紋梅花紋文 菊花文繋ぎし	中半磁	肥前系	18C前半		66	41
C2123	D16 4層	小坪	5.5	2.8	4.0	雷鳴紋唐花文	陶器	肥前	18C		66	41
C2124	C7 4層	小坪	6.4	2.7	2.5	白磁？	陶器	肥前	18C	高台畳付砂粒付着	66	41
C2125	D10 4層	中碗(蓋)	10.0	3.7	3.7	蝶紋文 見込竹雀手法唐草	中半磁	肥前	18C後	瓶敷ガ	66	41
C2126	C18 4層	中碗(蓋)	9.0	3.0	2.4	菊文 見込風鈴文	中半磁	肥前	18C前	広間焼の蓋	66	41

表25　武家屋敷跡第４地点出土磁器観察表 (3)

Tab.25　Notes on porcelains at EK4 (3)

登録番号	出土地点	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	釉上	生産地	製作年代	備考	図	図版
CJ127	F15 4層	中皿	－	4.9	－	蜻蛉描文	中中絵	肥前	18C末～19C前		67	42
CJ128	4層	小皿	1.9		－	竹文 植物文	中中絵	肥前	18C末～19C前		67	42
CJ129	A+B7 C9 4層	小瓶	－	3.1	－	唐文	雲磁	肥前	18C		67	42
CJ130	H10 4層	小鉢	3.9	8.0	25.3	松文 雲鶴文	雲磁	肥前	18C中		67	42
CJ131	A+B11 4層	急須?	－	3.0	－	文様あり不明	中中絵	肥前	19C	内面に「一口一口」陽書	67	42
CJ132	A+B4G14 4層	合子(蓋)	4.8	2.2	2.9	花卉草文	雲磁	肥前	18C		67	42
CJ133	G15 4層	合子(蓋)	6.0	－	1.3	小紋（赤・緑）施に鉄文	雲磁	肥前	18C		67	42
CJ134	C9 4層	小下皿	5.8	－	1.5	梅花 草文	雲磁	肥前	19C		67	42
CJ135	A+B14 4層	合子(蓋)	5.2	－	1.2	山水雲人文	雲紙	肥前系	19C前～中		67	42
CJ136	D13+E6 4層	紅皿	5.1	2.6	1.8	色絵（赤）梅花文	雲磁	肥前	18C		67	42
CJ137	H3 4層	紅皿	2.3	1.0	1.3	三嶋手?	雲磁	肥前	18C～19C中		67	42
CJ138	I10 4層	水瓶	－	－	－	鳳凰花文 鉄釉 雲鶴施	中中絵	不明	不明		67	42
CJ139	G13 1号炉 埋土層	小碗	10.2	3.3	6.7	雲龍小文	雲磁	肥前	18C中～後		68	42
CJ140	G13 1号炉 埋土層	中型広東碗	－	5.6	－	山水文 見込五弁文	中中絵	広東	19C前～中	官人鑑賞	68	42
CJ141	G13 1号炉 埋土層	小平皿民窯	8.4	3.7	4.4	内外唐草文 見込 1箇 平文 輪鉛釉	中中絵	瀬戸	19C中		68	42
CJ142	1号炉 埋土層	中皿	21.7	12.5	5.0	菊花	雲磁	肥前	18C	唐白内面絵 輪鉛釉	68	42
CJ143	D14 1号炉 埋土層	小皿	14.8	8.2	2.2	丸文 雲弁3	雲紙	肥前	17C末～18C前		68	42
CJ144	G16 1号炉 埋土層	小皿	15.6	7.8	4.2	松梅竹鳥文 外面VD文 見込手描3本指花	雲磁	肥前	18C		68	42
CJ145	G12 1号炉 埋土層	小皿	10.2	5.8	1.8	花鳥文	雲磁	肥前	18C末～19C前		68	42
CJ146	G4 4層上面東石敷構	小型端反碗	8.4	3.3	4.1	菊唐文? 見込二重圏文	中中絵	瀬戸	19C中		68	42
CJ147	G8 4層 1面東石敷構	土瓶(蓋)	6.0	6.9	10.7	秋草鳥文 鉄釉	黄	不明	19C中		68	42
CJ148	G11 4層上面	中型丸碗	10.8	－	－	色絵（赤・緑・黒・青）草花文 ：鉄	中中絵	肥前	18C末～19C前		68	42
CJ149	K5 4層 1面	小型端反碗	8.5	3.0	4.1	内外礼文段数文	雲	瀬戸	19C中	現職手	68	42
CJ150	D6 3～1層	中型丸碗	10.8	－	－	内外鉄釉文	雲磁	肥前	17C後半		68	43
CJ151	F17 3～1層	小平皿碗	－	4.9	－	外周文様あり不明 見込梅文 高台内「恵早年製」銘	雲紙	肥前	17C末		68	43
CJ152	B7 3～1層	蕎麦猪口	7.9	2.9	2.5	見込 蘭 1 字文	雲磁	肥前	17C後半～中	高台内無釉	69	43
CJ153	D6 3～1層	鉢小皿	－	－	2.6	赤絵花文	雲紙	肥前	17C後半		69	43
CJ154	E14 3～1層	蕎麦猪口	8.0	3.7	2.4	梅竹鳥文・唐草文	雲	瀬戸	19C中		69	43
CJ155	C10 3～1層	鉢	12.3	6.0	6.7	菊花文?	雲磁	肥前系	19C中		69	43
CJ156	A+B6 1層	大皿	－	15.2	－	山水文 外面花唐草文	中中絵	唐津	17C末～18C初		69	43
CJ157	G+H3 3層上部	水瓶	－	－	－	型打唐文	雲磁	肥前	18C末～19C前	長8.5 3cm 幅4.0cm	69	43
CJ158	1層	小皿	－	6.3	－	鳥花文 波かけ 「大明成化年製」銘	中中絵	中国	明末 17C前半		69	43
CJ159	D8基礎構内	小皿	12.0	4.1	3.3	花文? 見込蛇ノ目釉剥ぎ	雲磁	肥前(有田窯)	17C末～18C前		69	43
CJ160	G8-9 コンクリート解体土	小皿	13.9	8.2	4.6	区画雲に梅文 見込コンニャク印五弁花 高台内無「銘」鉄	雲磁	肥前(波佐見)	18C後半	くらわんか手	69	43
CJ161	H5～J7列コンクリート撤去部	鉢	15.6	－	－	色絵（赤・黄・黒・青）花文	雲紙	肥前	17C後	輪花鳥門鉢代	69	43
CJ162	4号溝	中皿	－	7.2	－	～小菊雪四季草七宝繋文	中中絵	肥前	17C前～中	高台型ケ谷焼代替品	70	37
CJ163	10号溝	小平丸碗	8.5	－	－	「蘭」平文	雲磁	肥前	17C前～中		70	37
CJ164	A+B16 3層	中皿?	－	－	－	～S字o～形（青・茶子銘）	雲磁	唐津	18C中		－	43
CJ165	G13 3号炉 埋土層	水鉢or置物	－	－	－	型打色絵（赤・青・緑・黒）	雲磁	肥前	17C後半		－	43
CJ166	D15 3号炉 埋土層	水鉢or置物	－	－	－	型打色絵（赤・青・緑・黒）鳳凰	雲磁	肥前	17C後半		－	43
CJ167	D13 3号炉 埋土層	水鉢or置物	－	－	－	型打色絵（赤）鳳凰	雲磁	肥前	17C後半		－	43
CJ168	G15 4層	水鉢or置物			－	型打色絵（赤）	雲紙	肥前	17C後半		－	43
CJ169	A+B13 4層	水鉢or置物	－	－	－	型打色絵（赤）鳳凰	雲磁	肥前	17C後半		－	43
CJ170	4層	水鉢or置物	－	－	－	型打色絵（赤）	雲紙	肥前	17C後半		－	43
CJ171	H10 2～1層	水鉢or置物	－	－	－	型打色絵（赤）	雲紙	肥前	17C後半		－	43
CJ172	ピット750	水鉢or置物?	－	－	－	型打色絵? 鉄釉	雲磁	肥前	17C後半		－	43
CJ173	E16 2～1層	袋物	－	－	－	～S字o～形（茶子銘・白）	雲磁	唐津	18C中		－	43
CJ174	B7 2～1層	水鉢or置物	－	－	－	型打色絵（赤・青・黒）	雲磁	肥前	18C		－	43
CJ175	I8 4層	火入れ	11.4	10.7	10.2	雪輪鳥 高台内無釉	中中絵	肥前	18C		67	42
CJ176	K-P17 1号溝 埋土層	小平	6.7	－	－	蘭花文	中中絵	中国	明末 17C前半		38	37
CJ177	19-G溝	碗?	16.6		－	内外唐草文	雲磁	肥前	17C		41	38

表26　武家屋敷跡第４地点出土陶器観察表（1）

Tab.26　Notes on glazed ceramics at BK4 (1)

陶器番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT001	D7 3層	中国民窯磁	－	－	－	葡萄蔓？口縁部から内面雲脚	外面白濁釉 透明釉	中や粗	黒？	17C前	瑞祥 内面底部不明瞭	72	53
CT002	E9 3層	中国丸碗	9.5	－	－	色絵(不明) 竹梅文	透明(淡黄灰白色)	密	赤・白質	17C4～18C	輸入製品	72	53
CT003	G5 3層	大鉢	36.2	12.0	11.2	白抜蔦文 3連頂部残線と鎬付	透明(淡灰色)	粗砂	信楽	17C後～18C前		72	53
CT004	F4G-H1 3層	鉢	－	12.6	－		透明(淡茶褐色)	中や粗	瀬戸	17C4～18C前	外面底部周り 使用痕顕著	72	53
CT005	F-G4 3層	小壺	9.2	－	－		透明(暗茶褐色)	中や粗	不明	小形	完形？	72	53
CT006	F8 3層	水筒	－	－	－	型打ち菊花形	透明(淡緑灰白色)	密	瀬・信楽	17C4～18C	輸入製品 内面無釉	72	53
CT007	G5 3層	鎬等花瓶	3.9	2.7	3.7		鉄釉	普通	不明	小形	外面鉄釉	72	53
CT008	A-D8 3層	鬢付	－	－	－	鎬鎬七宝文？	透明(天目色)	普通	美濃	17C前	底部 3区画型？	72	53
CT009	F7 3層	片口鉢	14.9	6.6	9.8	口縁部 2段仕切線一条 底部不明瞭	鉄釉(淡緑灰色)	中や粗	瀬戸	18C後	内面目跡 3箇所？ 輸入製品	72	53
CT010	D8 3層	鬢付	－	－	－		鉄釉	粗	丹波	17C前半		72	53
CT011	G5 3層	大鉢	－	18.0	－	胴部に波線による夕ダス文	鉄釉(白濁釉)	粗	信楽	18C4～19C前	口縁部に雲の飛び跡	73	53
CT012	F8 3層	小壺	8.7			体部横筋沈線	鉄釉(緑灰色)	普通	尾	17C～18C前		73	53
CT013	C-D8-9 1層上面	中国丸碗	11.0	4.3	7.6	台内時計目	透明(暗茶褐色)	普通	肥前	17C末～18C前		73	53
CT014	E15 1号遺構	小皿	12.1	7.2	2.5		長石釉	普通	美濃	16C末～17C前	窯跡	73	54
CT015	H17 1号溝 埋土	大型茶碗類	－	5.6	－		鉄釉(黒色)	普通	肥前	17C前	無縁碗系統	73	54
CT016	I-J3層 埋土	小皿	12.1	7.4	2.5		長石釉	普通	瀬戸・美濃	17C前	窯跡	73	54
CT017	F-G17 1号溝 埋土	大鉢	22.7	－	－	波線間連続文	鉄釉(淡黄灰白色)	普通	肥前	17C後半	輸入製品	73	54
CT018	B-D17 1号溝 埋土	大鉢	38.3	16.2	7.5	内面(淡灰色)底に 見込痕跡を残す高台	鉄釉(淡白色)	普通	瀬戸・美濃	17C前	中国写倣品 ハの字の開脚？	73	54
CT019	H17 1号溝 埋土	鉢類	－	－	－		無釉	粗	小形	不明	中世？	73	54
CT020	G17 1号溝 埋土	中瓶	－	－	－		鉄釉(淡緑灰色)	中や粗	信楽	16C末～17C前		73	54
CT021	H17 1号溝 埋土	大壺	9.0	－	－	胴部(淡灰色)底に 掛け	鉄釉(赤褐色)	中や粗	美濃	16C末	四耳壺	73	54
CT022	C17 1号溝 埋土	大皿	－	12.0	－	体部 ノ字から6角面取 輪花皿状	鉄釉(赤褐色)	普通	信楽	17C		73	54
CT023	A-B17 1号溝上面	鉢類	－	－	－		無釉	粗	丹波	15C前半		73	54
CT024	3層	中国丸碗	9.7	3.5	5.8		鉄釉(淡緑灰色)	密	太宰府窯	16C前半	輸入雑器	73	47
CT025	3層	鉢類	32.8	－	－		鉄釉(暗茶褐色)	粗	瀬？	16C後以降	外面は角型？	73	48
CT026	3層	灯明具	10.0	6.0	－		鉄釉(黒色)	中や粗	美濃	16C後	脚 3 手長 八王子城に類例	73	47
CT027	4層	小鉢	－	－	－	体部内面に丸／ミリエ具による間文(ツボ)	鉄釉(淡緑灰白色)	普通	美濃	16C後	鉄錆斑	73	44
CT028	4層	鬢付	－	－	－	台内・鎬鎬菊花文(黒色)	鉄釉	普通	美濃	17C前	鉄錆斑	73	44
CT029	4層	中瓶				体部に縦方向文字様	無釉	密	信楽	17C後半？		73	44
CT030	4層	中国丸碗	11.0	－	－		鉄釉(淡黄灰色)	普通	肥前	17C後半	高台手？ 輸入雑器	73	51
CT031	10C溝	鉢類				口縁部に反転沿線状色	鉄釉(暗茶褐色)	中や粗	瀬	17C		73	44
CT032	11層	小皿	11.0	6.9	2.0		鉄釉(淡黄灰白色)	普通	瀬戸・美濃	17C前～中	円筒ビン類	73	51
CT033	火葬												
CT034	2号石敷跡 層外	中国丸碗	11.6	4.6	7.6		鉄釉(淡緑灰色)	普通	肥前	17C4～18C前	四耳？ 輸入雑器	74	47
CT035	2号石敷遺 層外	千鳥形水注				胴部文	鉄釉(黒色)	普通	美濃	17C	大広間近くの溝の 脚台？	74	47
CT036	16層	四耳	15.0	－	－	鬢部	鉄釉(黒色)	普通	美濃	16C末～17C前	必要 鉄錆不明瞭 ビ類	74	44
CT037	21層	中国天目碗		－	－		鉄釉(黒色)	普通	瀬戸・美濃	17C前		74	44
CT038	3号石A	大鉢	38.6	9.6	9.9		鉄釉(赤色)	普通	唐津	17C		74	44
CT039	3号石D 埋土	小皿	10.4	5.6	2.2		鉄釉(淡緑灰色)	普通	瀬戸・美濃	17C後	内面外底無釉	74	44
CT040	3号石D 埋土	大鉢	－	12.3	－		鉄釉(暗茶灰色)	普通	美濃	17C後	電子顕微鏡 試料採取	74	44
CT041	3号石D 埋土	鬢付	11.4	7.6	8.1	口縁部に反転沿線状白色	鉄釉(暗赤褐色)	中や粗	信	17C	鉄錆斑 内面	74	44
CT042	3号石D	鉢類	35.0	－	－	口縁部に反転沿線状色	鉄釉(茶色)	中や粗	唐	17C		74	45
CT043	3号石D	鉢類	－	－	－		鉄釉(暗赤褐色)	普通	瀬戸	17C後	鉄錆斑 内面	74	45
CT044	3号石D	水筒	－	－	－	鎬部	鉄釉(茶色)	普通	唐	17C		74	45
CT045	3号石E 埋土	中国丸碗	－	－	－	鎬部(黒色) 雷文	鉄釉	普通	美濃	16C末～17C前	必要	74	45
CT046	3号石E 埋土	鉢	23.4			内面底 鎬鎬(赤色) 鳥足文・波文・目文	無釉	中や粗	肥前	17C中	大型鉢 下部欠損 欠損例	74	45
CT047	3号石A 3号石E 埋土	鉢類	－	9.2	－		鉄釉(暗赤色)	普通	唐	17C	内面に圧痕	74	45
CT048	G14 2号溝 埋土	大鉢	－				鉄釉(淡緑灰白色)	中や粗	唐・信楽？	17C1？	変形	74	45
CT049	7層 埋土 C7 3a層	小皿	13.4	7.0	3.9	平行線間文 鎬鎬(淡灰色)底に掛け	鉄釉(淡緑灰色)	普通	美濃	17C中～後	内面に目跡 3箇所 大平型？	74	45
CT050	G15 2号溝 埋土	中国	－	－	－	鎬鎬(黒色) 山水文	鉄釉(淡黄灰白色)	中や粗	肥前	17C後半	高台内 輸入雑器	74	45
CT051	G14-15 3号溝 埋土	中国丸碗	10.8	4.4	7.3	台内蛇目目	鉄釉(暗緑灰色)	普通	肥前	18C		74	45
CT052	H15 3号溝 埋土	中国	10.0	－	－	口縁部反転(暗緑灰色)底に掛け	鉄釉(暗赤褐色)	粗	唐	17C末～18C前		74	45
CT053	H15 3号溝 埋土	仏飯器	7.4	4.2	6.1		鉄釉(茶褐色)(内面)	普通	小形窯跡	18C		74	45
CT054	G14-16 3号溝 埋土	中国丸碗	11.3	4.9	7.8		鉄釉(淡緑灰色)	普通	肥前	17C末～18C前	高台手 輸入雑器	74	46
CT055	H15 3号溝 埋土	中国丸碗	12.0	4.9	7.3	台内蛇目目	鉄釉(暗緑灰色)	普通	肥前	18C	内面に目跡 3箇所	74	46
CT056	G14-16 3号溝 埋土	中国丸碗	10.2	4.2	5.0	鎬鎬(黒色) 山水文	鉄釉(淡黄灰色)	普通	肥前	17C後半	高台内 焼き目跡 輸入	74	46
CT057	7層 遺物溜まり	碗	10.7	12.6	7.0	体部内側に四点	鉄釉(暗緑灰色)	密泥	唐	17C～18C前	内面に目跡	74	46
CT058	H15 3号溝 埋土	鉢類					鉄釉(茶色)	普通	信	17C～18C前	外面鉄錆不十分	74	46
CT059	3号溝 遺物溜 15号土坑	鬢付	－	－	－		無釉	粗	丹波	17C後半？		74	46
CT060	H2 3号溝 埋土	鉢類	－	－	－		無釉	粗	丹波	17C前半		74	46
CT061	G12 3号溝 遺物溜	中瓶	15.6	－	－	外面胴部(黒色)底に掛け	鉄釉(茶褐色)	粗	不明	小形		74	46
CT062	G15-16 2号溝 埋土	小皿	7.4	4.5	7.4		鉄釉	密泥	小形	不明	完型品	74	46
CT063	H15 3号溝 遺物溜	水注	－	9.3	－		鉄釉(緑灰色)	中や粗	肥前？	17C後～18C前		74	46

表27　武家屋敷跡第4地点出土陶器観察表 (2)

Tab.27　Notes on glazed ceramics at HK1 (2)

遺構番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	釉調	色土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT064	H15 2号炉 埋土層	鉢?	11.2	－	6.9		灰釉(暗緑灰色)	黄褐	瀬?	17C～18C前	小袖沢?	72	46
CT065	H15 2号炉 埋土層	小鉢	－	4.1	－		灰釉(灰緑灰色)	やや黄	美濃? 信楽	17C後～18C前	高台内に墨書痕? 四郎? 口紅	72	46
CT066	3号遺構第1ブロック第3層	不明	20.8	－	4.6	鉄絵(灰褐色)　七宝繋文・花文 草花文 長方形?	灰釉(灰緑灰色)	黄褐	瀬?	17C中	瀬戸・土佐ブロ産? 第1ブロ系列	72	46
CT067	H16 2号炉 埋土層	小皿	6.4	2.1	2.2		灰釉	暗褐	小野	不明		72	46
CT068	G15 2号炉 埋土層	徳利	－	11.1	－		灰釉(灰赤褐色)	灰褐	信楽?	17C後	外面鉄釉垂れ?	72	46
CT069	2号溝 埋土層 3号炉下	向付	7.7	3.9	3.7		灰釉(灰緑色)	明褐	不明	不明	電石の可能性	72	46
CT070	B-C11 2号炉 埋土層	大型丸碗	14.2	5.2	6.8	上段区画(鉄錆灰色)	灰釉(灰緑灰色)	やや赤	大堀相馬	18C後～19C初	鉄ドロ? 天和貫入漏斗	73	47
CT071	B16 2号炉 埋土層	中型丸碗	－	－	－	鬼板(鉄錆灰色)	灰釉(灰緑灰色)	紫	京・信楽	18C	貫入漏斗	73	47
CT072	B12 3号炉 埋土層	中型蓋付碗	11.8	4.2	6.0	山部・鳳凰 唐草文	灰釉(灰緑灰色)	黄褐	瀬?	19C前	貫入漏斗 高台内墨跡	73	47
CT073	C13-17 2号炉 埋土層	中型丸碗	－	－	－		灰釉(灰緑灰色)	やや紫	大堀相馬	18C	貫入漏斗	73	47
CT074	B13 C13-16 3号遺構第1層	中型丸碗	10.7	－	－	鉄釉(暗緑灰褐色)　馬・鳳?	灰釉(灰緑灰色)	やや赤	大堀相馬	18C後半	貫入漏斗	73	47
CT075	B14 2号炉 埋土層	中型丸碗	11.8	4.2	7.0		灰釉(緑灰色)	暗褐	小野焼?	18C後～19C前	内面目跡 貫入漏斗	73	47
CT076	H16-D15 2号炉 埋土層	中型蓋付碗	10.2	4.9	6.1		灰釉(灰緑灰色)	黄	大堀相馬	18C	貫入漏斗	73	47
CT077	C15 2号炉 埋土層	皿	3.8	－	2.2		灰釉(明緑灰色)	やや明	東北系?	17C～18C前	内面鉄釉　最大径2.3cm	73	47
CT078	C15 2号炉 埋土層	鉢	24.5	－	－		灰釉(灰緑灰色)	やや赤	肥前	17C後～18C	貫入漏斗	73	47
CT079	D15 2号炉 埋土層	土瓶(急)	15.0	－	－		灰釉(灰白色)	明褐	不明	19C前半	貫入漏斗 体部下半縦沿痕	73	47
CT080	G15-16 2号炉 埋土層	中型丸碗	9.7	－	－	色絵(金・青・緑・黒)　鳳凰紋文	灰釉(灰緑灰色)	橙	京・伏見	17C中～18C	貫入漏斗	73	48
CT081	H15 2号炉 埋土層	小皿	13.9	5.8	3.9		灰釉(灰緑灰色)	やや赤	小野焼?	18C前～中	受口状? 左端部が 貫入	73	48
CT082	G16 2号炉 埋土層	小皿	15.0	7.6	3.1	鉄釉(黒)上掛け	灰釉(灰緑灰色)	黄褐	瀬戸・美濃	17C前	内面目跡 貫入漏斗	73	47
CT083	C14-D15 3号炉 埋土層	仏飯器	10.6	6.5	8.5	鉄釉(黒褐暗色)　流し掛け	灰釉(灰緑灰色)	やや紫	大堀相馬	18C	貫入漏斗 内面無釉	73	47
CT084	F12 2号炉 埋土層	徳利下部	6.8	3.9	1.7		土部に墨(緑釉)	黄褐	瀬	17C～18C前	中型蓋碗? 底	73	47
CT085	2号炉	鉢	－	－	－		緑釉(暗緑褐色)	やや紫	瀬?	18C後～19C前半	焼成不良	73	47
CT086	A-B15 3号炉	品字(窯)	5.8	－	1.8	色絵(緑・青・黄)　鳳凰紋文	灰釉(緑灰色)	黄褐	京・伏見	18C	貫入漏斗	73	47
CT087	1号炉 埋土層	中型丸碗	9.6	－	－	色絵(緑・黒)　松丹文?	灰釉(緑灰色)	やや紫	京・信楽	18C	貫入漏斗	74	48
CT088	1号炉 埋土層	灯口部	21.6	20.7	12.9	三種鉄釉(暗緑褐色)　流し掛け	灰釉(灰白色)	橙	小野焼?	18C	高台内? 五十、墨書? 同目跡	74	48
CT089	1号炉 埋土層 3号ボ?	徳利	27.3	15.8	17.1	口縁部鉄釉(暗緑褐色)　流し掛け?	鉄釉(茶褐色)	やや明	小野焼?	18C	口縁部・体部に掛け漏斗	74	48
CT090	1号炉? 埋土層	小皿	10.0	7.3	11.3		鉄釉(明緑褐色)	やや明	瀬?	18C後～19C前	口縁部・体部に掛け漏斗	74	48
CT091	3号炉 埋土層	中型天目碗	11.0	－	－		鉄釉(暗黒褐色)	暗褐	瀬戸・美濃	17C後		75	48
CT092	3号炉? 埋土層	小皿	12.3	4.4	3.7		灰釉(灰赤褐色)	黄褐	肥前	17C末～18C	貫入	75	48
CT093	2号炉 埋土層	鉢(平・火入れ)	10.5	5.7	6.8		灰釉(灰緑灰色)	やや明	小野焼?	18C中	内面鉄釉　内面目跡	72	46
CT094	3号炉? 埋土層	徳利	－	－	－	1～3段目文様(鉄釉灰色)　流し掛け	鉄釉(赤褐色)	やや明	小野	18C後～19C前		75	49
CT095	3号炉? 埋土層付近	鉢底	－	－	－		無釉	明	瀬	18C		75	49
CT096	3号炉? 埋土層 4号上面	坏型	6.4	6.2	7.4	鉄釉(暗緑褐色)　流し掛け	灰釉(灰緑灰色)	やや赤	大堀相馬	18C	口縁部鉄釉? 貫入漏斗	75	48
CT097	3号炉? 埋土層 ピット12	皿	14.3	12.6	4.2		無釉	やや明	不明	4C?	歪? 無釉	75	48
CT098	4号土坑 埋土層	土瓶(急)	11.9	－	－		鉄釉(暗茶褐色)	やや赤	大堀相馬	19C前半		75	49
CT099	3号土坑 埋土層	中型丸碗	10.4	3.8	2.8		灰釉(灰緑灰色)	やや紫	大堀相馬	18C	貫入漏斗	75	49
CT100	10号土坑 埋土層	酒盃(蓋)	9.3	4.2	3.0		鉄釉(茶褐色)	やや赤	大堀相馬	17C後～中	口唇部の傷は水取り	75	49
CT101	10号土坑 埋土層	小皿	5.5	2.6	2.4		灰釉(灰白色)	やや紫	大堀相馬	18C後～中	貫入漏斗	75	49
CT102	10号土坑 埋土層	皿(平)(蓋)	6.7	－	－	底から	灰釉(灰黒灰白色)	黄褐	京・信楽	不明	内面無釉	75	49
CT103	10号土坑 埋土層	灯明皿	6.4	2.7	1.8		鉄釉(暗茶褐色)	やや明	瀬?	18C前～中		75	49
CT104	10号土坑 埋土層	小型丸碗	8.6	3.5	4.4		灰釉(灰白色)	やや赤	大堀相馬	18C後～中	貫入漏斗	75	49
CT105	10号土坑 埋土層	徳利	－	－	－		鉄釉(茶褐色)	やや明	小野	18C後半頃		75	49
CT106	10号土坑 埋土層	土瓶(急)	7.8	－	－		灰釉(明緑色)	やや赤	大堀相馬	18C後～中		75	49
CT107	10号土坑 埋土層	徳利	－	－	－		鉄釉(暗褐色)	やや明	瀬	18C中		75	49
CT108	10号土坑 埋土層	水滴	－	－	－	鳥類形　鉄釉(黒色)　流し掛け	鉄釉(明黒色)	紫	京	18C中		75	49
CT109	10号土坑 埋土層	水滴	－	－	－	型打ち花形	灰釉(暗黒色)	黄褐	瀬戸	18C後～19C初	内面無釉　部分的鉄釉	75	49
CT110	13号土坑 埋土層	小型丸碗	8.6	3.6	4.4		灰釉(灰緑灰色)	やや紫	大堀相馬	18C	貫入漏斗	75	49
CT111	16号土坑第3遺構第4ピット	入隅(碗)	20.1	－	－	鉄釉　5段(縦・横・斜)　花四段文?	鉄釉(一部無)	黄褐	中国? 肥前	16C末～17C初	唐・宮・大宰で鉄釉甲土	75	49
CT112	18号土坑 埋土層	中型	－	11.4			灰釉(明緑褐色)	明	瀬	17C～18C前	鉄釉無釉	76	49
CT113	18号土坑 埋土層 3遺構目	中型丸碗	－	4.2	－		灰釉(灰緑灰色)	やや明	肥前	17C中	高台内墨跡　貫入漏斗	76	49
CT114	18号土坑 埋土層 3層	鉢?	16.0	－	－	鉄釉?	灰釉(茶褐色)	明赤	瀬?	17C後～18C前	内面鉄釉無釉	76	49
CT115	18号土坑 埋土層	土瓶(急)	12.0	6.1	6.3		灰釉(暗緑褐色)	黄褐	瀬	18C中～19C初	三角形のくち無釉	76	49
CT116	25号土坑	中型丸碗	－	3.2	－	色絵(緑・黒・黄)　竹文	灰釉(灰緑灰色)	紫	京・信楽	18C		76	50
CT117	25号土坑	中型丸碗	11.6	4.1	5.9	上部区画(鉄錆灰色)	鉄釉(暗黒灰褐色)	やや明	大堀相馬	18C	貫入漏斗	76	50
CT118	25号土坑	徳利	－	11.5	－		鉄釉(茶褐色)	明	小野	18C後半	外面体部下半に墨跡? 数	76	50
CT119	30号土坑 埋土層	酒盃(蓋)	10.0	－	－		鉄釉(暗茶褐色)	黄褐	瀬?	17C後半		76	49
CT120	30号土坑	行燈受皿(蓋)	－	－	－	酒瓶類写? 花? 鳥? 山?	灰釉(灰色)	黄褐	美濃	18C後半頃		76	50
CT121	7号遺構 B13 確方	中型蓋碗類	－	－	－	鉄釉(黒色)	灰釉(暗茶褐色)	黄褐	信楽	18C中～17C初		74	47
CT122	ピット37-D2	石製品	5.9	3.7	2.3		灰釉(暗黒褐色)	明	瀬	18C中		76	50
CT123	ピット38 西側 2号炉西側?	向付	15.0	－	－	外面 鉄釉(黒色)　草文	鉄釉	明	美濃	17C前	赤絵部 天平? 宮?	76	50
CT124	ピット183	小皿	－	2.8	－		灰釉(灰色)	やや明	瀬戸	18C末～19C前		76	50
CT125	ピット365	小皿(蓋)	5.3	－	1.0	鉄釉(黒色)　花文	灰釉(灰白色)	やや紫	京・信楽	18C	貫入漏斗	76	50
CT126	28号遺構第1ブロック第2層	中皿	－	5.9	－		灰釉(緑灰色)	やや赤	肥前?	17C後?	焼成前ノ三角刻印	74	47

表28　武家屋敷跡第4地点出土陶器観察表 (3)

Tab.28　Notes on glazed ceramics at BK4 (3)

遺構番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	釉薬	胎土	焼成	備考	図	図版
CT127	19西F ピット-016 19溝	小皿陶器碗	–		–	段状成し	内面白色系 外面灰釉	雲状	良？	17C台	荒木	71	49
CT128	BL3 ピット-016(遺構)	小型	22.4	9.2	6.3		灰釉(灰釉)(白)	密土	堅ア	18C中	貿入磁器 口縁部に紅彩痕	78	50
CT129	ピット-016	大型碗	14.3	5.5	7.4		灰釉(灰釉)(黒)	雲母	大型粗系	18C後半	貿入陶器	78	50
CT130	ピット-016	小型丸碗	10.6	4.2	7.2		灰釉(灰釉)(黒)	中々密	大型粗系	18C後半	貿入磁器	78	50
CT131	1西 表面採集	小型	7.4	3.1	3.9		灰釉(灰釉)(黒)	雲母	未良	18C後	貿入	78	50
CT132	10-11 4層	小型皿丸碗	12.0	3.8	4.5		灰釉(灰釉)(白)	中々密	堅・粗系	18C後～19C前	貿入磁器	78	50
CT133	A-B16 4層	中碗	–	4.7	–		灰釉(白)	中々密	堅ア？	17C後半	高台内 生ガラ釉 在来ずし	78	51
CT134	G4 4層	小型丸碗	8.8	3.2	5.1	白絵(緑・赤)	灰釉(灰釉)(黒)	雲母	堅・粗系	18C	貿入磁器	78	51
CT135	C15 4層	中型鉢形碗	9.2	3.5	5.2	色絵(緑・赤・黄) 格子文	灰釉(灰釉)(白)	雲母	堅・比較	18C	平面の法則のように整で配文	78	52
CT136	C16 4層	中型丸碗	10.4	4.4	7.2		灰釉(灰釉)(黒)	雲母	大型粗系	18C後半		78	51
CT137	F14 4層	中型丸碗	12.0	4.2	6.3	瑞獣雲文 上段3本(灰釉)(白)	鉄釉(鉄釉)(黒)	密土	大型粗系	18C	貿入磁器	78	52
CT138	D1 4層	中型皿	10.7	2.6	3.5	段状(無代) 多文文	灰釉(灰釉)(白)	雲母	大型粗系	18C後半	高台内型ガラ 無文 貿入	78	51
CT139	D16 4層	小型皿碗	8.8	4.0	3.8	瑞獣雲文・蓮弁 上段3本(灰釉)(灰黒系)	鉄釉(鉄釉)(黒)	中々密	大型粗系	18C	貿入磁器	78	52
CT140	D 4層	小型鉢碗	8.7	3.2	4.9		灰釉(灰釉)(白)	雲母	大型粗系	18C後～中	貿入磁器	78	52
CT141	K14 4層	小碗	6.6	3.7	3.7		灰釉(灰釉)(白)	中々密	雲母	18C後		78	52
CT142	F4 4層	小皿	5.3	2.8	2.9		灰釉(灰釉)(白)	中々密	大型粗系	18C前～中		78	52
CT143	I10 4層	小皿	5.7	2.7	3.3		灰釉(灰釉)(白)	雲母	大型粗系	18C後～中	貿入磁器	78	52
CT144	C8 4層	小皿	10.3	4.3	3.6		灰釉(灰釉)	雲母	粗ア	17C末～18C	見込部ノ字状線	78	52
CT145	H4 4層	小皿	9.4	3.6	2.7	唐花形 内面線刻鉄釉	灰釉(灰釉)(黒)	雲母	大型粗系	18C後～19C前	貿入磁器	78	52
CT146	A-D8 4層	小皿	–	3.2		見込段形文 方面線刻鉄釉	灰釉(灰釉)(黒)	中々密	大型粗系	18C後	貿入磁器	78	52
CT147	J6 4層	大碗	30.2	10.8	8.8	台付脚 5 巻風 蓮文・唐文・花蝶車文	灰釉(褐釉)(白)	雲母	粗系	17C後～18C前	内面目跡多数残	78	52
CT148	D15-F16 4層	大口碗	19.7		–	口縁部鉄釉(褐釉)(黒)(白)・多行	灰釉(灰黄褐系色)	雲	小型粗系	18C		78	52
CT149	4層	平皿鉢	24.4	–	–	内面線刻鉄しぼり 外面小線数々し	灰釉(灰黄褐系色)	中々密	堅ア	18C後半	鉄釉内面七宝文様刻	78	52
CT150	D8 4層	大鉢(碗)	7.3	6.6	11.5		灰釉(灰黒色)	中々密	大型粗系	18C第一半	貿入陶器 鉄釉に連行書	78	52
CT151	17 4層	鉢形	–	3.5	–		灰釉(灰褐色)	雲母	堅・粗系	不明	鉄釉文 線書 ゴ(下)?	79	53
CT152	A-B14 4層	徳利	–		–	見込(底)ノ字し 横行	鉄釉(灰黒系色)	雲母	粗ア	17C後半		79	53
CT153	10-11 4層	徳利口	2.9	10.0	19.5		鉄釉(黒色)	中々密	堅	18C	内面目跡多	79	53
CT154	C7 4層	木片下敷	11.5	6.0	2.5		灰釉(灰褐色)	雲母	好	17C～18C前	外面鉄釉 下面に漆書不明	79	53
CT155	H12 4層	灯明皿	10.9	6.9	2.3		鉄釉(黒褐色)	密	大型粗系	18C中	外面に線多数しぼ痕	79	53
CT156	C5・G13 4層	3号通用口層	12.6	4.2	2.9		灰釉(灰黄褐系色)	密	大型粗系	18C中～後	貿入磁器	79	53
CT157	H5 4層	壺	7.7	–	3.2		鉄釉(褐釉黒色)	中々密	強	18C	外面目跡 最大径10.5cm	79	53
CT158	B12 4層	壺	3.6		3.9		鉄釉(褐釉黒色)	雲母	滑ア・光沢	不明	外面目跡 最大径3.5cm	79	53
CT159	G15 4層	合子(蓋)	6.9	5.6	1.4		灰釉(灰黒)(白)	雲母	堅・粗系	18C～19C前	内面無釉 貿入磁器	80	53
CT160	E16 4層	鉄鉢?	5.2	3.3	3.2		鉄釉(灰褐色)	雲母	光沢	19C	貿入陶器	80	53
CT161	G4 4層	皿型	3.4	3.8	3.6		灰釉(褐黒系色)	雲母	大型粗系	18C		80	53
CT162	E14 4層	皿?	–		–	型打痕形	鉄釉(褐釉黒色)	雲母	不明	不明		80	53
CT163	D4 4層	大型香炉鉢	–	–	–	鉄釉(黒色) 高温横斜し 線多数ぐし格子文	黒土神	中々密	強硬	17C前	鉄釉薬 底部数穴痕跡	80	53
CT164	G13 1号通用口	八角	–	4.8	–	鉄釉(褐釉黒色) 10本文	灰釉(灰褐系)(白)	中々密	大型粗系	18C前		80	53
CT165	G8 4層	小平	5.4	2.9	2.8		灰釉(灰黒系色)	母岩	大型粗系	18C中		80	53
CT166	E14 3～2層	小瓶		4.2	–	青釉(灰釉灰色)流し 横行	灰釉(灰黒系色)	雲母	大型粗系	18C中		80	53
CT167	G11・G14 3～1層	中型香炉鉢	10.7	4.4	6.5	灰釉(無色)	鉄釉(無色)	密土	堅ア	18C後	香炉薬跡	80	53
CT168	D6 3～1層	小皿	34.5	7.4	5.6	見込(底)段	灰釉(灰黒系色)	雲母	不明	不明	貿入磁器	80	53
CT169	B12 2～1層	大型(壺)	–	–	–	鉄釉(褐黒系色) 文字文?	黒土神	中々密	強硬	17C前	底部	80	53
CT170	H17 2～1層	小皿	–	5.3	–	鉄釉(黒色)・粗高段見込文	灰釉(黒黒系色)	雲母	大型粗系	18C前	見込部は工場?跡痕	80	53
CT171	2～1層	平皿パン型?	4.4			型跡文	鉄釉(褐釉黒色)	中々密	小型	18C		80	53
CT172	G13 2 3層	灯明皿	4.8	–	–		灰釉(褐釉黒色)	雲母	不明	不明	墨汁皿?	80	53
CT173	A5 2層 土出遺構	小皿	–	7.9	–	見込段状(菊花)文 内面線刻鉄釉 平格成し	灰釉(灰黒色)	中々密	強硬	17C前	見込部 中央不安定の型跡?	80	54
CT174	2層 土器	仏器碗	–	4.4	–		灰釉(白)	雲母	大型粗系	18C	貿易? 加工痕 摩耗	80	54
CT175	西表面採集区	小皿	13.3	6.6	3.3	瑞獣雲文文 唐花(緑色)流し 横行	灰釉(灰黒系色)	雲母	強硬	17C中	鉄釉が 薬ア 鉄釉に変形	80	54
CT176	表面採集(西地区)?	小皿	–	6.7	–		灰釉(灰黒色)	雲母	強硬	18C後	鉄釉痕ノ字線	80	54
CT177	1号通用口西部表面	小皿		5.8	–	見込段状(菊花)文	灰釉(灰黒系色)	雲母	光沢	18C後	鉄釉痕ノ字線	80	54
CT178	19 L区 地区 C9 3層	大鉢	30.2	–	–	唐花(青緑色)流し 横行	灰釉(灰黒系色)	密土	強硬	17C前	当初用途・大小型跡痕 残存	79	49
CT179	14-2土坑	小瓶	3.1	–	–	灰釉(褐黒系色)流し 多行 横転	無釉	密	大型粗系	18C前～中		79	49
CT180	10号溝跡	大鉢	33.0	24.8	56.5		鉄釉(褐黒系色)	粗	軟	18C後～20C前	無頂部	81	54
CT181	15号溝跡	大鉢	58.3	28.6	98.9	見込(底)ノ字?	鉄釉(黒色)	粗	硬	18C後～20C	3段目 中に目跡? 5箇未開	81	54
CT182	1号溝 遺物溜	仏器碗	–		–	上段3本(灰釉)(白)	灰釉(灰褐色)	中々密	大型粗系	18C後～19C前		75	47
CT183	3号通用 表面採集区	中型丸碗	–	4.6	–	唐花(青色) 文様不明	灰釉(灰黒系色)(白)	雲母	粗ア	17C後半	高台内 木ヘラ痕 刻印	75	46

表29　武家屋敷跡第4地点出土土師質土器皿観察表
Tab.29　Notes on unglazed ceramic plates at BK4

登録番号	出土場所	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整 内面	調整 外面	調整 体部外面	調整 底面	胎土	焼成	残存	備考	図版	図版
CH001	F5 3b層	6.0	3.8	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		密	口縁		83	55
CH002	F・G4 3b層	7.2	3.9	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	石			83	55
CH003	F・G4 3b層	9.1	5.9	2.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	岸			83	55
CH004	F・G4 3b層	9.6	5.4	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	石			83	55
CH005	F7(中部排水) 3a層	3.9	2.6	1.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		不明			83	55
CH006	3号溝	4.6	3.4	1.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	左			82	55
CH007	4号溝	12.8	6.6	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		左			82	55
CH008	10号溝	11.2	6.7	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	石			82	55
CH009	1号土壙墓 鍛冶跡上	8.7	5.0	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	石	口縁		82	55
CH010	8号土坑 埋1層	6.1	3.1	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	石	口縁		83	55
CH011	10号土坑 埋1層	4.4	2.5	1.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	石			83	55
CH012	15号土坑 埋1層	10.2	5.6	2.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	右	全面黒色化		83	55
CH013	18号土坑 埋1層	6.1	3.6	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整		不明	口縁		83	55
CH014	25号土坑	6.5	4.2	1.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	右	口縁		83	55
CH015	26号土坑	8.4	4.3	2.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	右	口縁		83	55
CH016	1号井戸 埋2層	5.9	3.9	1.6	不明	不明	不明	回転糸切無調整	b	岸	内面 口縁		82	55
CH017	3号井戸 埋①～③層	8.1	5.0	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整		不明			82	55
CH018	ピット487(地鎮遺構1)	－	7.0	－	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	左			83	55
CH019	ピット487(地鎮遺構1)	12.8	6.8	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	石		底部に墨書「寅」	83	55
CH020	ピット797(地鎮遺構2)	9.1	5.4	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	b	石		合口の下	83	55
CH021	ピット797(地鎮遺構2)	9.6	5.2	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	不明		合口の下	83	55
CH022	ピット799(地鎮遺構3)	11.7	6.0	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	石		合口の下 底部に墨書「可北火」	83	55
CH023	ピット799(地鎮遺構3)	11.4	6.0	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	b	左		合口の下	83	55
CH024	26号柱列 柱3 表面	7.8	5.0	2.5	不明	不明	不明	不明		不明			82	55
CH025	H15西4 2号池 埋4層	11.5	7.4	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	石			82	55
CH026	H15・16 3号池 埋3b層	8.0	4.4	2.6	不明	不明	不明	不明		不明			82	55
CH027	G15・16 2号池 埋3b層	12.9	6.6	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整		不明			82	55
CH028	G15・16 2号池 埋3b層	－	6.2	－	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		不明		内面に横刷毛目	82	55
CH029	G15・16 3号池 埋3b層	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		不明		内面に墨書不明	82	55
CH030	B15 2号池 埋3b層	11.1	12.8	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	b	岸	全面黒色化		82	55
CH031	G13 2号池 埋3b層	8.3	5.6	2.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	左	口縁		82	55
CH032	G15 2号池 埋3b層	7.8	4.6	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		不明	口縁		82	55
CH033	F15 2号池 埋3a層	6.5	3.9	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		不明			82	55
CH034	G12 2号池 層位不明	6.6	3.6	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	b	左	口縁 内面の一部		82	55
CH035	A・B7 4層	6.8	3.7	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	b	左	口縁 底部外面黒色		83	55
CH036	A・B13 4層	5.7	3.3	1.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		不明	口縁		83	55
CH037	B3 4層	4.0	3.1	1.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	右	全面黒色化		83	55
CH038	G2 4層	12.0	6.6	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	左			83	55
CH039	G3 4層	11.2	7.0	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整		不明	口縁		83	55
CH040	G3 4層	7.1	3.5	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整		不明			83	55
CH041	E2 4層	9.8	5.8	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	石	口縁		83	55
CH042	G13 1号池 埋1層	10.9	6.3	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	右			83	55
CH043	G14 1号池 埋1層	8.4	4.4	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整	a	石	口縁		83	55
CH044	E15 2-3層	10.8	6.7	2.4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	不明		岸	全面黒色化		83	55

表30　武家屋敷跡第4地点出土土師質土器（皿以外）観察表
Tab.30　Notes on unglazed ceramics (except plates) at BK4

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考	図版	図版
CH045	3号池D 埋2層	焙烙	23.2	16.2	5.9		82	55
CH046	G15 2号池 埋3b層	焙烙	32.6	24.0	7.25	内耳	82	55
CH047	G5 5b層	焙烙	19.0	16.2	4.5		83	55
CH048	G15 2号池 埋4層	焼塩壺	7.0	5.2	10.8	外面体部下半格子目タタキ	82	55
CH049	F3・4 4層	鉄	7.6	－	－		83	55
CH050	A・B7・8 4層	紡錘り	8.0	－	－	内面にタール状の炭化物付着	83	55
CH051	C7 4層	火消壺蓋	9.9	－	1.8		83	55
CH052	B14 2-3層	灯心受付灯明皿	6.6	3.9	1.9		83	55
CH053	不明	有脚灯明皿	－	8.5	2.7	口縁部に炭化物付着	83	55

表31　武家屋敷跡 第4地点出土土人形・玩具観察表 (1)

Tab.31　Notes on clay figures and clay objects at BK4 (1)

遺構番号	出土場所	部位	高さ(cm)	幅 底径(cm)	厚 最大径(cm)	備考	図版	写真
C0001	F-G地区 表面	人形	裏A	5.2	–	–	土製質 手づくね 頭部の造型用か 成型で体形造型	86	58
C0002	G区 5a層	人形	西方正面A	4.9	4.2	2.9	土製質 前面全形作り 中央 眉描際口	86	58
C0003	D地区 2号墓 埋土5層	人形	頭部整形	–	–	–	土製質 中空なし 全面作り 大の人間形か 頭部に帽子 顔面に眉目	87	58
C0004	A-B6、E14、E-F12区 2号墓埋土5層	人形	七福神型	–	–	–	土製質 前面全形作り 中央 顔が四天	87	58
C0005	D地区 2号墓 埋土3層	人形	裏A	–	–	–	土製質 手づくね 頭部不明 成型で体形造型 左手に持ったものか 持つ	87	58
C0006	A-B5区 2号墓	人形	西方正面C	–	4.2	–	土製質 前面全形作り 中央 眉描際口 裏面不明 何かを手に持たない マーブル加工	87	58
C0007	3号墓P1 埋土1層	人形	裏A	4.3	–	–	土製質 手づくね 頭部のみ造形か 成型で体形表現	88	58
C0008	第1地区遺構2 埋土	人形	裏C	–	–	–	土製質 左右合せ作り 中央 顔部は見ず 背表は平面 ヘラ状工具による成型で体形表現	88	58
C0009	18号土坑 埋土1層	人形	裏A	–	–	–	土製質 手づくね 頭部不明 成型で体形表現 (簡単工具による本格品)	88	58
C0010	2号石敷遺 最下埋土	人形	天神形	5.0	3.9	1.3	土製質 角張った印象あり 背部に穴 型作り 型作り 型をもたない	88	58
C0011	神社4 4層	人形	七福神A	3.2	3.5	2.1	土製質 大黒天? 台形に近い印象 ひもかけ用か 紐を通す 紐穴	88	58
C0012	神社7 1層	人形	七福神B	–	–	–	土製質 大黒天? 崩れているとみられる 前面全形作り 中空	88	58
C0013	神社7 1層	人形	七福神C	2.8	1.8	1.6	土製質 大黒天? 前面全形作り 中空	88	58
C0014	G11区 4層	人形	武器?B	–	2.3	2.3	土製質 前面全形作り 中央	88	58
C0015	F4区 4層	人形	小女子A	2.9	1.9	1.1	土製質 表面に彩色 埋土整形 型作り	88	58
C0016	G3区 4層	人形	裏C	4.3	–	–	土製質 片面全形作り 中央 眉描際口	88	58
C0017	H3区 4層	人形	不明	–	–	–	土製質 外面に記による「注子」の開閉文字あり 全形作り 中央	88	58
C0018	G3区 4層	人形	裏C	4.8	3.8	3.0	土製質 前面に彩色 前面全形作り 中央 表面剥	88	58
C0019	H3区 4層	人形	裏A	–	–	–	土製質 左右合せ作り 中央	88	58
C0020	A-B6区 4層	人形	裏	–	–	–	土製質 左右合せ作り 中央	88	58
C0021	G17-18区 1-2層 焼土1層	人形	武?(頭部D)	–	–	–	瓦質 (陶土質か) 前面全形作り 型抜き記憶のみ 裏面	88	58
C0022	G3区 4層上面及び遺構	人形	裏イ?	–	2.9	3.5	土製質 前面全形作り 中空	88	58
C0023	H17区 3層	人形	七福神A	3.8	4.2	2.2	土製質 大黒天 型取は型作りかのように前に型は 前面のように使用するものか 型作り	88	58
C0024	G3区 3-5層	人形	裏ひかみ	–	–	–	土製質 表面に記 前面全形作り 中空	88	58
C0025	F3区 3層	人形	花鳥	–	3.0	–	土製質 前面全形作り 中空	88	58
C0026	G3区 3-5層	人形	裏C	3.3	1.7	2.7	土製質 左右合せ作り 中央 前面に「ばかをつけて	88	58
C0027	F4区 3層	人形	前掛手前?	–	–	–	土製質 印璽の周りでの記憶とみるべき 手づくね	88	58
C0028	C7区 3-5層	人形	人物B	–	–	5.1	土製質 裏手 前面全形作り 中空 眉描際口せず 骨太	88	58
C0029	D地区 2-4層	人形	山伏?B	2.8	2.4	1.7	粘質土質 表さん 前面全形作り 中央?	88	58
C0030	B11区 2-3層	人形	七福神B	–	–	–	土製質 芝太郎 前面全形作り 中央	88	58
C0031	G17区 2-3層	人形	武??A	–	–	2.6	土製質 前面全形作り 手型	88	58
C0032	B11区 2-3層	人形	裏A	3.8	4.6	2.9	土製質 手づくね 頭部のみ造型か 成型で体形表現 (簡単工具による本格品)	88	58
C0033	E1区 2-3層	人形	武(騎乗)	–	–	–	瓦質 左右合せ作り 中央	88	58
C0034	C3区 2-3層	人形	武A	–	–	–	土製質 武器に近い? 左右合せ作り 中央 裏ゆ	88	58
C0035	D6区 2-3層	人形	天神A	2.2	3.1	1.6	粘質土質 前面全形作り 中央 裏孔なし	88	58
C0036	C3区 2-3層	人形	武B	–	–	–	土製質 中央に穴あり 型作り 中央 眉描際口 十字に線の本体がのっていたとみられる	88	58
C0037	1層	人形	裏K	3.0	2.2	0.9	瓦質 型作り 中央	88	58
C0038	B3区 表土	人形	裏A	–	–	–	土製質 手づくね 黄緑に彩色の痕跡と認められる色の違う部分が見られる 表面で体形表現 マーブル加工	88	58
C0039	第8トレ 3層	人形	天人	4.3	2.3	4.9	土製質 芝太郎 前面全形作り 中央 顔が三角形 裏孔	88	58
C0040	墓不明	人形	裏C	–	2.1	–	土製質 左右合せ作り 中央 顔が三角形	88	58
C0041	F地区8層 7号墓埋土4層	馬型	鞍	7.2	6.0	2.8	粘質土質 表面不明 前面全形 胴部 胴部は部分的に中空 ロクロ成形方向不明	89	58
C0042	F-G4区 8層	馬型	鞍	2.0	3.0	5.5	粘質土質 表面不明 前面全形 胴部 胴部は部分的に中空 ロクロ成形方向不明	89	58
C0043	H-B-M6区 5層上面遺構	馬型	おとこ面	3.8	–	1.5	粘質土質 上面に赤チ 表面不明 前面全形 胴部 胴部は部分的 最大径2.2cm ロクロ成形	89	58
C0044	3号墓D	馬型	頭	3.9	1.8	1.1	粘質土質 表面不明 前面全形 胴部 胴部は中空 ロクロ成形	87	58
C0045	G-H10-16区 3号墓 埋土3層	馬型	鞍	5.9	2.7	3.5	粘質土質 表面不明 前面全形 胴部 ロクロ成形	87	58
C0046	D地区 2号墓 埋土3層	馬型	頭	9.6	3.9	2.1	粘質土質 表面不明 前面全形 胴部 胴部は部分的に中空 ロクロ成形	87	58
C0047	D地区 2号墓 埋土3層	馬型	おとこ面?	3.3	2.5	0.7	粘質土質 表面不明 前面全形 胴部 胴部は部分的に中空 ロクロ成形	87	58
C0048	3号墓P1 掘方埋1-2層	馬型	鞍内? A	5.9	2.9	2.5	粘質土質 表面不明 前面全形 胴部 (簡単) 胴部は中空 ロクロ方向不明	87	58
C0049	3号墓P1 埋土1層	馬型	鞍内? B	4.4	3.4	2.3	土質 ロクロ目がいくつかあるとみられる 胴部は中空	89	58
C0050	3号墓P1 埋土1層	馬型	頭体	5.6	3.3	1.9	粘質土質 表面不明 前面全形 胴部 胴部は中空 ロクロ成形	89	58
C0051	15号土坑 埋土1層	馬型	鞍	4.5	2.2	2.3	土質 表面不明 前面全形 胴部 ロクロ成形?	89	58
C0052	18号土坑 埋土1-3層	馬型	頭	5.2	–	–	粘質土質 上半身のみ 二頭部を前とするように前傾 胴部は部分的 最大径2.2cm	89	58
C0053	18号土坑 埋土1層	馬型	頭部	3.7			粘質土質 表面 上半身が前に前傾 5月頃? 前面全形 胴部は部分的 最大径2.2cm	89	58
C0054	18号土坑 埋土1層	馬型	頭	–	2.1	–	粘質土質 表面 表面不明 前面全形 胴部 胴部は中空のみ? 最大径2.2cm ロクロ成形	89	58
C0055	ピット194	馬型	鞍	–	1.9	–	土質 表面不明 前面全形 胴部 最大径1.8cm ロクロ成形	89	58
C0056	4号墓 4層	馬型	頭	3.3	1.7	1.0	粘質土質 表面 表面不明 前面全形 胴部 胴部は部分的 ロクロ成形	88	58
C0057	D地区 4層	馬型	おとこ面	2.9	–	1.4	土質 三角の印象 前面全形 胴部 最大径1.1cm ロクロ成形	88	58
C0058	D地区 5層	馬型	おとこ面	2.9	–	0.6	粘質土質 表面 表面不明 前面全形 胴部 胴部は部分的 最大径2.3cm ロクロ成形?	88	58
C0059	M14区 1号墓 埋土1層	馬型	鞍内? A	–	2.7	2.4	粘質土質 表面不明 前面全形 胴部 胴部は部分的 ロクロ成形?	88	58
C0060	H3区 撹乱	馬型	鞍	3.1	4.2	4.7	粘質土質 表面不明 前面全形 胴部 表面にカキメ 瓦? 胴部は部分的 体形に前傾による調文 最大径4.4cm ロクロ成形?	90	59
C0061	調査区東側1層撹乱	馬型	おとこ面	2.9	–	0.9	粘質土質 上面に型による? 型取文様 (海石?) 胴部は部分的	90	59
C0062	G3区 5a層	馬型	不明	2.6	3.0	1.4	土質 あるいは人形の持ち物か	89	59
C0063	G8区 5a層	馬型	荷物?	–	1.8	2.6	土質質 何かに使用していたとみられる あるいは人形の持ち物か 手づくね多量	89	59

表32　武家屋敷跡 第4地点出土土人形・玩具類察表 (2)

Tab.32　Notes on clay figures and clay objects at BK4 (2)

登録番号	出土場所	器種	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	備考	図	図版
C0064	H17区 1号溝 埋土1層	仏笛	3.9	3.5	3.2	土師質	87	59
C0065	G12区 2号住 埋土9層	仏具	土製品A	－	－	－	土師質 外面に粘土による幾何学文様 器壁の厚さ0.6cm	87	59
C0066	G12区 2号住 埋土9層	仏具	土製品A	－	7.8	－	土師質 一部に黒彩つの痕があられる 器壁の厚さ0.8cm あるいは実用品か	87	59
C0067	B・C16区 2号住 埋土3層	仏具	土製品A	－	－	－	土師質 短軸に沿ってによる文様 短軸直径で完全な 短軸中心部に穴	87	59
C0068	H14区 2号住 埋土9層	仏具	鈴	－	2.7	2.6	土師質 内面上部に2穴 下の穴は横長にかかれる	87	59
C0069	A・B12区 2号住	仏具	土製品？	－	－	－	土師質	87	59
C0070	10号土坑 埋土1層	仏具	手捻容器	－	－	－	土師質 対角線部分で折合せ	88	59
C0071	21号土坑	仏具	方形容器	－	6.0	5.5	土師質 相対する二辺に凹形の窓部があられる 器壁の厚さ0.7cm	88	59
C0072	4層	仏具	器不	－	1.7	6.6	土師質 手づくね 中央部がやや くぼむ	88	58
C0073	表土 4層	仏具	軍用砂時計	3.6	－	3.1	土師質 片面に凹状による軍歌状文様 手あぶり部は 文様のない側は平坦	88	59
C0074	A・B区 4層	仏具	軍用砂時計	3.7	－	3.2	土師質 片面に凹状による軍歌状文様 中央に穴あり 文様のない側は二段ずつ	88	59
C0075	F16 4層	仏具	有文円板	－	－	0.3	土師質 片面に凹状による線・線状文様（図中下部） 上端部に 文様のない側は平坦	88	59
C0076	A・B16区 4層	仏具	不明	－	－	－	瓦質 本来の形状または井用途で全体の形のものに限合していたとみられる部位あり	88	59
C0077	H16区 4層	仏具	小円	－	－	－	白色粘土の周囲に粘土（赤）色面に粘による文様あり 側板のものの 部か	88	58
C0078	G16区 3層	仏具	円筒	－	－	－	赤褐色 胴部部分に線刻 横に平行する 角内に穴あり	88	59
C0079	C14区 2・3層	仏具	蓋石	1.3	1.8	0.5	土師質	88	59
C0080	G12区 2　3層	仏具	鈴鐘？	－	－	－	白色粘土に緑色の釉薬（黒色？）が部分的に被覆されあり 水滴をかこむ一部か	88	59

表33　武家屋敷跡第4地点出土軟質施釉土器類察表

Tab.33　Notes on lead glazed soft ceramics at BK4

登録番号	出土場所	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考	図	図版
CN001	F・G4区南層 2号住	鍋	11.9	5.3	4.5	鉛釉	89	55
CN002	1号石敷遺 撹乱	鉢	9.3	5.0	3.1	鉛釉	89	55
CN003	10号土坑埋土層 H12区4層	壺蓋	12.7	10.2	5.9	鉛釉 胴部付	89	55
CN004	16区 4層	鍋	13.5	－	5.3	鉛釉 内外面に炭化物付着	89	55

表34　武家屋敷跡第4地点出土近世・近代瓦類察表

Tab.34　Notes on roof tiles belonging to Edo and modern period at BK4

登録番号	出土場所	種類	特徴	図	図版
T001	I17 1号溝 埋1層	軒丸瓦	三巴文(左巻) 瓦当直径16.7cm 瓦当内径12.2cm 周縁幅2.7cm	91	60
T002	E17 1号溝 埋1層	軒丸瓦	連珠三巴文(左巻) 周縁幅2.2cm	91	60
T003	試掘6 3層	軒丸瓦	九曜文 周縁幅2.5cm	91	60
T004	ピット637	菊丸瓦	菊花文?頭	91	60
T005	7号住居 住5 撹乱	丸瓦	(二葉)+唐草4類	91	60
T006	B15 4層	軒平瓦	(隅切折敷に三文字？)+唐草1a類 瓦当面に刻印(丸に山に「寸」)	91	60
T007	1号池 埋1層	軒平瓦	？+唐草3類	91	60
T008	E・F-3・4 2層上面	軒桟瓦	小巴文様：不明 脚部：二引回+唐草1a類	91	60
T009	D・E 16 方形撹乱	軒桟瓦	石持 桟長17.5cm 垂れ幅4.2cm	91	60
T010	C15 2号池 埋2a層	丸瓦	玉縁幅14.2cm 玉縁長4.0cm 胴長24.7cm 高7.0cm 凹面：コビキ(B) ×台口→棒状圧痕	91	60
T011	H10 3～3層	丸瓦	玉縁は凹側から切り込みのあるが、玉縁を形成しない 凹面：コビキ(B)→台口 →横面端部の横の圧痕	92	60
T012	D8 3～1層	丸瓦	凸面に斜格子叩き痕 凹面は明瞭な台目(コビキは不明) 横断面はやや多角形を呈す	92	60
T013	ピット566	丸瓦	凸面(玉縁近くの胴部)に刻印(「○」)	91	60
T014	3号井戸 埋2層	平瓦1類	胴幅23.8cm 凹幅24.5cm 長さ8.8cm 厚さ1.3cm 凸面：凹形石の痕跡とみられる木目 ×部分的にナデ 凹面：全面ナデ痕なし	92	61
T015	1号石敷遺 撹乱	平瓦1類	胴部(凹面を除く)に縄状(斜格)叩 胴土は比較的多角形を呈する 凸面：木口痕→ナデ 凹面：全面 を左方向ナデ上げ(ナデ)	91	60
T016	G16 2　3層	平瓦1類	胴または凹側端面にごく浅い刻印(四角に「寸」) 近代桟瓦か	91	60
T017	4号建物跡 内部南北石列	平瓦1類	頭または凹側端面にごく浅い刻印(四角に「寸」) 近代桟瓦か	91	60
T018	試掘6 1号溝 埋3層	桟瓦	全長30.4cm 全幅25.8cm 垂れ幅5.7cm 上端25.7cm 凹側以幅4.2cm 凸面は格子 (縦線上端を横線)、側辺は、凸面は凹側端面を、頭部は、を平滑に仕上げ	92	61
T019	3層	桟瓦	全長32.3cm 全幅24.4cm 垂れ先を凸側を切り、側面端は、凸面は凹側に近接 凹側は中央に仕上 げるが凸側はデラついている 後の凸面側端面を縦に2回ヒッ切りする	92	61
T020	B15 3層	桟瓦	形状は19に同じ(側戸台体かどうか止不明) 頭または凹側端面に刻印(丸に山に「寸」)	91	60
T021	C17 1号溝 埋1層	鬼瓦	立体的な貼り付けによる雲形文様	91	60
T022	試掘6 1号溝 埋2層	鬼瓦？	鬼瓦の背面の取手か	91	60
T023	G12 1号池 埋1層	飾り瓦	波に浮かぶ亀　中腹部分には型を使用か	91	60

表35　武家屋敷跡第4地点出土古銭観察表（1）

Tab.35　Notes on coins at BK4 (1)

登録番号	出土場所	銭名	外径(mm)	穿径(mm)	重量(g)	備考	図	図版
MC001	ピット799(地鎮3)カワラケ内	永楽通寶	24	6	2.0	一部欠損 MC001から011まで一括出土 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC002	ピット799(地鎮3)カワラケ内	永楽通寶	24	6	3.1	完形 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC003	ピット799(地鎮3)カワラケ内	永楽通寶	24	6	3.0	完形 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC004	ピット799(地鎮3)カワラケ内	永楽通寶	24	6	3.9	完形 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC005	ピット799(地鎮3)カワラケ内	永楽通寶	25	6	3.8	一部欠損 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC006	ピット799(地鎮3)カワラケ内	永楽通寶	25	6	2.4	一部欠損 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC007	ピット799(地鎮3)カワラケ内	永楽通寶	25	6	2.4	完形 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC008	ピット799(地鎮3)カワラケ内	永楽通寶	24	6	2.3	完形 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC009	ピット799(地鎮3)カワラケ内	永楽通寶	25	6	2.5	完形 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC010	ピット799(地鎮3)カワラケ内	永楽通寶	24	6	2.0	完形 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC011	ピット799(地鎮3)カワラケ内	永楽通寶	25	6	2.2	一部欠損 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC012	ピット487(地鎮1)カワラケ内	永楽通寶	25	6	1.4	1/6欠損 錆化顕著 MC012から023まで一括出土 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC013	ピット487(地鎮1)カワラケ内	永楽通寶	24	6	2.0	一部欠損 錆化顕著 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC014	ピット487(地鎮1)カワラケ内	永楽通寶	24	6	2.2	完形 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC015	ピット487(地鎮1)カワラケ内	永楽通寶	24	6	2.0	一部欠損 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC016	ピット487(地鎮1)カワラケ内	永楽通寶	24	6	2.0	完形 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC017	ピット487(地鎮1)カワラケ内	永楽通寶	24	6	2.6	一部欠損 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC018	ピット487(地鎮1)カワラケ内	永楽通寶	24	6	2.0	完形 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC019	ピット487(地鎮1)カワラケ内	永楽通寶	24	6	1.8	一部欠損 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC020	ピット487(地鎮1)カワラケ内	永楽通寶	24	6	2.7	完形 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC021	ピット487(地鎮1)カワラケ内	永楽通寶	24	6	2.5	一部欠損 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC022	ピット487(地鎮1)カワラケ内	永楽通寶	24	6	2.3	完形 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC023	ピット487(地鎮1)カワラケ内	永楽通寶	25	6	2.7	完形 明銭（1408年初鋳）	93	62
MC024	26号土坑	寛永通寶（古寛永）	23	6	1.4	完形 錆化顕著	93	62
MC025	3号溝	寛永通寶（新寛永）	—	7	0.8	一部欠損 錆化顕著		
MC026	4号溝	寛永通寶（古寛永）	25	6	1.7	一部欠損	93	62
MC027	G12 2号池 瓦3b層	永楽通寶	—		0.4	3/4欠損 明銭（1408年初鋳）		
MC028	H5 2号池 瓦2b層	寛永通寶（古寛永）	24	6	1.9	一部欠損 錆化顕著	93	62
MC029	E15 3号池 瓦2a層	寛永通寶（六寛永）	—	6	1.8	1/2欠損 錆化顕著		
MC030	G13 1号池	寛永通寶（古寛永）	24	6	2.8	完形 MC030から045まで一括出土	93	62
MC031	G13 1ウ池	寛永通寶（六寛永）	25	6	3.2	完形	91	62
MC032	G13 1号池	寛永通寶（新寛永）	22	7	1.7	完形	94	63
MC033	G13 1ウ池	寛永通寶（新寛永）	22	7	2.0	完形	94	63
MC034	G13 1号池	寛永通寶（新寛永）	22	6	2.2	完形	94	63
MC035	G13 1ウ池	寛永通寶（新寛永）	23	6	2.2	完形	94	63
MC036	G13 1号池	寛永通寶（新寛永）	23	6	3.0	完形	94	63
MC037	G13 1ウ池	寛永通寶（新寛永）	23	6	2.7	完形 （「八ネ永」）	94	63
MC038	G13 1号池	寛永通寶（新寛永）	23	6	2.9	完形 （「八ネ永」）	94	63
MC039	G13 1ウ池	寛永通寶（新寛永）	23	6	2.4	完形 （「八ネ永」）	94	63
MC040	G13 1号池	寛永通寶（新寛永）	24	6	2.1	完形 （「虎の尾寛」）	94	63
MC041	G13 1号池	寛永通寶（新寛永）	24	6	2.7	完形 （「金二永永」）	94	63
MC042	G13 1ウ池	寛永通寶（新寛永）	24	6	2.9	完形	94	63
MC043	G13 1号池	寛永通寶（新寛永）	24	6	3.4	完形	94	63
MC044	G13 1ウ池	寛永通寶（新寛永）	25	6	3.2	完形	94	63
MC045	G13 1号池	寛永通寶（新寛永）	25	6	3.2	背「佐」 完形 （佐渡相川銭）	94	63
MC046	G13 1号池	寛永通寶（新寛永）	22	7	1.9	完形 MC046から049まで一括出土	94	63
MC047	G13 1号池	寛永通寶（新寛永）	22	7	1.7	完形	94	63
MC048	G13 1号池	寛永通寶（新寛永）	22	7	1.8	完形	94	63
MC049	G13 1号池	寛永通寶（新寛永）	23	6	2.3	完形	94	63
MC050	I5 5a層	寛永通寶（新寛永）	23	7	1.7	一部欠損 錆化顕著 文字詳細不明	—	—
MC051	I5 5a層	寛永通寶（新寛永）	22	6	1.9	完形 錆化顕著 文字詳細不明	—	—
MC052	I5 5a層	寛永通寶	22	7	1.5	1/6欠損 錆化顕著	—	—
MC053	M4 4層	寛永通寶（新寛永）	24	6	2.4	ごく一部欠損 錆化顕著		
MC054	F5 4層	寛永通寶（新寛永）	—	6	0.3	2/3欠損 錆化顕著 文字詳細不明	—	—
MC055	G2 4層	寛永通寶（六寛永）	25	6	2.9	一部欠損	—	—
MC056	I8 4層	寛永通寶（古寛永）	24	6	1.5	1/5欠損 錆化顕著	—	—
MC057	A・B11 4層	寛永通寶（新寛永）	25	6	2.6	一部欠損	—	—
MC058	D9 4層	寛永通寶（新寛永？）	23	6	1.1	1/4欠損 錆化顕著 文字詳細不明	—	—
MC059	E4 4層	寛永通寶（新寛永）	25	6	2.4	完形 錆化顕著	—	—
MC060	E4 4層	寛永通寶（新寛永）	—	6	1.6	1/5欠損 錆化顕著	—	—
MC061	F3 4層	寛永通寶（新寛永）	21	6	1.6	一部欠損 錆化顕著	—	—
MC062	F3 4層	寛永通寶（新寛永）	25	6	2.0	1/2欠損	—	—
MC063	F5 4層	寛永通寶（新寛永）	23	7	1.6	完形	—	—

表36　武家屋敷跡第４地点出土古銭観察表 (2)

Tab.36　Notes on coins at BK4 (2)

登録番号	出土場所	銭名	外径(mm)	穿径(mm)	重量(g)	備考	図	図版
MC064	F5 4層	寛永通寶（新寛永）	24	6	3.0	完形	－	－
MC065	G3 4層	寛永通寶（新寛永）	－	－	1.8	1/2欠損	－	－
MC066	G3 4層	寛永通寶（古寛永）	24	6	3.5	一部欠損 錆化顕著	－	－
MC067	H3 4層	寛永通寶（新寛永）	23	6	3.2	一部欠損 錆化顕著	－	－
MC068	H3 4層	寛永通寶（新寛永）	23	7	2.5	一部欠損 錆化顕著	－	－
MC069	H4 4層	熙寧元寶（古寶）	24	7	2.0	北宋銭（1068年初鋳）一部欠損	94	63
MC070	H4 4層	寛永通寶（新寛永）	23	6	2.4	完形 錆化顕著	－	－
MC071	D3 4層上面	寛永通寶（新寛永）	24.5	6	1.4	1/2欠損 錆化顕著	－	－
MC072	D10 4層上面	寛永通寶（新寛永）	22.6	6.4	1.3	一部欠損 錆化顕著 文字詳細不明	－	－
MC073	E4 4層上面	寛永通寶（新寛永）	23	6	2.6	完形 錆化顕著	－	－
MC074	H5 4層上面	寛永通寶（新寛永）	23	7	3.1	完形	－	－
MC075	H4 4層上面	寛永通寶（新寛永）	24	6	2.6	完形 錆化顕著	－	－
MC076	G6 3-3層	寛永通寶（文銭）	25	6	2.3	一部欠損 錆化顕著	－	－
MC077	B16 3-1層	寛永通寶（新寛永）	－	6	0.7	1/2欠損 錆化顕著 文字詳細不明	－	－
MC078	H6 3-3層	寛永通寶（文銭）	25	6	2.1	一部欠損	94	63
MC079	A・B7 3層	寛永通寶（古寛永）	24	6	3.4	一部欠損	－	－
MC080	A・B14 3層	寛永通寶（古寛永？）	－	6	0.7	1/2欠損 錆化顕著	－	－
MC081	I8 2　4層	寛永通寶（古寛永）	24	6	3.0	一部欠損	－	－
MC082	C14 2-3層	寛永通寶（古寛永）	24	6	2.0	完形 錆化顕著	－	－
MC083	D15 2-3層	寛永通寶（新寛永）	24	6	2.7	一部欠損 錆化顕著	－	－
MC084	E15 2-3層	寛永通寶	22	7	1.1	一部欠損 錆化顕著	－	－
MC085	E15 2-3層	寛永通寶（新寛永）	25	6	3.2	背「元」完形 銭貨相同銭	94	63
MC086	E15 2-3層	寛永通寶（新寛永）	23	6	2.5	完形 錆化顕著	－	－
MC087	E16 2-3層	寛永通寶（新寛永）	－	6	1.1	1/2欠損	－	－
MC088	F16 2-3層	寛永通寶（古寛永）	－	6	1.6	1/2欠損 錆化顕著	－	－
MC089	2列上面溝掃	寛永通寶（古寛永）	25	6	2.5	一部欠損	－	－
MC090	1号建物基礎西辺	寛永通寶（新寛永）	23	7	1.6	一部欠損 錆化顕著	－	－
MC091	C12 1号土坑	寛永通寶（新寛永）	23	7	1.8	完形	－	－
MC092	B6~G1 土管裏側	寛永通寶（文銭）	25	6	3.1	完形 錆化顕著	－	－
MC093	土管掘出	寛永通寶（新寛永）	24	7	1.1	1/2欠損 錆化顕著 文字詳細不明	－	－
MC094	D8検溝九不明	銭未鋳	－			詳細不明	－	－
MC095	区・層位不明	寛永通寶（古寛永）	24	6	3.2	完形	－	－
MC096	F5 層位不明	至道元寶（真書）	22	6	1.6	北宋銭（995年初鋳） 1/4欠損	94	63
MC097	表採	寛永通寶（新寛永）	23	7	2.4	完形「寸二ホ」	－	－
MC098	H8 3-3層	延永通寶（古寛永）	24	6	1.3	完形 錆化顕著	－	－
MC099	I11 3-3層	寛永通寶（新寛永）	－	7	0.6	1/2欠損	－	－
MC100	中庭南区 層位不明	寛永通寶（新寛永）		－	0.8	2/3欠損	－	－

表37　武家屋敷跡第４地点出土漆器観察表

Tab.37　Notes on lacquerewares at BK4

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	備考	図	図版
W001	3号井戸 埋没層	椀身	13.6	－	－	外面黒地菊紋？（白黄）内面赤	口縁部下穿孔３箇所	99	67
W002	15号土坑 埋土層	不明	－	－	－	外面黒地菊花文（赤）内面赤		－	67
W003	25号土坑	不明	－	－	－	外面黒地菊花文（赤）内面赤		－	67
W004	3号井戸 埋土層	不明		－	－	外面赤地菊花文（金？）		－	67
W005	3号井戸 埋土層	不明	－	－	－	外面黒地三引両文（赤）内面赤		－	67
W006	ピット1016	不明	－	－	－	外面黒地寒紋？（菊花・巴・手毬）嵌らし（赤）		－	67

表38　武家屋敷跡第４地点出土煙管（雁首）観察表

Tab.38　Notes on pipes (stems and bowls) at BK4

登録番号	出土場所	全体形状	火皿形状	接合方法	雁部アワセノ	全長(mm)	火皿直径(mm)	ラウ口直径(mm)	備考	図	図版
MO002	3号井戸 埋土4・3c層	IIB	－	3	左	－	－	11		99	64
MO003	H12区 4層	IC	2b	2	左	63	11	10	MO008と対 内部に墨字遺存	95	64
MO007	D4区 4層	I	－	－	上	－	18	9		95	64
MO008	C16区 4層	IIC	1b	3	－	－	14	－	MO023と対	95	64
MO009	C6区 4層	IC	2b	3	左	26	14	12		95	64
MO010	F4区 4層	IB	－	－	左	－	－	9		95	64
MO011	D5区 4層	IIC	2b	3	上	27	14	9		95	64
MO012	D16区 4層	IIC	1b	3	上	48	13	13		95	64
MO014	H8区 3-3層	IIB	1b	2		58	12	10		95	64
MO016	H6区 2-4層	IIB	1b	3	左		13	－		95	64
MO017	D6区 2-2層	IIC	－	3	左	－	－	10	梅花文嵌らし 内部に墨字遺存	95	64

表39　武家屋敷跡第４地点出土煙管（吸口）観察表
Tab.39　Notes on pipes (mouthpieces) at BK4

登録番号	出土場所	全体形状	全長(mm)	ラウロ直径(mm)	吸口直径(mm)	備考	図	図版
MO001	ピット545	IIB	－	9	－		95	64
MO004	H12区 4層	IIA	78	9	5	MO003と対 内部に銀手遺存	95	64
MO005	F8区 4層	IIA	－	－	－		95	64
MO006	H4区 4層	IIB	－	10	－		95	64
MO013	H4区 4層	IIB	－	8	－		95	64
MO013	A11区 3層	IIB	50	11	7		95	64
MO023	C16区 4層	IIA	－	13	－	MO008と対	95	64

表40　武家屋敷跡第４地点出土その他の金属製品観察表
Tab.40　Notes on various metal implements at BK4

登録番号	出土場所	器種	材質	備考	図	図版
MO019	F-G4 5層	海流錘	鋼系		94	63
MO019	F3 4層	屋敷錘	鋼系		94	63
MO020	A-B10 3層	釘	鋼系		96	65
MO021	H3 3-3層	釘	鋼系		96	65
MO022	C36 2-3層	釘	鋼系		96	65
MO024	B8-C8 5a層	輪状２	金	片面に銀刺	96	64
MO026	H15 2号炉 焼土層	文錘	鋼系	32.5g	96	64
MO028	G14 2号炉 掘上層	円貨	鋼系		96	64
MO027	ピット817	切刃	鋼系	錆ハキ	96	64
MO029	3号炉D	安定	鋼系		96	65
MO029	2号炉F 焼土層	不明	鋼系	錆ハキ(小)	96	65
MO030	F4 4層	指金具	鋼系		96	64
MO031	E3 4層	鋲	銅系		96	64
MO032	H5 2号炉 焼土層	ベラ状製品	鋼系		96	65
MO033	D15 2号炉 掘上層	鞭状金具	鋼系		96	63
MO034	H5 3b層	小柄	鋼系		96	65
MO035	F7 5a層	釘	鋼系		96	65
MO036	1号炉J 焼土層	釘	鋼系		96	65
MO037	4層	鋲	鋼系		95	64
MO038	H3 4層	鋲	真鍮		95	64
MO039	A-B13 4層	鋲	鋼系		95	64
MO040	G11区内 2号炉 掘上層	鋲	銅	21.5g	96	65
MO041	A-B12 4層	錘	鉛	12.0g	96	65
MO042	G3 3層	錘	鉛	30.9g	96	65
MO043	H15 2号炉 掘上層	配錘	鉛	94.1g		65
MO044	10号土坑 掘上層	鉛管	鉛	一部開口 93.0g	96	65
MO045	H16 4層	円錘	鉛	6.5g	96	65
MO046	ピット71	不明	鉄		96	65
MO047	3号炉F 掘上層	小刀	鉄		96	65
MO048	1号溝	不明	鉄		96	63
MO049	A-D17 1号溝 上層	小刀	鉄		－	65
MO050	C31 4層	釘	鉄		96	63
MO051	H4 4層	ミニス弾	鉛	29.9g	95	64
MO052	H4 4層	ミニス弾	鉛	24.4g	95	64

表41　武家屋敷跡第４地点出土石製品観察表
Tab.41　Notes on stone implements at BK4

登録番号	出土場所	器種	石材	特徴	図	図版
SO002	G11区 4層	硯	粘板岩	縁7.3cm 厚0.3cm	97	66
SO003	A-B14区 4層	硯	粘板岩	新用跡あり	97	66
SO001	D18区 4層	磨石	輝緑片岩	縁8.3cm	97	66
SO004	A-B13区 5-3層	砥石	石英安山岩	被熱	97	66
SO005	G15-16区 2号炉 焼土層	砥石	緑泥片	被熱した跡あり 縁石として再利用	97	66
SO006	G16区 2号炉 焼土層	砥石	石英安山岩		97	66
SO007	G5区 4層	砥石	石英安山岩		97	66
SO008	H7区 2層	砥石	石英安山岩		97	66
SO009	H4区 2-3層	砥石	石英安山岩		97	66
SO010	1号溝 焼土層	砥石	石英安山岩		97	66
SO011	B14区 掘上	砥石	石英安山岩		98	66
SO012	G4-5層 5-7層	砥石	石英安山岩		98	66
SO013	C18区 2号層 焼土層	火打石	玉髄		98	66
SO014	F14区 3号層 掘上層	火打石	石英		98	66
SO015	B11区 4層	火打石	石英		98	66
SO016	C13区 掘上層	火打石	石英		98	66
SO017	G4区 5b層	赤石（仮）	粘板岩	縁幅 最厚 最幅2.4cm 厚0.3cm 厚0.4cm	98	66
SO018	H3区 5a層	赤石（仮）	粘板岩	凹穴 縁型 長幅2.3cm 短幅2.2cm 厚0.3cm	98	66
SO019	H7区 1号炉 焼土層	赤石（仮）	粘板岩	小形凹穴 縁型 長幅1.8cm 短幅1.7cm 厚0.6cm	98	66
SO020	3号炉F 掘上5-3層	赤石（仮）	緑泥変質安山岩	縁型 凹穴	－	－
SO021	ピット236	赤石（仮）	粘板岩	凹穴 縁型	－	－
SO022	1号木製桶底溝跡	赤石（仮）	粘板岩	1穴 縁型	－	－
SO023	1号石敷跡 掘方	赤石（仮）	緑泥変質安山岩	凹穴 縁型 長幅2.2cm 短幅2.3cm 厚0.4cm	98	66
SO024	G15-16区 2号炉 焼土層	赤石（仮）	粘板岩	縁型 厚板	－	－
SO025	G15区 3号炉 焼土層	赤石（仮）	粘板岩	凹穴 縁型	－	－
SO026	G16区 2号炉 焼土層	赤石（仮）	粘板岩	凹穴 縁型	－	－
SO027	G15区 4号炉	赤石（仮）	粘板岩	1穴 縁型	－	－
SO028	C7区 4層	砥石	緑泥片	表面（刃）に 研ぎ痕 縁幅1.3cm 厚0.4cm	98	66
SO029	A-B13区 4層	不明	石英安山岩質凝灰岩	長径3.5cm 厚0.7cm	98	66
SO030	E-F17区 1号溝	墨壺(下)?	雲母片岩		98	66
SO031	G15区 3号炉 焼土層	火打石	石英		98	66
SO032	G14区 1号炉 焼土層	火打石	石英		98	66
SO033	B14区 掘上	火打石	石英		98	66

表42　武家屋敷跡第４地点出土ガラス製品観察表
Tab.42　Notes on glass implements at BK4

登録番号	出土場所	器種	特徴	図	図版
G001	B8区 3号炉 焼土層	容器(徳利?or灯?)	青色 型吹き	99	67
G002	G6区 5a層ほか	容器	緑色 型吹き	－	67
G003	G9区 4層	瓶	透明 縁0.7cm	99	67
G004	H1区 4層	珠	黒色 縁0.7cm	99	67
G005	B8・C8区 4層	珠	緑色 最大3cm 3cm	99	67
G006	E14区 4層	珠	赤色 区平 縁0.4cm	99	67
G007	H3区 4層	珠	黒色 縁不	－	67
G008	D13区 2-3層	珠	青灰 最大縁0.6cm	99	67
G009	E14区 2-3層	珠	黒色 縁不	－	67
G010	9号土坑 掘上層	容器(徳利)	緑色 型吹き縁0.7cm	99	67
G011	H5区 4層	不明	透明？ 型吹き 厚5 (縁A) 0.8cm 縁0.2cm	99	67

表43　武家屋敷跡第４地点出土骨角製品観察表
Tab.43　Notes on bone and antler implements at BK4

登録番号	出土場所	種類	特徴	図	図版
B001	G12-H5区 2-3層	櫛	歯不保 現幅0.8cm 厚3.0.3cm	99	67

表44　武家屋敷跡第４地点出土その他の遺物観察表
Tab.44　Notes on various implements at BK4

登録番号	出土場所	種類	特徴	図	図版
O001	28号土坑	鉄鏃(矢束)	鏃部の鏃既欠損 鏃部幅の大きさは最長15cm程度と推定される	99	67・68
O002	3号溝	鉄鏃?		－	67
O003	ピット689	金型?		－	67
O004	ピット87	鏃?	鏃	－	67

表45　武家屋敷跡第４地点出土縄文土器・弥生土器・須恵器・古代の瓦観察表
Tab.45 Notes on Jomon pottery, Yayoi pottery, Sue ware and ancient roof tiles at BK4

登録番号	出土場所	種類	特徴	図	図版
C2001	G6区 6a層	弥生土器 高坏	高坏口縁部 平行線と変形U字文の一部が展開する 弥生前期後半の山王田層式土器	56	35
C2002	D6区 6a層	弥生土器 鉢	鉢口縁部 細い沈線による縦羽文 弥生中期中頃の樫彫洞式土器	56	35
C2003	B3・4区 6層	弥生土器 壺	粗製壺体部下半 細く間隔の狭い櫛状縦文 胎土層はクズリ 樫彫洞式土器	56	35
C2004	G5区 6a層上面	縄文土器 深鉢	深鉢口縁部 大きな波状口縁 太い横線がめぐる	56	35
C2005	H5区 6層上面	弥生土器 壺	壺口縁部 緩やかに外開する口縁部 体部には縄文 弥生中期中頃の樫彫洞式土器	56	35
C2006	F5区 5b層	弥生土器 小型鉢	小型鉢の体部上半 細い沈線の平行線と連弧文 磨かれている 弥生中期樫彫洞式土器	56	35
C2007	A・B13区 5層	弥生土器 器種不明	壺か深鉢の体部 LR縄行縄文が段組し施される 弥生中期中頃の土器とみられる	56	35
C2008	16号土坑	弥生土器 深鉢	浅鉢深鉢の口縁部 平坦1線に平行線2 櫛描縄文手法 LR縄文 10と同一個体	56	35
C2009	D6区 5層	弥生土器 鉢	鉢の底部 風化著しく縄紋調整は不明 高底に木葉痕	56	35
C2010	13号建物跡 柱4・5	弥生土器 深鉢	浅鉢深鉢の体部 2条の太い沈線で山形文が描かれ縦櫛縄文手法がみられる 弥生中期前半	56	35
C2011	3号墓D 埋2層	弥生土器 壺	鉢形器式壺 口縁部は強く外反し櫛ナデの装飾 頸部には平行線2条 体部に細かな縦縄文が施開する	56	35
C2012	A・H5区 4層	弥生土器 深鉢	浅鉢深鉢の体部 太い荒縄文による入組文が展開し縦櫛縄文手法がみられる 弥生中期前半	56	35
C2013	H5区 3-5層	弥生土器 鉢	鉢器鉢体部 LR縄文が4段展開 焼成良好 鉢形鉢半から弥生前期の土器	56	35
C2014	A・H5区 層位不明	弥生土器 小形鉢	小型鉢 太い荒縄の平行線文2条鉢線1条が展開 口縁部内面にも1条の沈線がめぐる 弥生前期後半山王田層式古段階の鉢	56	35
C2015	区・層位不明	弥生土器 小形鉢	小型鉢 荒縄の入組文あるいは櫛状文が施される 中期前半の弥生土器	56	35
C2016	区・層位不明	弥生土器 壺	大型甕の体部 細く浅い沈線で平行線2条と鉢線が施される 体部下半に縦文が施文される 中期中頃の樫彫洞式土器	56	35
C2017	H6区 3号畝C 埋3層	軒平丸	手捏き瓦質丸 [illegible]瓦 多賀城政庁I期 只の出土遺構	56	35
C2018	F17区 2-5層	須恵器 瓦	胴部破片	56	35
C2019	E14区 3-1層	平丸	凸面ヘラ削り　面取り→ナデ　多賀城政庁II期	56	35
C2020	G13区 3-3層	平瓦	凸面ヘラ削り　周縁部→ナデ　多賀城政庁II期　一枚作り	56	35

表46　武家屋敷跡第４地点出土石器類観察表
Tab.46 Notes on stone tools at BK4

登録番号	出土場所	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考	図	図版
ST001	E5 6層	石斧	22.0	7.3	4.5	0.6	玉髄		57	36
ST002	3～6列 5b層	石鏃	(18.3)	8.8	4.0	(0.6)	玉髄	先端部破片	57	36
ST003	13号建物跡 柱4・5	石錘	34.0	16.4	4.1	1.1	硅化凝灰岩		57	36
ST004	G15 2号池 埋3a層	石鏃	(17.6)	10.1	4.0	(0.7)	玉髄	先端部折損	57	36
ST005	A・B13 4層	石錐	(25.3)	18.8	5.6	(2.2)	硅化凝灰岩	先端部折損	57	36
ST006	B15 4層	ポイント	67.8	21.4	10.2	15.2	石英安山岩質凝灰岩	先端部右胃不良	57	36
ST007	E5 6a層	石錐	20.8	16.5	6.8	2.1	玉髄		57	36
ST008	F・G6 5b層	石錐	48.0	10.8	8.6	3.7	流紋岩		57	36
ST009	28号土坑	石錐	36.9	25.5	10.3	7.1	非化凝灰岩	機長製片素材	57	36
ST010	F5 6a層	石匙	(24.5)	(25.8)	9.0	(6.2)	珪質頁岩	刃部折損	57	36
ST011	3号井戸 埋3c層	石匙	34.6	31.7	8.4	15.5	非化凝灰岩		57	36
ST012	E4 5b層	スクレイパー	45.2	39.4	8.9	14.7	石英安山岩質凝灰岩		57	36
ST013	G14 3号溝D 埋1層	スクレイパー	71.6	50.1	9.7	47.2	非化凝灰岩		57	36
ST014	C17 2-3層	スクレイパー	36.6	67.5	9.8	32.0	硅化凝灰岩	横長剥片素材	57	36
ST015	D12 3-1層	破損品	(18.4)	28.0	4.2	(2.7)	珪質頁岩		57	36
ST016	E14 2-3層	破損品	(15.0)	20.1	4.1	(1.9)	玉髄		57	36
ST017	電気PK西側 4層	磨製石斧	92.9	42.4	23.6	140.4	頁岩	刃こぼれ有	58	35
ST018	24号建物跡 柱7	石臼	62.9	83.2	63.4	355.0	流紋岩		58	38
ST019	A・B10 4層	石鏃	(10.1)	12.5	3.9	(0.6)	玉髄	先端部・基部折損	57	36

6．自然科学的分析

（1）花粉分析・プラントオパール分析

株式会社　古環境研究所

①　はじめに

仙台城跡（二の丸北方武家屋敷地区第４次調査）の発掘調査では、幕末から明治初頭とされる時期の畑跡とみられる遺構が検出された。そこで畑跡の耕作土とされる試料について花粉分析とプラント・オパール分析を行い、同遺構における栽培植物の復元および当該時期の植生、環境の推定を試みることになった。

②　花粉分析

Ａ．試料

試料は調査区の壁面から採取されＩ－８区畑畝上部（試料№１）、Ｉ－８区畑畝下部（試料№２）、Ｆ－７区畑畝上部（試料№３）の３点である。

Ｂ．方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

１：５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

２：水洗した後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

３：25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

４：水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

５：再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

６：沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

Ｃ．結果

【分類群】

出現した分類群は、樹木花粉16、樹木花粉と草本花粉を含むもの２、草本花粉16、シダ植物胞子２形態の計36である。これらの学名と和名および粒数を表47に示す。主要な分類群を図101に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

モミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ－シイ属－マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、サンショウ属、モチノキ属、ツツジ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

表47　武家屋敷跡第４地点における花粉分析結果
Tab.47　List of pollen from BK4

分類群		F-7区	I-8区	
学名	和名	畑畝上	畑畝上	畑畝下
Arboreal pollen	樹木花粉			
Abies	モミ属	3	4	6
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	30	54	53
Cryptomeria japonica	スギ	97	80	90
Juglans	クルミ属	1	3	
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ			3
Alnus	ハンノキ属	4	6	5
Betula	カバノキ属			1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	4	2	2
Castanea crenata-Castanopsis	クリ-シイ属	6	3	2
Fagus	ブナ属		1	1
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	27	25	31
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	4	1	
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	5	5	4
Zanthoxylum	サンショウ属	1	2	1
Ilex	モチノキ属	1	3	6
Ericaceae	ツツジ科			1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	5	5	3
Leguminosae	マメ科	1		
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属	2		
Gramineae	イネ科	79	85	95
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3		
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節		2	1
Fagopyrum	ソバ属	3	4	3
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	20	19	19
Caryophyllaceae	ナデシコ科	6	11	8
Cruciferae	アブラナ科	5	4	5
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属			1
Umbelliferae	セリ科	2	3	1
Labiatae	シソ科			1
Sesamun indicum	ゴマ		1	
Plantago	オオバコ属			1
Lactucoideae	タンポポ亜科	5	4	3
Asteroideae	キク亜科	5	3	5
Artemisia	ヨモギ属	30	21	20
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	12	20	14
Trilate type spore	三条溝胞子	11	8	18
Arboreal pollen	樹木花粉	183	189	206
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	6	5	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	160	157	163
Total pollen	花粉総数	349	351	372
Unknown pollen	未同定花粉	4	3	4
Fern spore	シダ植物胞子	23	28	32

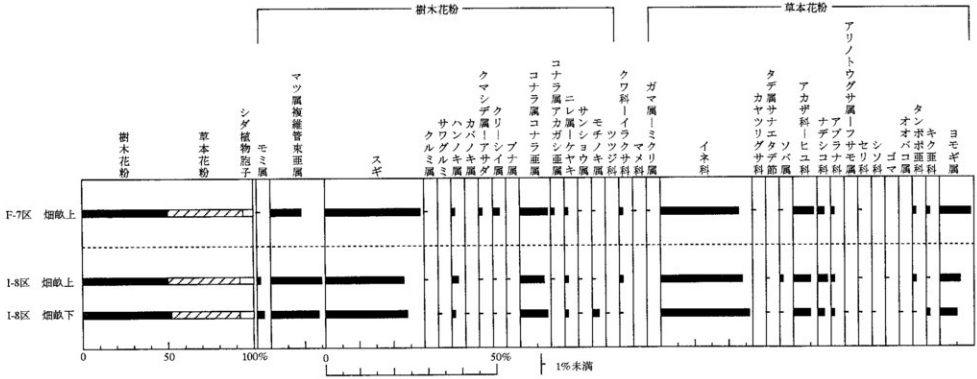


図100　武家屋敷跡第４地点における花粉組成
Fig.100　Histograms of pollen from BK4

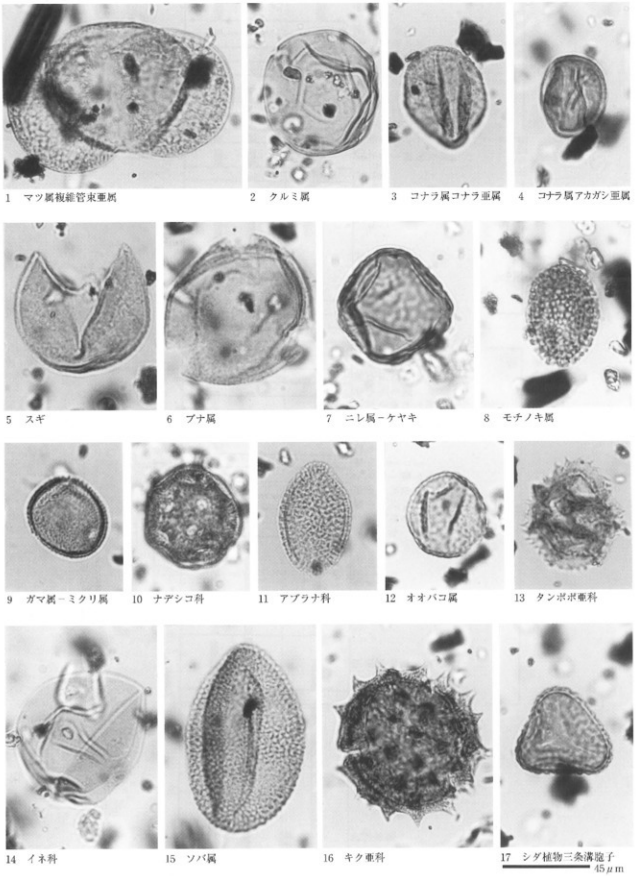


図101 武家屋敷跡第4地点の花粉・胞子遺体
Fig. 101 Pollen and spore from BK4

ガマ属－ミクリ属、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、アリノトウグサ属－フサモ属、セリ科、シソ科、ゴマ、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

【出現傾向】

3試料とも花粉組成の傾向は類似していた。まず、樹木花粉と草本花粉の割合はほぼ同程度である。樹木花粉ではスギが最も優占し、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属が伴われる。草本花粉ではイネ科が優占し、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科が伴われる。他にソバ属、アブラナ科が各試料とも検出され、Ⅰ－8区畑畝上からゴマが出現した。

D．花粉分析からみた植生、農耕、環境

草本花粉において、多様な環境に生育する人里植物や雑草を多く含むイネ科、畑地などの改変された乾燥地を好むアカザ科－ヒユ科、ヨモギ属が多く、これらが繁茂し、やや乾燥した畑地の環境が示唆される。畑作物としてはソバ属、ゴマが明らかな栽培植物である。また、アブラナ科にはアブラナやダイコン類など多くの栽培植物が含まれ、畑作物の可能性がある。なお、水湿地植物のガマ属－ミクリ属がF－7区畑畝上から検出されているが近隣に水溜めや水路があったのか散水に含まれて花粉が反映されたものと考えられる。

森林植生としてはスギが周辺にやや多く分布し、またニヨウマツ類（マツ属複維管束亜属、アカマツないしクロマツ）、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）も分布している。スギは造林の可能性が高く、ニヨウマツ類、ナラ類は二次林と考えられ、遺跡周辺には人為性の高い森林が分布していたとみなされる。

③　プラント・オパール分析

A．試料

分析試料は、花粉分析試料と同一のⅠ－8区畑畝上部（試料№1）、Ⅰ－8区畑畝下部（試料№2）、F－7区畑畝上部（試料№3）の3点である。

B．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原1976）」をもとに、次の手順で行った。

1：試料土の絶乾（105℃・24時間）

2：試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm，約0.02g）

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

3：電気炉灰化法による脱有機物処理

4：超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

5：沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥

6：封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成

7：検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，

単位：10^{-5}g）を乗じて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、8.40、6.31、1.24、0.48である（杉山・藤原1987）。

C．分析結果

採取された試料すべてについて分析を行った結果、イネ、ウシクサ族、シバ属、タケ亜科の各分類群のプラント・オパールが検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表48に示した。また、図102にこれらの顕微鏡写真を示した。以下、各試料ごとに検出状況を記す。

【試料№1】

本試料からは、イネ、ウシクサ族、タケ亜科のプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は順に6,200個/g、2,800個/g、3,800個/gである。

【試料№2】

本試料からは、イネ、ウシクサ族、シバ属、タケ亜科の各プラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は順に4,400個/g、3,000個/g、700個/g、57,000個/gである。

【試料№3】

本試料では、イネ、ウシクサ族、タケ亜科のプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は順に4,300個/g、1,700個/g、44,700個/gである。

D．考察

本遺跡では、畑跡の畝部と畝間部より採取された試料について分析を行ったところ、すべての試料よりイネのプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は4,300～6,200個/gといずれも高い値であることから、他所からの混入の危険性は考えにくい。また、イネ以外ではタケ亜科が非常に高い密度で認められ、ウシクサ族も随伴する一方、湿地を好むヨシ属はまったく検出されていない。よって、本遺跡一帯は乾いた環境であったことが示唆される。これらのことから、本遺構は畑跡であり、ここで稲が栽培されていたものと判断される。

さて、一般に水田跡の分析調査においては、イネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。一方、畑跡であれば判断の基準となるプラント・オパール密度はこれよりも低い値となる。すなわち、畑作ではある作物のあとに同一または近縁の作物を翌年も続けて栽培すると、連作障害をおこし生育が劣ることから、一般に連作は行われない。これは稲についても同様である。したがって、畑作で稲を栽培していた場合、水田作のようには毎年続けて栽培されることはないため、耕作土中に還元されるプラント・オパールの量は当然少なくなる。ところが、ここでは畑であるにもかかわらず検出されたイネのプラント・オパール密度は高い値である。このことから、本遺跡におい

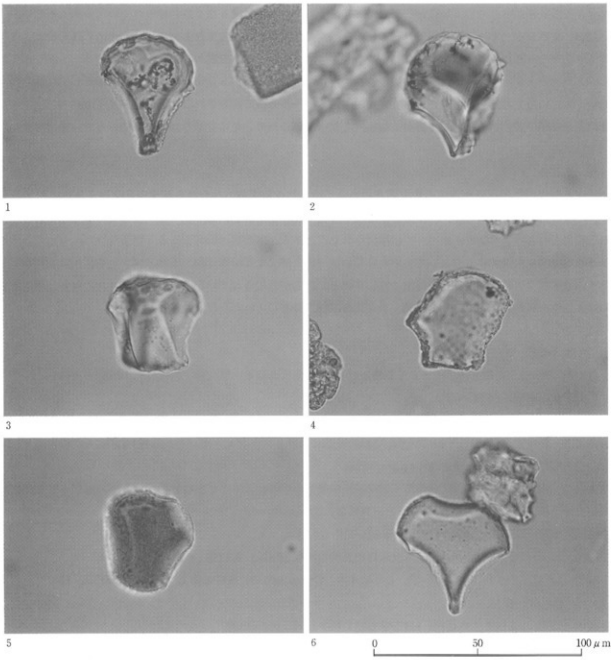
表48　武家屋敷跡第4地点におけるプラント・オパール分析結果
Tab.48　List of plant opal from BK4

検出密度（単位：×100個/g）

分類群＼試料	4　層		
	№1（畝）	№2（畝間）	№3（畝）
イネ	62	44	43
キビ族（ヒエ属など）			
ヨシ属			
ウシクサ族（ススキ属など）	28	30	17
シバ属		7	
タケ亜科（おもにネザサ節）	380	570	447

推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ	1.83	1.31	1.26
（イネ穀）	0.64	0.46	0.44
キビ族（ヒエ属など）			
ヨシ属			
ウシクサ族（ススキ属など）	0.34	0.37	0.21
タケ亜科（おもにネザサ節）	1.82	2.74	2.14



No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	15号溝南壁	No. 1
2	イネ	15号溝南壁	No. 2
3	イネ	7区中央北壁	No. 3
4	タケ亜科	15号溝南壁	No. 2
5	ウシクサ族（ススキ属）	15号溝南壁	No. 1
6	シバ属	15号溝南壁	No. 2

図102　武家屋敷跡第4地点の植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真
Fig. 102 Plant-opal from BK4

てはかなり長期間にわたって畑作が行われており、その間、稲も数度となく作付けられていたと考えられる。

なお、プラント・オパール分析で同定が可能な植物のうち栽培種が含まれるものには、イネ以外ではヒエ・アワ・キビ等のキビ族、ハトムギが含まれるジュズダマ属、トウモロコシ属およびムギ類等がある。しかし、これらのプラント・オパールはいずれも検出されなかった。したがって、本遺跡ではイネ科の穀類としては稲のみが栽培されていたと考えられる。ただし、プラント・オパール分析で同定される分類群は主にイネ科の植物に限定され、イモ類や野菜等の根菜類は分析の対象外となっているため、ここではこれらが栽培されていた可能性については言及できない。

④　まとめ

仙台城跡二の丸武家屋敷地区の発掘調査において検出された畑跡とみられる遺構より採取された試料について、花粉分析とプラント・オパール分析をあわせて行った。その結果、乾燥地あるいは畑地を好むとされる植物の花粉化石およびプラント・オパールが検出されたことから、本遺構が畑跡であると判断された。そして、そこでは栽培植物に由来するものとしてイネをはじめソバ属、ゴマなどの畑作物、またアブラナやダイコン類などが含まれるアブラナ科の植物化石が検出され、これらの作物が栽培されていたものと推定された。なお、遺跡周辺には人為性の高いスギ、ニヨウマツ類、ナラ類の森林が分布していたと推定された。

引用・参考文献

金原正明（1993）「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本　第10巻　古代資料　研究の方法』角川書店　pp.248～262

島倉巳三郎（1973）「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第５集　p.60

杉山真二・藤原宏志（1987）「川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析」『赤山－古環境編－』川口市遺跡調査会報告10　pp.281～298

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追求のための基礎資料として－」『考古学と自然科学』20　pp.81～92

中村純（1973）『花粉分析』古今書院　pp.82～110

中村純（1980）「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集　p.91

中村純（1974）「イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として」『第四紀研究』13 pp.187～193.

中村純（1977）「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』10　pp.21～30

中村純ほか（1981）「農耕史の花粉分析学的研究」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 昭和55年度次報告書』文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班編　pp.147～154

藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』９　pp.15～29

藤原宏志（1979）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定－」『考古学と自然科学』12 pp.29～41

藤原宏志・杉山真二（1984）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17　pp.73～85

（2）植物遺体

東北大学大学院理学研究科附属植物園　内藤俊彦

仙台城二の丸北方武家屋敷跡第４地点から出土した植物遺体について調査した。調査は肉眼と立体顕微鏡及びルーペを用いて行った。その結果は表49に示した。

この一覧表からもわかるように、出土した植物遺体はオニグルミ核果、ウメ核果、スモモ核果、モモ核果、ツバキ種子、クリ果皮断片、モミの果鱗、マツ球果、マツ球果中心柱、スギ種子、ハスの種子？、種類不明小形種子？、モミの葉、スギ葉、アカマツ樹皮片、樹皮片不明、イネ科茎片であった。オニグルミの核果については極めて変化が多く、極小形の核果も出土した。

これらの植物遺体を発掘した場所及び層順で検討してみると、次のようである。

17世紀の３号池からはウメ核果片が出土した。

17世紀末～18世紀の２号池からは、オニグルミ核果、アカマツ樹皮片、樹種名不明の樹皮片、形からしてハスの種子？と思われるものが出土した。

18世紀の３号井戸跡からは埋土３層を中心にオニグルミ果皮片、スモモ核果、クリ果皮断片、ツバキ種子穴あき、ツバキ果実、モミ果鱗、モミ葉、マツ球果が出土している。

幕末の１号池からは、オニグルミ核果、ウメ核果、モモ核果、スギ種子、スギ葉、モミ葉、イネ科茎片が出土した。

これらの植物遺体のうち、オニグルミの核果は、調査地点の南に位置する二の丸の外濠（通称残飯沢）の斜面に現在もオニグルミの林が成立しているので、この辺りから飛来したものであろう。また、モミの果鱗、スギ種子、スギの葉等はオニグルミの核果と同様、調査地点の南側の沢右岸に大木が生育しているので、そこから風に乗って飛来したものであろう。クリの果皮片は３号井戸から出土しているが、武家屋敷地内に植えられていたものから由来したのか、南側の沢の自然林にあったものが何らかの事情によりもたらされたのかは不明である。

表49　武家屋敷跡第４地点出土の植物遺体
Tab.49 List of plant remains from BK4

１号池埋土３層	種類不明小形種子？２個
３号池Ｄ埋土２層	ウメ核果１片
２号池埋土2b 層	オニグルミ核果（極小）、アカマツ樹皮片
２号池埋土3b 層	種類不明樹皮片
２号池埋土４層	種類不明核果片
２号池埋土不明	ハスの種子？（形状から）
３号井戸埋土２層	オニグルミ果皮片、不明
３号井戸埋土３層	モミ葉、ツバキ種子穴あき、スモモ核果、クリ果皮断片、ツバキ果実、マツ球果
３号井戸埋土3b/3c 層	スモモ核果、クリ果皮断片、モミ果鱗
25号土坑	オニグルミ核果片
26号土坑	オニグルミ果実片、マツ球果中心柱２本
5a 層	オニグルミ核果片１片、種類不明植物片
１号池埋土１層	オニグルミ核果10個、オニグルミ核果（小形）２個、ウメ核果７個、ウメ核果６片、モモ１個、スギ種子多数、スギ葉、モミ葉、イネ科茎片、不明１
３－３層	種類不明樹皮片

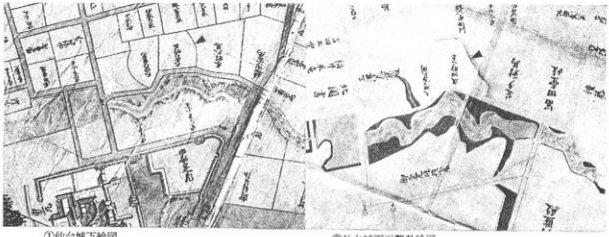
7．考察

(1) 検出遺構の検討

① 絵図との対比による屋敷地の推定

仙台城下の絵図の内、屋敷割りが描かれる絵図は、寛文年間以降のものが残っており、おもな4枚の絵図を図103に示した。この4枚を比べると、細部の表現は異なる部分があるが、屋敷の形や道路には大きな変化は認められない。現在の沢沿いの道路はプール脇へ入る所で方向を変えているが、同様の道路の屈曲がこれらの絵図にも見られる。この道路の形は沢の形状に制約されたものと考えられ、大きく位置が変わっていることは想定し難い。今回の調査で、東西の屋敷の境と考えられるのは、Ⅰ期では1号溝、Ⅱ期では2号池あるいはその西端の段差となる部分と考えられる。このⅠ期・Ⅱ期の屋敷境と考えられる遺構は、ちょうど道路の屈曲する付近から北へのびており、絵図の屋敷割の記載と一致している。また、元禄四・五年の絵図では、成田助之丞の屋敷の東側に、崖と考えられる表現がある。これが調査区の東側に、南東から北西に走る段丘崖に対応すると考えられる。したがって今回の調査区は、西端を除くと、図103の1～4に矢印を付けた屋敷に対応するものと考えられる。

この4枚の絵図に見られる人名をもとに、それぞれの家格・禄高を示したものが表50である。時期が新しくなるほど家格が高くなる傾向があるが、いずれも400石以上の禄高の者である。家格でみると、平士（虎の間）、



①仙台城下絵図
寛文四年(1664)＝大立目将監

②仙台城下五敷巻絵図
元禄四・五年(1691・92)＝成田助之丞

③仙台城下絵図
天明六～寛政元年(1786～89)＝大町久馬

④安政補正改革仙府絵図
安政三～六年(1856～59)＝大松沢越中

図103　武家屋敷跡第4地点調査区周辺の絵図
（『絵図・地図で見る仙台』より）
Fig. 103　The picture maps around BK4

人名	絵図	家格・身分	禄高
大立目将監	寛文四年〔1664〕	平士（虎の間）	450石（45貫文）
成田助之丞	元禄四・五年〔1691・92〕	平士（虎の間）	507石（50貫714文）
大町　久馬	天明六～寛政元年〔1786～89〕	着座	637石（63貫779文）
大松沢越中	安政三～六年〔1856～59〕	一族	61貫153文

表50　絵図に見える人名
Tab.50　List of names of *samurai* lived at this location

家格	員数	総禄高
	人	石.斗.升
一門	11	139,774.4.3
一家	25	61,059.2.1
一族	22	31,471.1.6
宿老	3	7,033.4.6
着座	38	45,153.7.9
太刀上	9	3,080.3.0
大番士	3,441	379,723.9.1
組士	860	27,749.9.1
卒	5,469	94,442.8.0
百姓町人	1,241	9,449.3.3
計	11,119	798,937.5.8

表51　仙台藩の家格と禄高
（平重道「伊達出自家譜　解題」より）
Tab.51　List of status and fief in *Sendai-han*

着座、一族となっている。平士は、大番士とほぼ同じで、大番士は家格によって城内の詰め所に分けられる。召出・虎の間・中之間・次之間・広間に分けられ、虎の間番士は召出に次ぐ家格である。したがって、今回の調査地点は、比較的上級の家臣の屋敷地として使用された場所であることが判明する。

また17世紀初頭については、絵図がなく実態が不明であったが、今回の調査によって屋敷境が後の時期と大きく異ならないことが明らかになり、17世紀初頭にこの地区の武家屋敷の整備が行われていたことが確実となった。

②　屋敷内の土地利用

先に列挙した屋敷境の推定をもとに、屋敷地の範囲を復元したものが、図104である。南側の道路の幅、東端の位置など、確実でないところは残るが、大枠では間違いないであろう。今回の調査区は、一区画の屋敷地の南

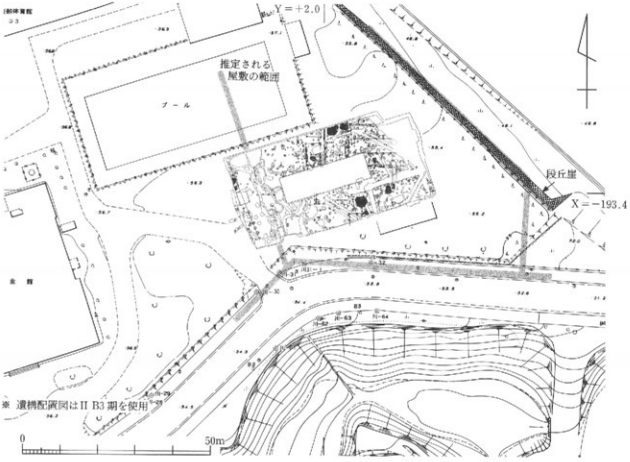
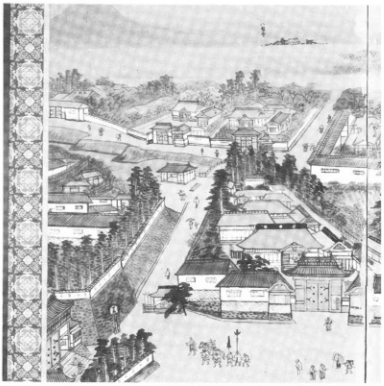


図104　武家屋敷跡第４地点屋敷区画推定図
Fig. 104　Blocks estimated to the residence at BK4

西よりの区域を調査したこととなる。

図105は、登米郡出身の画家である吉成東温（1828～1907）の筆による、「慶応元年仙台城下図屏風」の第六扇の左上の部分である。かろうじて左端に入っている建物の屋根に「大松沢」と書かれており、この建物が大松沢越中邸の屋敷であることが判明する。右隣の屋敷から坂をあがったところに描かれており、間の木々が描かれているところが、段丘崖に相当するのであろう。坂をあがってすぐの所に門が描かれ、門を入ってすぐの所に屋根に「大松沢」と書かれた最も大きな建物があり、これが母屋であろう。そのように考えると、屋敷の中心的な建物は、屋敷地の東側によった所に存在したこととなる。



（仙台市博物館所蔵、写真提供：仙台市博物館）

図105　慶応元年仙台城下図屏風（第６扇）

Fig.105　The folding screen painted castle town, Sendai in 1865 (the 6th paneled screen)

本章４の冒頭で、今回の調査地点には礎石建物がほとんどなく、小規模な建物が多いと指摘したが、中心的な建物が調査区から東にはずれていた可能性もある。ただし全ての時期において、同じかどうかは判らない。Ⅰｂ期の30号建物などは、比較的規模が大きいことから、中心的な建物であった可能性が残る。この建物も掘立柱建物であるが、17世紀代のものであり、まだ礎石建物が一般化していない可能性も考えておくべきであろう。

今回の調査区では、ゴミ穴と考えられる遺構は見つかっていない。絵図や「慶応元年仙台城下図屏風」の記載から、屋敷は南側を正面としていたことは確実である。今回の調査範囲より北側に、さらに屋敷地が広がっていると推定できることから、裏手にあたる北側にゴミ穴のような施設は造られていた可能性が考えられるであろう。なお、今回の調査では、瓦の出土が極めて少ない。この屋敷地では、瓦を葺いた建物は、存在しないか、存在したとしても極めて限定されたものであったと考えられる。「慶応元年仙台城下図屏風」に描かれた大松沢越中邸の建物には、門や塀を含めて、瓦を使用しているような表現は全く認められず、調査成果と合致する。

③　建物跡・柱列の柱間寸法

本章４の時期区分のところで述べたが、今回の調査で検出された建物跡の柱間寸法は、６尺５寸から６尺３寸へと変化していると考えられ、17世紀末には６尺３寸が採用されていたものと推定された。これまでの二の丸地区の調査で検出された建物跡の柱間寸法を以前に検討したが（年報９）、元和６年（1620年）に造営された、五郎八姫の「西屋敷」と考えられる建物跡では、１間が６尺５寸であった。この点は、今回の調査結果と一致する。二の丸期の遺構は、門や塀と考えられる施設がほとんどで、検討できる素材が少ない。第２地点で検出された二の丸の中心的な建物である「小広間」は、検出範囲が狭く確実性に欠けるが、６尺５寸の可能性が高い。この「小広間」は、明治15年の火災で廃絶したと考えられ、６尺５寸であるとするならば、19世紀代にもこの柱間寸法が使用されていたこととなる。ただし、二の丸調査地点の各所の遺構を、18～19世紀代の絵図と対比させたところ、むしろ６尺３寸と考えた方が、良く対応した。今回の調査で武家屋敷地区では、17世紀末までに柱間寸法が変化していることを確認できたことは、二の丸跡の柱間寸法を検討する基準となるであろう。屋敷地と異なる柱間寸

法が使用されている建物があった場合、建物の性格など、固有の理由を検討していくことが必要であろう。

今回の調査で確認された、この両者以外の柱間寸法としては、塀のような施設の可能性がある7・20・21号建物跡を除くと、次のような建物がある。柱間寸法が7尺となるのはⅡａ期の8・9号建物跡があり、Ⅰｂ期の28・32号建物跡では、桁行7尺、梁行6尺5寸であった。やや特殊と思われる6尺8寸を採用するのがⅠｂ期の29号建物跡である。数が少ないため、これだけで確定的なことは言えないが、Ⅰｂ期からⅡａ期の、17世紀後半から18世紀前葉の時期に限られている。柱列でも、7尺を採用する20号柱列、8尺の22号柱列はⅡａ期である。時期的な特色という可能性と、この時期の当屋敷地の個別的な理由の両面から検討していく必要があるだろう。

柱列の柱間寸法は、変化に富んでいる。小規模な12号柱列、建物跡の一部を構成する可能性がある6尺3寸と6尺5寸のものを除いて、整理して列挙すると、次のようになる。なお、L字形に曲がるため建物跡としたが、塀のような施設の可能性があるⅡｂ1期の3棟の建物跡も含めた。

- 3尺6寸：2号（Ⅱｂ期）、15号（Ⅱｂ期）、20号建物跡（Ⅱｂ1期）
- 4尺：13号（Ⅱｂ3期）、14号（Ⅱｂ3期）、16号（Ⅱｂ2期）、21号（Ⅱａ期）、24号（Ⅰ期）、7号建物跡（Ⅱｂ1期）
- 5尺：3号（Ⅱｂ2期）、7号（Ⅱ期）、27号（Ⅰａ期）
- 5尺2寸：19号（Ⅱａ期）21号建物跡（Ⅱｂ1期）
- 6尺：28号（Ⅰａ期）　・7尺：20号（Ⅱａ期）　・8尺：22号（Ⅱａ期）

4尺が最も多く、柱列については、柱間寸法4尺が最も一般的で、次いで3尺6寸、5尺、5尺2寸などが使用されたと考えて良いであろう。これらの柱列の多くは、塀のような施設であったと考えられる。

④　地鎮遺構について

今回の調査では、3基の地鎮遺構と考えられる遺構が発見された。伴って出土した銭貨が、永楽通寶で占められることから、17世紀初頭と考えられる。当屋敷地の使用開始が17世紀初頭と考えられることから、これらの地鎮遺構は、最初の屋敷造営に関わる可能性がある。3基とも、ピットの底面に土師質土器の皿を含みセ口にして埋納したもので、内2基には永楽通寶が入れられ、その内の1つには皿の中に稲籾が一面に入っていた。地鎮跡2では、ピット埋土で柱痕跡が明瞭に確認できたことから、柱穴の底面に埋納したものと考えられる（図版30－3）。

近年、東北地方でも地鎮遺構の検出例が増加し、集成も行われているが（平泉研究会編1996）、古代・中世の例は多数知られている反面、近世の調査例はまだ少ない。宮城県内の例としては、多賀城市高崎遺跡第7次調査のＳＸ233がある（石川俊秀1989）。不整楕円形の土坑から、かわらけが10点、寛永通宝7点が出土している。かわらけは合わせ口にはならず、全て上向きに並べられ、古銭もかわらけの外から出土している。今回の調査例とは、埋納方法などで違いが大きく、様々な方法があったことを伺わせる。今回確認できた柱穴の底面に埋納した例は、他の地方では知られているが、東北地方では確実な類例が無いようである。

今回検出された地鎮遺構は、柱穴に埋納していること、土師質土器の皿（一部墨書有り）に古銭・稲籾を入れた状態が良好に判る点など、具体的な地鎮の様子が判明する、近世では数少ない例である。また、出土した遺跡が、仙台城周辺の比較的上級の家臣の屋敷地であるという、地鎮を行った主体の社会的階層が明らかな点も重要である。地鎮遺構の比較研究を進めていく上で、基準となる資料を提供するものと言えよう。

(2)　陶磁器・土器の検討

①　陶磁器・土器の種類別組成の検討

本調査地点出土の陶磁器・土器を、磁器、陶器、軟質施釉土器、土師質土器（皿）、土師質土器（皿以外）、瓦質土器の6種類に分け、年代の限定できる遺構内出土の一括資料を用いて、それぞれの比率の変遷を調べた（図

107、表52)。数値は全て、接合、同一個体の識別を経た後の破片数である。その結果、元禄年間を境に、土師質土器、特にそのなかでも皿の比率が大きく変化していることが判明した。すなわち、18世紀前葉以前には、資料ごとのバラツキはあるものの、土師質土器の比率が全体の4割を下回ることはない。それに対して、18世紀以降の資料群では、1割前後に激減する。二の丸地区では、江戸時代を通じて、土師質土器が3割以上の比率を保っており、本調査地点とは対照的なあり方を示す(註1)。また、前に土師質土器の項で触れたように、本調査地点出土の土師質時皿のうち、少なくとも約半数は灯明皿として利用されており、二の丸地区に比べて、灯明皿への利用頻度が高く、食器として使われたものの比率は低いと考えられる。これらのことから、藩の公的な空間である二の丸地区では、江戸時代を通じて各種の宴会を含む儀礼的な席上、土師質土器の皿類(いわゆる「かわらけ」)をハレの器として用いる伝統が保持され続けたのに対して、私的な空間である家臣の屋敷内では、そうしたある意味中世武家的儀礼の色彩の強い宴会は、江戸中期までには行われなくなっていたと見ることができる。福井県一乗谷朝倉氏遺跡の調査では、武家屋敷、寺院に比べ当主の館である朝倉館では、「かわらけ」の組成比率が高いことが指摘されている(福井県教育委員会1979)。仙台城二の丸跡および本武家屋敷地点出土の陶磁器・土器の検討から、近世遺跡においても、「かわらけ」は、「場」の公的・政治的度合いを測る尺度として利用可能であるとの見通しが得られたわけであり、今後、そのような視点から研究を進める必要がある。

② 陶磁器の産地別組成の検討

年代の限定できる遺構内出土の一括資料に含まれる磁器と陶器に関して、それぞれ産地別の組成比率の変遷を検討した(図108・109、表53・54)。数値は全て、接合、同一個体の識別を経た後の破片数である。なお、仙台城二の丸地区における陶磁器の産地別組成の変遷に関しては、年報9で既に検討しており(年報9の125・126頁)、二の丸地区との対比を行う場合には、そのデータを用いているので、併せて参照されたい。

本調査地点には、肥前磁器を含まず中国産磁器のみを出土するか、若しくは中国産磁器が肥前産を上回る量出土する遺構は存在しない。本調査地点で最も古い遺構の一つであり、17世紀前半代の遺物を出土する1号溝においても、磁器は肥前産が約9割を占めている。17世紀代には、磁器の1割程度が中国産であるが、18世紀以降は、一部優品が伝世される以外、基本的に中国産磁器は姿を消す。中国産磁器は、明末の景徳鎮系の青花が多く、漳州窯系の粗製品は、皿が僅かに認められるに過ぎない。19世紀代に入ると、小型端反碗を中心に瀬戸・美濃産の磁器が出土するようになる。本調査地点においても、これまでの報告した二の丸地区の調査においても、瀬戸・美濃産の磁器の大部分は、藤沢編年第11小期の美濃窯の製品であり、仙台において本格的に瀬戸・美濃の磁器が使われだすのは、19世紀中葉になってからのことと思われる。また、本調査地点には、二の丸地区第2地点石敷遺構(年報1)や同第10地点Ⅲ－3層(年報9)のように、切込や平清水など東北産の磁器が、肥前や瀬戸の磁器を凌駕する遺構や層は存在しない。これは、本調査地点が、明治維新により武家屋敷が廃絶された直後、畑として利用されているため、陶磁器が廃棄されるような状況にはなかったためと考えられる。翻って考えれば、切込や平清水など東北産の磁器が、肥前や瀬戸の磁器を凌駕する段階は、明治維新直後二の丸地区に勤政庁が置かれていた時期から鎮台が撤かれていた初期の段階、すなわち、1860年代後半から1870年代前半の極めて短い期間に限定できる可能性が高い。

陶器の産地に関しては、17世紀前半の遺物を主体とする1号溝では、瀬戸・美濃が全体の半数以上を占めている状況にある。しかし、それ以降瀬戸は漸次減少する傾向にあり、19世紀に瀬戸の磁器が入る段階になって、それに伴って再びやや出土量が増加に転じるまで、ほとんど見られない状況にある。17世紀後半から18世紀代にかけて瀬戸・美濃産陶器の比率が極めて低調である原因としては、次のようなことが考えられる。生産地側で指摘されているように、瀬戸・美濃は、17世紀後半の段階で、それまでの皿・向付類を中心とする高級食器を指向した生産体制から、碗や徳利をはじめとした日用雑器、擂鉢に代表される荒物主体の生産体制へ移行したことが判っている。しかし、東北地方南半部においては、後述するように、17世紀後半代には岸窯系陶器の擂鉢が、価格の

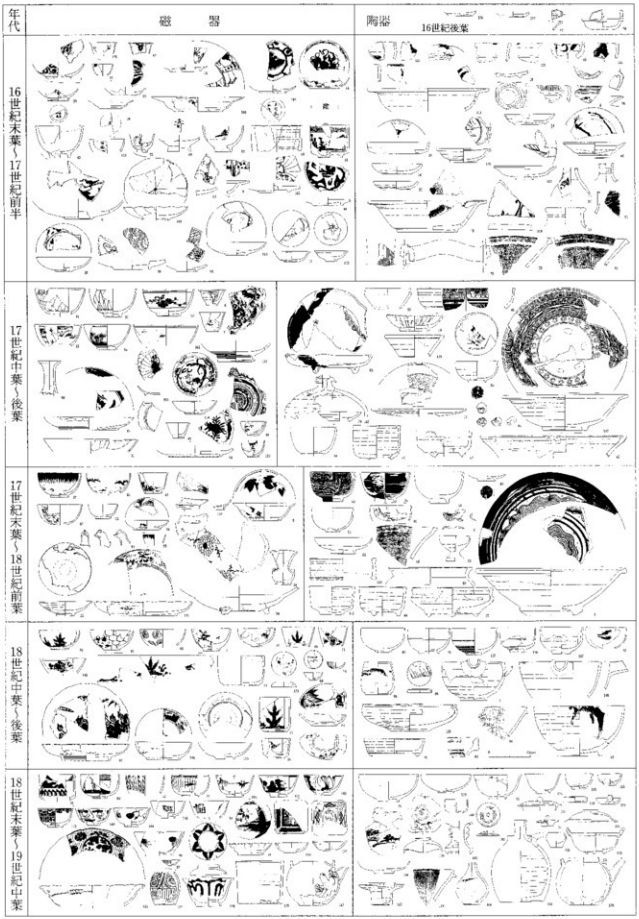


図106　武家屋敷跡第4地点陶磁器変遷図

Fig. 106　Chronological sequence of porcelains, glazed ceramics from BK4

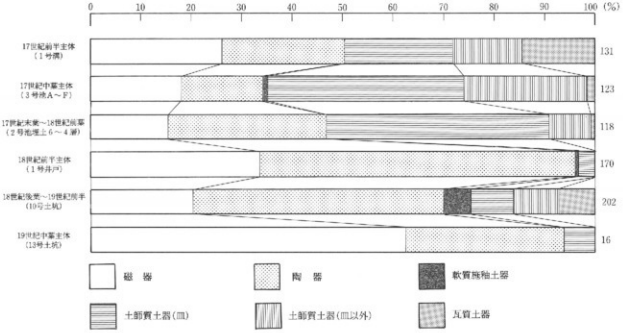


図107　武家屋敷跡第４地点陶磁器・土器種類別組成の変遷
Fig. 107　Histograms of porcelains, glazed ceramics and ceramics from BK4 by shape

表52　武家屋敷跡第４地点陶磁器・土器種類別組成の変遷
Tab.52　Histograms of porcelains, glazed ceramics ans ceramics from BK4 by shape

	磁　器	陶　器	軟質無釉	土師器皿	土師器その他不明	瓦質土器	合　計
17世紀前半主体（1号溝）	34	32	0	28	18	19	131
17世紀中葉主体（3号焼土～F）	22	20	1	48	30	2	123
17世紀末葉～18世紀前葉（2号地埋土6～4層）	18	37	0	52	10	1	118
18世紀前半主体（1号井戸）	57	106	1	6	9	0	170
18世紀後葉～19世紀前半（10号土坑）	41	100	11	17	18	15	202
19世紀中葉主体（13号土坑）	10	5	0	1	0	0	16

点でも品質の点でも、瀬戸の擂鉢を卸えてかなりの量流通していた可能性が高い。さらに、17世紀末以降、大堀相馬焼の碗皿類や小野相馬焼の皿、片口鉢、鉢、香炉、仏飯器が、急速な勢いで大量に出回り始めることにより、18世紀代には、東北地方の南半部の地域において、瀬戸・美濃の陶器が入り込む余地はますますなくなったことが、本調査地点出土陶器の産地別組成の変遷の分析結果にも現れている。また、岸窯系陶器が仙台周辺域で盛行する期間は短く、17世紀末から18世紀初頭の段階で急速に流通量が減少することも同時に読みとれる。岸窯系擂鉢に取って代わり18世紀代に仙台周辺で使われていた擂鉢の多くは、おそらく18世紀に入って東北南半部に興った複数の小規模な窯で生産されたものであると推察されるものの、未だ具体的な窯跡を指摘できる段階にはない。一方、大堀相馬焼と小野相馬焼を比べた場合、二の丸地区においても本調査地点でも、大堀相馬焼が幕末に到るまで順調に比率を伸ばすのに対して、小野相馬焼は、18世紀後葉には減少に転じることが判る。以前、筆者が指摘した大堀相馬焼と小野相馬焼の生産動向の違い（関根達人1998）が現れている。

京焼は、時代により比率の変化は認められるものの、他の産地の製品と比べた場合、変化の幅は小さい。これは京焼が、他の産地の陶器と違い、江戸時代を通じて高級ブランドとしての地位を保持していたため、常にいつの時代にも一定量の受容があったからに他ならない。それでも、18世紀の終わり頃から19世紀前半にかけ京焼の減少幅が比較的大きいのは、この時期、大堀相馬焼が新たに雛白釉を下地に鉄絵を施す製品の開発に成功し、従来の瀬戸・美濃指向から京焼指向の生産へと方針を転換した結果、大堀相馬焼と京焼が直接競合することになったためであろう。

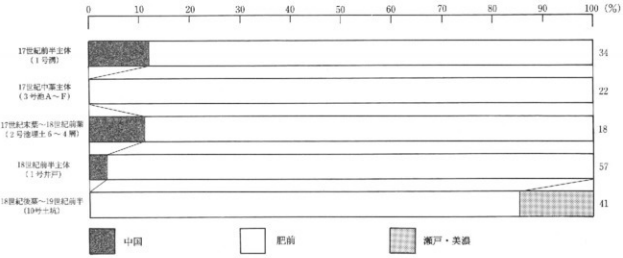


図108　武家屋敷跡第４地点磁器産地別組成の変遷
Fig. 108　Histograms of porcelains from BK4 by producing district

表53　武家屋敷跡第４地点磁器産地別組成の変遷
Tab.53　Histograms of porcelains from BK4 by producing district

	中国	肥前	瀬戸・美濃	合計
17世紀前半主体（1号溝）	4	30	0	34
17世紀中葉主体（3号地A～F）	0	22	0	22
17世紀末葉～18世紀前葉（2号地埋土5～4層）	2	16	0	18
18世紀後半主体（1号井戸）	2	55	0	57
18世紀後葉～19世紀前半（10号土坑）	0	35	6	41

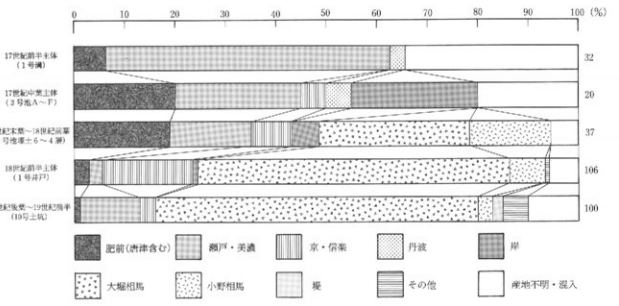


図109　武家屋敷跡第４地点陶器産地別組成の変遷
Fig. 109　Histograms of glazed ceramics from BK4 by producing district

表54　武家屋敷跡第４地点陶器産地別組成の変遷
Tab.54　Histograms of glazed ceramics from BK4 by producing district

	肥前（唐津含む）	瀬戸・美濃	京・信楽	丹波	岸	大堀相馬	小野相馬	薩	その他	不明・混入	合計
17世紀前半主体（1号溝）	2	18	0	1	0	0	0	0	0	11	32
17世紀中葉主体（3号地A～F）	4	5	1	1	5	0	0	0	0	4	20
17世紀末葉～18世紀前葉（2号地埋土5～4層）	7	6	3	0	7	11	6	0	0	2	37
18世紀前半主体（1号井戸）	3	3	19	0	1	66	7	0	1	6	106
18世紀後葉～19世紀前半（10号土坑）	1	12	3	0	0	64	3	2	5	10	100

③　岸窯系陶器の分布と編年

本調査地点からは、擂鉢105点、香炉19点、鉢６点、灯明皿３点、猿形水滴２点、水注の蓋1点、甕１点、花生１点、合計137点の岸窯系陶器（註２）が出土している。これまでにも、仙台城では、三の丸、二の丸地区（第５・６・９・12地点）から岸窯系陶器が出土しているが、擂鉢と香炉が確認されていただけで、その出土量もごく僅かであった。そのため、これまで仙台は岸窯系陶器の分布圏内には位置するが、その流通量は僅かであるとの認識を持っていた。しかし、前に明らかにしたように、本調査地点においては、17世紀中葉の遺構では陶器の四分の一を岸窯系陶器が占めており、これまでの認識を再検討する必要が今回生じた。また、以下では、本調査地点出土の岸窯系陶器に対して正しい評価を与えるべく、岸窯系陶器の分布と編年の検討を行う。

岸窯系陶器の分布に関しては、これまで信達盆地を主たる流通圏としながらも、北は岩手県南部の平泉から、南は福島県南の白河まで、西は会津若松、さらに米沢まで分布するとの指摘がなされていた（堀江格1998）。今回新たに集成を行った結果、岸窯が発見される前に刊行された報告書のなかで、唐津や産地不明とされた資料の中にも岸窯系陶器を見いだすことができ、以下の知見を付け加えることができた（図110、表55）。

従来北限といわれた平泉町内から出土した資料に関しては、記録が皆無で、現在資料自体も確認することはできないが、宮城県北に位置する栗原郡築館町の八沢要害遺跡で唐津産と報告された擂鉢には岸窯系製品が含まれている。八沢要害遺跡より南の地域では仙台周辺まで、散発的ながらいくつかの遺跡で岸窯系陶器を確認することができ、仙台藩の中部地域が分布の北限に当たることを確定できた。

二本松藩の江戸屋敷である千代田区溜池遺跡で猿形水滴が出土しており、これが現在のところ岸窯系陶器の出土の南限である。しかし江戸で確認されているのはこの資料のみであり、北関東からも岸窯系陶器の出土報告はないことから、一応、白河、棚倉周辺を流通の南限と見ておきたい。福島県の浜通りでは、最北部の新地町で出土が確認されている以外は、近世遺跡の調査事例の豊富ないわき市内を含め、岸窯系陶器の出土は確認できない。

西へは、脊梁山脈を越えるものの生産地から比較的近い米沢、会津若松で岸窯系陶器が確認されている。米沢では、これまで擂鉢がわずかに知られる程度であったが、近年米沢城二の丸跡の堀で行われた大規模な調査の資料（未報告）を実見した結果、種類、量ともに豊富な岸窯系陶器を確認することができた。

以上、岸窯系陶器は、窯のある信達盆地では多種多様な器種が濃密に分布するほか、北は仙台藩の中部地域、南は白河藩や棚倉藩領まで、西は脊梁山脈を越えて会津藩や米沢藩領でも、主として擂鉢、香炉という限られた器種が一定量流通していたと見ることができる。しかし、分布の外縁部にあたる地域にあっても、本遺跡や米沢城二の丸跡のように、擂鉢や香炉以外の器種を出土する遺跡も存在する。仙台や米沢といった比較的規模の大きな城下町では、生産地と結びついて岸窯系陶器を専門に扱う瀬戸物問屋が存在していた可能性もあろう。

次に、出土した遺構や層、あるいは共伴した遺物から年代の限定できる消費地遺跡出土資料と、窯跡出土資料を中心に、岸窯系陶器の変遷を考える（図111）。

【17世紀前葉】

岸窯系陶器のうち最も古いものは、仙台市南小泉遺跡、白河市小峰城跡、会津若松市城東町遺跡で出土しており、これらは17世紀前葉の寛永年間に遡る。南小泉遺跡では、14・16次調査で、寛永４年（1627年）から同13年までに年代を限定しうる若林城下町期の遺構から、擂鉢が出土している。特に、１の擂鉢は、連房初期の美濃灰釉碗、同丸皿、金箔付三巴文軒丸瓦との共伴関係が明らかな資料である。白河小峰城三の丸跡では、丹羽長重により寛永６年（1629年）から４箇年かけて行われた大改修以前の遺構から、志野織部蘭竹文皿や向付、青花、初期伊万里などと共に、擂鉢が出土している（５～７）。会津若松城下町では、城東町遺跡ＳＸ06遺構から、青花、絵唐津向付、志野菊皿、志野織部丸皿、志野織部向付などに伴って、岸窯系擂鉢が出土している（４）。

これら最古段階に位置づけられる擂鉢は、いづれも口縁部が上方に短く屈曲し、口唇部端面が僅かに内外に張り出す特徴を有する。このような口縁部形態を有する擂鉢は、岸窯物原の発掘調査資料にはほとんど認められな

図110　岸窯系陶器出土遺跡分布図
Fig. 110　Distribution of sites where Kishi ware were found

表55　岸窯系陶器出土遺跡一覧
Tab.55　List of sites where Kishi ware were found

No.	遺跡名	所在地	丸鍋	大皿	丸皿	折縁皿	徳利	水注	壺・甕	鉢	蓋	印判	香炉	擂鉢	その他	文献
1	八沢要害	宮城県栗原郡築館町八沢字要害												○		小井川和夫1980
2	上新田	宮城県登米郡佐沼町西佐沼字堀合、上新田												○		小井川和夫1981
3	二ツ森	宮城県黒川郡富谷町赤小田字西町								○			○			大石幸生1999
4	関ヶ谷	宮城県多賀城市関ヶ谷						○				○	○	○		千葉市郎ほか1987
5	西崎	宮城県多賀城市崎町二丁目											○	○		山川俊英1989
6	山王	宮城県多賀城市中山王						○								多賀城市教育委員会1986
7	仙台城跡	宮城県仙台市青葉区川内											○	○		東北大学埋文1990、93、97、99
8	仙台城下	宮城県仙台市青葉区川内(BK4)						○	○	○	○	○	○	○	水鳥鉄	本報告
9	南小泉	宮城県仙台市若林区南小泉字原												○		斎藤禅1987
10	薬師堂	宮城県仙台市泉区南小泉						○		○		○	○	○		佐藤氏1987
11	松木	宮城県仙台市太白区柳生松木												○		上藤和司・斎藤禅1986
12	台山城跡	宮城県石巻市山岡町						○					○	○		古川一明1989
13	間崎	福島県相馬郡新地町谷地小屋字間崎		○												なし
14	本町	福島県伊達郡桑折町字本町			○	○	○	○	○	○		○	○	○		山中雄志・井岡下秋1996
15	和泉	福島県伊達郡川俣町大字鳥居字陶窯						○	○	○	○		○	○		石橋圭司ほか1996
16	青柳館遺跡	福島県伊達郡川俣町西福沢字古館柳山							○		○					高橋丰次1994
17	川俣城跡	福島県伊達郡川俣町東郷沢字石雨内山						○						○		宮腰圭次1991
18	欠入	福島県福島市飯坂町字大枝	○	○		○	○	○	○		○			○	巡鉢	鈴木功・堀江慎ほか1993
19	高屋敷	福島県福島市飯坂町野字鍛冶												○	水筒	鈴木弘1994
20	古屋敷遺跡	福島県福島市飯坂町古屋敷遺跡													小皿	新潟県氏ほか1993
21	勝口館跡	福島県福島市野田町字加賀屋敷		○	○			○	○	○			○	○	ヒダ皿	安藤義弘・高橋一郎1996
22	舌屋	福島県福島市南矢部川字重原		○				○	○	○	○	○		○	水鉢鉄	引地克人1998
23	倉ノ前	福島県福島市岡部字根岸								○	○					柳宮重・鈴木功ほか1994
24	二本松城跡	福島県二本松市郭内		○					○		○		○	○		なし
25	高木	福島県安達郡本宮町大字高木字高木					○									鈴木康文1991
26	天神南	福島県郡山市富田町字天神下						○								熊川進一1998
27	宮田館跡	福島県郡山市西田町大字宮田							○					○		山岸建美ほか1991
28	木村新館	福島県郡山市日和町木村	○							○			○	○	水鉢鉄	鈴木浪・小山田秀彦1992
29	堀ノ内	福島県田村郡三春町大字貝山字堀ノ内												○		高橋信一ほか1992
30	一身城下町	福島県田村郡三春町字大町・字南町			○		○							○		平田敏文1995、平田・桑原園1996
31	小峰城跡	福島県白河市字郭内					○							○		石井伸光1997
32	懸倉城跡	福島県白河郡棚倉町大字懸倉字城跡												○		なし
33	城東町	福島県会津若松市城東町											○	○		江花明久・斎藤貞作氏1994
34	米沢城跡	山形県米沢市丸の内								○						井山徳弘1994
35	新宿	東京都千代田区永田町二丁目													水鉢鉄	長佐古真也ほか1996

い。このタイプの擂鉢が相形となって、やがて口唇部端面の内外への張り出しが発達し、岸窯出土擂鉢C類(23,24)が成立すると考えられる。施釉のあり方では、鉄錆を施した後、口縁部付近にのみ灰釉を掛けるもの(2～7)が多いが、内面から外面上半に鉄釉を掛けたもの(1)も存在する。また、仙台市教育委員会の行った仙台城三の丸跡の調査で、寛永15年(1638年)の三の丸造営以前の遺構である6号土坑から、「元和」(1615～1623年)の紀年銘木簡、青花、織部向け、美濃伊賀の水指などに共伴して出土した擂鉢(8)は、灰釉の用い方や口縁部形態が、上述の最古段階の擂鉢と類似しており、岸窯系陶器の可能性がある(唐津と報告された No.1172)。

生産開始時の岸窯系陶器の様相に関しては、窯が未確認のため、器種構成をはじめ不明な点が多い。しかし、これまで消費地で確認されるのが擂鉢ばかりである点や、ほぼ年代的に併行すると予想される長沼天神山窯跡(市川一秋1996)もまた擂鉢を専門に生産している点からみて、当初より擂鉢が主要製品であったと考えられる。

【17世紀中葉】

岸窯跡B区物原3～5層出土資料(13～25)を基準とする。この資料には、「正保」年五月」の銘が刻まれた壺が含まれており、これらの資料が正保年間(1644～48年)を含む17世紀中葉に位置することを示している。擂鉢、香炉、丸皿、折縁皿、ヒダ皿、鉢、火鉢、水注、甕、壺、花生などの器種がある。擂鉢は、口唇部端面の内外への張り出しが発達したもの(岸窯出土擂鉢C類)が目立ち、それらの多くは口縁部に灰釉が掛けられている。数は少ないが、口唇部が肥厚せず断面形が角状を呈する擂鉢も見られる。本遺跡3号池出土の岸窯系陶器(9～12)には、猿形水滴がみられるが、新しい段階のものに比べ作りが丁寧で、顔の表現も精緻である。

【17世紀後葉～18世紀初頭】

岸窯跡A区物原2層出土資料(30～48)を基準とする。前段階に比べて、大皿、灯明皿、徳利、花瓶が目立つ。口縁部に灰釉の掛かる擂鉢は、口唇部端面の内外への張り出しが弱まり、玉縁状に肥厚した形態へと変化する。一方、内面から外面の上半部に鉄釉をかけた擂鉢は、口唇部が肥厚し三角状を呈するものが多い。大皿の内面や、徳利、把手付水注、花生、甕の外面には灰釉を流し掛けするほか、鉢の体部に凹凸をつけたり、花生にはタガ状の粘土紐を巡らせるなど、前段階に比べ、装飾性が高まる傾向にある。

【18世紀前半】

大鳥城跡1次調査の3号溝と1号井戸出土資料(49～58)を基準とする。本段階の資料は、信達盆地でのみ出土するようになり、それまでの段階に比べ流通範囲は大幅に縮小する。器種の点では、香炉の形態の変異が大きくなるとともに、その比率が高くなると思われる。主体となる擂鉢は、口縁部を外側に大きく折り返して外面に貼り付けるといった、いわゆる折り返し二重口縁のもので、岸窯の出土資料には全く見られないタイプである。突帯の貼付や灰釉の流し掛けを行うなど、前段階同様、装飾性は高い。

以上、本遺跡の一括資料にみられる岸窯系陶器を契機として、その分布と編年を考えてきた。本遺跡は、岸窯系陶器の分布の外縁部に近いわりには、多様な器種が確認された。それでも本遺跡から出土した137点の岸窯系陶器のうち105点(約76.6%)が擂鉢であり、次いで多い19点の香炉(約13.9%)と比較しても、その比率は非常に高い。また、消費地出土の岸窯系陶器の検討から、その成立は1620年代に遡り、初期の製品でも擂鉢が主要な器種であったことが判明した。最古段階(17世紀前葉)の擂鉢は、信達盆地にとどまらず、北は仙台から南は白河まで流通しており、その分布は岸窯系陶器の最盛期にあたる17世紀後半の流通範囲に相当する。開窯当初から、これだけ広い流通圏を形成し得たのは、岸窯系擂鉢が唐津や瀬戸・美濃、丹波等の擂鉢と対抗できるだけの価格や品質を有していたためであろう。本遺跡では、17世紀中頃を境として、岸窯系擂鉢が丹波産の擂鉢に取って代わる様相が捉えられた。18世紀にはいって急速に岸窯系陶器の流通範囲が縮小するのは、小野相馬焼(関根達人1998)や会津本郷焼など、東北地方においても各地の陶器窯で擂鉢の生産が本格化し、信達盆地より外側の地域では、岸窯系陶器の主力製品であった擂鉢に対する需要が減ったためと考えられる。

(註1)二の丸地区の各時期を代表する資料群を例に挙げるならば、土師質土器の比率は、17世紀初頭(第9地

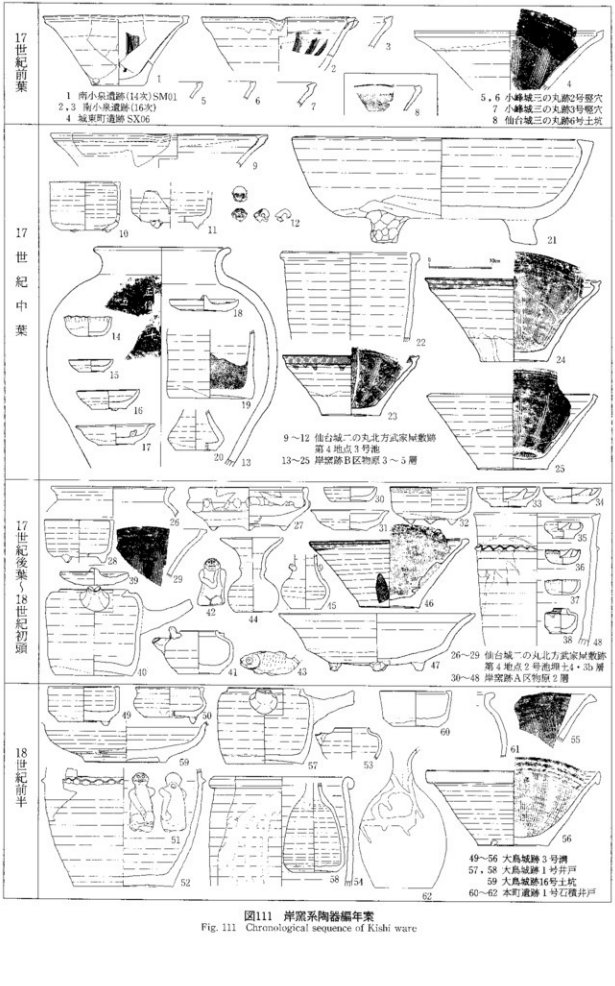


図111 岸窯系陶器編年案
Fig. 111 Chronological sequence of Kishi ware

点下層）で35.1%、元禄年間（第５地点Ⅳ～Ⅶ層）で89.2%、18世紀後葉（第９地点15・16号土坑）で59.0%、19世紀前葉から中葉（第９地点１号池）で31.5%の数値を示す。

（註２）福島市飯坂にある岸窯跡は、平成４・６年と７年の２回にわたり発掘調査が行われた（鈴木・堀江1996、堀江前掲）。同じ丘陵の北斜面にも岸窯跡と同様の陶器片や窯道具が出土する地点が存在する。さらに岸窯跡のある福島県中通り北部の信達盆地からは、岸窯跡から出土する陶器と胎土や製作技法が近似しながらも、岸窯では作られていない製品が出土することもあり、周辺に近世窯跡が展開することが予想されている。これら岸・大鳥丘陵窯跡群（関根達人1999）で作られた近世陶器を岸窯系陶器と呼ぶ。福島県中通り地方には、18世紀中葉以降も岸窯系陶器の影響下に成立し、擂鉢を主体に壺・甕等の生産を行ったであろう地元の窯が複数存在したと予想されるが、それらの窯で作られた製品については、岸窯系陶器の概念からは除外して考える。

⑶　土人形・土製玩具の検討

今回の調査においては、二の丸跡でのこれまでの調査例に比して、比較的多数の土人形・土製玩具が出土した。仙台周辺の近世遺跡において、これだけのまとまった量の出土は初めてである。しかし幕末以降の整地層からの出土を主とする出土状況からは、出現時期や時期毎の組成の変化などを詳細に論じるには不足なので、以下では出土資料全体としてみた特徴について、二の丸跡での出土例や他地域との比較を通して若干考えてみたい。

①　土人形

人形の製作技法については、型を用いたものが圧倒的に多い。なかでも前後または左右に２分割した合せ型作りのものが多く、片面のみに型を用いたものが少数認められる。型を用いた製法の採用が、比較的簡単に同じものを量産する道を開き、江戸時代に土人形の普及をもたらした要因として重視される点であり、型作りが主体であることは、各地の近世遺跡に共通する様相といえる。合せ型作りの場合、器壁を薄くして内部を中空にすることが一般的であるが、器壁を薄くせずに大きな穿孔を施す例が大阪で多いなど、技法の細部には変異も多くまた地域性が存在することも知られている（愛知県 埋蔵文化財センター1990ａ、中野高久1998）。当地点出土のものをみても、中空の度合いや底面の開口の有無、穿孔の有無など一様ではない。ちなみに、仙台の江戸時代中期からの人形産地として知られる堤人形の伝世品では、原則的に底は作らず、下部の内側まで胡粉を塗るが、底まで作り込んでいるものや、底に紙を貼っているものなどもあるとのことである（杉山晋作ほか1996）。

単純な型作りとは異なる技法のものに、大型の西行法師Ｄ（図90－21）と、手づくねを主体とし一部に型を併用した猿Ａ（図112－１～５・７）・Ｂがある。

西行法師Ｄはいわゆる瓦質土器とは異なり、屋瓦とほとんど変わらない燻し銀色の堅緻な焼成の大型のものである。１号池からの出土で幕末に近い時期のものと考えられる。型作りではないこのような瓦に近い焼成の人形には、堤焼の作例として伝世する高さが70～120cm にもなる大型の七福神が知られる（東北歴史資料館1995）。

また、型作りによるものが圧倒的に多いなかで、猿に手づくね（十一部型使用）のものがみられるという例は各地でたびたび認められる。その背景としては、様々なポーズをとらせるための表現上の理由であろうとする見解（真砂遺跡調査団1987）が妥当と思われる。手づくねの猿のポーズには実際非常に多様性があり（図112）、本遺跡の例だけでも、釣りをするもの、鉄砲を構えるもの、しゃがむもの、あぐらをかくもの、横座りするものがあり、他遺跡の例では、親子が荷車するもの、擂鉢を抱えすりこぎを持つものなども認められる。なぜ猿についてのみこれほどまでに多様性があるのだろうか。

土人形の意匠には、人間の形をとるものでは、天神・七福神・西行法師、動物では猿・犬が多い傾向が認められる。これらの意匠はいずれも各地でよく出土するものであり、仙台城下でも同様であったことがわかる。

天神はきわめて様式化されたスタイルのものである。七福神には背面に橋状の突帯を作るものが認められる（図112－９）。このような突帯をもつものには猿・般若などの例があり（図112－14・15など）、お面とされている。

図112　武家屋敷跡第4地点出土土人形と各地の土人形
Fig. 112　Clay figures from BK1 and other sites

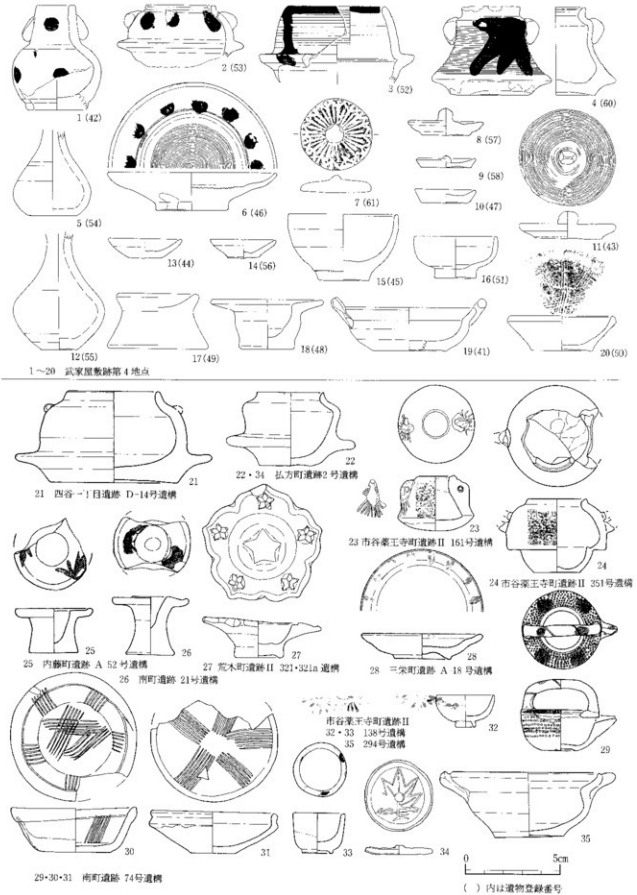


図113　武家屋敷跡第４地点出土玩具と各地の玩具
Fig. 113　Clay objects from BK4 and other sites

お面としては顔の左右端部に穿孔を施し、紐を通せるようにした形のものもあり、こちらは実際かぶせることの可能な形態であるが、本例の場合は、かぶせるというより飾り物的に何かに括りつけることを目的としたものであろう。

西行法師は土人形の元祖とも考えられている京都の伏見人形の初期からみられるモチーフで、腰痛封じや盗難除けとして用いられたという。他地域での西行法師の例をみると（図112－16～18）、座るものと立つものがあり、傘をかぶるものとはずして持つものがある。18は首を別に作り体部にはめ込んでいるものである。本遺跡の出土例では、座形のもののみである。堤焼の伝世品に西行法師を象った瓦質の香炉や鉄釉の水滴があるが（東北歴史資料館1995）、それらも座形であり、仙台周辺では座形が卓越する傾向が指摘できよう。

図88－17にみられる「庄子」の文字は、堤人形との関連を示すものとして注目される。庄子姓は18世紀後半の堤人形の工人にみられ、伝世する型の外側に姓名を刻んだ例が知られている。17の文字は型の内側に陰刻したものとみられ、仙台市博物館蔵の本出保治郎コレクションのなかに収められている堤人形の伝世品「和藤内」の背面に、同様の方法による良く似た字形の「庄子や」の文字がある（杉山晋作ほか1996 P 43の76）。

② 土製玩具

土製玩具では、うつわもの以外で実際遊んだと推定できるのは、鈴、碁石と面子、箱庭道具の多層塔・民家・屋根、可能性のあるものとして石垣かもしれない方形囲Aや、電かもしれない方形囲BやC、水滴かもしれない瓢縁？くらいのもので、鈴を除けば各々1点のみか多くても4点しか出土していない。今回の調査区でみる限りでは、土製玩具の主体はうつわものと鈴であるといえる。

うつわものには多様な器種が認められた。白色胎土で西日本産とみられる図88－77は型作りのうつわの可能性があり、図113－7も型作りとみられるほかは、すべて轆轤を用いて作られている。京都・大阪や江戸の遺跡では、小型の碗皿や茶釜などに型を用いたもの（図123－23・24・29・32・33など）が一定量認められるのとは異なった様相を示している。

碗類は高台を環状ではなく中実の円柱状に作っている。このような形態のものはいまのところ他地域での例を知らない。二の丸跡第9地点15号土坑の出土例には高台のないものと円柱状のものがあり、高台は作らないか中実円柱状に作るのが地域的な特徴と言えそうである。

器台Bは類例を知らないが、器台Aに類するものは江戸でも数遺跡に見出すことができる。図113に2点の例を示した（25・26）が、法量や細部形態には多様性があり、その性格についても香台・器台や花器などとされており、いまだ定説と呼べるものはないようである。江戸遺跡の出土例では、これらは白色の胎土で陶器質、施釉で緑釉による文様が施されており、京都系とされるものが多いが、本遺跡の例は白色胎土ではなく褐色のもののみで、それらを模した在地産であると考えられる。

また、壺や茶釜に鉄釉で円形文や飆文などを施文するものが数点出土しており、これまで仙台城では出土例のないもので注目される。5b層、18号土坑、2号池理土3b層の出土で、概ね18世紀後葉以降のものと考えられる。釉薬で草花や円形文の施文された例としては、先述の器台（図113－25・26）や図113－28の皿、29の銚子などがあり、それらとの関連が想定できる。当地点の例は形態やカキメを多用する点などで特徴的であり、胎土からみても在地産の可能性が高いと考えられることから、上記のような緑釉の製品を意識して在地で生産されたものなのであろう。

最も多く出土した鈴は、二の丸跡でも比較的よく出土するものである。比較的整った球形のものが多く、法量は多様であるが形態は斉一的である。鈴は各地の例をみると意外と多様性があるものであり、森潤雅介ほか1977には堤人形の現代の製品として玉鈴と呼ばれる整った球形のものが紹介されており、仙台では比較的球形を志向する伝統があるかのようである。

その他の玩具では、先述のようにいわゆる面子の類がほとんど無く、江戸で流行した円柱状で各種の文様を型

打ちした泥面子は全く認められないことが特徴的である。箱庭遺具の多層塔の出土は仙台城周辺では初めてであり、19世紀には箱庭遊びが行われていたことを示すものとして注目される。

③ **小結**

以上大雑把ではあるが本遺跡出土の土人形・土製玩具について検討してみた。二の丸地区にはみられない多様性と出土量が武家屋敷としての本地点の第一の特徴である。各地のものと比較してみると、意匠や器種には流行が反映されているとみえて共通するものが多いことに気づく。明らかに西日本的である白色胎土のものもわずかに含まれるが、表現のスタイルや器形においては地域的な特徴を有するものが多く認められることも明らかである。江戸中期からの人形産地として知られる堤人形と関連付けられる要素も有しており、今後仙台周辺での生産の様相を明らかにしていくうえで重要な資料となるものである。

8．まとめ

今回の調査では、二の丸北方の武家屋敷地1143㎡の発掘が行われ、仙台藩の武家屋敷の考古学的な解明が進んだ。調査の結果、建物跡、柱列、溝、池、土坑、畑の耕作跡など多様な遺構が多数、複雑に重なりあって検出された。また、整地、盛土などの基礎地業も度々行われており、遺構相互の関係はきわめて複雑になっていた。調査資料を整理し、遺構と検出層、検出面の関係、建物遺構の配置、方位、建物の柱間、重複遺構の新旧関係を詳細に検討し、また、陶磁器など出土遺物の年代などを入念に検討した結果、多数の検出遺構、特に建物群の変遷をⅠa期からⅡb３期まで大別２期、細別６期で捉えることができた。Ⅰ期とⅡ期の間には、建物柱間に１間６尺５寸から６尺３寸への変化が認められた。この武家屋敷が造成、整備されたⅠ期の始まりは、１号溝出土の陶磁器によって17世紀初頭まで遡ることが確認された。また、Ⅱ期の開始は、２号池出土遺物から、17世紀末頃と推定した。Ⅱ期の詳細な変遷は、建物の方位と重複関係、配置、出土遺物を検討して決定した。また、発掘区の遺構群を仙台城下絵図と対比させることによって、この武家屋敷の区画、居住藩士名を確定することができた。

検出した遺構群は、１つの屋敷地の西半にあたり、ほぼ同規模、類似した構造、配置の建物が建て替え続けられたことが明らかにされた。Ⅰ期には地鎮を行った遺構が３個所で検出されている。その埋納銅銭から年代がほぼ確定し、その祭祀行為の内容を具体的に捉えることができた。Ⅰb期には多くの建物跡が検出され、この屋敷の基本的な建物構成をよく示している。建物は南北棟が主であり、その構造から、敷地の西側の建物群を構成するもので、主屋群は東よりにあると考えられる。Ⅱa期には池状遺構も造成され、屋敷地の基本形態がほぼ形づくられ、その後巻末まで改修、改築が繰り返されていったことが明らかになった。

今回の調査で、多種多様な遺物が出土した。ことに陶磁器や土器については、江戸初期の内容が明らかにされ、その編年基準資料が確保された。また、その後の陶磁器類の様式推移についても良好な資料がえられ、二の丸跡出土資料とあわせて検討すると、江戸時代を通じて使用陶磁器の変遷を詳細に捉えることができるようになった。さらに陶器、磁器類の供給関係の推移、東北地方の供給窯の推移についても検討を加え、福島県岸窯系陶器の編年などについても新たな知見を提示することができた。磁器では、切込焼の三彩皿が出土しており、仙台藩の上・中級藩士層が、この地方窯に親しんでいたことも明らかにされた。

この遺跡からの出土遺物には、化粧・装身具、文具、武具、武器、玩具、生活用具、什器、祭祀具、仏器、あるいは茶器、喫煙具といった藩士の生活にむすびつくあらゆる物質文化がみられ、二の丸跡の出土資料に比べると、それぞれの遺物の量が少なく、画一性に乏しいが、藩士の上・中階層の生活内容を具体的に捉えることができた。ことに、生活什器、祭祀・仏器、あるいは茶器などの陶磁器、土器類について、器種の組み合わせ、使用量、産地、扱い方など、また、時代による推移を詳細に解明できた。このことは、本調査の重要な成果といえる。

土器類では、土師質土器皿の様相が、二の丸地区と顕著に異なっており、本屋敷地では「かわらけ」を使用した饗宴が、二の丸地区と比べると格段に少なかったことを示している。また、土人形・土製玩具は、これまでの

二の丸地区での総出土量を上回る量が出土しており、遺跡の性格の違いを良く表している。一方、瓦の出土量は極めて少なく、この屋敷地では、瓦葺建物は存在しなかったか、あったとしても極めて限られたものであったと考えられる。また、地鎮具として金製の小型輪宝が出土している。この資料も、武家屋敷の敷地造成、建物の建造にあたって行われた当時の祭祀行為のあり方をうかがうことができる貴重な資料である。漆紙文書が、近世遺跡では初めて出土したことも、重要な成果であった。今後、類例が増加していくことを期待したい。

このように、遺構の様相、遺物の様相ともに、二の丸地区とは大きな違いが認められた。これまでの二の丸跡の調査成果だけでなく、性格の異なる遺跡との比較を進めていくことが、近世遺跡の研究に広がりと深みをもたらすことが、あらためて明らかになったと旨えるであろう。

今回の調査における重要な成果のもう一つは、江戸時代以前の遺物が出土していることである。歴敷造営以前の沢状の落ち込みから、縄文土器・弥生土器・石器が出土している。これまでにも川内地区では、約4000年前の中期縄文土器や石器が出土しているが、極めて少量で、当該期の遺跡の存在は予想されても、具体的な場所の比定は困難であった。また、弥生時代前期中頃から中期中頃の弥生土器も出土しており、この時代の人々の生活の場が、この川内の河岸段丘上に営まれていたことが明らかになった。川内地区では、縄文時代・弥生時代の遺跡は、これまでには全く見つかっておらず、その実態の解明が期待される。また、古代の遺物も出土しており、周辺にその時期の遺跡が存在する可能性が高くなった。

第Ⅳ章　青葉山遺跡Ｅ地点第４次調査（ＡＯＥ４）

１．調査経緯

⑴　青葉山地区の立地と1994年までの調査

理学部・工学部・薬学部が所在する青葉山地区は、多摩段丘に比定される青葉山段丘の低い方から２番目の面（Ⅲ面）に位置する。青葉山段丘は各面を覆う火山灰層の関係からⅠ・Ⅱ面とⅢ・Ⅳ面とでは形成時期が異なると考えられており、より低位のⅢ・Ⅳ面には愛鷹軽石層より上位の指標テフラのみがみられる（大月義徳1987）。

青葉山地区では、旧石器時代をはじめとする遺物が発掘・採集された青葉山遺跡Ａ～Ｅ地点が知られている。東北大学構内には、Ｂ地点とＥ地点が存在する。Ｂ地点は本調査区の北東に位置し、1984年に２個所の発掘調査が行われて前期～晩期旧石器時代にわたる合計４面の旧石器時代の文化層が発見された（年報２）。Ｅ地点ではこれまで３次にわたる調査が行われている。旧石器時代の陥し穴状遺構が検出された1984年の理学部化学機器分析センター新営に伴う第１次調査（年報２）以来、しばらく調査は行われていなかったが、1993年の青葉山地区基幹整備に伴う第２次調査で縄文時代早期～平安時代の遺物が発見された（年報11）。これによりＥ地点の範囲が大きく広がっていることが明らかとなった。翌1994年に行われた理学部自然史標本館の新営に伴う第３次調査では、縄文時代早期後葉の住居跡２棟と、4000点近い貝殻条痕文土器・石器が出土し、当該期の良好な一括資料が得られ、石英安山岩を素材とした石器製作の様相が捉えられるとともに、土器の詳細な検討により、これまで東北地方では空白であった当該期の土器型式について「青葉山Ｅ式」を提唱した（年報12）。

⑵　調査地点の位置

調査地点は理学部地学系学科教室の南に東西に走る道路と宮城教育大学方面への道路に挟まれた部分の東端に近く、北側は地学系教室との間の道路によって削平されている。東側は現在自然史標本館が建てられている第３次調査区につながる。南東には道路を挟んで理学部と工学部の所在する尾根を分ける深い谷があり、その谷頭に近い東南東に傾斜する緩斜面である。調査前の標高は最も高い北西部で157m、低い南東部で152mであった。

⑶　調査の方法と経過

東隣の第３次調査区では先述のように縄文時代早期の集落跡が検出されており、本調査区でもその続きが検出されることが予想された。また本調査区は第３次調査区よりも斜面の上方に位置し、火山灰層の堆積状況もより良好であることから、旧石器時代の遺構・遺物が存在する可能性も考えられた。そのため縄文時代の包含層は全面を調査し、その後火山灰層について調査面積の１割を目安に試掘調査を行うこととした。

重機によって１層を取り除いた後、２層以下を手掘り調査した。グリッドは第３次調査区から連続する形で設定した。２層上面・２層および遺構内の遺物を取り上げる際にはすべて出土位置と標高を記録した。２層を掘り下げながら遺構の確認を行ったが、遺構はすべて３層上面で確認している。３層上面を検出した段階で地表面の標高を記録した。図115に示した標高は、３層上面のものである。３層以下の火山灰層については図115に示すように調査区全体をカバーする形で深掘試掘調査を行い、層序と旧石器時代の遺構・遺物の存在を確認した。遺構平面図・断面図、遺物の出土位置等は基本的に20分の１で実測し、分布の疎らな地域では平板を用いて100分の１で実測した部分がある。

1995年７月24日から、建物本体部分を対象に調査を開始し、10月中には２層と遺構の調査はほぼ終え、３層以下の試掘調査に移った。その後工事車両の搬入路部分の追加調査が必要となり、11月22日からＡＱ・ＡＲ－10～16区の拡張を始め、12月12日には深掘り調査まで終了した。翌３月４日からＡＳ～ＢＤ－10～15区を更に拡張し、

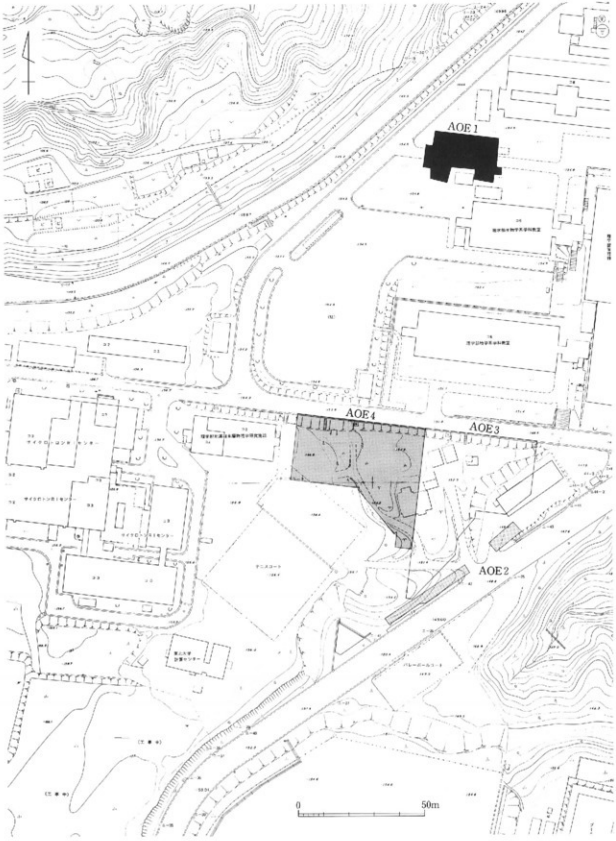


図114　青葉山遺跡E地点第4次調査調査区の位置

Fig.114　Location of AOE4 (AOE4 i.e. the fourth excavation of Aobayama site Loc.E)

3月28日には全て終了した。いずれの深掘り調査においても、旧石器時代の遺構・遺物は確認されなかった。

2．基本層序

基本層序は1～12層に分けられた(図116～119)。1層は大学による盛土と戦後の開拓時代以降の客土とみられる褐色土、および大学の埋設管埋土を一括している。2層が遺物包含層で、褐色の2ａ層と、3層との漸移的な様相をもつ2ｂ層に細分される。2層には縄文土器・土師器が含まれ、2層上面からは近代の磁器が出土しており、2層上面は近代まで表土であったとみられる。3～7・9・10層がローム層で、5層上面に川崎スコリア(2.6～3.2万年前：板垣ほか1980)が確認された。8層が愛島軽石層(6.4～8万年前：年報2)。11層は赤色風化がみられ、水成堆積の可能性が高いと考えている。12層が段丘礫層である。

ＡＰ～ＢＡ－5～9区にかけては、ごく最近まで戦後の開拓農家の廃屋が藪の中に建っており、おそらくその建設のための削平で大きな段差が形成され、4層以上は残存していなかった。2層はこの部分とＡＱ・ＡＲ…10～13区、北西部の1号溝以北では削平されていた。斜面下方の南側が厚い傾向がみられた。深掘試掘調査の結果、3～6層は厚みの変異はあるものの調査区全域に似たような傾斜で認められたが、より下部の層序については場所により違いが大きい。8層が存在するのは深掘1区・2区のみで3区以東では認められない。3区以東では6層の下は7・8層が混ざり合った再堆積状態のＡ層やＤ層・Ｅ層となっている。また9・10層は調査区北東隅と深掘4区・12区の境界付近を結ぶラインより東では認められなくなり、7～8層相当の下に11層相当の堆積が認められる状況となる。11層も様相は一様ではない。12層の上面の傾斜も場所によって大きく異なっており、調査区南壁（図117）や6・7列境北壁（図118）ではより上層の傾斜とあまり違いはないが、ＢＥ・ＢＦ列境西壁では南端では南に下がり、より北では北に下っている。ＡＱ・ＡＲ列境東壁でも北側に下がる傾斜を示している。12層の上面は全体として9列付近の西側が最も高く、その南北両側で低くなっているようである。

3．検出遺構

3層上面で検出された遺構は溝跡1条、土坑5基、ピット13基である（図115）。土坑は6列以北に分布し、2～4号土坑は形状はそれぞれ異なるが、近接して東西に並んで検出された。これらの所属時期については明確にする手掛りが少なく、断定できるものはない。

【1号溝】(図120、図版69・72)

調査区の北西部ＢＫ－3・4区、ＢＬ－4・5区、ＢＭ－5区で検出された。埋設管で中央・南北が分断され、これ以上の延びは不明である。方向Ｎ－50°－Ｅで直線的、残存長8.9m、幅は南側で50cm、北端で広がり最大75cmを測る。断面は緩やかなＶ字状を呈し深さは12cm。埋土は暗褐色土で3層に分けられる。出土遺物はない。

【1号土坑】(図120、図版72)

ＢＬ－6・7区で検出された。南を除く三方が攪乱で破壊され、全体の形状は不明である。壁がある南辺は直線的で壁際がくぼんでいる。残存部分での長軸は166cm、短軸が72cm、深さは10～22cmを測る。出土遺物はない。

【2号土坑】(図120、図版72)

ＢＥ・ＢＦ－6区で検出された。東南部は攪乱を受けて底面近くしか残っていない。上端残存部と下端の形態から、本来は長方形に近い平面形と推定される。底面中央には平面楕円形のピット（長軸26cm短軸19cm深さ36cm）が1基認められる。長軸方向はＮ－51°－Ｗである。残存部で長軸198cm、短軸105cm、深さはセクション図の位置で118cmを測る。埋土は8層に分けられ、埋土5層以下は黄褐色土と暗褐色土が互層をなし、4層以上は暗褐色土に黄褐色土ブロックを含む土である。壁が崩壊しながら自然に堆積したものと考えられる。出土遺物はない。平面形・規模と底面のピットの存在から、陥し穴の可能性が高いと考えられる。

【3号土坑】(図120、図版72)

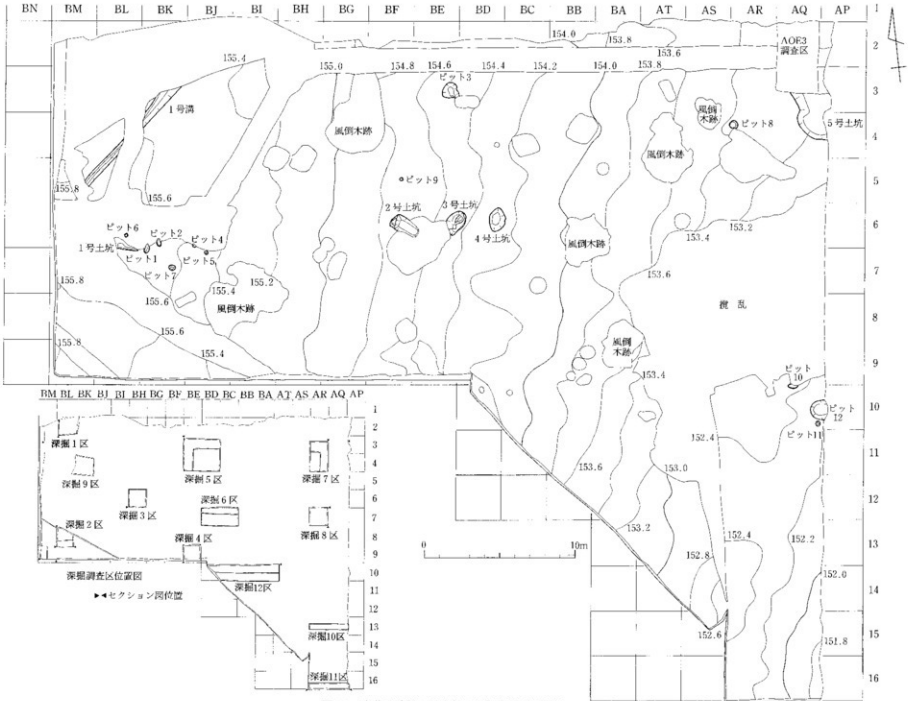
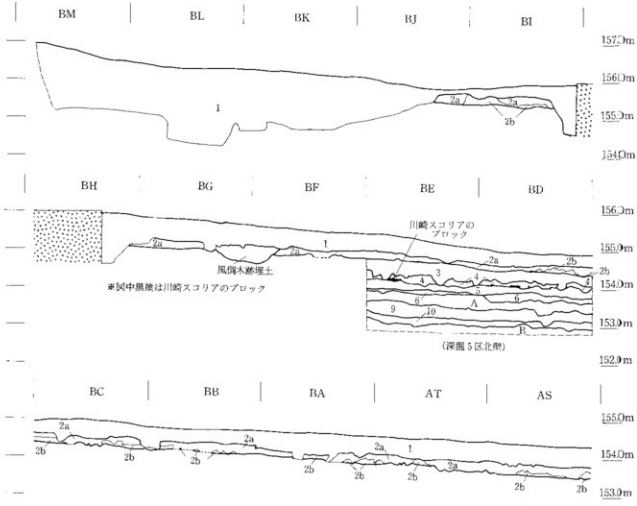
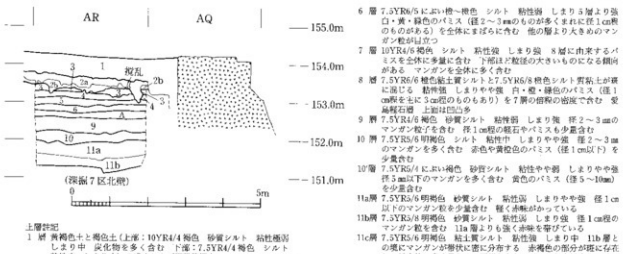


図115　青葉山遺跡E地点第4次調査遺構配置図
Fig. 115　Distribution of features at AOE4





6 層 7.5YR6/5 にぶい橙～橙色 シルト 粘性弱 しまり 5層より強 口・黄・褐色のパミス (径2～3mmのものが多くまれに径1cm程のものがある) を全体にまばらに含む 他の層より大きめのマンガン粒が目立つ

7 層 10YR4/6 褐色 シルト 粘性強 しまり強 8層に由来するパミスを全体に多量に含む 下部ほど粒径の大きいものになる傾向がある マンガンを全体に多く含む

8 層 7.5YR6/6 橙色粘土質シルトと7.5YR6/8 橙色シルト質砂土が斑に混じる 粘性強 しまりやや強 白・橙・褐色のパミス (径1cm程を主に3cm程のものもあり) を7層の個程の密度で含む 受蒲軽石層 上部は凹凸多

9 層 7.5YR4/6 褐色 砂質シルト 粘性弱 しまり強 径2～3mmのマンガン粒子を含む 径1cm程の軽石やパミスも少量含む

10 層 7.5YR5/6 明褐色 シルト 粘性中 しまりやや強 径2～3mmのマンガンを多く含む 赤色や黄橙色のパミス (径1cm以下) を少量含む

10'層 7.5YR5/4 にぶい褐色 砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや強 径5mm以下のマンガンを多く含む 黄色のパミス (径5～10mm) を少量含む

11a層 7.5YR3/6 明褐色 砂質シルト 粘性弱 しまりやや強 径1cm以下のマンガン粒を少量含む 軽く赤味がかっている

11b層 7.5YR3/6 明褐色 砂質シルト 粘性弱 しまり強 径1cm程のマンガン粒を含む 11a層よりも強く赤味を帯びている

11c層 7.5YR5/6 明褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり中 11b層と2の境にマンガンが層状に密に分布する 赤褐色の部分が斑に存在し一見全体に赤く見える 下部を中心にパミスを少量含む ラミナがみられる

12 層 7.5YR5/6 明褐色 径5cm程の礫層を多量に含む風化礫層 粘性弱 しまり中 マンガンを帯状に含む 軽石・パミス・炭粉を多量に含む 赤味を帯びる 上面の凹凸が著しい ラミナがみられる

A 層 10YR6/6 明黄褐色と5/6黄褐色が斑に混じる シルト 粘性弱 しまり強 厚0.5～2cmの礫を少量含む 径2～3mmのマンガンを多く含む 7～8層相当

B 層 7.5YR4/6 褐色 シルト 粘性弱 しまり中 斑に橙色の部分がある 非常に細かなマンガンの粒子を含む C層よりも赤味が強い

C 層 7.5YR5/6 明褐色と5/6橙色が斑に混じる シルト 粘性弱 しまり中 径2～10mm程のマンガン粒子を非常に多く含む

B・C層は11a層に対応する

調査区北壁

土層詳記

1 層 黄褐色土と褐色土(上層:10YR4/4 褐色 砂質シルト 粘性極弱 しまり中 炭化物を多く含む 下層:7.5YR4/4 褐色 シルト 粘性中 しまり中) の混じ合ったもの 現代整地層

2a 層 7.5YR4/3 褐色 シルト 粘性強 しまり中 黒褐色シルトを部分的に斑に含む 巻～明褐色シルトを部分的にブロック状あるいは斑に含む

2b 層 7.5YR5.5/6 橙～明褐色 シルト 粘性中 しまり中 褐色シルトを斑に含む 断層破

3 層 10YR5/6 黄褐色 シルト 粘性中 しまり中 以下の層に比して微もポゾゾルしている

4 層 10YR5/4 にぶい黄褐色と6/6明黄褐色が斑に混じる シルト 粘性やや弱 しまり中 3層よりやや固く5層ほど緻密ではないやや角のとれた小礫をわずかに含む

5 層 7.5YR5.5/5 にぶい褐色～橙色 3・4層よりやや赤味・白味がある 粘土質シルト 粘性強 しまりやや強 土器まれに層中に川崎スコリアのブロックが認められる

図116 青葉山遺跡E地点第4次調査断面図(1)

Fig.116 Cross sections of AOE4(1)

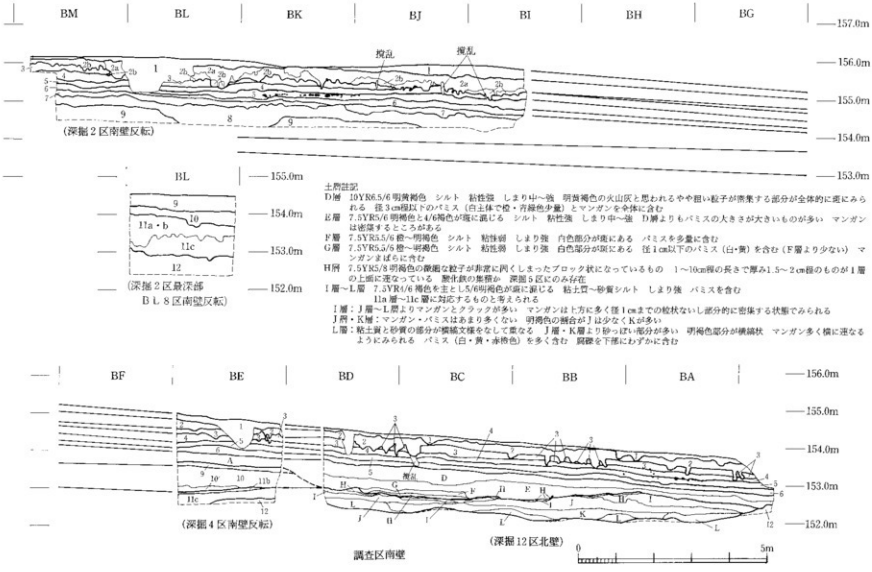
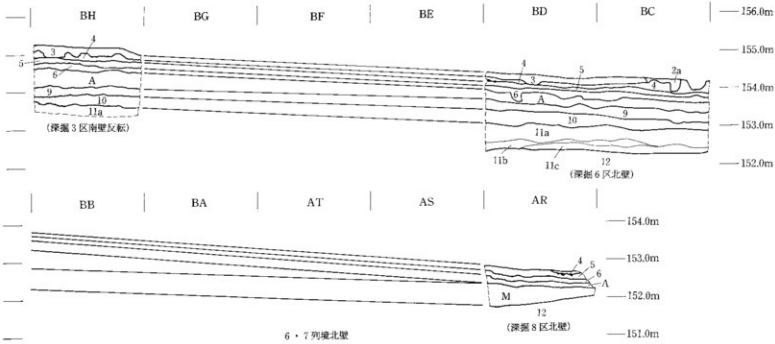


図117　青葉山遺跡E地点第４次調査断面図(2)

Fig.117　Cross sections of AOE4(2)



土層注記
M層　5YR5/6明赤褐色を主体とし、10YR6/6明黄褐色が斑に混じる　粘土質シルト　粘性中　しまりやや強
径1cm前後の礫を上部にごく少量含む　径5～10mmのマンガンを含む　11a層～11c層に対応

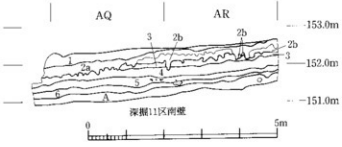


図118　育業山遺跡E地点第4次調査断面図(3)

Fig.118　Cross sections of AOE4(3)

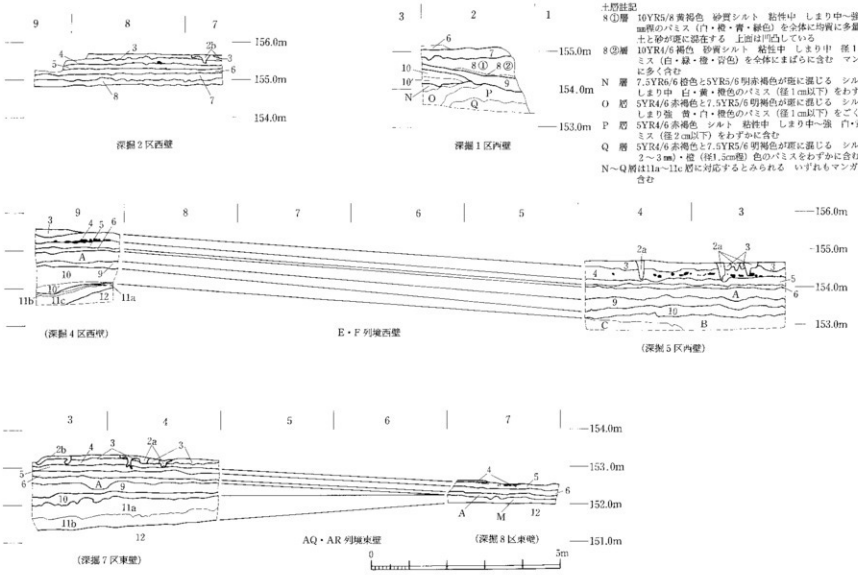


図119　青葉山遺跡E地点第4次調査断面図(4)

Fig.119　Cross sections of AOE4(4)

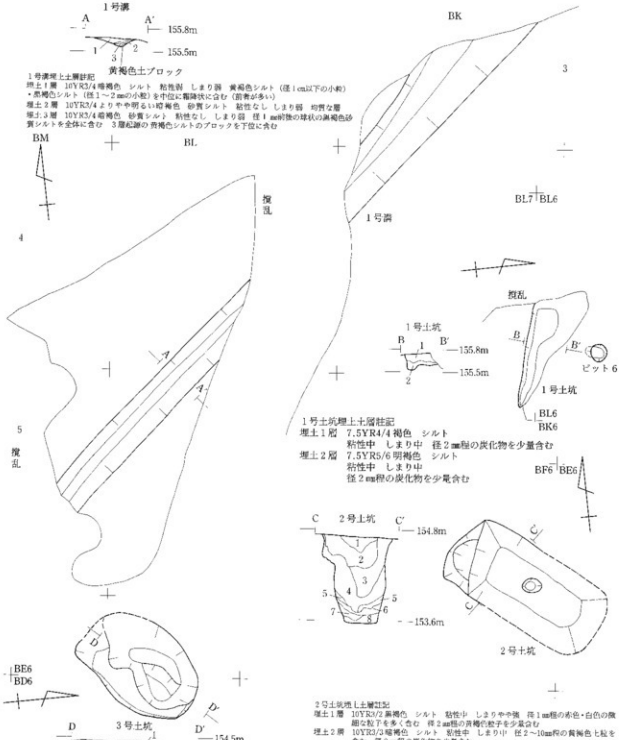


図120 青葉山遺跡E地点第4次調査検出遺構(1)

Fig.120 Plans and sections of features at AOE4(1)

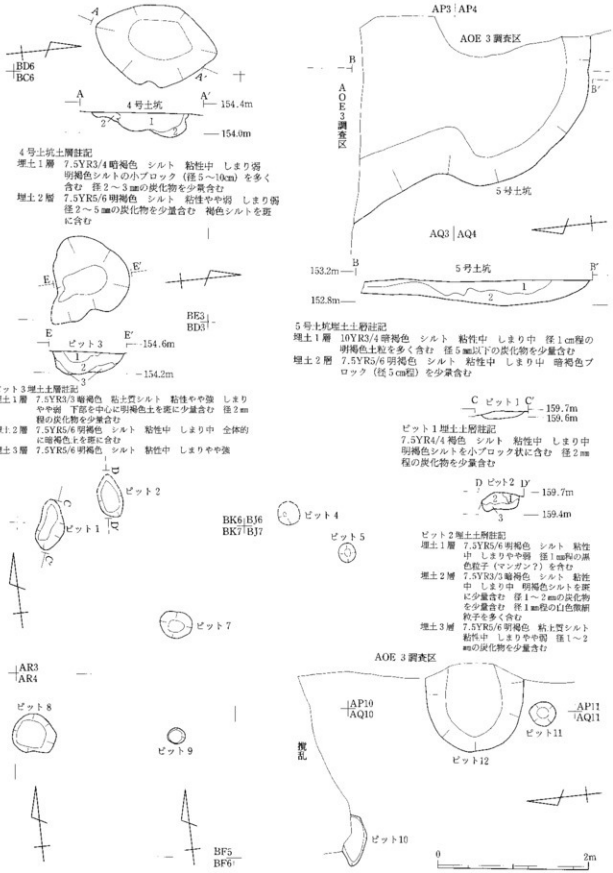


図121　青葉山遺跡E地点第4次調査検出遺構(2)

Fig.121　Plans and sections of features at AOE4(2)

ＢＤ・ＢＥ－６区で検出された。南西隅は攪乱により破壊されている。残存部のみでみても平面は不整形で底面にも凹凸が激しい。残存部での長軸168cm、短軸112cm、深さ26cm を測る。埋土は５層で、出土遺物はない。

【４号土坑】（図121、図版73）

ＢＣ・ＢＤ－６区で検出された。平面は卵形に近い不整形を呈する。長軸163cm、短軸110cm、深さ33cm を測る。埋土は２層に分けられ、出土遺物はない。

【５号土坑】（図121、図版73）

ＡＰ・ＡＱ－３・４区で検出された。東側は第３次調査区に続きがあったと考えられるが、第３次調査区では半分以上攪乱されていたため検出していない。北辺は攪乱によって破壊されている。平面不整形で、南北312cm、東西278cm、深さは36cm を測る。埋土は２層に分けられ、埋土２層から貝殻条痕文土器が１点出土した。

【ピット】（図120・121、図版73・74）

ピットは13基が確認されたが、ピット13については平面図を作成し忘れており、正確な位置と平面形状が不明になってしまった。ＡＱ－11区付近にあった浅いものである。ピット１・２・４～７は晩期縄文土器の集中部に重なるＢＪ～ＢＬ－６・７区でまとまって検出された。形状は１・２・７が60×40cm 程の楕円形、４～６は直径20～30cm の円形のもので、深いものでは20cm 程の深さがある。組み合わせは不明だが、柱穴の可能性があろう。ピット３・８・９は調査区東半に散漫に分布している。ピット８からは貝殻条痕文土器２点が出土した。

４．出土遺物

⑴　遺物の出土状況（図 122、図版 71）

遺物は基本層２層上面と２層、遺構埋土、風倒木跡埋土、表土、攪乱から出土した。２ａ・２ｂ層の区別は平面的に掘り下げる段階では困難であったため２層として一括して取り上げている。遺構からの出土は土器がピット８から２点、５号土坑から１点出土しているのみで、特筆すべき傾向はみられない。図122は２層および遺構・風倒木跡埋土から出土した縄文土器と石器についてグリッド毎に出土点数の多寡を示したものである。土器については大多数がＢＤ列以東の調査区東半からの出土で、ＡＰ～ＢＡ－６～９区は削平のため不明だが、特に北部のＡＰ～ＢＡ－２～５区に集中する傾向がある。また、これとは別に西半のＢＫ－６・７区に集中が認められる。出土した縄文土器には早期のものと晩期のものがあるが、ＢＫ－６・７区で出土しているのはすべて晩期の土器であり、それ以外での晩期の土器の出土は、ＡＲ－４区での図124－15の一部のみである。ＢＫ－６・７区のなかでも特にピット２・７の周辺に集中する傾向がある。石器については９点しかないが、調査区北東部に多いという傾向はみてとれ、晩期の土器に伴った集中は形成されていない。

東隣の第３次調査区では北東部に２棟の竪穴住居跡が検出され、2000点近い貝殻条痕文土器が住居より西側の９列以北を中心に分布していた。本調査区東半の土器は、貝殻腹縁文が１点のみであとは貝殻条痕文であり、３次調査区の貝殻条痕文土器の分布と一連のものとして捉えられる。ＢＨ～ＢＭ－２～６区は２層の削平されていた部分も多いが、ＢＩ列付近までその分布は途切れ、その西に早期とは重複しない形で晩期の土器の集中が形成されていると理解できる。

⑵　縄文土器（図123・124、図版75、表56）

縄文土器は115点出土した。内訳は早期の貝殻腹縁文土器が１点、貝殻条痕文土器が92点、晩期の縄文土器が 22 点である。これらのうち口縁部、底部、および条痕以外の文様が施されるもので、残存状態のよいものを抽出して17点を資料化した。観察表の項目記載方法は年報12に準拠している。

（表土・攪乱は除く）

図124－Ｃ11は内外面に貝殻条痕状の器面調整を施した後、外面に貝殻腹縁文と爪形文が施された体部破片。

図123－Ｃ１～９、図124－Ｃ18は貝殻条痕文土器である。器形の全体が知られるものはないが、口縁部端面の

形状には内削ぎのもの（C4・5・18）が認められた。C４は小波状口縁で口唇部外面側のみを口縁に直行する方向で刻むもの、C５はあまり起伏のない大波状口縁で刻みをもたないものである。C18の口縁部装飾は不明である。体部では屈曲部の上が強くくびれるC２・７とくびれのないC６とがある。C８は縦方向の屈曲がみられるものである。文様には沈線文？（C９）、沈線＋刺突文（C３）、沈線区画内を連続刺突で充填するもの（C５・７・18）、刺突列（C１・２）、刺突列による幾何学文様（C６）、斜行沈線＋連続刺突文（C８）があり、文様には第３次調査で出土しているものと共通するバラエティがある。

図124－C12～16は回転縄文の施されたもので、縄文には単節のＬＲ縄文とＲＬ縄文がある。C12・14は口縁部である。C12は受け口状の口縁で口唇部にも沈線が施される。C14は端部を丸くおさめる単純なものである。C13は残存状況が良くないが、複数の沈線とその間に曲線的な文様が描かれているようである。C17は底部破片である。文様は不明だが形態と出土状況から晩期のものと考えられる。

C11は貝殻条痕文土器に先行する早期中葉のものとみられ、後葉の貝殻条痕文土器が主体を占めるなかに中葉のものがわずかに認められたことになる。第３次調査でも乳房状の尖底土器の底部破片が１点出土しており、同様の傾向を示している。また回転縄文の土器はC12の特徴から晩期中葉以降のものであろう。

(3) 石器（図124、図版75、表57）

石器は、２層上面から２点、２層から７点、風倒木跡埋土から１点、表土から１点、総計11点出土した。石鏃、スクレイパー、石核、剝片、チップに分類した。

石鏃は４点出土した（図124－Ｓ１～４、図版75－Ｓ１～４）。すべて無茎鏃である。１は頁岩製の大型品である。入念な剝離で周縁を加工し、中央に素材の面を残して薄手に作られている。２は頁岩製で、両面加工により丁寧に作られている。幅に対してやや厚みがある。３は良質な頁岩製で、両面を丁寧に加工している。やや大きめの剝離で整形されているが、薄手に作られている。４は石英安山岩を用いているが、風化のためか軟質である。やはり両面加工で丁寧に作られており、２と同様やや厚めである。

スクレイパーは２点出土した（図124－Ｓ５・６、図版75－Ｓ５・６）。５は頁岩の縦長剝片を用いている。剝片の左側辺から末端にかけて刃部が形成されている。６は石英安山岩質凝灰岩の横長剝片を用いている。石器の石材としてあまり良質とはいえないが、剝片の末端に連続した二次加工が観察できる。

小型の石核が２点出土した（図124－Ｓ７・８、図版75－Ｓ７・８）。７は石英安山岩のもので、縦長や横長の剝片を生産した痕跡がみられる。８は黄色の玉髄のもので、小型の剝片を多く生産したと考えられる。また、図示してはいないが表土から流紋岩の小型石核が１点出土している。

剝片とチップは、2層から石英安山岩のものが1点ずつ出土した。

(4) 土師器（図123－C10、図版75－C10）

ＡＴ６区２層とＢＡ５区2層から出土した破片が接合した。土師器壺の頸部から体部上半にかけての破片である。器面の残りが悪く、調整ははっきりしない。体部のふくらみから古墳時代中期以降のものと考えられる。

５．まとめ

第３次調査区に連続する縄文時代早期後葉貝殻条痕文土器の分布が認められ、その西端が確認された。より先行する時期の貝殻腹縁文土器も１点のみではあるが存在し、また更に西側には縄文時代晩期中葉以降の土器の集中地点が確認されるなど、早期中葉以外の時期の遺物検出例を加えることになった。遺構の密度は高くなく、時期の明確なものはないが、陥し穴状の土坑が確認されている。

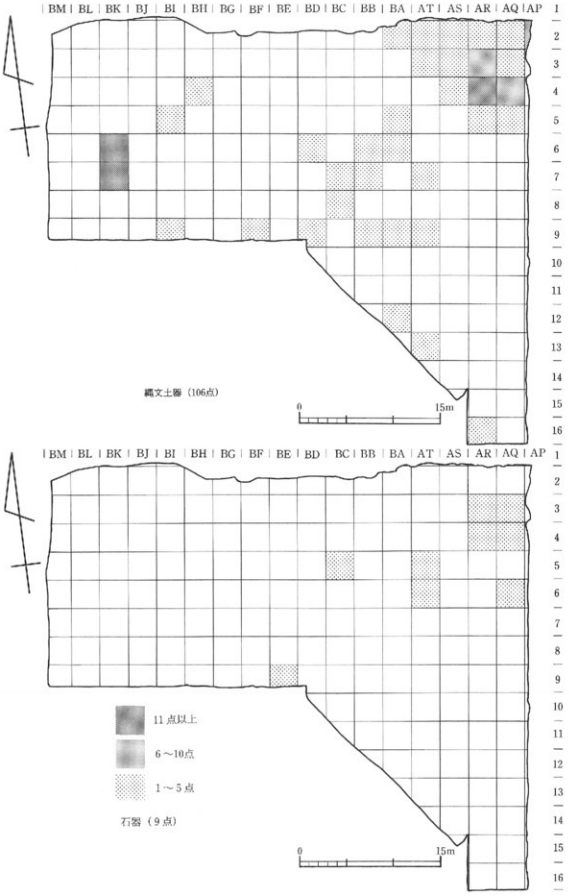


図122　青葉山遺跡E地点第4次調査グリッド別遺物密度

Fig. 122　Density of remains at AOE4

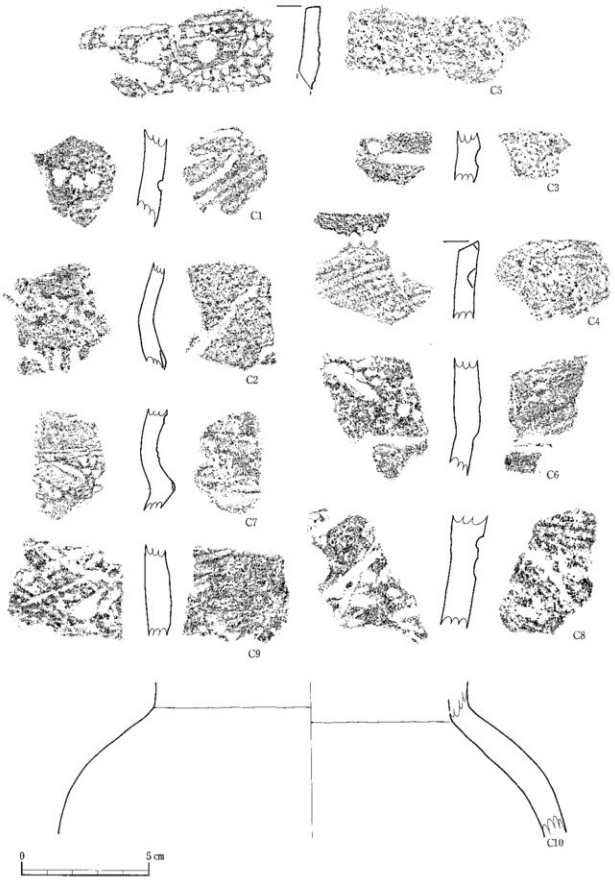


図123　青葉山遺跡E地点第4次調査出土遺物 (1)
Fig. 123　Pottery from AOE4

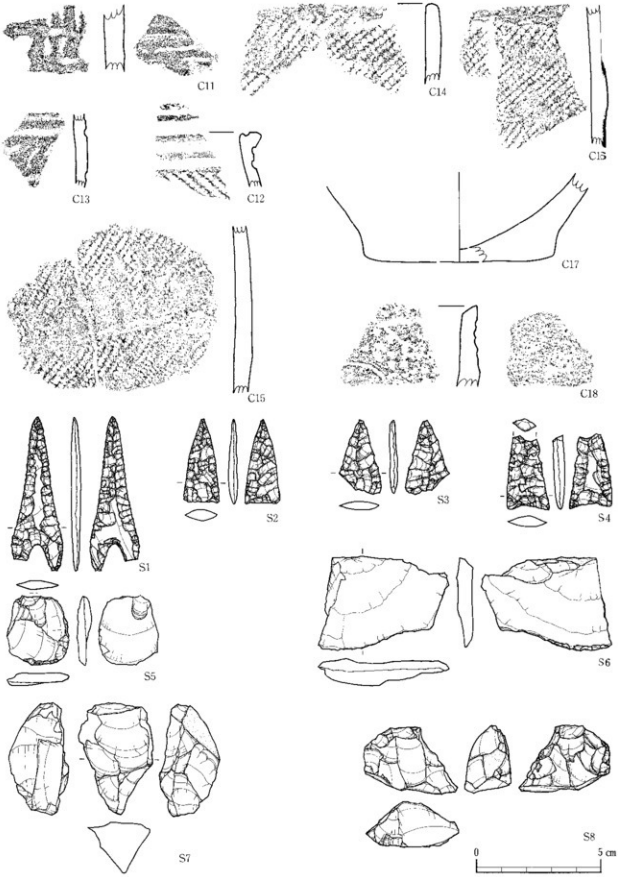


図124　青葉山遺跡E地点第4次調査出土遺物 (2)
Fig. 124　Pottery and stone implements from AOE4

表56　青葉山遺跡E地点第４次調査出土土器観察表
Tab.56　Notes on pottery from AOE4

番号	地　区	遺構・層位	種　類	部　位	口縁形	口縁形態	器面調整	文　様	炭化物	器厚	胎土	備　考	図	図版
C１	BA６区	２層上面	縄文土器	体部	不明	不明	内S・外S	Da	無	8.0	多	早期	123	75
C２	BE７区	２層上面	縄文土器	体部屈曲部	不明	不明	内S・外不	Da	無	7.0	多	早期	123	75
C３	BE３・４区	２層上面	縄文土器	体部	不明	不明	内不・外不	A＋D	無	9.0	多	早期	123	75
C４	AP２区	２層	縄文土器	口縁部	内削(1)	Ba	内S・外S	無	無	8.0	多	早期	123	75
C５	AQ・AR４区	２層	縄文土器	口縁部	内削(1)	Ca	内不・外S	Ba	無	5.5	多	早期	123	75
C６	AQ４区	２層	縄文土器	体部	不明	不明	内不・外不	Db	無	10.5	多	早期	123	75
C７	AR３区	２層	縄文土器	体部屈曲部	不明	不明	内S・外不	Bb	無	7.0	多	早期	123	75
C８	AR４区	２層	縄文土器	体部屈曲部	不明	不明	内S・外不	C	無	10.5	多	早期	123	75
C９	AR４区	２層	縄文土器	体部	不明	不明	内S・外不	A?	無	9.5	多	早期	123	75
C10	AT６・BA５区	２層	土師器	頸部～体部	不明	不明	内N・外ミガキ		無	10.5	無		123	75
C11	BA２区	２層	縄文土器	体部	不明	不明	内S・外S	貝殻腹縁文　爪形文	無	8.0	少	早期	124	75
C12	BK６区	２層	縄文土器	口縁部	受口状	沈線	内ナデ・外不	RL縄文　沈線	無	7.0	無	後期	124	75
C13	BK６区	２層	縄文土器	体部	不明	不明	内不・外不	沈線　蕨型文？	無	5.0	無	後期	124	75
C14	BK７区	２層	縄文土器	口縁部	丸(3)	A	内不・外不	LR縄文	無	5.5	無	後期	124	75
C15	AK４・BK７区	２層	縄文土器	体部	不明	不明	内不・外不	LR縄文	無	7.0	無	後期	124	75
C16	BK７区	２層	縄文土器	体部	不明	不明	内不・外不	LR縄文	外面	6.0	無	後期	124	75
C17	BK６区	２層	縄文土器	底部	不明	不明	内不・外不		無	9.0	無	後期	124	75
C18	AR・AS４区	ピット８埋土	縄文土器	口縁部	内削(1)	A?	内不・外不	Bb	無	6.0	少	早期	124	75

※　底部形・口縁形態・器面調整・文様の分類は年報12に準拠している。
S　貝殻条痕文　N　貝殻以外の調整具によるナデ　不・調整の種類が不明　器厚の単位はmm
胎土欄は胎土中の観察の多少を示している

表57　青葉山遺跡Ｅ地点第４次調査出土石器観察表
Tab.57　Notes on stone implements from AOE4

遺跡番号	出土場所	器　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	備　考	図	図版
S1	AT５区　縄例木部埋土	石　鏃	(50.80)	29.10	3.80	(3.10)	頁　岩	逆剥離折損	124	75
S2	BA４区　２層上面	石　鏃	33.10	13.90	3.85	1.96	頁　岩		124	75
S3	B9区　２層	石　鏃	29.10	(16.80)	3.30	(1.40)	頁　岩	逆剥離折損	124	75
S4	BC8区　２層	石　鏃	(28.70)	16.70	4.45	(1.50)	石英安山岩	先端部折損	124	75
S5	AQ3区　２層	スクレイパー	27.25	24.00	3.75	3.10	頁　岩		124	75
S6	BH7区　２層	スクレイパー	37.60	47.20	6.25	13.20	石英安山岩変質凝灰岩	石材使用	124	75
S7	AQ4区　２層	石　核	44.20	28.60	20.70	17.60	石英安山岩		124	72
S8	AT5区　２層	石　錘	27.90	35.65	17.60	16.00	玉　髄		124	75

〈引用・参考文献〉

愛知県陶磁資料館　1984　『近世城館跡出土の陶磁』

愛知県陶磁資料館　1997　『遺跡にみる戦国・桃山の茶道具』

愛知県埋蔵文化財センター　1990a　『名古屋城三の丸遺跡（Ⅰ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書15

愛知県埋蔵文化財センター　1990b　『名古屋城三の丸遺跡（Ⅱ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書16

安芸毅子　1991　「江戸遺跡にみる土人形－遺跡の性格と出土遺物」『江戸在地系土器の研究Ⅰ』59～77頁
江戸在地系土器研究会

阿刀田令造　1936　『仙台城下絵図の研究』斉藤報恩会博物館図書部研究報告 4

石井洋光　1997　「白河駅前地下自由通路建設関連発掘調査報告書Ⅰ」白河市埋蔵文化財調査報告書21

石川俊英　1989　『高崎遺跡調査報告書』多賀城市文化財調査報告書19

市川一秋　1996　「天神山窯跡」『長沼町史第２巻資料編Ⅰ』349～362頁

石沢誠司　1984　「土人形」『窯業』講座・日本技術の社会史第４巻　278～286頁　日本評論社

板垣直俊ほか　1981　「仙台およびその周辺地域に分布する洪積世末期のスコリア層」『東北地理』第33巻第１号48～53頁

伊東信雄　1967　「仙台城の歴史」『仙台城』1～22頁　仙台市教育委員会

伊藤正義ほか　1990　『東北の陶磁史』福島県立博物館

井上喜久男　1992　『尾張陶磁』ニューサイエンス社

井上新太郎　1974　『本瓦葺の技術』彰国社

井上雅孝　1996　「地鎮め具としての蛸宝」『標葉文化論究』145～155頁　小野田禮常先生頌寿記念論文集

梅宮茂・鈴木功ほか　1994　『（仮称）福島市東部学校給食センター建設関連埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』
福島市埋蔵文化財報告書63

江戸遺跡研究会　1991　『よみがえる江戸』新人物往来社

江戸遺跡研究会　1992　『考古学と江戸文化』江戸遺跡研究会第５回大会発表要旨

江戸遺跡研究会　1992　『江戸の食文化』吉川弘文館

江戸遺跡研究会　1993　『遺跡にみる幕末から明治』江戸遺跡研究会第６回大会発表要旨

江戸遺跡研究会　1995　『江戸時代の生産遺跡』江戸遺跡研究会第７回大会

江戸陶磁土器研究グループ　1992　『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』シンポジウム資料

江花明久・近藤真佐夫　1994　『若松城下城東町遺跡』会津若松市文化財調査報告書38

扇前正義　1993　『江戸発掘』名著出版

大月義雄　1987　「宮城県中南部の中期更新世示標テフラ」『東北地理』第33巻第４号268～282頁

大橋康二　1984　「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』152～157頁

大橋康二・尾崎葉子　1988　『有田町史　古窯編』有田町教育委員会

大橋康二・西田宏子ほか　1988　『別冊太陽 No.63　古伊万里』平凡社

大橋康二　1993　『肥前陶磁』ニューサイエンス社

大橋康二　1994　『古伊万里の文様』雄工学社

奥津春生　1967　「仙台城の地形・地質」『仙台城』仙台市教育委員会

押山雄三　1998　『天神南遺跡』　郡山市教育委員会　**123～165** 頁

小田原市教育委員会　1990　『小田原城とその城下』

笠原信男　1996　「仙台藩の瀬戸瓦」『研究紀要22』1～23頁　東北歴史資料館

関西近世考古学研究会　1994　『近世陶磁器の諸様相』第６回関西近世考古学研究会大会

九州陶磁文化館　1984　『国内出土の肥前陶磁』

九州陶磁文化館　1990　『柴田コレクション展（Ⅰ）』

九州陶磁文化館　1991a　『柴田コレクション展（Ⅱ）』

九州陶磁文化館　1991b　『肥前の色絵「その始まりと変遷」展』

九州陶磁文化館　1993　『柴田コレクション展（Ⅲ）』

九州陶磁文化館　1994　『よみがえる江戸の華』

九州陶磁文化館　1995　『柴田コレクション展（Ⅳ）』

工藤哲司・佐藤洋　1986　『柳生』　仙台市文化財調査報告書95
久保和士　1995　「鋼の鍾」『華火』54号　4・5頁
見城敏子・小井川百合子　1989　『堤人形の美』仙台市博物館
小井川和夫　1980　「八沢災害遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』宮城県文化財調査報告書72
小井川和夫　1981　「上新田遺跡」『長者原遺跡・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書78
小井川百合子　1996　「堤焼と雄人形」『仙台市史　特別篇3 美術工芸』201～209頁　仙台市
古泉　弘　1990　『江戸を掘る』柏書房
小林清治篇　1982　『仙台城と仙台領の城・要害』日本城郭史研究叢書2
駒井訓之助　1981　『かわら日本史』雄山閣出版
斎藤義弘・高橋一征　1996　『勝口前畑遺跡5』福島市埋蔵文化財報告書92
坂田啓編　1995　『私本　仙台藩士事典』創栄出版
佐久間光平・佐藤憲幸ほか　1993　『上野館跡（III）』宮城県文化財調査報告書149
佐久間光平・小村田達也　1995　『佐沼城跡』迫町文化財調査報告書2
佐々木達夫　1985　「物資の流れ－江戸の陶磁器－」『季刊考古学13　江戸時代を掘る』48～50頁
佐々木達夫　1987　「江戸へ流入した陶磁器とその背景」『国立歴史民俗博物館研究報告14』189～230頁
佐藤　巧　1967　「仙台城の建築」『仙台城』仙台市教育委員会　23～87頁
佐藤　巧　1979　『近世武士住宅』
佐藤広史ほか　1990　『切込窯跡』宮崎町文化財調査報告書3
佐藤　洋　1987　「仙台城三の丸跡出土の陶器」『貿易陶磁研究7』日本貿易陶磁研究会　41～48頁
佐藤　洋　1987　『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書109
佐藤　洋　1997　『養種園遺跡』仙台市文化財調査報告書214
新宿区荒木町遺跡調査団　1998　『荒木町遺跡II』
新宿区遺跡調査会　1994　『早稲田南町遺跡』
新宿区市谷薬王寺町遺跡調査団　1998　『市谷薬王寺町遺跡II』　87～110頁
新宿区教育委員会　1988　『三栄町遺跡』
新宿区内藤町遺跡調査会　1992　『内藤町遺跡』
新宿区南町遺跡調査団　1994　『南町遺跡』
新宿区南山伏町遺跡調査団　1997　『南山伏町遺跡』
新宿区払方町遺跡調査団　1999　『払方町遺跡』
新宿区四谷一丁目遺跡調査団　1998　『四谷一丁目遺跡』
新宿区歴史博物館　1990　『江戸の暮らし－近世考古学の世界－』
杉山晋作・清水芳裕・小井川百合子　1996　『みちのくの人形たち－三春・堤・花巻・相良』仙台市博物館
鈴木功・堀江格ほか　1993　『猪上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告2』福島市埋蔵文化財報告書54
鈴木功・堀江格　1996　「福島市飯坂町岸窯跡について」『福島考古37』
鈴木雅文　1991　『阿武隈川右岸地区遺跡調査報告II（高木遺跡）』本宮町教育委員会
鈴木裕子　1990　「江戸の陶磁器」『江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨』9～22頁
須藤隆ほか　1984　『福島県会津若松市　墓料遺跡　1980年度発掘調査報告書』会津若松市教育委員会
関　善内　1974　『堤焼と陶工たち』萬葉堂書店
関根達人　1998　「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』51～90頁
関根達人　1999　「相馬焼の生産と流通」『江戸の物流－陶磁器・漆器・瓦から－』65～90頁
江戸遺跡研究会第12回大会発表要旨
芹沢長介篇　1978　『切込』　東北大学文学部考古学研究会
芹沢長介ほか　1981　『日本やきもの集成1』平凡社
芹沢長介　1983　「東北地方の近世陶磁」『世界陶磁全集9』227～259頁　小学館
仙台市教育委員会　1967　『仙台城』
仙台市教育委員会　1985　『仙台城三の丸跡』仙台市文化財調査報告書76
仙台市史編さん委員会　1997　『仙台市史　資料編3近世2城下町』

高倉淳ほか編　1994　『絵図・地図で見る仙台』
多賀城市教育委員会　1986　『山王遺跡Ⅰ』多賀城市文化財調査報告書９
高橋圭次　1991　『川俣城跡発掘調査報告書Ⅰ』川俣町教育委員会
高橋圭次　1994　『菅提院遺跡発掘調査報告書』川俣町文化財調査報告書11
高橋圭次ほか　1996　『梅沢遺跡発掘調査報告書Ⅱ』川俣町文化財調査報告書14
高橋信一ほか　1992　『東北横断自動車道遺跡調査報告17』福島県文化財調査報告書284
田口昭二　1983　『美濃焼』ニューサイエンス社
田口昭二編　1993　『美濃窯の焼物』多治見の古窯３　多治見市教育委員会
たばこと塩の博物館編　1983　『きせる』
千葉孝弥ほか　1987　『年報１　昭和61年度』多賀城市文化財調査報告書４
月山隆弘　1994　『米沢城発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書44
坪井利弘　1976　『日本の瓦屋根』理工学社
坪井利弘　1977　『図鑑瓦屋根』理工学社
坪井利弘　1979　『桟瓦屋根のデザイン』理工学社
坪井利弘　1981　『古趣葉の瓦屋根』理工学社
東京大学遺跡調査室　1989　『理学部７号館地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書１
東京大学遺跡調査室　1990a　『法学部４号館・文学部３号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書２
東京大学遺跡調査室　1990b　『医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書３
東京大学埋蔵文化財調査室　1990　『山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書４
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985　『東北大学埋蔵文化財調査年報１』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1990　『東北大学埋蔵文化財調査年報３』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1992　『東北大学埋蔵文化財調査年報４・５』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993　『東北大学埋蔵文化財調査年報６』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1994　『東北大学埋蔵文化財調査年報７』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997　『東北大学埋蔵文化財調査年報８』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998　『東北大学埋蔵文化財調査年報９』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998　『東北大学埋蔵文化財調査年報10』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999　『東北大学埋蔵文化財調査年報11』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999　『東北大学埋蔵文化財調査年報12』
東北中世考古学会　1999　『東北地方の中世出土貨幣』
東北陶磁文化館　1987　『東北の近世陶磁』
東北歴史資料館　1990　『宮城県の諸職』東北歴史資料館資料集27
東北歴史資料館　1993　『宮城県の瓦職』東北歴史資料館資料集34
東北歴史資料館　1995　『仙台・堤のやきもの』
土岐市美濃陶磁歴史館　1991　『洛中出土の桃山陶器』
土岐市美濃陶磁歴史館　1993　『桃山の華　大坂出土の桃山陶磁』
土岐市美濃陶磁歴史館　1994　『大坂出土の桃山陶磁Ⅱ』
土岐市美濃陶磁歴史館　1996　『塀衆のやきもの－堺環濠都市遺跡出土の桃山陶磁－』
土岐市美濃陶磁歴史館　1997　『洛中 桃山のやきもの』
土岐市美濃陶磁歴史館　1998　『城下町のやきもの』
土岐市美濃陶磁歴史館　1999　『織部　御深井　古染付』
都立一橋高校内遺跡調査団　1985　『江戸　都立一橋高校地点発掘調査報告』
都立学校遺跡調査会　1990　『白鷗』
長崎窯業試験場　1982　『波佐見古陶磁文様集』肥前波佐見焼振興会
長佐古真也ほか　1996　『溜池遺跡』都内遺跡調査会永田町二丁目地内遺跡調査団
中野高久　1998　「刻印・筐書きからみる『玩具類』」『江戸在地系土器の研究Ⅲ』71～101頁　江戸在地系土器研究会
中野晴久　1986　「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要Ⅱ』24～38頁
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1986『東北大学埋蔵文化財調査年報２』

中野晴久　1996　「常滑窯の研究～近世赤物について～」『知多古文化研究10』291～325頁
中山雅弘　1992　『泉城跡』　いわき市埋蔵文化財調査報告31
櫛崎彰一ほか　1980　『日本やきもの集成３』平凡社
新堀昭宏ほか　1993　『五郎兵衛館跡』福島市埋蔵文化財報告書56
羽柴直人　1996　『江川鉄山跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書237
長谷部楽爾・今井敦　1995　『日本出土の中国陶磁』中国の陶磁12　平凡社
原　充広　1994　『飯坂南部土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告III』福島市埋蔵文化財報告書65
引地光太　1998　『菅原遺跡』福島市文化財調査報告書116
平泉研究会　1996　「地鎮・遺構の廃棄儀礼検討会資料」
平田禎文　1995　「三春城下近世追手門前通遺跡群Ｂ地点発掘調査報告書」三春町文化財調査報告書22
平田禎文・藤井康　1996　「三春城下近世追手門前通遺跡群Ｃ地点発掘調査報告書」三春町文化財調査報告書23
福井県教育委員会　1979　「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告１　朝倉館の調査」
藤井直正　1988　『大坂城三の丸跡III』大手口における発掘調査報告書２
藤沢良祐　1987～89　「本業焼の研究(1)～(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要６～８』
藤沢良祐　1993　『瀬戸市史　陶磁史篇四』瀬戸市史編纂委員会
藤沢良祐　1998　『瀬戸市史　陶磁史篇六』瀬戸市史編纂委員会
藤本　強　1990　『埋もれた江戸』平凡社
古川一明　1999　「白石城跡」「名生館遺跡・下草古城本丸跡ほか」宮城県文化財調査報告書181
平凡社編集部編　1984　『やきもの事典』
堀江　格　1998　『岸窯跡－近世窯跡の調査－』福島市埋蔵文化財報告書111
前田宣裕　1997　「会津戦争に使われた近代兵器」『歴史民俗資料館名城シリーズ15　会津若松城』110～113頁
真砂遺跡調査会　1987　『真砂遺跡』
松本茂・小田川哲彦　1992　『東北横断自動車道遺跡調査報告15』福島県文化財調査報告書282
水野正好　1983　「屋敷と家屋の安寧－そのまじなひ世界」『奈良大学紀要12』1～12頁
水野正好　1985　「招福・除災－その考古学－」『国立歴史民俗資料館研究報告７』291～322頁
港区麻布台１丁目遺跡調査会　1986　『郵政省飯倉分館構内遺跡』
宮城県多賀城跡調査研究所　1982　『多賀城跡－政庁跡』
宮崎勝美・吉田伸之編　1994　『武家屋敷　空間と社会』山川出版社
村上直・木村礎・藤野保　1988　『藩史大事典　第１巻北海道・東北編』
森　毅　1992　「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」「離波宮址の研究９」大阪市文化財協会　358～372頁
盛岡市教育委員会　1991　『盛岡城跡Ｉ－第１期保存整備事業報告書－』
森瀬雅介・斉藤岳南　1977　「日本の土鈴」徳間書店
森村健一　1984　「堺環濠都市遺跡出土の陶磁器の組成と機能分担」「貿易陶磁研究４」41～49頁
日本貿易陶磁研究会
森本伊知郎　1989　「江戸における陶磁器の流通について」『考古学の世界』　93～114頁
慶應義塾大学民族学考古学研究室編　新人物往来社
森本伊知郎　1991　「江戸市中の物資流通と生活用具－遺跡出土の陶磁器から－」『甦る江戸』141～180頁
江戸遺跡研究会
柳内寿彦ほか　1986　『若松城三の丸跡発掘調査報告書』会津若松市文化財調査報告書11
山岸穆夫ほか　1991　『東北横断自動車道遺跡調査報告14』福島県文化財調査報告書264
大和幸生　1999　『三ケ森遺跡発掘調査報告書』宮城県富谷町文化財調査報告書２
山中雄志・井沼千秋　1996　『本町遺跡発掘調査報告書』桑折町埋蔵文化財発掘調査報告書12

REPORT
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY

vol. 13 March 2000

The Archaeological Research Center
on the Campus, Tohoku University
Katahiracho, Aoba ward, Sendai 980 8577 JAPAN

Summary

On the campus of Tohoku University, a lot of archaeological sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. The north part of Kawauchi campus is located on the sites of samurai residences. Aobayama campus includes remarkable Paleolithic sites and Initial Jomon sites. In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. According to legal procedures, the commission for research, which was organized in 1983, carried out many salvage excavations for 11 years. It was reorganized into the Center in 1994 to improve conditions of research. The Center mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on the campus, analyzes those records and remains and publishes excavation reports. Conservation and exhibition of archaeological heritage, studies about structure of sites, artifacts, techniques of excavation and preservation are also important duties.

This volume carries reports of salvage excavations at NM11, BK4 on Kawauchi campus, AOE4 on Aobayama campus, which were carried out by The Archaeological Research Center on the Campus, Tohoku University in 1995.

NM11 site (Loc. 11 of Ninomaru, i.e. the secondary citadel of Sendai Castle)

NM11 area corresponds to the southwest corner of Ninomaru which was located on the skirts of the Aobayama hill. This site was excavated prior to the construction of the main building of Botanical Garden attached to Faculty of Science. Depressions connecting together which we consider ponds were found there. Those depressions situated at the foot of the Aobayama hill seem to be a waterway which was used to drain the water from the hill during Edo period. There found small quantity of artifacts such as roof tiles

BK4 site (Loc. 4 of samurai residences located at the side of north outer moat of Ninomaru)

This site was excavated prior to the construction of Kawauchi student Circle Hall. This research is the first major excavation at samurai residences of the Sendai castle town. It became clear that the features belonging to Edo are well preserved at this site. We could find a few artifacts belonging to ancient times and many features and remains belonging to Edo period. The excavation at BK4 produced excellent results as follows.

Jomon and Yayoi periods

Several pottery sherds belonging to the Final Jomon period and the first half of Yayoi period, as well as stone tools were found from the top of layer 6 which was soil accumulation filling up the swamp. Settlements of the neolithic age seem to exist near this site, although no feature was found there.

Nara and Heian periods

A flat eaves tile, two flat tiles and a bottle sherd of *Sue ware* were found. The flat eaves tile resembles the tile which was used on the roof of the buildings belonging to the first stage at the Tagajo fort site, the

ancient administrative center for Tohoku district. These ancient remains had never been known at Kawauchi campus.

Edo period (1600–1868)

This site is located on a river terrace inclining to the east. During Edo period the ground surface was replenished several times, but the landfill deposit is thinner than that of Ninomaru area. The three soil accumulations, layer 5a, 5b', 5b, distributed partially expanded. Many features, over 1200 pits, twenty ditches, four ditches lined with stones, and three wells, ponds, nineteen earthen pits, and other features were found, superimposed in plans. It was very difficult to understand the relations of those features. However, by the investigation of archaeological structures found at BK4, we could recognize six major phases belonging to Edo period.

The Ia phase (the beginning of the 17th century to the middle 17th century)

The Ib phase (the latter half of the 17th century)

The IIa phase (the end of the 17th century to the early 18th century)

The IIb1 phase (the early 18th century to the middle 18th century)

The IIb2 phase (the middle 18th century)

The IIb3 phase (the late 18th century to the middle 19th century)

We could acquire new knowledge for samurai residences as follows, though we could not reconstruct arrangement plans of buildings at every phase exactly from the distribution of features. Three features of land purification ritual (*jichin*) of the building compound, three sets of two vessels fitted together at the rim under a pillar, were found on the lowest surface of occupation at Edo period. There were unhulled rice and Chinese coins minted by the Ming dynasty in the vessels. These features show us that this area located at the side of the north outer moat of Ninomaru had been brought under development for samurai residences before the Kan-ei era (1624–1644) when the Tokugawa government began to mint coins of its own. Buildings belonging to the 17th century were built at intervals of 6.5 *shaku*, and most of the buildings built after the 18th century have pillars at intervals of 6.3 *shaku*. Main buildings of the residences are thought to be constructed on foundation stones. But most of the foundation stones had been removed in later ages, so we could only recognize some attached buildings with post holes. We could know four names of samurai, Ohdachime, Narita, Ohmachi, Ohmatsuzawa, who had lived at this site successively by overlaying the four historical illustrations of Sendai Castle. As for Ohmatsuzawa's residence, we can see the illustration of the houses on the historical document of Sendai Castle illustrated by To-on Yoshinari who was the artist patronized by Sendai-Han in 1864, furthermore. The fundamental lots of each residence have never been changed during Edo period. The facilities marking one residence from another were found at the west of the excavated area. They had been changed from the ditches to the fences at the late 17th century. There were few buildings with tile roofs in this residence. Samurai residence was discontinued by the Meiji Restoration, and this place was used for a kitchen garden for a short span of time until Japanese Imperial Army's structure was constructed here in the late 19th century.

Because this site had been used as residences of samurai who held a fief yielding about 500 *koku* during Edo period, we could find various artifacts such as ceramics, clay objects, roof tiles, metal implements, stone implements, glasses, lacquer wares, and so on, which reflect the documented and private lives of a little upper samurai class. Those finds were not standardized in comparison with the finds from Ninomaru which was a part of Sendai Castle.

Ceramics excavated from features and soil accumulations belonging to Edo period are dated from the late 16th century to the middle 19th century. Most of Chinese porcelain are Jingdezhen ware made at Ming dynasty. Swatow ware made at Ming dynasty and Jingdezhen ware made at Qing dynasty are few. In the first half of the 17th century Chinese and early Japanese porcelain made in Hizen were used together. The

most interesting Chinese porcelain is the excellent bowl with the ode of "*Go-Sekiheki-No-Fu*" which was made in the late 17th century and passed down over 150 years. After the latter half of the 17th century, Hizen ware was dominant over all porcelain products until the first half of the 19th century. In the middle 19th century Seto-Mino and the minor kilns in northeastern district of Japan, such as Kirigome and Hirashimizu began to supply porcelain. Polychrome porcelain in Hizen, including the bowl of Kakiemon Style symbolize the wealthy life at this residence. Two or three-color glazed porcelain of Kirigome ware found for the first time except the kiln site showed us that they were used by the ruling class of the Sendai domain. Tea utensils belonging to the 17th century from this site consist of cups made in Mino, Karatsu and Kyoto, pitcher of Mino ware and tea jars made in Mino and Shigaraki. In the latter half of the 17th century, In the middle 17th century, fumed earthenware mortar made of tile-clay and glazed earthenware mortar of Tanba ware were replaced by those of Kishi ware made at Fukushima city. Kishi ware occupied one fourth of glazed ceramics belonging to the latter half of the 17th century from this site. After the 18th century, many Souma ware (Ohbori-souma and Ono-souma) were used for cheap tableware, a few of Kyoto ware were used for goods of higher grade. Glazed ceramics and glazed pottery with soft body made at Tsutsumi in Sendai Castle town in the 19th century were found from landfill deposited at the end of Edo period.

Unglazed ceramic consist of dishes, salt baking pots (called *Yakishio-tsubo*), earthen pans, braziers, trivets, portable cooking stoves, flower pots and so on. There are few dishes of unglazed ceramics used for tableware on a ceremonial occasion unlike at Ninomaru, because a majority of dishes of unglazed ceramics are thought to have been used for light dishes.

Clay figures and objects are abundant and of various types. Most of them are considered local products. Variety of clay figures from this site is common to those in Edo, though each was made by different techniques. Clay objects do not contain earthenware chips, but toys for playing house were found.

Metal implements consist of coins, pipes, fake coins made from pressed bowl of pipe, ornamental hairpins, accessories of Japanese swords, knives, bullets, sickles, sinks, steels for striking sparks, tongs, nails, rivets, hooks, a *rinpo* (a round object buried for purification before construction) and so on. The *rinpo* made of gold is small and very thin. This *rinpo* reduced to a mere skeleton is very rare and important for restoring the purification of building compound at samurai residence.

Stone implements consist of ink stones, rub stones, go game stones, heating stones, flints, a tea grinding mortar, a seal and so on.

Ornamental hairpins and cups made of glass which are in various colors tell about fine life past away of this residence.

We could find a piece of paper bearing ink characters permeated with lacquer by the careful excavation. It is the first find of papers permeated with lacquer belonging to pre-modern period in Japan.

AOE4 site (the fourth excavation of Aobayama site Loc. E)

The area close to AOE3 was excavated prior to construction of a research building of the Department of Physics on Aobayama campus. Artifacts of Initial and Final Jomon period and a Haji ware were found. By these finds, it became clear that this site had been repeated used. There were several pits, including a trap pit, but we cannot determine which period these belong to. The Initial Jomon pottery from AOE4 consists of two kinds. The one with decoration of shell edge impression belongs to the middle stage of the Initial Jomon period. The other type with scratch marks made by shell-edge belongs to the late stage of the Initial Jomon period. The former has been found for the fist time on Aobayama. While the latter is considered to be the Aobayama E type Jomon pottery which has been found in large quantities at AOE3. AOE4 seems to be situated at the verge of the settlement belonging to the late stage of the Initial Jomon period found at AOE3.

写　真　図　版

図版１～３：仙台城二の丸跡第11地点
図版４～68：仙台城二の丸北方武家屋敷跡第４地点
図版69～75：青葉山遺跡Ｅ地点第４次調査

1．試掘1区全景（北西から）

2．試掘2区全景（南東から）

3．試掘1区共同溝壁セクション（北東から）

4．試掘2区西壁セクション（北東から）

5．試掘3区全景（北西から）

6．試掘4区全景（南東から）

図版1　仙台城二の丸跡第11地点調査状況(1)

Pl. 1 Views and cross sections at NM11(1)

1．確認調査状況（北から）

2．本調査区全景（北西から）

3．本調査区全景（南東から）

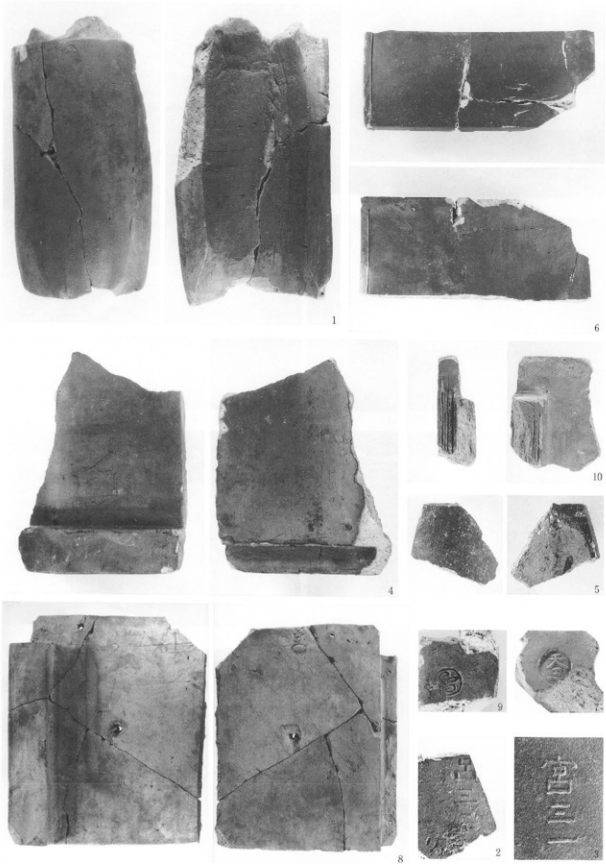
4．本調査区池状遺構セクション（北東から）

5．本調査区ピット1セクション（北東から）

6．電気ケーブル埋設都立会調査状況（東から）

図版2　仙台城二の丸跡第11地点調査状況(2)

Pl. 2 Views and cross sections at NM11(2)



図版3　仙台城二の丸跡第11地点出土瓦
Pl. 3 Roof tiles from NM11

2, 3, 7, 9　S＝1：2
1, 4, 5, 6, 10　S＝1：4
8　S＝1：6

1．5 a 層上面全景（東から）

2．5 a 層上面全景（西から）

3．5 a 層上面調査区南東部（東から）

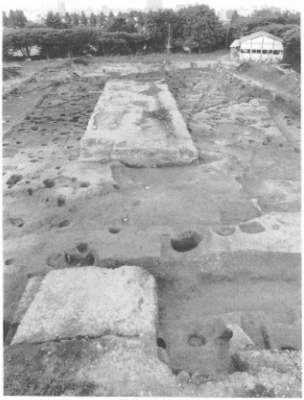
4．5 b 層上面調査区南半部（東から）

5．5 b 層上面相当全景（東から）

6．6 層上面全景（東から）

図版 4　武家屋敷跡第 4 地点江戸時代の遺構全景(1)

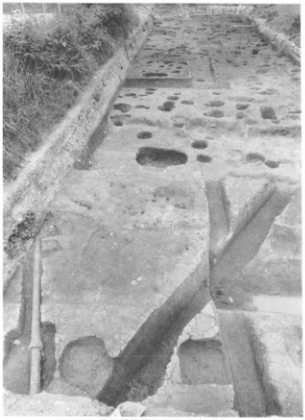
PL 4 Views belonging to Edo period at BK4(1)



1．6層上面全景（西から）

2．5b′層上面相当調査区南東部（東から）

3．北舗最終状況全景（東から）



4．北舗最終状況全景（西から）

図版5　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構全景(2)

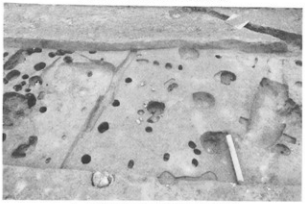
Pl. 5 Views belonging to Edo period at BK4(2)

1．中庭西側5層上面相当全景（東から）

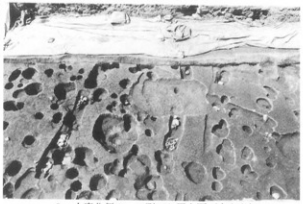
2．1号溝・2号池周辺（西から）

3．中庭北西部建物群（南から）

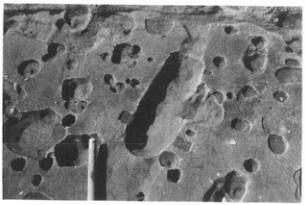
4．中庭北西部5a層上面（南から）



5．中庭北東部5a層上面（南から）



6．中庭北側9～11列5b層上面（南から）



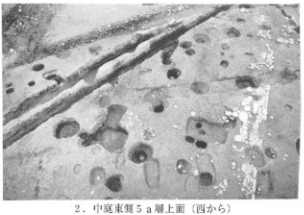
7．中庭北側6～8列5b層上面（南から）

8．中庭北側4～6列5b層上面（南西から）

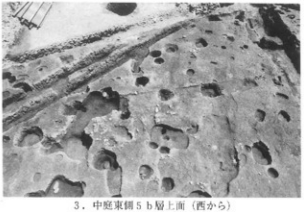
図版6　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構全景(3)

Pl. 6 Views belonging to Edo period at BK4(3)

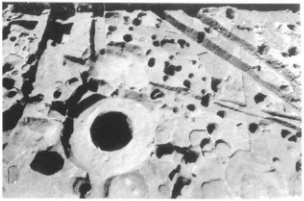
1．中庭東側５ａ層上面（東から）



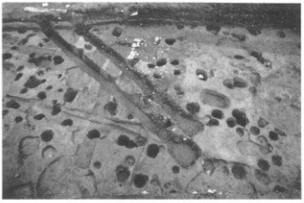
2．中庭東側５ａ層上面（西から）



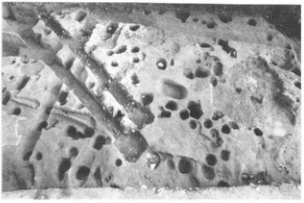
3．中庭東側５ｂ層上面（西から）



4．３号井戸周辺５ｂ層上面相当（北から）



5．中庭南側中央部（北から）



6．中庭南側最終状況（北から）

7．中庭東側の南北深掘りトレンチ（北から）

図版７　武家屋敷跡第４地点江戸時代の遺構全景(4)

Pl. 7 Views belonging to Edo period at BK地(4)

1．付帯A区全景（北から）

2．付帯A区全景（南から）

3．付帯B区全景（西から）

4．付帯C区全景（西から）

図版8　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構全景(5)

PL 8 Views belonging to Edo period at BK4(5)

1．中庭東壁南半部（東から）

2．中庭南壁北半部（東から）

3．中庭西壁（西から）

4．中庭南壁西半部（南から）

5．中庭南壁９列セクション（南から）

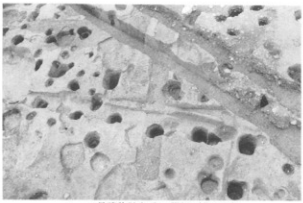
6．中庭南壁８列セクション（南から）

7．調査区北壁際深掘トレンチセクション（南から）

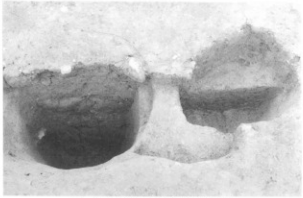
8．G－７区６層直下火山灰層確認状況（西から）

図版９　武家屋敷跡第４地点外周壁セクション

PL 9 Cross sections at BK4

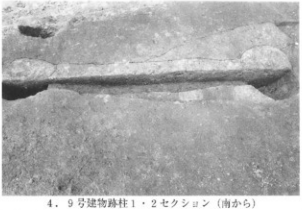


1．7号建物跡とその周辺（北から）

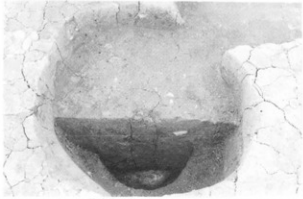


2．7号建物跡柱3断面（北から）

3．8号・9号建物跡（南から）



4．9号建物跡柱1・2セクション（南から）



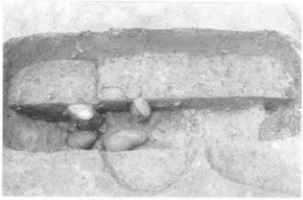
5．10号建物跡柱1セクション（北から）

6．10号建物跡南側柱列（西から）

図版10　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構(1)建物跡

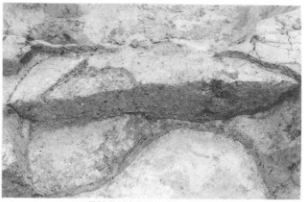
Pl. 10 Features belonging to Edo period at BK4(1)

1．13号建物跡とその周辺（南から）



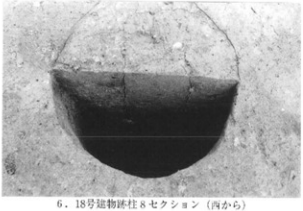
2．13号建物跡柱6・7セクション（東から）

3．14号建物跡柱4セクション（北から）



4．16号建物跡柱3セクション（南から）

5．18号建物跡柱9セクション（西から）



6．18号建物跡柱8セクション（西から）

7．20号建物跡柱1～3（北から）

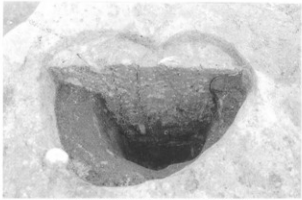
図版11　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構(2)建物跡

Pl. 11 Features belonging to Edo period at BK4(2)

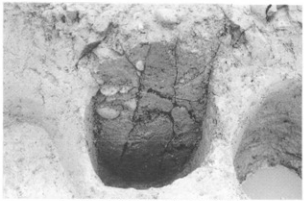
1．20号建物跡柱８・９（東から）

2．20号建物跡柱６セクション（東から）

3．22号建物跡柱５セクション（東から）



4．25号建物跡柱６セクション（北東から）

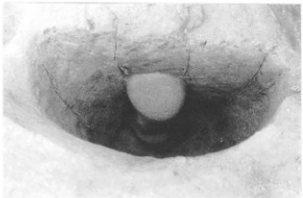


5．26号建物跡柱10セクション（北から）

6．28号建物跡柱３セクション（北から）

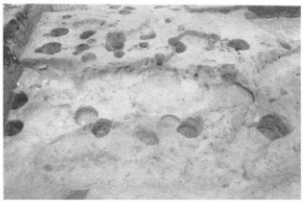
図版12　武家屋敷跡第４地点江戸時代の遺構(3)建物跡

Pl. 12 Features belonging to Edo period at BK4(3)

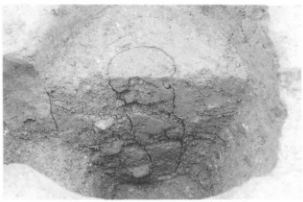


1．29号建物跡柱３セクション（北から）

2．30号建物跡柱12セクション（南東から）



3．32～34号建物跡（西から）



4．33号建物跡柱８セクション（西から）

5．２号柱列柱３セクション（西から）

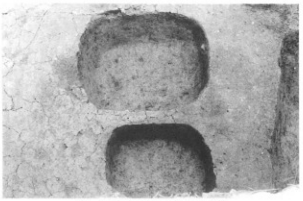
6．３号柱列（南から）

7．６号柱列（南から）

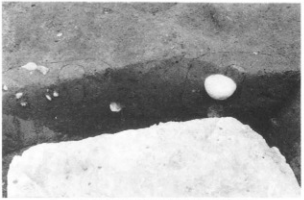
図版13　武家屋敷跡第４地点江戸時代の遺構(4)建物跡・柱列

Pl. 13 Features belonging to Edo period at BK4(4)

1．7号柱列南半部（北から）

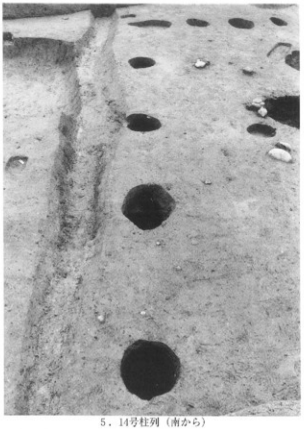


2．7号柱列柱9・15（西から）

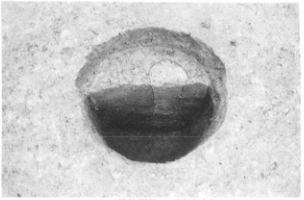


3．7号柱列柱1・2セクション（南から）

4．8号柱列（南東から）



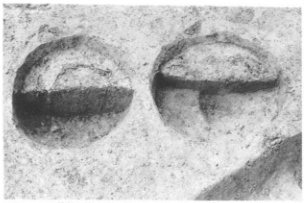
5．14号柱列（南から）



6．14号柱列柱1（東から）

図版14　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構(5)柱列

Pl. 14 Features belonging to Edo period at BK4(5)



1．15号柱列柱1・ピット147セクション（東から）

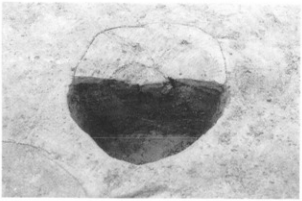
2．16号柱列柱8セクション（南から）

3．17号柱列柱3セクション（北から）

4．20号柱列柱2セクション（北から）

5．18号柱列とその周辺（東から）

6．21号柱列柱3セクション（西から）



7．25号柱列柱7セクション（南から）

図版15　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構(6)柱列

Pl. 15 Features belonging to Edo period at BK4(6)

1．14～16列２号池（南から）

2．14～16列２号池（北から）

3．２号池全景（南南東から）

4．F・G－12・13区２号池（北西から）

5．G・H－13・14区２号池（北から）

6．15・16列北側２号池（南から）

7．15・16列南側２号池（北から）

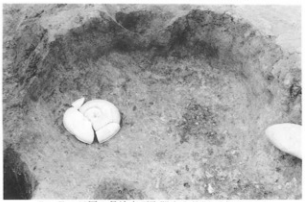
8．２号池内裡出土状況（南から）

図版16　武家屋敷跡第４地点江戸時代の遺構(7)２号池

Pl. 16 Features belonging to Edo period at BK4(7)

1．G－13区２号池底面遺物出土状況（南東から）

2．G－13区２号池底面古銭出土状況（南東から）



3．B－15区２号池底面陶器出土状況（南西から）

4．F－14～16区中庭南端に沿ったベルトセクション（南から）

5．C－15区２号池セクション（北から）

6．D－15・16区２号池（南西から）

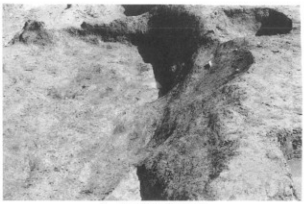
7．E－14～16区２号池セクション（北から）

8．G－15・16区２号池セクション（南から）

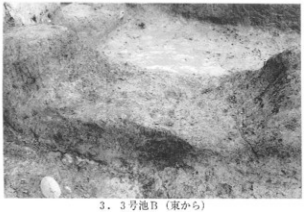
図版17　武家屋敷跡第４地点江戸時代の遺構(8)２号池

Pl. 17 Features belonging to Edo period at BK4(8)

1．3号池Aセクション（南から）

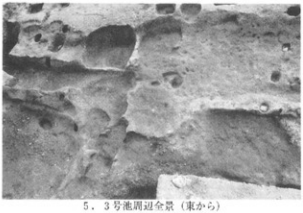


2．3号池A（北から）



3．3号池B（東から）

4．3号池D・E・Fセクション（東から）



5．3号池周辺全景（東から）

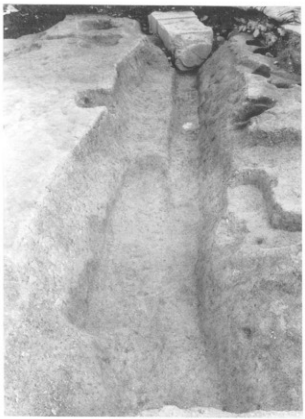
6．3号池D・E・F（東から）

7．3号池G古代瓦出土状況（北東から）

8．3号池Gセクション（北から）

図版18　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構(9)3号池

PL 18 Features belonging to Edo period at BK4(9)



1．1号溝南半部（北から）

2．1号溝北半部（南から）

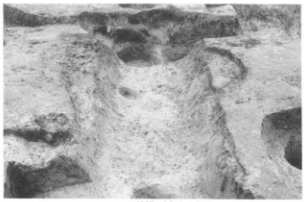
3．1号溝全景（東から）

4．1号溝セクション（南から）

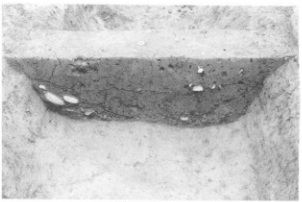
5．3号溝（南から）

図版19　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構(10)溝

Pl. 19 Features belonging to Edo period at BK4(3)



1．4号溝（南から）



2．4号溝セクション（南から）

3．5号溝（南から）

4．5号溝セクション（南から）

5．5号溝底面西側杭セクション（北から）

6．6号溝セクション（東から）

7．6号溝東端付近底面礫検出状況（北から）

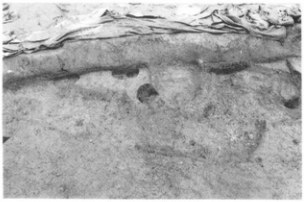
図版20　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構(15)溝

Pl. 20 Features belonging to Edo period at BK431

1．7号溝（南から）

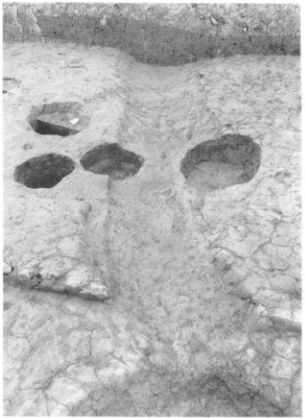
2．A・B9区7号溝（南から）

3．9号溝セクション（北から）



4．10号溝（南から）

5．10号溝セクション（西から）



6．A・B－9区10号溝（南から）

図版21　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構(2)溝

Pl. 21 Features belonging to Edo period at BK4(2)

1．11号溝（南から）

2．12号溝セクション（北から）

3．12号溝（南から）

4．13号溝セクション（東から）

5．14号溝セクション（西から）

6．15号溝セクション（北から）

7．16号溝セクション（東から）

図版22　武家屋敷跡第４地点江戸時代の遺構(13)溝

Pl. 22 Features belonging to Edo period at BK(13)

1．18号溝（南から）

2．19号溝（南から）

3．19号溝セクション（南から）

4．21号溝セクション（南から）

5．23号溝（西から）

6．24号溝（北から）

図版23　武家屋敷跡第４地点江戸時代の遺構(4)溝

Pl. 23 Features belonging to Edo period at BK404

1．1・3号石敷溝とその周辺（東から）

2．1号石敷溝セクション（西から）

3．2号石敷溝（西から）

4．3号石敷溝（東から）

5．3号石敷溝セクション（南から）

6．4号石敷溝（南東から）

7．4号石敷溝セクション（北から）

図版24　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構(5)石敷溝

Pl. 24 Features belonging to Edo period at BK435

1．1号井戸（東から）

2．1号井戸上部セクション（西から）

3．1号井戸セクション（西から）

4．1号井戸遺物出土状況（東から）

5．2号井戸（東から）

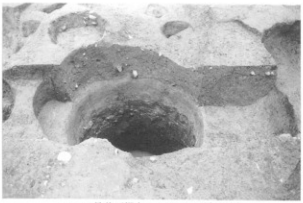
6．3号井戸（北東から）

7．3号井戸上部セクション（東から）

図版25　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構⑯井戸

Pl. 25 Features belonging to Edo period at BK40⑥

1．3号井戸下部セクション（東から）



2．3号井戸掘方セクション（東から）

3．3号井戸掘方完掘状況（北から）

4．1号粘土貼床遺構（東から）

5．1号粘土貼床遺構セクション（東から）

6．2号粘土貼床遺構（北から）

7．3号粘土貼床遺構（北西から）

図版26　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構(7)井戸

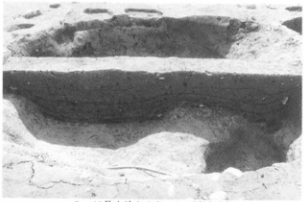
Pl. 26 Features belonging to Edo period at BK407

1．8号土坑（南西から）

2．8号土坑セクション（南から）

3．9号土坑（南から）

4．10号土坑（南から）



5．10号土坑セクション（東から）

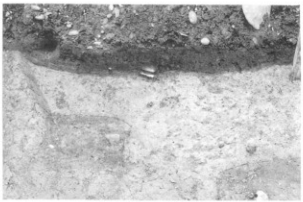
6．11号土坑（南から）

7．12号土坑セクション（西から）

図版27　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構(18)土坑

Pl. 27 Features belonging to Edo period at BK438

1．13号土坑セクション（東から）



2．14号土坑（東から）

3．15号土坑遺物出土状況（南から）

4．16号土坑セクション（北から）

5．17号土坑（南から）

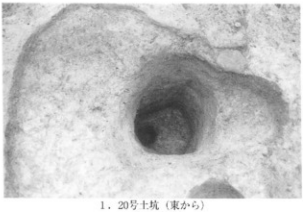
6．18号土坑（東から）

7．18号土坑セクション（北から）

8．19号土坑（南西から）

図版28　武家屋敷跡第４地点江戸時代の遺構(19)土坑

Pl. 28 Features belonging to Edo period at BK-(19)

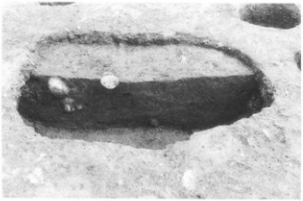


1．20号土坑（東から）

2．21号土坑（南西から）

3．22号土坑（南から）

4．23号土坑セクション（南から）



5．24号土坑セクション（西から）

6．25号土坑セクション（南から）

7．25号土坑（南西から）

8．26号土坑（南から）

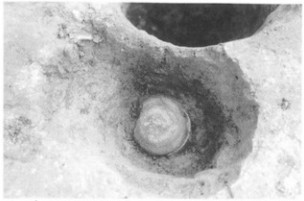
図版29　武家屋敷跡第４地点江戸時代の遺構⑳土坑

Pl. 29 Features belonging to Edo period at BK4⑳

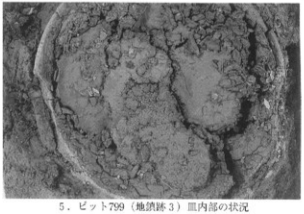
1．1号木箱埋設遺構（北から）

2．ピット487(地鎮跡1)地鎮具出土状況（北から）

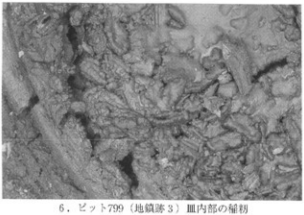
3．ピット797（地鎮跡2）セクション（北東から）



4．ピット799（地鎮跡3）土師質土器皿の検出状況（北から）



5．ピット799（地鎮跡3）皿内部の状況



6．ピット799（地鎮跡3）皿内部の植物

7．ピット799（地鎮跡3）皿内部の古銭

図版30　武家屋敷跡第4地点江戸時代の遺構(2)その他の遺構

Pl. 30 Features belonging to Edo period at BK42(2)

1．4層上面全景（東から）

2．4層上面全景（西から）

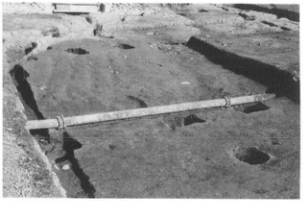
3．14～17列4層上面（南から）

4．A・B－16・17区4層上面道路状遺構（西から）

5．H・I－13・14区1号池（北東から）

6．E～G－12～14区1号池（西から）

7．中庭南東側4層上面畑（南東から）



8．中庭北東側4層上面畑（西から）

図版31　武家屋敷跡第4地点4層上面の遺構

Pl. 31 Views and features on the surface of stratum 4 at BK4

1．4層上面畑区画溝（南東から）

2．A・B列4層上面全景（東から）

3．G－8区4層上面集石遺構（南西から）

4．6・7号土坑セクション（東から）

5．3層上面全景（東から）

6．3層上面全景（西から）

7．B・C－14区3層上面炭化物集中地点（南から）

8．I－9区3層上面礫群（南から）

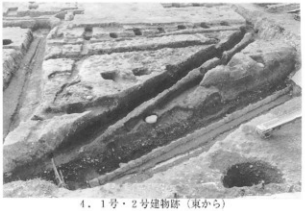
図版32　武家屋敷跡第4地点4層上面・3層上面の遺構

PL 32 Features on the surfaces of stratum 3 and 4 at BK4

1．2層上面全景（東から）

2．2層上面全景（南東から）

3．1号建物跡（南から）



4．1号・2号建物跡（東から）

5．1号建物跡南面コーナーセクション（南から）

6．10号埋甕（南から）

7．3号建物跡（南から）

8．3号建物跡北半部（東から）

図版33　武家屋敷跡第4地点2層上面の遺構(1)

PL 33 Views and features on the surface of stratum 2 at BK4(1)

1．2・3号埋甕と排水施設（北から）

2．3号建物跡東辺礎石セクション（東から）

3．4・5号建物跡全景（東から）

4．4・5号建物跡全景（西から）

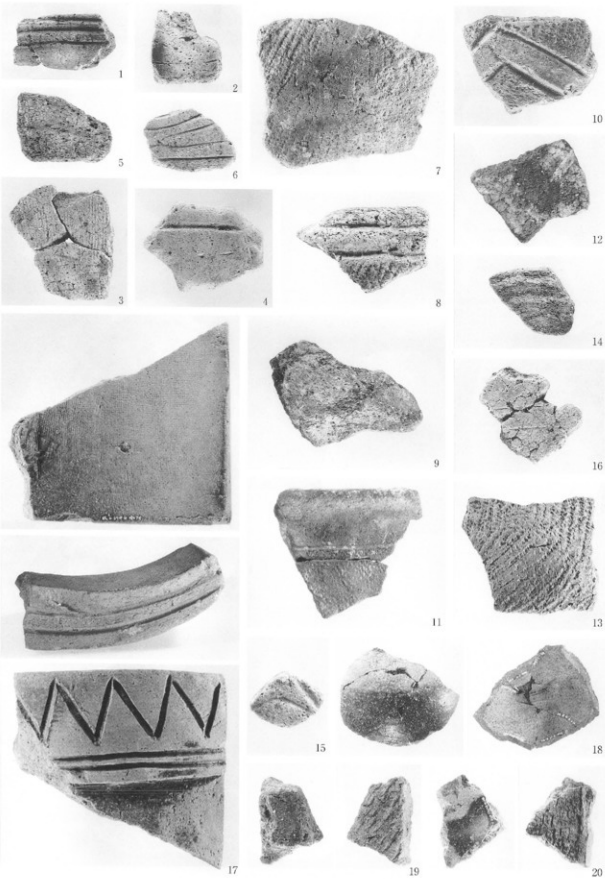
5．5号建物跡東辺南端礎石セクション（南から）

6．1号石道（東から）

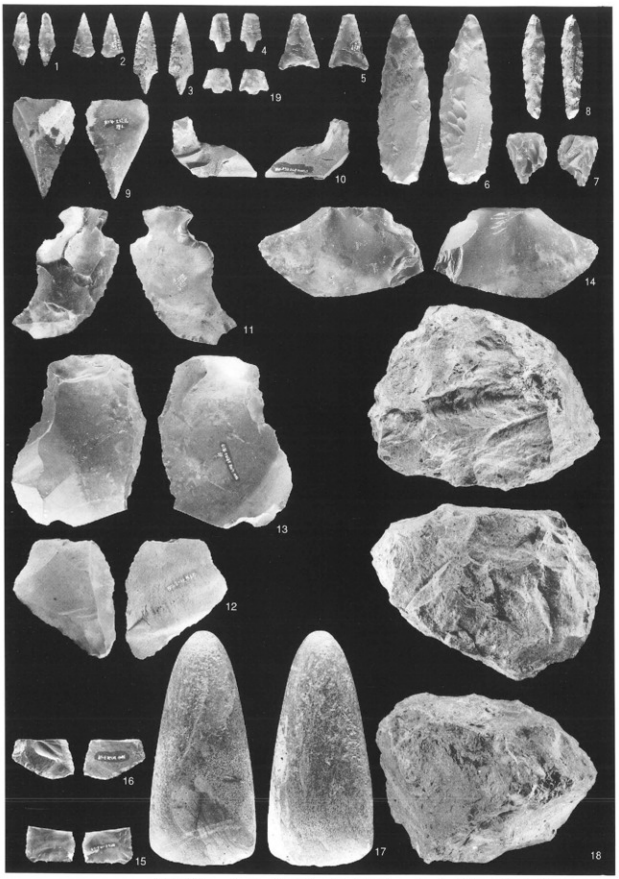
7．3号土坑（北から）

図版34　武家屋敷跡第4地点2層上面の遺構(2)

PL 34 Features on the surface of stratum 2 at BK4(2)



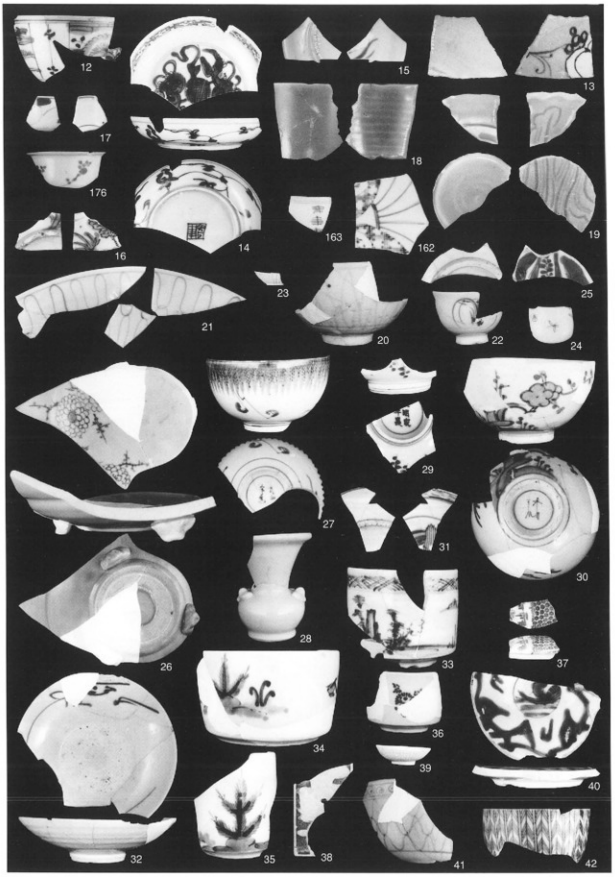
図版35　武家屋敷跡第４地点出土原始・古代の遺物(1)　　1～16　S＝2：3
Pl. 35 Prehistric and ancient implements from BK4(1)　　17～20　S＝1：3



S＝2：3　1～5，19　石鏃　6　ポイント　7～9　石錐　10，11　石匙
12～14　スクレイパー　15，16　トゥール破損品　17　磨製石斧　18　石核

図版36　武家屋敷跡第4地点出土原始・古代の遺物(2)石器

Pl. 36 Prehistric and ancient implements from BK4(2) Stone tools



図版37　武家屋敷跡第４地点出土磁器(1)　　S＝1：3

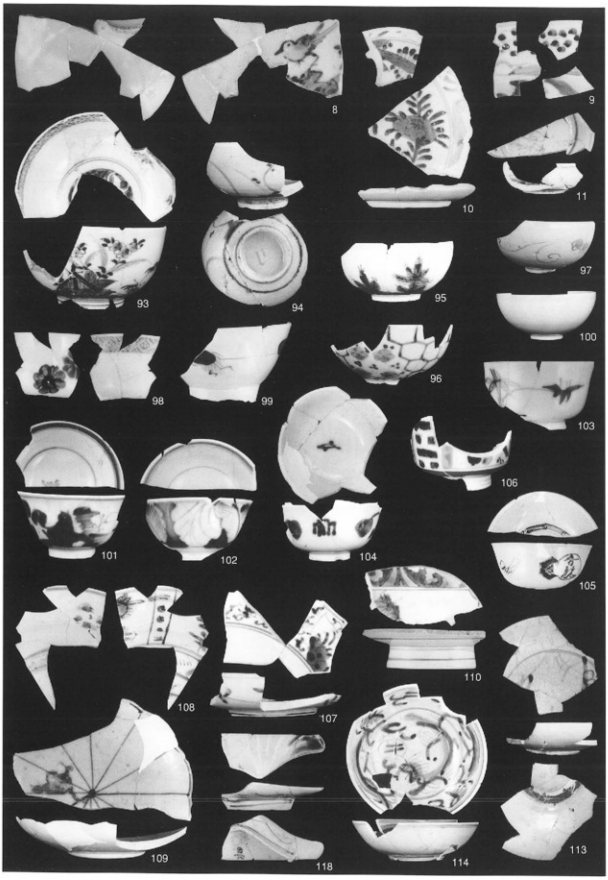
Pl. 37 Porcelains from BK4 (1)

図版38　武家屋敷跡第４地点出土磁器(2)　　S＝1：3

Pl. 38 Porcelains from BK4 (2)

図版39　武家屋敷跡第４地点出土磁器(3)　　S＝1：3

Pl. 39 Porcelains from BK4 (3)

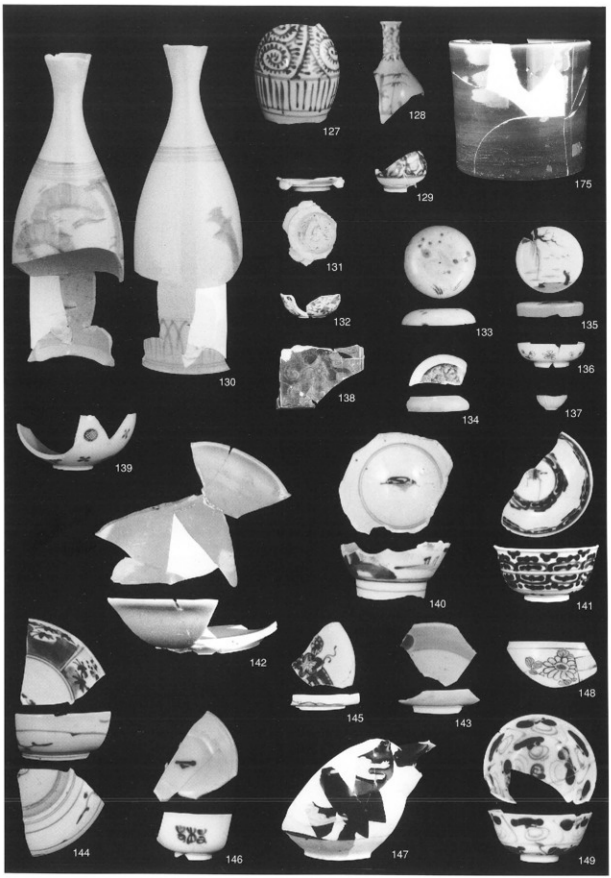


図版40　武家屋敷跡第４地点出土磁器(4)　　S＝1：3

PL 40 Porcelains from BK4 (4)

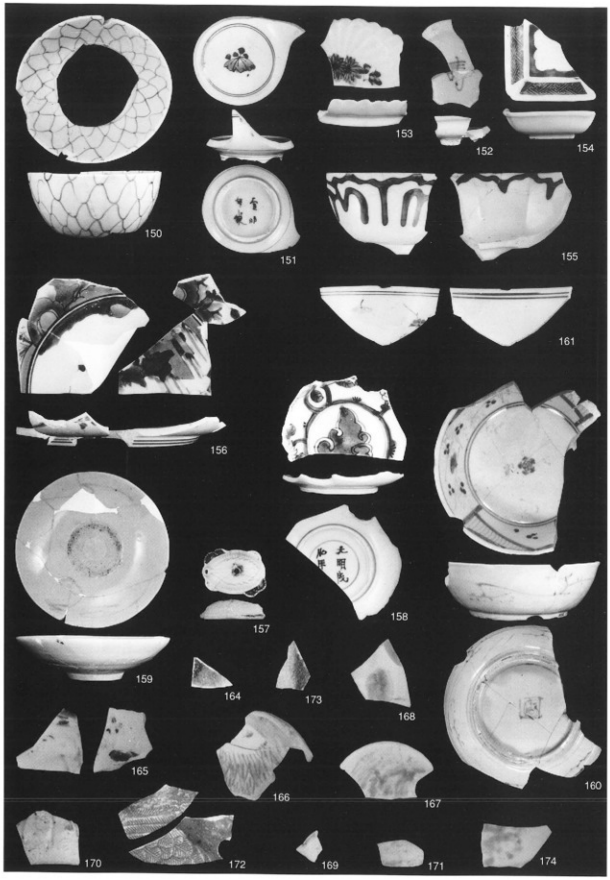
図版41　武家屋敷跡第４地点出土磁器(5)　　S＝1：3

PL 41 Porcelains from BK4 (5)



図版42　武家屋敷跡第４地点出土磁器(6)　　S＝1：3

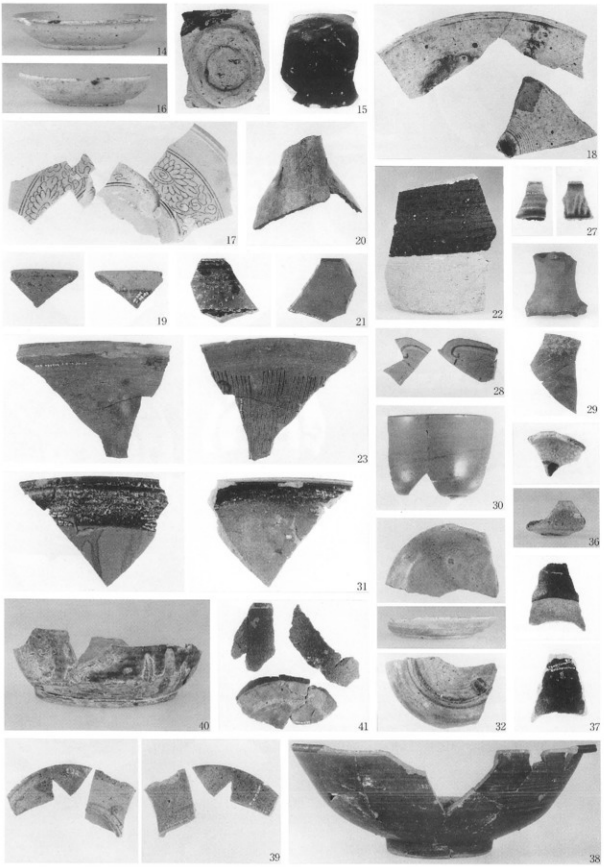
PL 42 Porcelains from BK4 (6)



図版43　武家屋敷跡第４地点出土磁器(7)

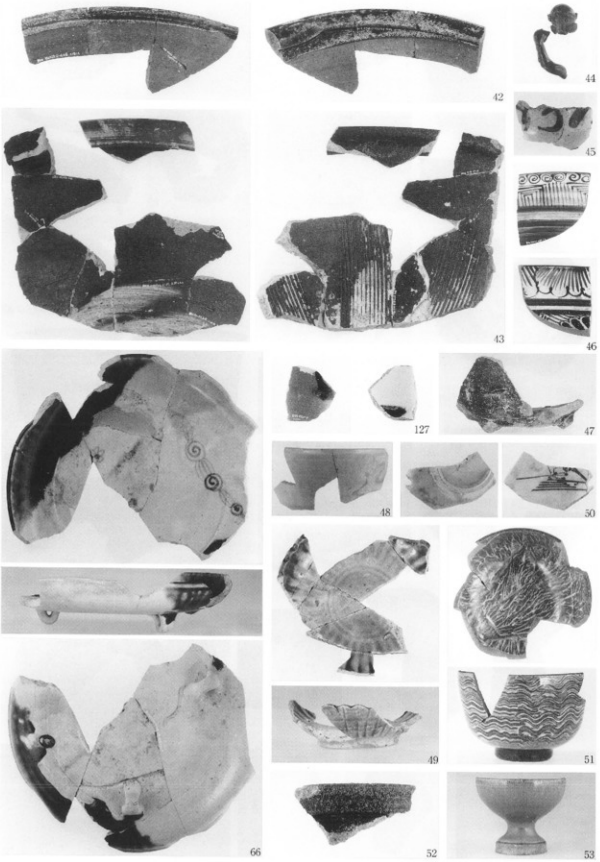
Pl. 43 Porcelains from BK4 (7)

150～161　S＝1：3
164～174　S＝2：3



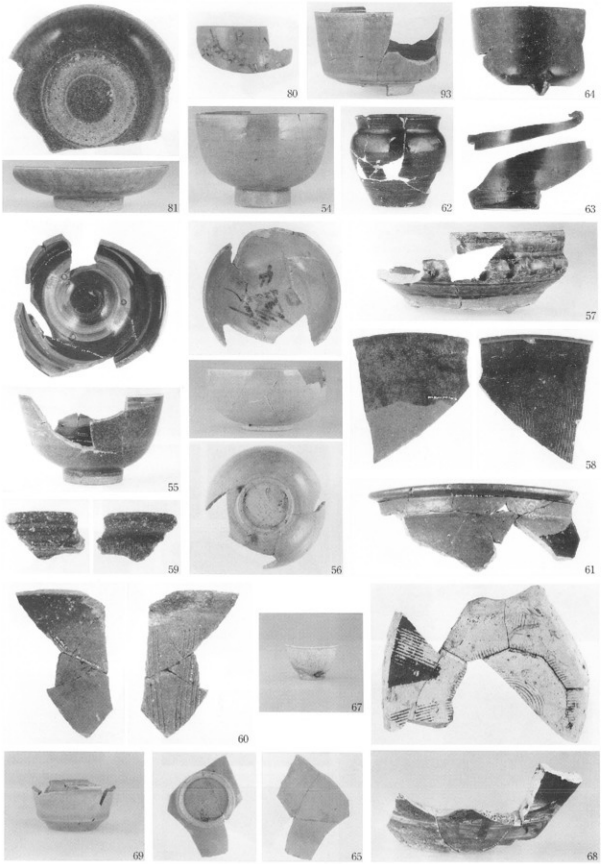
図版44　武家屋敷跡第４地点出土陶器(1)　　S＝1：3

Pl. 44 Glazed ceramics from BK4 (1)



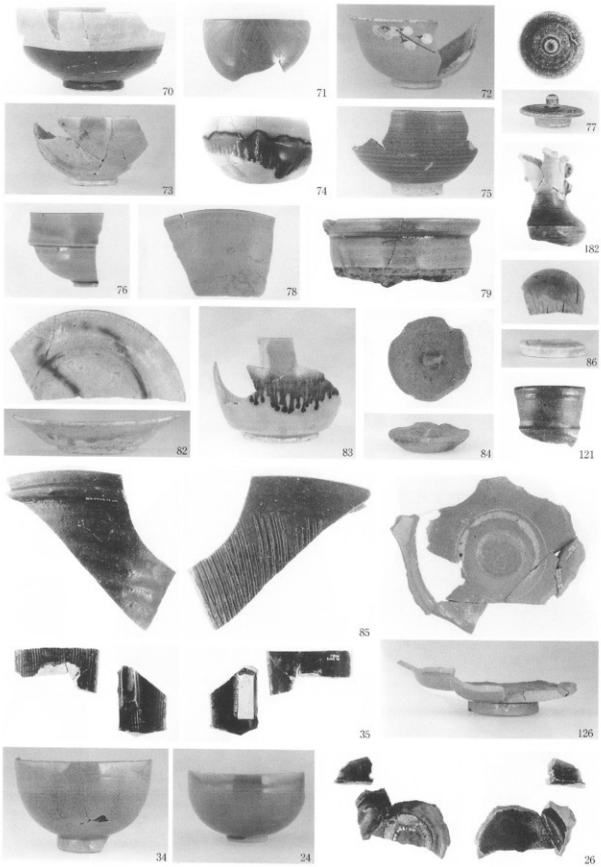
図版45　武家屋敷跡第４地点出土陶器(2)　　S＝1：3

Pl. 45 Glazed ceramics from BK4 (2)



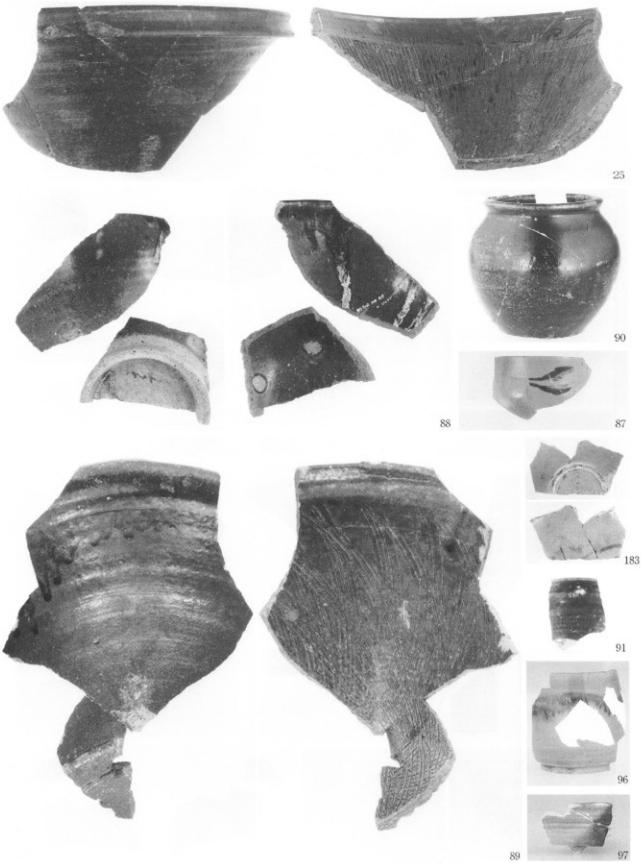
図版46　武家屋敷跡第4地点出土陶器(3)　S＝1：3

Pl. 46 Glazed ceramics from BK4 (3)



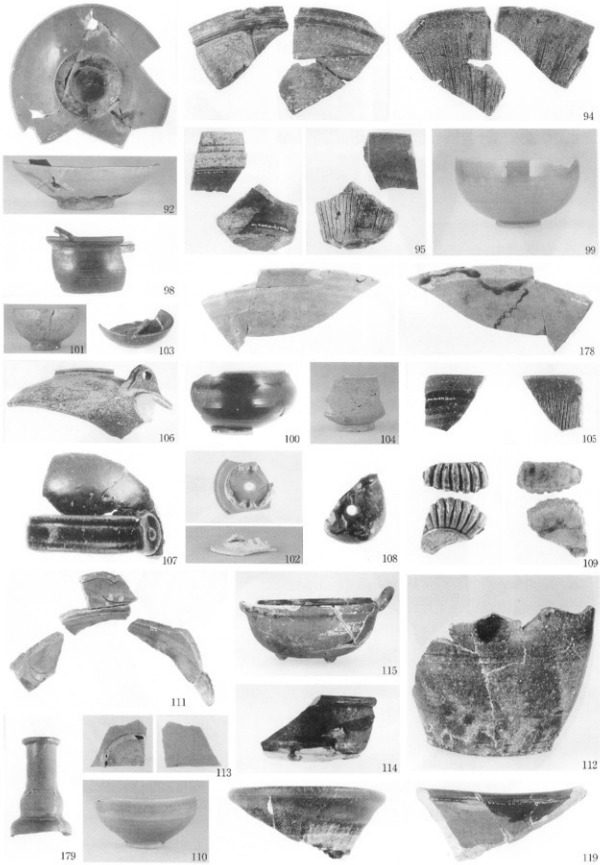
図版47　武家屋敷跡第４地点出土陶器(4)　　S＝1：3

Pl. 47 Glazed ceramics from BK4 (4)



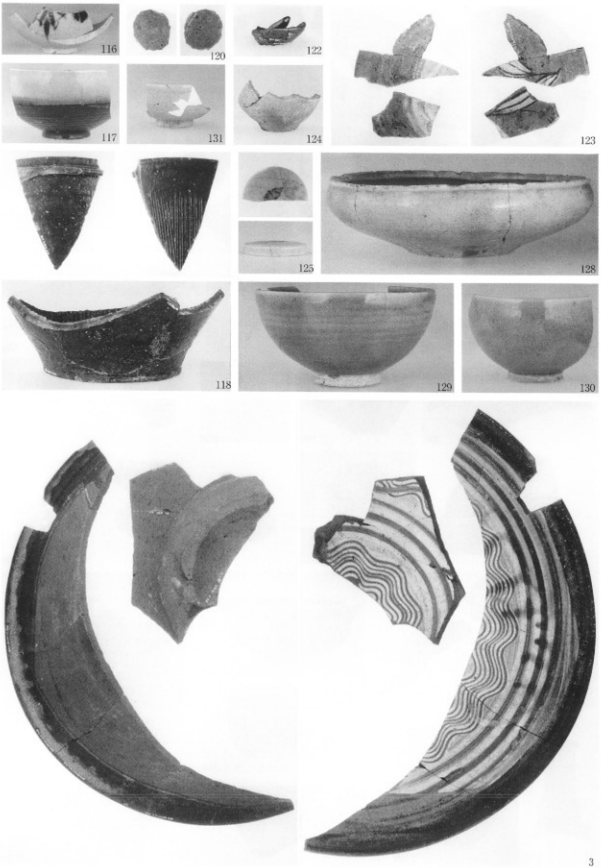
図版48　武家屋敷跡第４地点出土陶器(5)　　S＝1：3

Pl. 48 Glazed ceramics from BK4 (5)



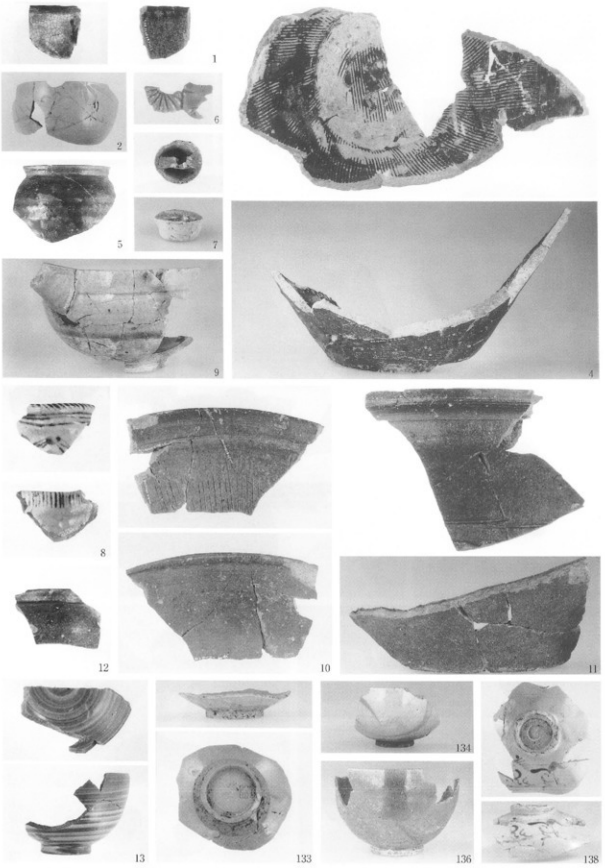
図版49　武家屋敷跡第４地点出土陶器(6)　　S＝1：3

Pl. 49 Glazed ceramics from BK4 (6)



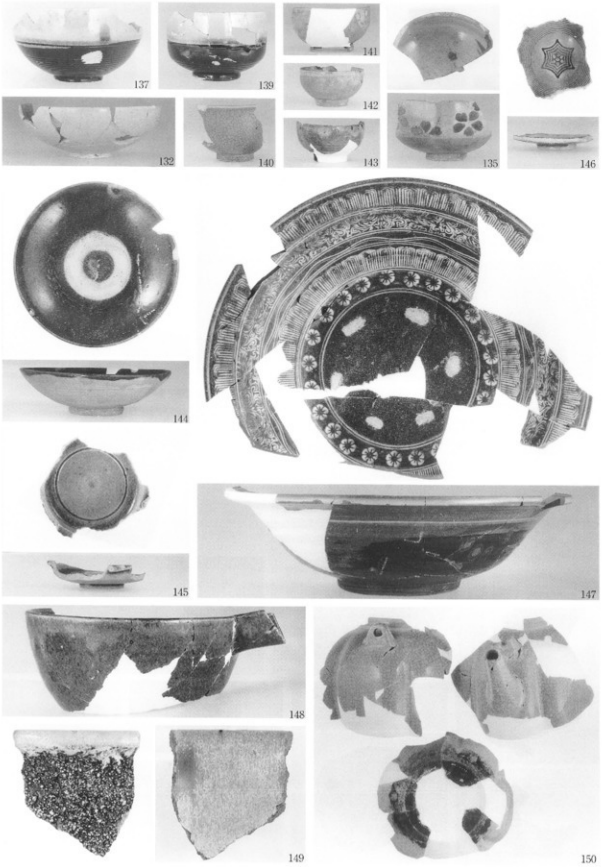
図版50　武家屋敷跡第４地点出土陶器(7)　　S＝1：3

Pl. 50 Glazed ceramics from BK4 (7)



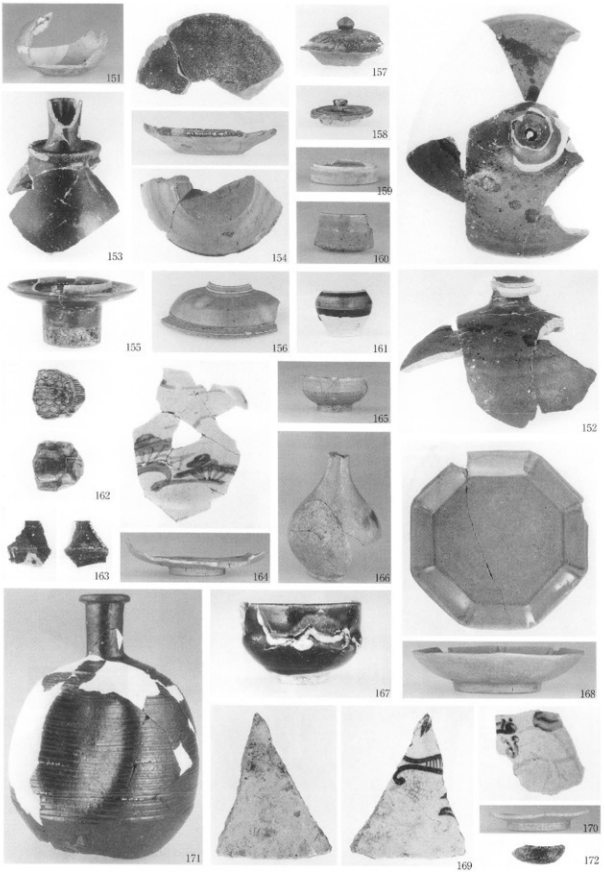
図版51　武家屋敷跡第４地点出土陶器(8)　S＝1：3

Pl. 51 Glazed ceramics from BK4 (8)



図版52　武家屋敷跡第４地点出土陶器(9)　　S＝1：3

Pl. 52 Glazed ceramics from BK4 (9)

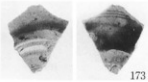


図版53　武家屋敷跡第４地点出土陶器(10)　　S＝1：3

Pl. 53 Glazed ceramics from BK4 (10)

180

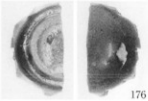
181



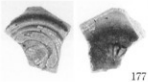
173

174

175



176

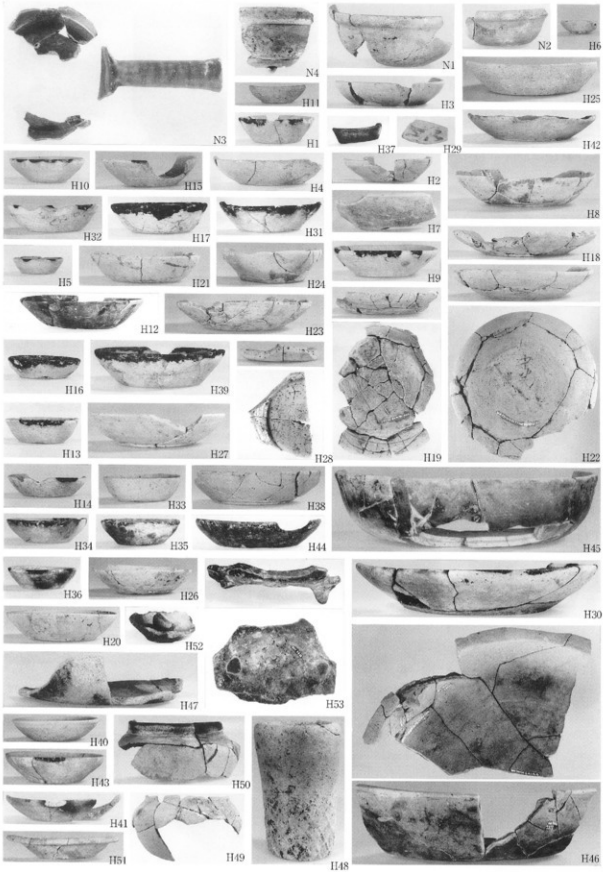


177

図版54　武家屋敷跡第４地点出土陶器(1)

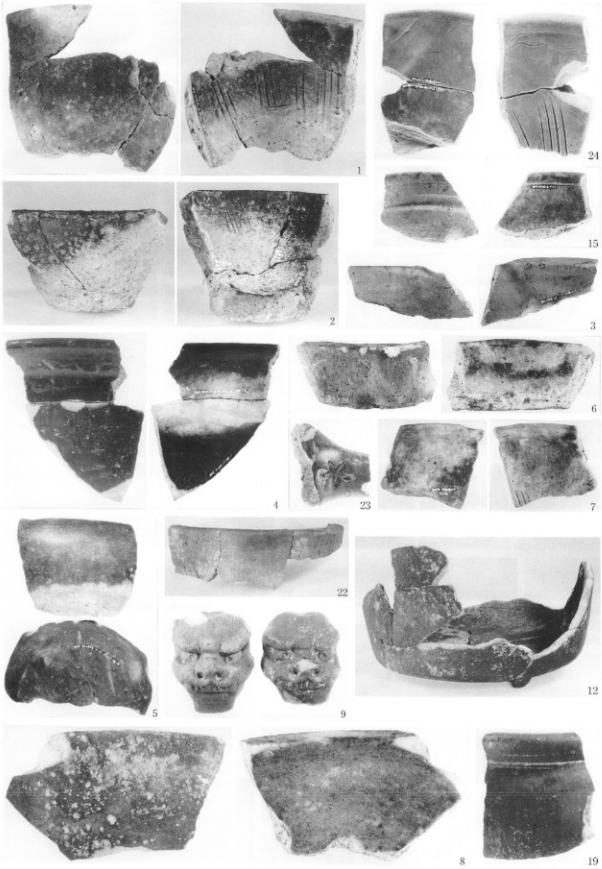
Pl. 54 Glazed ceramics from BK4 (1)

180、181　S＝1：5
173～177　S＝1：3



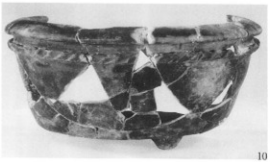
図版55　武家屋敷跡第４地点出土土器(1)　　S＝1：3

Pl. 55 Ceramics from BK4



図版56　武家屋敷跡第４地点出土土器(2)　S＝1：3

Pl. 55 Ceramics from BK4

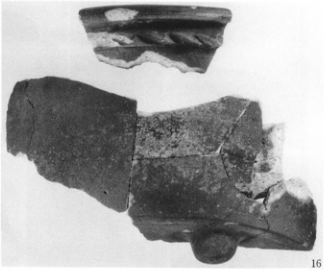

10

13

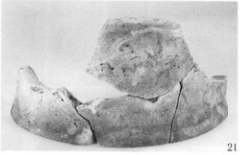
11

14

17


16

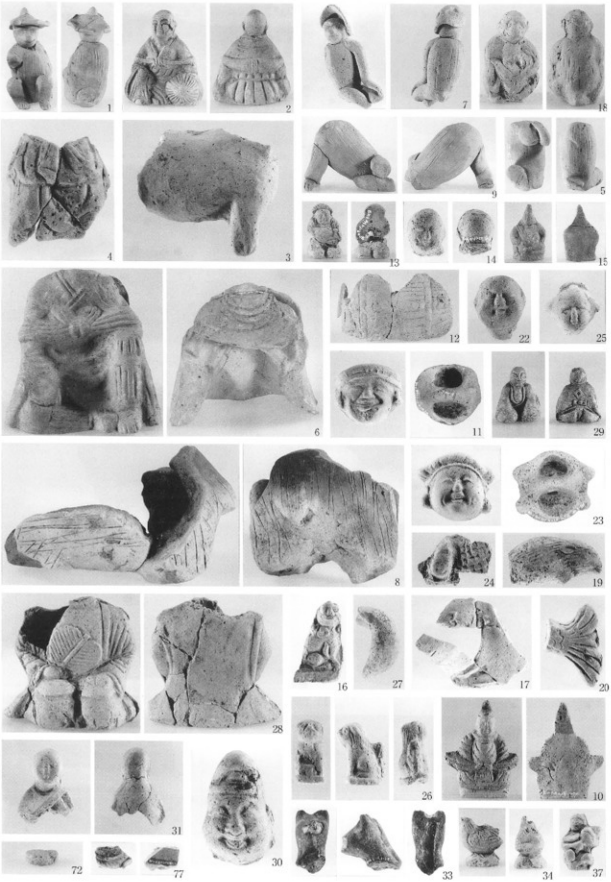
20


21

18

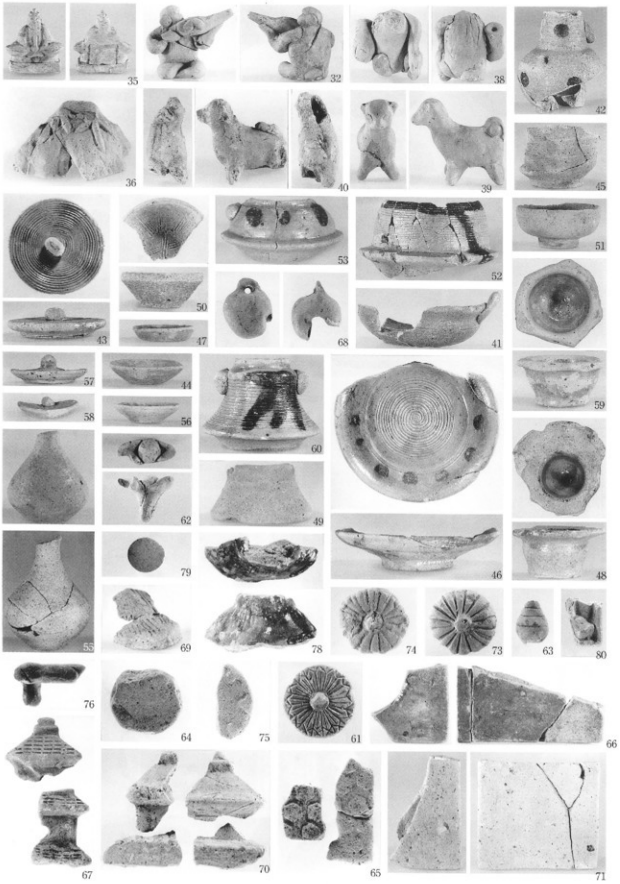
図版57　武家屋敷跡第４地点出土土器(3)　　S＝1：3

Pl. 57 Ceramics from BK4



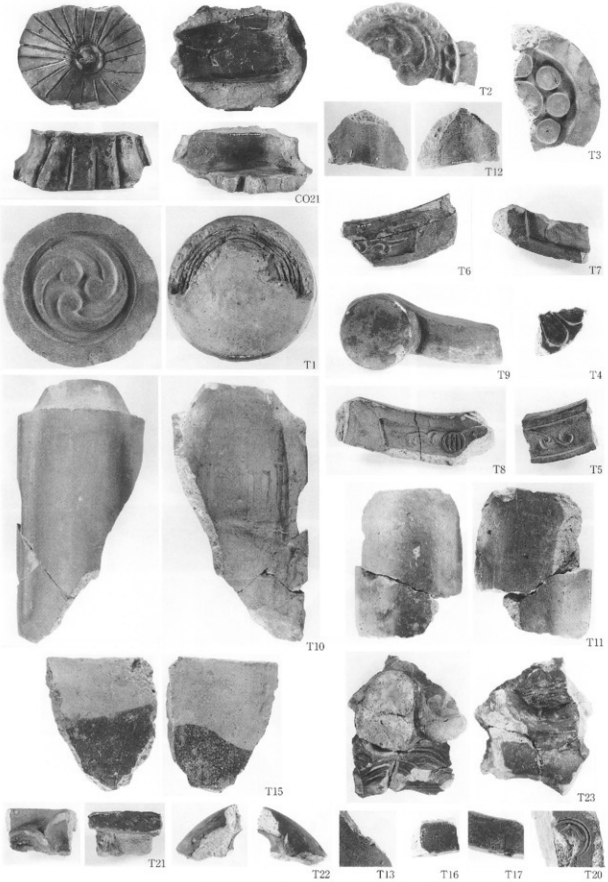
図版58　武家屋敷跡第４地点出土土人形・玩具(1)　　S＝1：2

Pl. 58 Clay figures and clay objects from BK4 (1)



図版59　武家屋敷跡第４地点出土土人形・玩具(2)　　S＝1：2

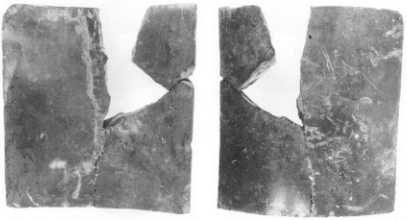
Pl. 59 Clay figures and clay objects from BK4 (2)



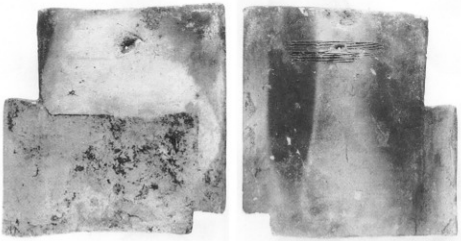
図版60　武家屋敷跡第4地点出土瓦(1)

Pl. 60 Roof tiles from BK4 (1)

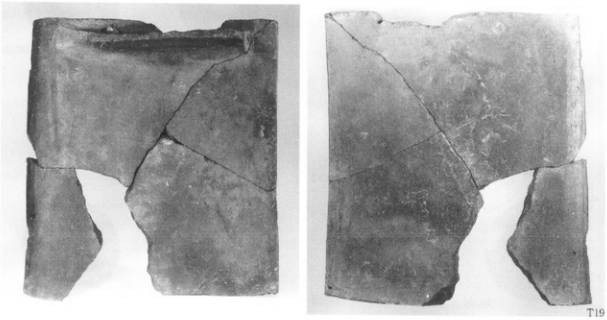
CO21, T1～12, 15, 21～23　S＝1：4
T13, 16, 17, 20　S＝1：2



T14



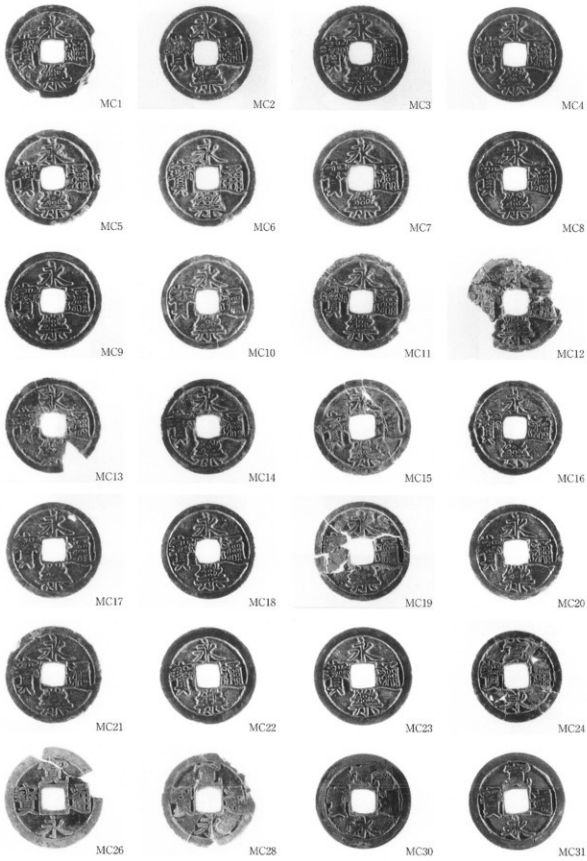
T18



T19

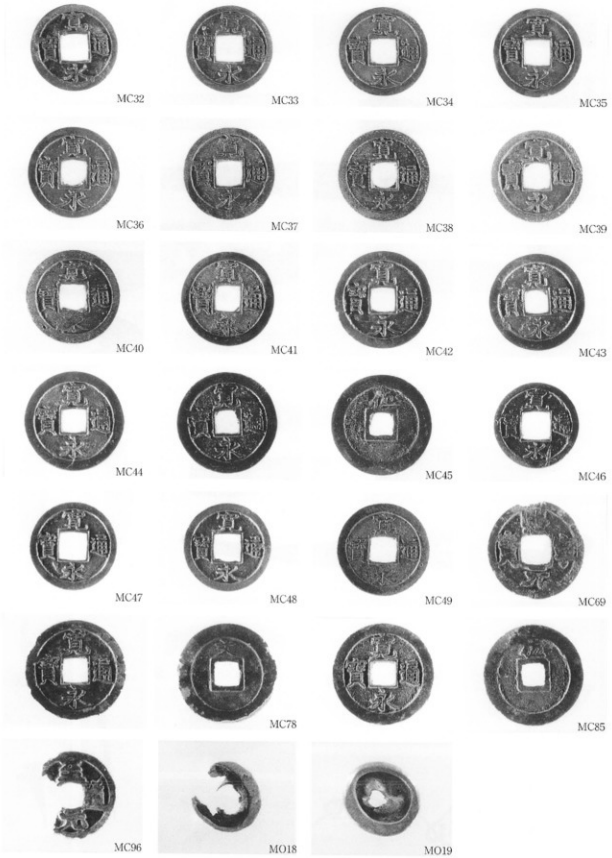
図版61　武家屋敷跡第４地点出土瓦(2)　　S＝1：5

Pl. 61 Roof tiles from BK4 (2)



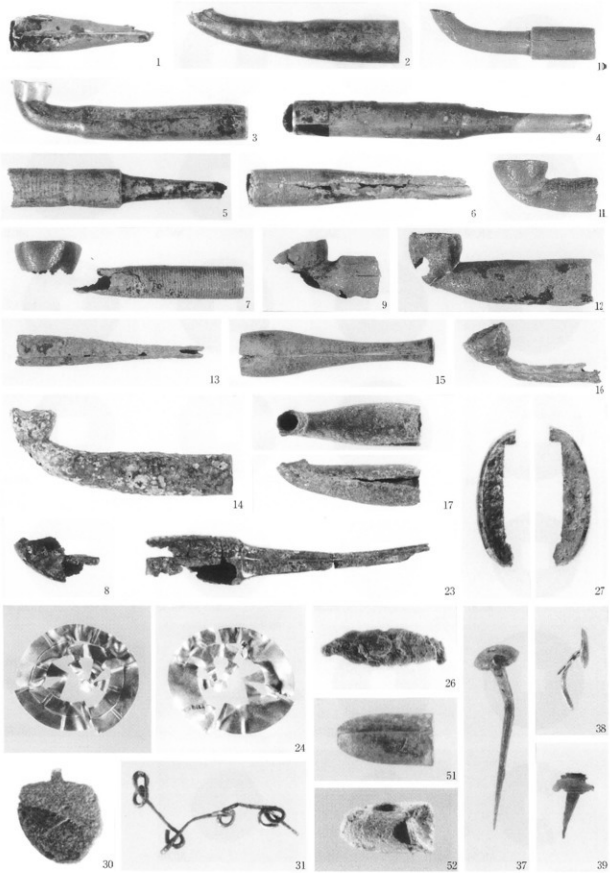
図版62　武家屋敷跡第４地点出土古銭(1)　　S＝1：1

Pl. 62 Coins from BK4 (1)



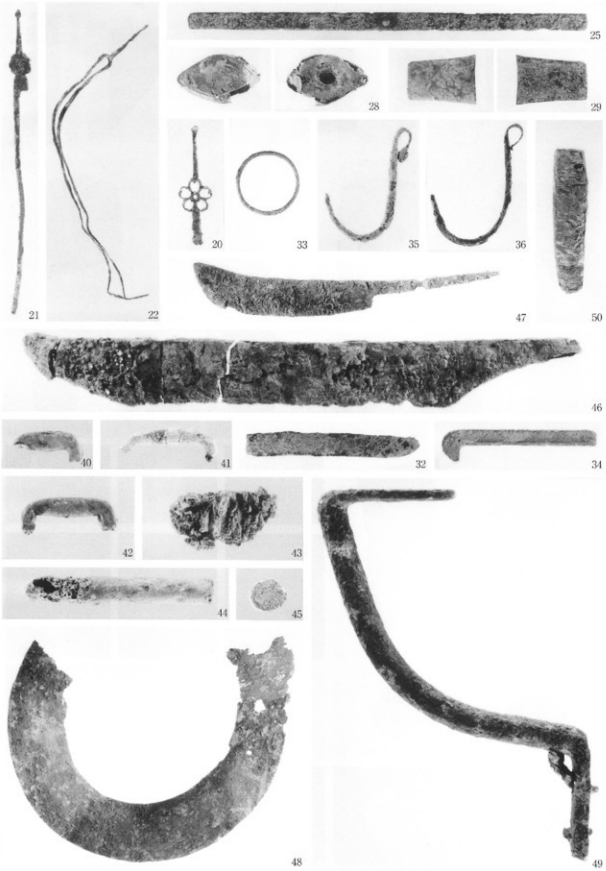
図版63　武家屋敷跡第4地点出土古銭(2)　　S＝1：1

Pl. 63 Coins from BK4 (2)



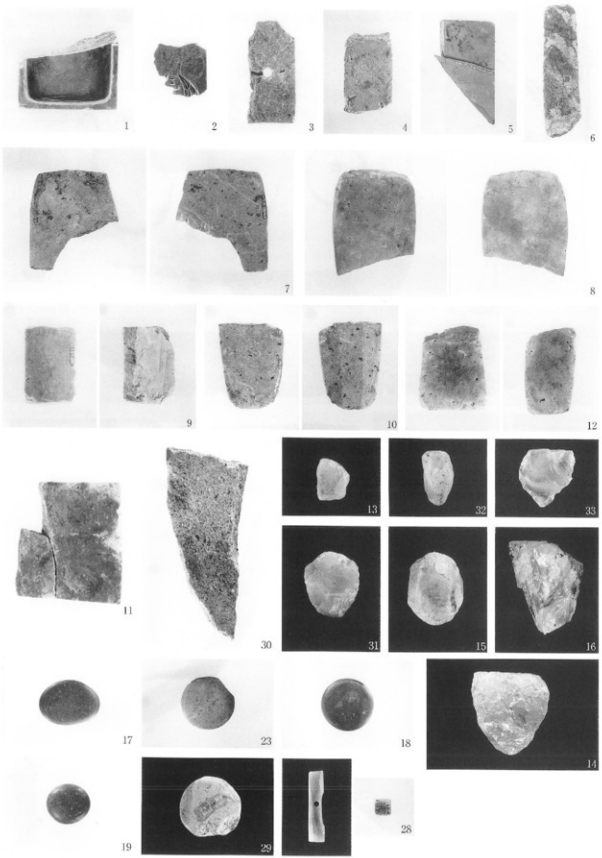
図版64　武家屋敷跡第４地点出土金属製品(1)　S＝1：1

Pl. 64 Metal implements from BK4 (1)



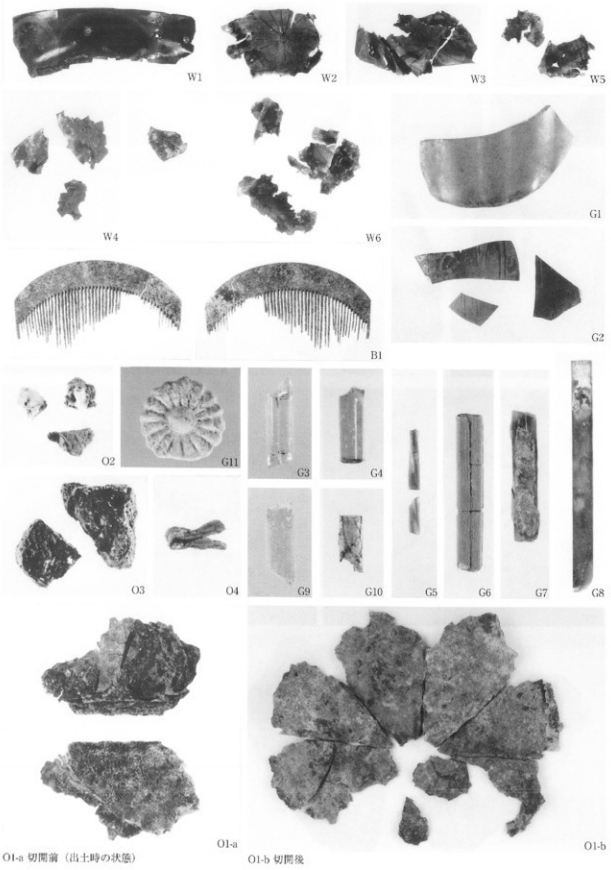
図版65　武家屋敷跡第４地点出土金属製品(2)
Pl. 65 Metal implements from BK4 (2)

20～22・49 以外　S＝2：3
20～22以外　S＝1：2
49　S＝任意

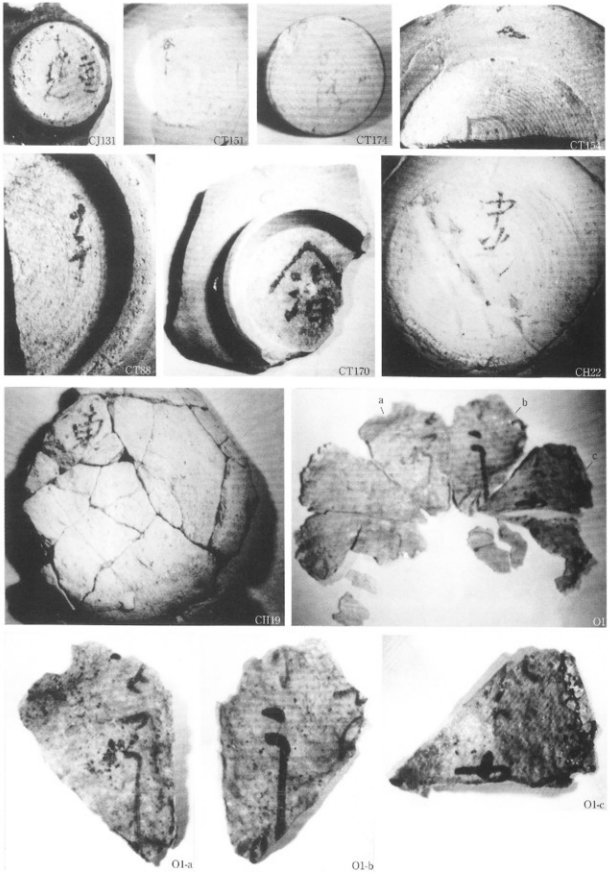


図版66　武家屋敷跡第４地点出土石製品
Pl. 66 Stone implements from BK4

1～12，30　S＝1：3
その他　S＝1：4



図版67　武家屋敷跡第４地点出土その他の遺物　　G１～11　S＝１：１
Pl. 67 Various implements from BK4　　G１～11以外　S＝１：２

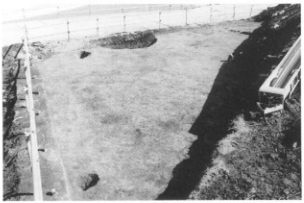


図版68　武家屋敷跡第４地点出土遺物の赤外線写真

Pl. 68 False-colour infra-red photographies of various implements from BK4

1. 調査区全景（3層上面・西から）

2. 拡張区（AQ・R－10～17区）全景（3層上面・北から）



3. 拡張区（AS～BD－10～15区）全景（3層上面・西から）

4. 最終状況全景（北東から）

5. BH～M－3区　調査区北壁セクション（南西から）

6. BF・G－3区　調査区北壁セクション（南から）

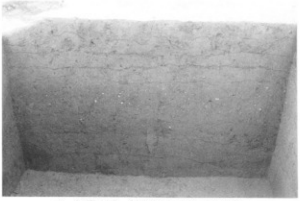
7. AS・T－3区　調査区北壁セクション（南から）

8. 深掘5区　北壁セクション（南から）

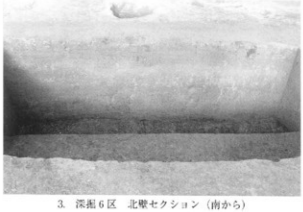
図版69　青葉山遺跡E地点第4次調査区全景・北壁セクション

Pl. 69 Views and cross sections at AOE4

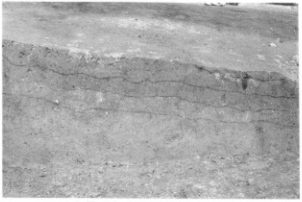
1. 深掘7区　北壁セクション（南から）



2. 深掘3区　南壁セクション（北から）

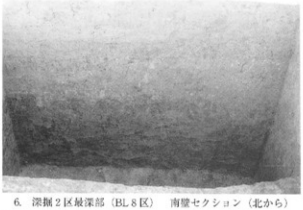


3. 深掘6区　北壁セクション（南から）



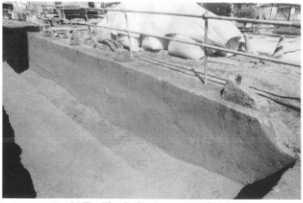
4. 深掘8区　北壁セクション（南から）

5. 深掘2区　南壁セクション（北西から）



6. 深掘2区最深部（BL8区）　南壁セクション（北から）

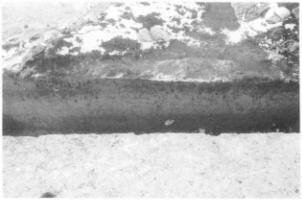
7. 深掘4区　南壁セクション（北から）



8. 深掘12区　北壁セクション（南東から）

図版70　青葉山遺跡E地点第4次調査セクション

Pl. 70 Cross sections at AOE4



1. 深掘11区　南壁セクション（北から）

2. 深掘２区　西壁セクション（東から）

3. 深掘１区　西壁セクション（東から）

4. 深掘４区　西壁セクション（東から）

5. 深掘５区　西壁セクション（東から）

6. 深掘７区　東壁セクション（西から）

7. 深掘８区　東壁セクション（西から）

8. BK７区　遺物出土状況（北東から）

図版71　青葉山遺跡E地点第４次調査セクション・遺物出土状況

Pl. 71 Cross sections and view at AOE4

1. 1号溝セクション（南西から）

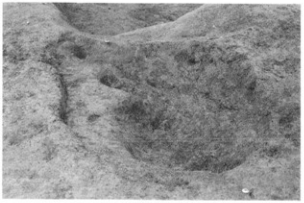
2. 1号土坑セクション（東から）

3. 1号土坑完掘状況（北西から）

4. 2号土坑セクション（東から）

5. 2号土坑完掘状況（南東から）

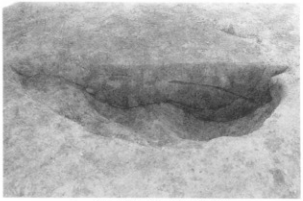
6. 3号土坑セクション（東から）



7. 3号土坑完掘状況（北東から）

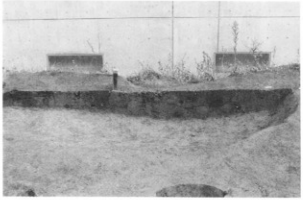
図版72　青葉山遺跡E地点第4次調査検出遺構(1)

Pl. 72 Features at AOE4(1)

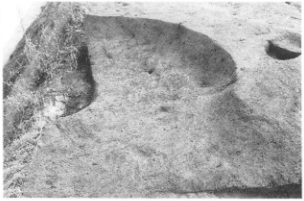


1. 4号土坑セクション（東から）

2. 4号土坑完掘状況（南から）

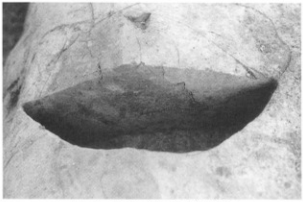


3. 5号土坑セクション（西から）

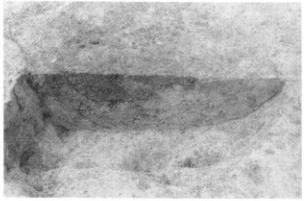


4. 5号土坑完掘状況（北から）

5. ピット1セクション（西から）



6. ピット2セクション（西から）

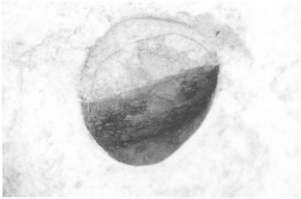


7. ピット3セクション（東から）

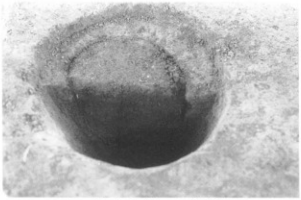
8. ピット4セクション（東から）

図版73　青葉山遺跡E地点第4次調査検出遺構(2)

Pl. 73 Features at AOE4(2)

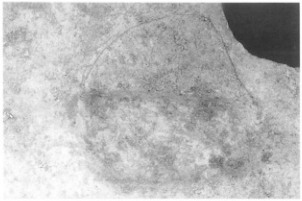


1. ピット5セクション（西から）

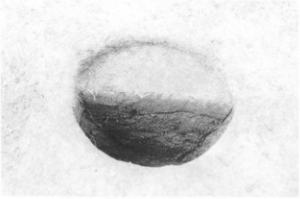


2. ピット6セクション（西から）

3. ピット7セクション（南から）



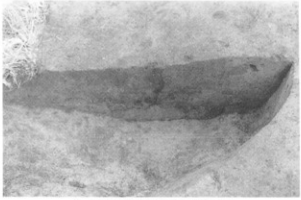
4. ピット8セクション（西から）



5. ピット9セクション（南東から）

6. ピット10セクション（北から）

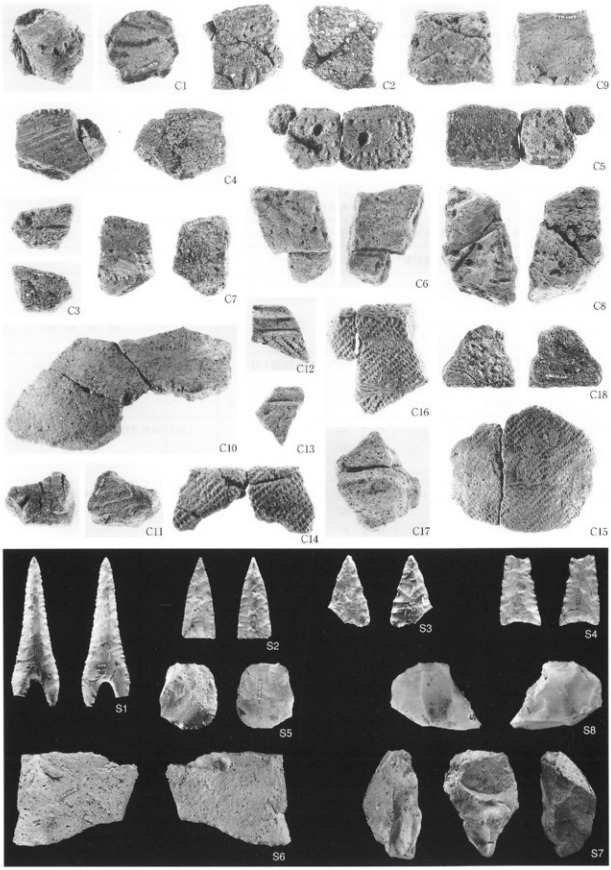
7. ピット11セクション（北から）



8. ピット12セクション（北から）

図版74　青葉山遺跡E地点第4次調査検出遺構(3)

Pl. 74 Features at AOE4(3)



図版75　青葉山遺跡E地点第４次調査出土遺物　　C１～18　S＝１：２
Pl. 75 Pottery and stone implements from AOE4　　S１～８　S＝２：３

報告書抄録

ふりがな	とうほくだいがくまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	東北大学埋蔵文化財調査年報
副書名	
巻次	13
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	須藤　隆・藤沢　敦・関根達人・奈良住子・玉橋さやか・内藤俊彦・北野信彦
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平二丁目１－１　TEL　022-217-4995
発行年月日	西暦2000年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
仙台城跡	宮城県 仙台市 青葉区川内	04100	01033	38° 15′ 10″	140° 51′ 20″	1995.10.30・31 1995.11.27～11.30 1995.12.8～1996.4.11	35	理学部附属植物園本館新営
仙台城 二の丸北方 武家屋敷跡	宮城県 仙台市 青葉区川内	04100	01033	38° 15′ 27″	140° 51′ 26″	1995.3.1～8.31 1995.12.18～ 1996.4.10	1,143	課外活動施設新営
青葉山遺跡 E地点	宮城県 仙台市 青葉区荒巻 字青葉	04100	01443	38° 15′ 17″	140° 50′ 24″	1995.7.24～12.15 1996.3.1～4.2	1,380	理学部研究実験棟新営

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城 二の丸跡 第11地点	城館	近世	池状遺構・ピット	瓦	
仙台城 二の丸北方 武家屋敷跡 第４地点	武家屋敷	近世・縄文・弥生・古代	建物跡・掘立柱列・ 池状遺構・溝・井戸・ 土坑・ピット多数・畑跡	陶磁器・土器・瓦・ 土製品・金属製品・ 石製品・石器	近世初頭の地鎮遺構 柿右衛門様式の色絵鉢 近世の漆紙文書
青葉山遺跡 E地点 第４次調査	集落跡	縄文（早・晩）	土坑５基	縄文土器・石器・土師器	

研 究 編

東北大学構内（仙台城二の丸跡）遺跡出土漆器資料の材質と製作技法

くらしき作陽大学　食文化学部　北 野 信 彦

1．はじめに

東北大学構内遺跡からは江戸時代各年代にわたる仙台城二の丸御殿（中奥地点）関連の遺構・遺物が多数検出され、その内には漆器資料も多く含まれている。今回、東北大学埋蔵文化財調査研究センターの御厚意により、これら漆器資料の材質と製作技法について自然科学的手法を用いた調査を行う機会を得た。本稿ではこの調査結果および、そこから派生する幾つかの諸問題について報告する。

2．出土漆器資料の調査

各種出土生活什器の内でも飲食器（椀・蓋・皿類）は、衣・食・住のなかにおいて「食」という我々の日常・非日常の生活の在り方と密接に関わる資料（物質文化財）である。それと即応するためか遺跡から出土する什器類の内、漆器・陶磁器ともに飲食器が占める割合が極めて高い。このような飲食器資料の材質や製作技法と、使用階層や使用状況との関連性が把握されれば、これらが出土した遺構・遺跡の性格、即ちそこで生活していた人々の暮らしぶりの一端がある程度推定されよう。特に漆器資料は、陶磁器資料と比較して、木胎・塗り・加飾等、材質や製作技法に関する属性が多く、これらの品質は自然科学的手法による調査によって、より客観的にとらえやすい。そのためこのような漆器資料の材質と製作技法を調査することは、個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり、これらが出土した遺構・遺跡の性格自体を考える上でも意味があるものと考えている。本稿では、これら漆器資料の形態、漆塗り面の状況を表面観察した後、(1)用材選択、(2)木取り方法、(3)漆膜面の漆塗り構造、(4)色漆の使用顔料、(5)蒔絵材料、等の項目別に自然科学的な手法を用いた分析を行った。まず、その調査方法と調査結果を記す。

(1) 調査方法

・用材選択（樹種同定）

樹種の同定作業は、出土木材の細胞組織の特徴を生物顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、カミソリの刃を用いて遺物本体をできるだけ損傷しないように、破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片を作成した。切片はキシレン・サフラニンにより脱水および染色して検鏡プレパラートに仕上げた。

・木取り方法

挽き物類である漆器の木取り方法の調査は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行なった。

・漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、簡易顕微鏡を用いた細部の観察を行なった。次に1㎜×3㎜程度の漆膜片を漆器資料から採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイト GY1251JP、ハードナーHY837）に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ・塗り重ね構造・顔料粒子の大きさ・下地の状態等について金属顕微鏡による観察を行った。

・色漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析

色漆に用いられた顔料および蒔絵材料である金属粉の無機物に関する定性分析には、先の漆膜片をカーボン台に取り付け、日立製作所 S-415 型の走査電子顕微鏡に堀場製作所 EMAX-2000 エネルギー分散型電子線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー）を連動させて用いた。分析設定時間は500秒とした。

(2) 調査結果

今回、調査を行った漆器資料は、椀・蓋・皿型を中心とした挽き物類および塗箱や譜部材の板物類、さらには杓子・ヘラ類、箸櫛、塗下駄等の生活什器類の合計104点である。共伴陶磁器の編年観や出土状況および出土層位の観察から、これらの帰属年代は、近世初頭から幕末期にわたる1～4期に分類され、その内訳は、第1期（17世紀初頭～元和期：1600～1638年の二の丸跡整地層下層）の29点、第2期（元禄期の二の丸御殿改造期）の16点、第3期（18世紀後葉）の27点、第4期(18世紀末～19世紀中葉）の32点である。以下、各項目別の調査結果を述べる（Table.1）。

(用材選択)

本漆器資料の内、挽き物類である椀・蓋・皿等の樹種には、ブナ科ブナ、トチノキ科トチノキ、ニレ科ケヤキ、モクセイ科シオジ、モクレン科コブシ、等の広葉樹5種類が、塗箱や譜部材等の板物類にはヒノキ科ヒノキ、スギ科スギ、マツ科マツ、等の針葉樹材3種類が確認された。また、杓子やヘラ類にはブナ科ブナ、ブナ科クリ材が、塗櫛にはイスノキ科イスノキ、さらには塗下駄にはブナ科コナラ節、ミズキ科ミズキ、バラ科サクラ亜属、等のいずれも広葉樹材が、箸にはタケ材が確認された。これらの木材の組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗り等を考慮に入れて分類すると(Table.2)に示すようになり、それぞれの用途に即した用材選択が為されている（注1）。さらにこれらの用材選択の傾向をみてみると、吟味された最優材であるケヤキ・シオジ・ヒノキ材などと、加工や入手の容易さという大量生産の点からみて一般性が高いと考えられる適材のトチノキ・ブナ・スギ・マツ材の2つのグループに分かれた。そして本漆器資料の内、椀・蓋・皿等の挽き物類(104点中77点）では、前者のケヤキ・シオジ材は7点(9.1%)、後者のトチノキ・ブナ材は68点(88.3%）で、後者の比率が大きい。とりわけブナ材は、挽き物類全体の88.0%の出現比率を占め、圧倒的に利用度が高かった(Photo.1)。

報告者によるこれまでの全国115遺跡、合計16,009点の出土漆器資料の用材選択性に関する調査結果では、挽き物である漆器椀・蓋・皿類の樹種には、ケヤキ（江戸時代前期段階ではシオジ材が多い）・トチノキ・ブナの3樹種の占有率が高く一般的である。ところが全国を大きく8ブロックの地区に分けて材の使用比率を集計してみると、それぞれの頻度の様相は地域により若干異なる事が窺える。すなわち東北地区ではブナ材の使用が卓越しており、北海道・北陸・山陰地区ではブナ材優勢ながらもトチノキ材使用も多い。一方、江戸市中・東海・近畿・山陽地区ではややトチノキ材使用が多い傾向が見出された(Fig.1)（注2）。この結果を参考にして本漆器資料の用材の使用状況をみてみると、いずれの年代の資料群においても東北地区の特徴であるブナ材の使用比率が高く、これまでの調査結果を裏付ける結果となった。

(木取り方法)

挽き物類の木取り方法は、横木地と竪木地に大別され、その大半は板目取りもしくは柾目取りの横木地であった。挽き物類である近世出土漆器の木取り方法は、竪木地に比較して横木地を用いる例が大半であり、竪木地の場合も木芯を外した材を利用する例が一般的である(Fig.2)。これは木材の割れ狂い、収縮等を考慮に入れて漆器自体の品質を重視したため、不都合な木取り方法が自然淘汰された結果と考えている（注3）。

本漆器資料の木取り方法をそれぞれの樹種との関連性でみてみると、本資料の大多数を占めるブナ材は、いずれも横木地柾目取りであった。一般にトチノキ材は、芯を中心にして割れ狂いの多い赤味（心材）が広がり、表皮に近い部分にシラタとよばれる白い部分（辺材）がある。シラタは、多く取れても四寸（約12cm）程度しか利用できないので、椀木地ではおのずと椀を伏せたような形で木地を取る板目取りの方法が適している。一方、ブナ材は芯に近いところまで利用が可能なので、木の狂いが少なく木地が多く取れる柾目取りの方法（ブンギリ）が適している。という福島県奥会津および岩手県安代町・浄法寺町周辺で採集された口承資料がある（注4)。この点からも、本漆器資料の木胎製作の工程が、一貫してそれぞれ材の性質を考慮に入れた可能性が指摘されよう。

(漆膜面の塗り構造)

漆器表面の漆塗り技法は、大きく分けて無文様で地塗りのみの資料と、家紋等の漆絵文様を地外面に描く資料、さらには蒔絵等きわめて高度な漆工技法をもつ資料に分かれた。これらの漆膜面の塗り構造、特に、各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、ピークがほとんど見出だされない資料と、粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料の２種類に分けられた。これらをさらに金属顕微鏡で観察することにより、前者を炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地、後者を細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）であると認識した（注５）。

次に、地の漆塗り層は、いずれも１層塗りから３～４層塗りまで見出だされ、簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料が中心である（注６）。そして加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた(Fig.３)。しかし一部の資料では、口縁部に布着せ補強を施したり、精緻な蒔絵等の加飾が施されるなど極めて高度な漆工技術が見出だされており、品質の多様性も見い出された。また一部の資料には塗り直し補修の痕跡が確認されており、これらが長期間大切に使用されてきたことも理解された(Photo.２)。

(色漆の性質)

赤色系漆の使用顔料は、定性分析と顕微鏡観察の結果、それぞれベンガラ（酸化第二鉄 Fe_2O_3）、朱（水銀朱 HgS）、の二種類の異なる赤色顔料を用いた赤色系漆であると理解した(Fig.4.1～4.3)。ベンガラ・朱ともに赤色系顔料としての歴史は古い。しかし近世漆器の色漆顔料としては、幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して、江戸時代中期以降、人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が珍価で一般的となる(注７)。本漆器資料の場合も、各年代別に朱とベンガラの遣いわけ比率をみてみると、近世初頭～江戸時代前期段階の資料群（第1期）では朱の使用比率が高いが、その後の第２～３期ではベンガラの使用が高くなる傾向がみられる。さらには、簡素で一般的な塗り構造を持つ資料にはベンガラを、堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ資料には朱を使用するというような明らかな朱・ベンガラの使い分け事例も見出された。これらの事例の背景にはやはり先の赤色系顔料の調達や価格の問題が反映しているものであろう。

次に緑色系漆の使用顔料についてみてみる。緑色系漆の定性分析結果では、いずれも石黄（硫化ヒ素：As_2S_3）が検出された。顕微鏡観察でも藍等の天然染料で青色に着色した漆の中に石黄（黄色）が混入してあり、青と黄色で緑色の発色をつくる江戸時代後期（18世紀中期）以降に見られる当時の色漆の漆工技術の一端が確認された。

(蒔絵加飾材料の材質)

表面観察において金粉（金箔）によるとみられる家紋や絵柄等の蒔絵加飾部分を定性分析した結果、Au（金）が認められる資料の他、Ag(銀)、Sn(スズ)のそれぞれ異なる材質が見出だされた（Fig.4.4～4.8)。このことは、本漆器資料の蒔絵加飾には、実際の金（Au）自体を用いる例の他、銀粉や代用金粉である錫粉（箔）を使用する事例があったことを示していよう。さて、江戸期の各種文献資料からは、漆器に蒔絵や梨子地等の加飾を施すこと自体、寛文年間以降しばしば発せられる奢侈禁止令によって各社会階層毎に厳しく制限されていたこと(注８）や、これら金・銀・錫等の材質別の蒔絵漆器に、明確な価格差が存在したこと（注９）等が、知られる。この点に関連して、本漆器資料をはじめとする各遺跡の蒔絵漆器資料の材質別使用比率を集計してみると、いずれの遺跡・年代の一括資料の場合でも、基本的には金（Au）自体を使用した蒔絵漆器は数%程度で少なく、大半は代用金粉である錫粉や石黄粉、もしくは銀粉（Ag）であった。この結果は、各資料の製作年代の違いとともに、奢侈禁止令による各社会階層別の蒔絵・梨子地等加飾漆器の使用や、所有・調達に関する制限、さらには基本的な価格の違い等が複雑に影響していることを示していよう。いずれにしても、このような赤色系漆の使用顔料や蒔絵粉の材質の問題は、個々の資料の性格を考える上でも大変示唆的である。

３．考　察

以上、前章では項目別に各出土漆器資料の材質および製作技法の在り方をみた。その結果、本漆器資料は、木

胎・漆塗り技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる極めて一般的で廉価な日常什器類から、吟味された素材からなる堅牢で複雑な漆工技法を有する優品資料に至るまで、幾つかのランク別のグループに分類された。このような漆器資料のグループ毎の違いは、文化的背景を含むそれぞれの漆器資料の製作年代、これら什器を使用しさらには授受した使用階層の社会的・経済的背景（生活様式）、地域性、什器類の使用目的や方法、さらには個々の漆器生産地の製作技術、等さまざまな条件が反映されたものであろう。さて、近世漆器の場合、木胎製作の工程（樹種選択性や木取り方法）の品質程度の優劣と、漆工の工程（下地を含めた漆塗り構造や使用顔料）の品質の優劣には強い相関関係がみられる場合が多い。すなわち、木胎にケヤキ材などの最良材を用いた漆器では、サビ下地～口縁部等には布着せ補強を施すなどの堅牢で複雑な多層塗り構造、さらには朱や金自体などの吟味された材料を用いる例が多い。一方、ブナ材などの一般的な用材選択が為された漆器には、炭粉下地に上塗りの漆層が１～２層程度の簡便な技法が採用され、かつベンガラ等の廉価な材料を用いる例が多い。この点を考慮にいれて今回の調査結果をみてみると、資料№58をはじめとする幾例かは、極めて堅牢で複雑な多層漆塗り構造を有しながらも東北地区では汎用性が高いブナ材を用いており、本資料群の特徴の一つといえる。さらに、これらを各年代の一括資料毎に把握するために、最も一般的な８つの材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出し、それぞれの比率を総出現数の中で集計した(注10)。その結果、生産技術面からみた本漆器資料の全体的な組成の傾向は、仙台城関連資料をはじめとする東北地区における各遺跡出土資料および漆器生産地関連の民具資料のそれとは基本的には大差が無いが、江戸市中における東北諸藩の藩邸である仙台藩伊達家屋敷跡の汐留遺跡および南部八戸藩屋敷跡の林野庁跡地遺跡のそれとは異なっていた。この結果からは、本漆器資料の主流を占める椀・蓋・皿類は、『江戸表』や『京・上方』から調達された什器類よりも、東北地区の『国元』で賄われたものである可能性が推察される（Fig.５）。

なお、本漆器資料はいずれの年代でも実用に即した一般的な漆器が中心である(注11)が、他の武家地関連遺跡出土漆器資料のそれらに比較してみると、第3期の一括資料を中心とした優品資料の占有率がやや高い傾向で認められた（Fig.６）。一般に国元における城内御殿や江戸市中における諸大名の藩邸は、それぞれの大名家の私的な『屋敷』であると同時に、極めて多数の武家社会構成員が勤務する『役所』の性格も同時に有する。そのためか、大名屋敷（国元城内御殿や江戸表藩邸）敷地内の土地空間の利用状況を文献史料や絵図面等を参照してみてみると、(1)各藩の公的な役回りを行う建物区域・(2)私的な居住建物区域（これは大名家の居住邸宅としての御主殿エリア・詰人等の長屋居住エリア等に身分別に細分化される）・(3)各種庭園区域・(4)蔵物殿や厩舎等の付属建物区域・(5)馬場等の使用目的有無にかかわらず存在する空間地、等、使用目的別な区画が明確にされる。さらにこのような土地空間の中では、それぞれの「時」と「場所」に応じた『什器調達(注12)』や『ゴミ処理』が為されていたことも知られており、基本的には主殿空間と詰人空間に代表される空間スペースの利用状況の違いが、出土漆器資料をはじめとする多くの出土遺物の検出状況（ゴミ処理問題も含めて）に規制として働いた可能性が指摘される(注13)。すなわち仙台城内二の丸御殿中奥エリアで使用された什器類を中心とする本漆器資料や、同様の性格を有する金沢城内江戸町遺跡・赤穂城内御殿跡等の出土漆器の性格は、それぞれの御殿内のゴミ処理問題の影響をある程度反映しているものであろう(注14)。

今後の課題は、陶磁器類をはじめとする他の共伴遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討していくことが挙げられる。この検討作業を行うことが、本出土漆器資料の性格をさらに的確に理解する上で大切なことであろう。

４．（附章）『縦三引両文』の加飾が施された漆器椀・蓋・皿類について

本漆器資料のうち、資料№15，16，17，22，25，26，30，31，32，35の９点は、地内面や外面に伊達家家紋である『縦三引両文』が赤色漆で豪放に加施された漆器椀・蓋・皿類である。この『縦三引両文』は、いずれも仙

台藩では初代政宗～二代藩主の伊達忠宗の時期頃によく用いられていたとされる『しない三引』のモチーフであり、かつ資料の帰属年代の時代性もよく合致するため、これら漆器資料と伊達家との関連性は強く推察されるところである（注15）。これと同様の『縦三引両文』の加飾が施された漆器資料は、仙台城三の丸跡や仙台北目城跡等の伊達家関連遺跡からも、やはり近世初頭～前期頃の比較的江戸時代の初期段階の年代観が与えられた資料の中に幾例か見い出すことができる。本稿では、これら『縦三引両文』の加飾が施された漆器資料同士の生産技術面の関連性を考察する目的で、これまで調査する機会に恵まれた本漆器資料（9点）、仙台城三の丸遺跡（6点）、北目城跡遺跡（4点）の3遺跡合計19点の『縦三ツ引両文』が加飾された出土漆器資料について、相互の調査結果を比較検討した（Table. 3）。その結果、これら『縦三ツ引両文』の家紋が施された漆器資料は、椀・蓋タイプの資料ではいずれも用材にはブナ科ブナ材の横木地柾目取りが、今回の調査結果からは1点のみではあるが、大型の鉢タイプの資料にトチノキ科トチノキの横木地板目取りが使用されていた。そしてこれらの下地にはいずれも炭粉下地の上に1～2層上塗り漆を塗布する基本的にはやや簡便な漆塗り技法の資料である点では一致していた。しかしその一方で、偃々の資料の加飾の赤色漆には朱・ベンガラの異なる赤色顔料の使用も見い出だされた。このことからは、同じ『縦三ツ引両文』を加飾したほぼ同年代の資料群の中でも個体により若干の生産技術面での違いが存在していたようである。なお、伊達家家紋である『縦三ツ引両文』のモチーフ自体は藩主用、伊達家一族用、上級家臣団用と各々使用目的に応じて使い分けが存在していたことが知られる（注16）。このような使用者と偃々の資料の生産技術面との関連性、さらには偃々の漆器の使用目的（ここでは漆器の機能）や時代背景など、幾つかの想定される問題点との相互関係の解明も今後の課題の一つといえよう。

（謝　辞）

本調査を行なうにあたり、東北大学の須藤隆先生、同大学埋蔵文化財調査研究センターの藤沢敦氏、関根達人氏、奈良県立橿原考古学研究所の今津節生氏をはじめとする多くの方には、大変お世話になりました。厚く謝意を表します。

（注）

(1) 末沢（1975）の調査では、近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には、早晩材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが靭性がある材を適材であるとしている。
　　橋本鉄男（1979）『ろくろ　ものと人間の文化史31』　法政大学出版局

(2) 北野信彦（1996）「近世遺跡出土漆器資料の生産・流通・消費に関する諸問題」『日本考古学協会第62回総会研究発表要旨集』pp.49-52、日本考古学協会等を参照されたい。

(3) 北野信彦（1993）「日常生活什器としての近世漆器椀の生産と消費」『食生活と民具』pp.81-101、日本民具学会編　雄山閣出版、等を参照されたい。

(4) 須藤（1982）の調査によると、近世以降の近江系（小椋谷）木地師による挽き物類の木取り方法は、横木地板目取りはトチノキ地帯に、同柾目取りはブナ地帯に定着し、その細かい技術は偃々の集団に受け継がれてきたとしている。
　　須藤護（1982）『日本人の生活と文化、暮らしの中の木器』日本観光文化研究所編　ぎょうせい

(5) サビ下地を用いた漆器の生産自体の生産体制が地方の漆器生産においても普及・一般化するのは、漆器の需要とそれに伴う漆器生産量が増大した江戸時代後期～幕末期以降のようである。この状況を知る事例として、近世輪島塗の台頭や、炭粉下地による廉価な日用漆器の生産では奥州会津、近江日野とともに三大生産地の一つといわれていた紀州黒江生産地へのサビ下地（堅地物）技術の導入などがあげられよう。なお一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地（堅下地・本下地より堅牢性に欠ける）の可能性もある。しかし出土資料のにかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビ下地とした。
　　北野信彦（1993）「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・Ⅰ-文献史料からみた量産型漆に使用する混和剤を中心として-」『古文化財の科学　第38号』pp.65-79、古文化財科学研究会

(6) このような近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗事例の1つに、新潟県糸魚川市大所の小椋文助氏による実用に即した近世木地師、漆器椀の製作技法に関する口承資料がある。それによると［上品］布着せ補強（椀の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く）～サビ下地（砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布）～下塗り（生漆）～上塗り（生漆に赤色系顔料も

しくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆）の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。［下品］炭粉下地（柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地）～上塗り（生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入している粗悪な漆）。［中品］下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。などとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。

文化庁文化財保護部編（1974）『木地師の習俗　民俗資料選集2』　国土地理協会

(7)　江戸時代における朱とベンガラの価格表を検討してみると、江戸時代前期段階には両者海外輸入品が多いためか、相対価格差はほとんど見られない。しかし江戸時代後期頃の段階では、両者に約30倍ほどの相対価格差が見られ、とりわけ朱の高価さと入手困難さが指摘される。

北野信彦（1994）「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・II-文献史料からみた赤色系漆に使用するベンガラの製法について-」『古文化財の科学 第39号』pp.93-102、古文化財科学研究会

北野信彦（1996）「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・III 文献史料からみた赤色系漆に使用する朱の製法について-」『文化財保存修復学会誌　第41号』pp.88-100、文化財保存修復学会

(8)　江戸時代前期から徐々に定着化しつつあった雛道具類について、享保20年(1735)の尾張名古屋城下町の町衆に対する禁令には、「一、同調道具、梨子地ハ勿論、蒔絵無用ニ可仕候、上之道具たりとも、黒塗ニ可仕候。(名古屋叢書第三巻)」という記述がみられる。又、武家社会内部でも、万治３年(1660)の紀州徳川家（御家中祝言道具達）では、藩士のランクを１万石から200石までの８段階に分け、道具揃や仕様を細かく規定している。その上で漆器である具補は2400石以下の者には調達が認められておらず、諸道具の蒔絵仕上げも同様に許されていない。(南紀徳川史　法令制度第四)

(9)　寛延四年（1751）の『名古屋諸色直段集，寛延四未年小買物諸色直段帳』には、漆器の休漆技法別の価格が記載されている。この史料では、布着せ蠟色塗（上品）：常溜塗（中品）：常拭漆塗（下品）の相対価格差は、約51：3.4：１と算定される。また、伊勢藍野藩士方家菩提寺である見性寺の見性寺文書には、伊勢桑名の塗物商ぬし興に提出させた見積書があるが、それによると家紋加飾に使用された金・銀・錫粉蒔絵の相対価格比率は、約18：６：１と算定され、いずれの事例からも材質や政策技法の違いにより、漆器資料には明確な価格差が存在したことが理解される。

北野信彦（1997）「文献史料からみた近世蒔絵漆器について」『元興寺文化財研究 第61号』、pp.1-8、(財) 元興寺文化財研究所

(10)　本調査では個々の漆器資料からもっとも一般的な８つの製作技法上の優劣ランクの項目を抽出しそれぞれの比率を総個体数の中で計算してその結果をレーダーチャート方式で図化するものである。すなわちレーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・ブナ材などのいわゆる廉価で粗雑な量産型漆器資料の製作技法の特徴を取り、それと相対する左側には、朱・サビ下地・ケヤキ材などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもケヤキ・ブナ材のほぼ中間に位置すると考えられるトチノキ材の占有比率(%)をそれぞれ配置した。この配置で示されるレーダーチャートは、その重点が右に寄るほどランク的に廉価な資料が多いことを、左に寄るほど優品資料の占める割合が高いことを示す。

(11)　北野信彦（1990）「近世尾張における生活什器としての出土漆器資料」

『綜合郷土研究所紀要35巻』　pp.82-94、愛知大学

北野信彦（1993）「近世武家社会における生活什器としての漆器資料」

『綜合郷土研究所紀要38巻』pp.115-134、愛知大学

北野信彦（1994）「近世村方社会における生活什器としての漆器資料」

『綜合郷土研究所紀要39巻』pp.115-135、愛知大学

北野信彦（1995）「近世寺域社会における生活什器としての漆器資料」

『綜合郷土研究所紀要40巻』pp.167-185、愛知大学

北野信彦（1996）「近世町方社会における生活什器としての漆器資料」

『綜合郷土研究所紀要41巻』pp.119-135、愛知大学

北野信彦（1998）「近世社家社会における生活什器としての漆器資料」

『綜合郷土研究所紀要43巻』pp.145-160、愛知大学

北野信彦（1999）「出土漆器からみた近世初頭から前期における城下町居住者の一性格」

『綜合郷土研究所紀要44巻』pp.113-132、愛知大学

北野信彦（2000）「出土漆器からみた江戸市中武家地関連遺跡の一性格」

『総合郷土研究所紀要45巻』pp.113-132、愛知大学

等を参照されたい。

⑿ 国元の城内御殿や江戸市中の各藩邸内における各種公的な用向きに使用される什器類の調達は、各藩諸役業務の一環として行われる場合が多く、藩はこれら諸役を通じて、御用蒔絵師や塗師らの手になる特別な什器類（婚礼道具や贈答品・御下賜品）の調達以外は、江戸・国元等の御用漆器商人から十人揃・二十人揃など大量に購入していたものであろう。この点に関連して寛永16年(1639)の長州萩藩毛利家中「江戸御番手付立」には、江戸藩邸内の諸役割り当てが記載されており、陶磁器・桶等の器物一切を保管・管理する「諸物方（35石以下無給通士）」、御台所の家具・器物を出納する「家具方（25石以下徒士）」、これらの諸会計事務を司る「算用方（60石無給通士）」等の職名が知られる。

山本博文(1991)『江戸お留守居役の日記』読売新聞社

また、享保2年(1717)の備前庭瀬藩牧倉家中文書には、年間必要経費となる御殿女中等の使用飲食器の品目・経費が記載された定書がある。この文献史料からは、御局同並迄：上臈衆同並迄：茶之間中居半下迄：徒巳下足軽迄：下女・中間の身分別の椀代相対比率は、約9.4：5：3：1.6：1と算定される。

⒀ これら漆器資料の性格自体が、非日常のハレの食事に供せられるような特別の飲食器類(伝世品として長期間大切に保管管理される場合が多い)とは異なり、普段の食生活で多用され、かつ割合簡単に廃棄されたであろう什器類、すなわち(1)通常のゴミ処理や不用品の投棄、(2)屋敷立て替えに伴う什器払い、(3)火災や地震等の不測の事態（災害）に伴う一括廃棄、等に伴う不用品の廃棄資料が中心であることに由来しよう。

⒁ 個々の出土漆器資料の分析結果は、既刊の下記発掘調査報告書の項目を参照されたい。

北野信彦（1992）「仙台城三の丸跡出土漆器資料の製作技法」『仙台市博物館調査研究報告 12』 pp.78-86,仙台博物館

北野信彦（1992）「特別名勝　兼六園内出土漆器資料の製作技法」『特別名勝　兼六園（江戸町推定地）発掘調査報告』pp.73-85、石川県立埋蔵文化財センター

北野信彦（1995）「出土漆器資料の製作技法」『清洲城下町遺跡５』pp.124-139, 愛知県埋蔵文化財センター

北野信彦（1997）「汐留遺跡出土漆器資料の製作技法」『汐留遺跡　1』 pp.87-137、東京都埋蔵文化財センター

⒂ 『しない三引両文』は、特に仙台藩二代藩主の伊達忠宗が好んで用いたとされている。

高橋あけみ(1996)「２章　近世四　伊達家をめぐる美術　伊達家の漆工」『仙台市史　特別編3』pp.259-276

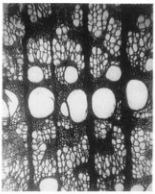
⒃ それ以降の年代の資料においても『縦三引両文』の加飾が施された漆器資料をはじめとする什器類は、あるものは伊達家ゆかりの大名諸道具として、あるものは伊達家からの御下賜品として、仙台領内を中心に伝世しているものが幾例か宮見される。また出土資料においても、江戸表に位置する仙台藩邸跡（汐留遺跡）や伊達家菩提寺の一つである寺域内遺跡からも同様の『縦三引両文』が飾された什器類や軒丸瓦等が多数検出されている（Photo.３）。

(引用文献)

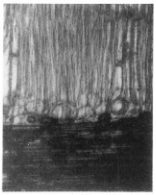
(1) 沢口悟一：“日本漆工の研究”（1966）、美術出版社。

(2) 光芸出版社編（1978）『うるし工芸辞典』

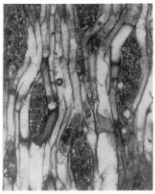
にれ科ケヤキ



木口（30×　）

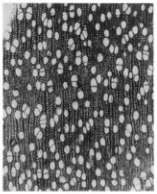


柾目（100×　）

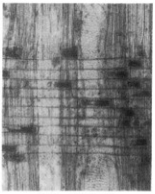


板目（50×　）

とちのき科トチノキ



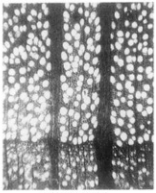
木口（30×　）



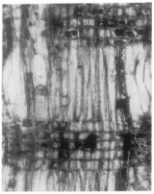
柾目（100×　）

板目（50×　）

ぶな科ブナ



木口（30×　）



柾目（100×　）

板目（50×　）

Photo 1　主要樹種の顕微鏡写真

Table1-1　出土漆器資料観察表 (1)

No.	器形	産地	木取	表面塗り技法 内	表面塗り技法 外	表面塗り技法 文様	使用顔料 内	使用顔料 外	使用顔料 文様	漆塗構造 内	漆塗構造 外	備考	年代観
1	椀(身)	プナ	B	黒	黒					3	3		
2	椀(身)	プナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1		
3	椀(蓋)	プナ	B	赤	黒	外-紋-銀	ベンガラ		Ag+ベンガラ	1	2		
4	椀(身)	プナ	B	赤	黒	外-紋-赤	ベンガラ		ベンガラ	3	4		4,9,12：17ct
5,1	椀(身)	プナ	B	黒	黒					1	1		
5,2	椀破片	プナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1		上記以外：
6	椀(身)	プナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1		17ct.末葉
7	椀(身)	プナ	B	黒	黒	内外-紋-赤			ベンガラ	2	2		(元禄年間)
8	椀(身)	プナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	高台内黒	
9	椀(身)	プナ	B	黒	黒					8	8	布着せ補強	
10	椀(身)	プナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1		
11,1	椀(身)	プナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1		
11,2	椀破片	プナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1		
12	椀(身)	プナ	B	黒	黒	内外-絵-赤			ベンガラ	2	2		
13	椀(身)	プナ	B	赤	黒	外-絵-赤	朱	朱		5	6		
14	椀(身)	プナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1		
15	椀(蓋)	プナ	B	黒	黒	内外-紋-赤			朱	2	2	三ツ引両文	17ct.前期
16	椀(蓋)	プナ	B	黒	黒	内外-紋-赤			朱+ベンガラ	2	2	三ツ引両文	
17	椀(蓋)	プナ	B	黒	黒	内外-紋-赤			ベンガラ	2	2	三ツ引両文	
18	椀(身)	プナ	B	黒	黒	内外-絵-赤			ベンガラ	2	2		
19	椀(蓋)	シオジ	B	黒	黒					5	5	油煙	
20	椀(身)	プナ	B	黒	黒					1	1		
21	椀(身)	プナ	B	黒	黒	内外-絵-赤			ベンガラ	2	2		
22	椀(身)	プナ	B	黒	黒	内外-紋-赤			ベンガラ	2	2	三ツ引両文	
23	椀(身)	シオジ	B	黒	黒					5	5	油煙	
24	椀(身)	プナ	B	赤	黒	外-絵-赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2		
25	椀(身)	プナ	B	黒	黒	内-絵-赤			朱	2	1		
26	椀(身)	プナ	B	黒	黒	内外-紋-赤			朱	2	2	三ツ引両文	
27	椀(蓋)	プナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1		
28	椀(身)	プナ	B	赤	黒	外-絵-赤	朱		朱	1	1		
29	椀(身)	シオジ	B	黒	黒					5	5	油煙	
30	椀(身)	プナ	B	黒	黒	内-紋-赤			朱	2	1	三ツ引両文	
31	皿	プナ	B	黒	赤	内-紋-赤		ベンガラ	朱+ベンガラ	2	1	三ツ引両文	
32	椀(身)	プナ	B	赤	黒	外-紋-赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2	三ツ引両文	
33	椀(身)	プナ	B	赤	－	内-絵-赤			ベンガラ	2			
34	椀(蓋)	プナ	B	黒	黒	内外-絵-赤			朱	2	2		
35	椀(蓋)	プナ	B	黒	黒	内外-絵-赤			ベンガラ	2	2	三ツ引両文	
36	椀(身)	プナ	B	黒	黒	内外-絵-赤			朱	2	2		
37	皿	プナ	B	黒	黒	内-絵-赤・茶			朱・ベンガラ潰み	2	1		
38	椀(身)	ケヤキ	A	黒	黒					5	5		
39	皿	ケヤキ	A	黒	黒					7	7	布着せ補強	
40	椀(身)	プナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1		18ct.後葉
41	椀(身)	ケヤキ	B	赤	黒		朱・ベンガラ			7	7	布着せ補強	
42	椀(身)	プナ	B	赤	黒	外-紋-赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2		
43	椀(蓋)	プナ	B	赤	黒	外-紋-赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2		
44	椀(身)	プナ	B	赤	黒	外-紋-赤	ベンガラ		ベンガラ	5	6		
45	椀(身)	プナ	A	赤	黒	外-紋-銀	ベンガラ		Ag	1	2		
46	椀(蓋)	プナ	B	赤	黒	外-紋-銀	ベンガラ		Ag	1	2		
47	椀(蓋)	プナ	B	赤	黒	外-絵-赤	ベンガラ		ベンガラ	5	6	油煙	
48	椀(蓋)	プナ	B	赤	黒	外-絵-赤	ベンガラ		ベンガラ	5	6		
49	椀(身)	プナ	B	赤	黒	外-紋-赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2		
50	椀(身)	プナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1		
51	椀(蓋)	プナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1		
52	椀(身)	トチノキ	A	黒	黒					5	5	油煙	
53	椀(蓋)	プナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1		
54	椀(蓋)	プナ	B	赤	黒	外-絵-赤	ベンガラ		ベンガラ	1	1		
55	椀(身)	プナ	B	赤	黒	外-絵-赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2		
56	皿	プナ	B	黒	黒	外-絵-赤銀金		As+S/アイ	朱・Au・As+S/アイ	1	4	墨書銘	
57	皿(盆)	プナ	B	赤	黒		ベンガラ	ベンガラ		3	3		
58	椀(身)	プナ	B	赤	黒	外-紋-赤	ベンガラ		ベンガラ	7	8	多層塗り	
59	椀(身)	ケヤキ	B	赤	赤		ベンガラ潰み	ベンガラ		多層	7+7	塗り直し？	19ct.前～
60	椀(身)	プナ	B	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1		幕末
61	椀(身)	プナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1		

Table1-2　出土漆器資料観察表 (2)

No.	器形	樹種	木取	表面塗り技法 内	表面塗り技法 外	表面塗り技法 文様	使用顔料 内	使用顔料 外	使用顔料 文様	層量構造 内	層量構造 外	備考	年代観
62	椀(身)	ブナ	B	赤	黒		朱・ベンガラ			3	1		
63	椀(身)	ブナ	B	赤	黒		朱・ベンガラ			3	1		
64	椀(身)	ブナ	B	赤	黒		朱・ベンガラ	ベンガラ		3	3	塗り直し?	
65	椀(蓋)	ブナ	B	赤	赤	外・絵 金・黒	朱	朱	Au+クロ	3	4	蒔絵	
66	皿	コブシ	C	黒	黒					5	5	油煙	
67	椀(身)	ブナ	B	赤	赤	外・線文・黒	朱	朱		3	4		
68	椀(蓋)	ブナ	B	黒	黒					1	1		
69	椀(蓋)	ブナ	B	赤	黒	外・絵・赤金	ベンガラ		Au・ベンガラ	1	1		
70	容器?	ブナ	B	赤	黒		朱			1	1		17ct.初～17ct.前葉
71	容器(身)	不明	−	赤	黒	外・絵・赤	ベンガラ		ベンガラ	1	2		
72	容器(蓋)	ブナ	B	赤	黒		朱			1	3		
73	不明	ブナ	B	黒	黒	外・文字・赤			朱	1	2		
74	鏡箱片	針葉樹材		透	透					1	1		18ct.後葉
75	ヘラ?	針葉樹材		赤	一		ベンガラ			5	5		
76	茶托台破片	ブナ	B	茶	茶		ベンガラ摺み	Au+S		1	1		
77	不明	ヒノキ		黒	黒					7	7		
78	杓子	クリ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1	油煙	
79	ヘラ	ブナ	B	赤	黒		ベンガラ			1	1	油煙	
80	不明	クリ		-	黒						1		77～92：19ct.前葉～幕末
81	不明	クリ		−	黒					1	1	油煙	
82	ヘラ	クリ	A	赤	赤		ベンガラ			1	1	朱・黒・油煙	
83	箱枕	針葉樹材	−	−	黒						5		
84	容器(蓋)	ブナ	B	黒	黒					1	1	油煙	93：18ct.後葉
85	不明部材	針葉樹材	−	黒	黒					7	7		
86	腰板?	マツ		黒	黒					1	1	油煙	
87	不明部材	スギ		黒	黒					3	3	油煙	
88	不明部材	スギ		黒	黒					1	1	油煙	
89	不明	ブナ	A	黒	黒	外・線・赤金緑			ベンガラ・Au・As+S	1	2		
90	不明	針葉樹材		黒	黒					5	5		
91	箱物部材	ヒノキ		黒	黒	外・線・金			Au	5	6		
92	箱物部材	ヒノキ		黒	黒	外・絵・金・赤			Au+ベンガラ・朱	5	6	蒔絵	
93	箱部部材	スギ		透	透		ベンガラ染	ベンガラ染		1	1		
94	重箱破片	ダケ		赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1	油煙	18ct.後葉
95	重箱	イスノキ		黒	黒	外・絵・赤・銀			SN・ベンガラ	1	2	銀箔絵	
96	重箱	イスノキ		黒	黒	外・絵・赤・銀			SN・ベンガラ	1	2		
97	不明	ミズキ科	−	黒	黒		ベンガラ染			1	1		19ct.前中
98	重下駄	広葉広材	A	赤	黒		ベンガラ			5	5		18ct.後葉
99	重下駄	サクラ類	A	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		1	1		
100	重下駄	コナラ節	−	黒	黒					1	1		19ct.後～幕末
101	転物足	針葉樹材	-	透	透					1	1	油煙	
102	板物蓋	スギ	−	透	透		ベンガラ染	ベンガラ染		1	1		

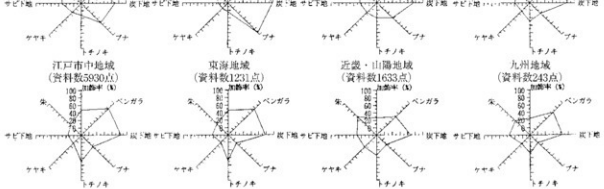
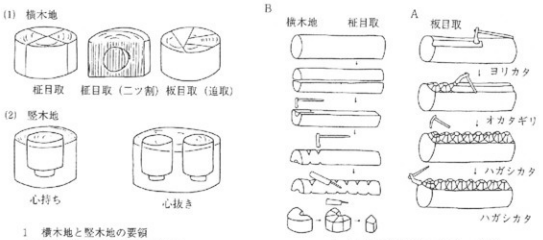


Fig. 1　地域別出土漆器資料の組成（集計例・18～19ct.）



1　横木地と竪木地の要領
（宋沢春一郎「近世以降木地師の
ロクロ製品技術の研究」原図）

2　近世会津木地師の木取りの方法
須藤（1982）より原図引用

Fig. 2　近世以降の漆器（挽き物類）木取り方法

A 環孔材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギク、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靭性もあり、木皿など薄手物に適する。
B 散孔材	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適してる。割れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが、加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっと適する。
	c. ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキ、など	軟かくて加工は容易であるが、乾燥が難しくて狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d. エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目にもよく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、割れにくいので使用に適する。

Table 2　ろくろ挽き物の用材分類一覧表

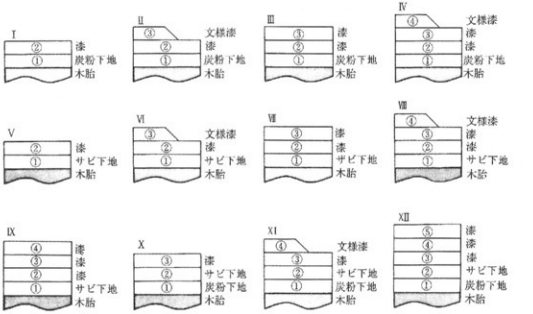
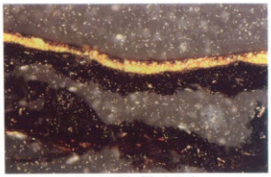


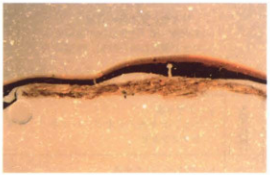
Fig. 3　漆塗り構造の分類

No. 8　赤色系漆（×200）



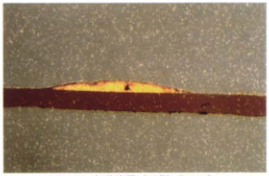
No. 76　黄色系漆（×200）

No. 20　黒色系漆（×200）



No. 84　黒色系漆（×100）

No. 56　蒔絵加飾漆器（緑色系：石黄＋藍）（×200）

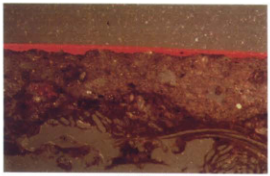


No. 56　加飾漆器（石黄）（×200）

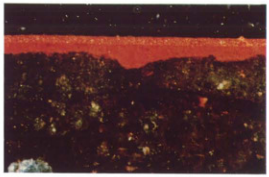
No. 46　蒔絵加飾漆器（銀蒔絵）（×100）

No. 92　蒔絵加飾漆器（金＋銀：青金蒔絵）（×100）

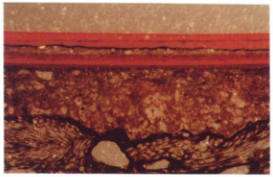
Photo 2－1　漆器膜面の塗り構造（顕微鏡写真）(1)



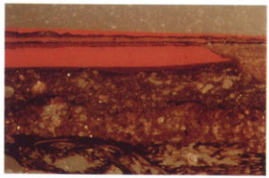
No. 41　赤色系漆（×100）



No. 41　同左拡大（×200）

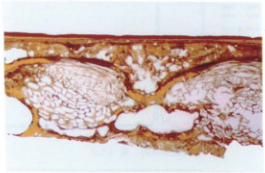


No. 59　赤色系漆（塗りなおし補修）（×100）

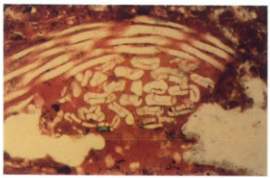


No. 59　赤色系漆（塗りなおし補修）（×100）

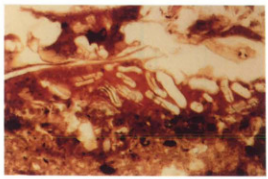
No. 59　赤色系漆（多層塗り構造）（×50）



No. 58　布着せ補強の状態（×50）

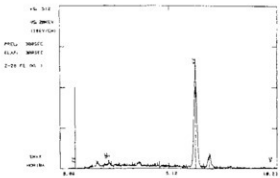


No. 9　布着せ繊維部分の拡大（×300）

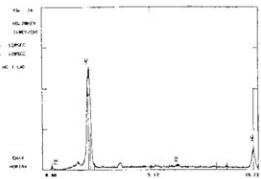


No. 39　布着せ繊維部分の拡大（×300）

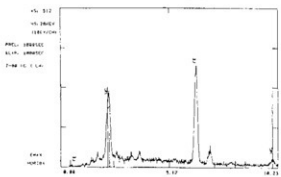
Photo 2－2　漆器膜面の塗り構造（顕微鏡写真）(2)



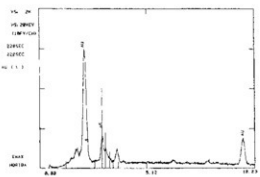
①赤色系漆　ベンガラ（Fe_2O_3）



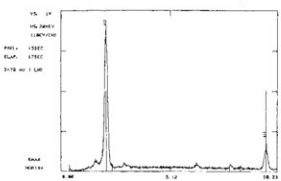
②赤色系漆　朱（HgS）



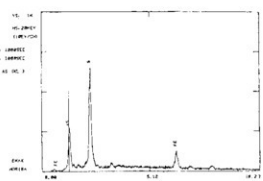
③赤色系漆　朱＋ベンガラ（$HgS+Fe_2O_3$）



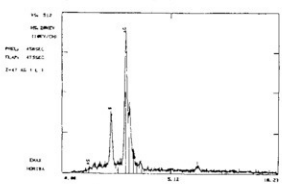
④蒔絵粉材料　金（Au）＋銀（Ag）



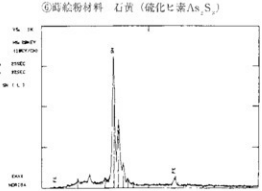
⑤蒔絵粉材料　金（Au）



⑥蒔絵粉材料　石黄（硫化ヒ素As_2S_3）



⑦蒔絵粉材料　銀（Ag）



⑧蒔絵粉材料　錫（Sn）

Fig. 4　電子線マイクロアナライザーの分析結果

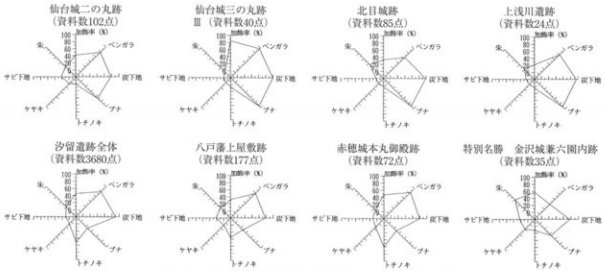


Fig. 5　本遺跡をはじめとする各遺跡出土漆器資料の組成

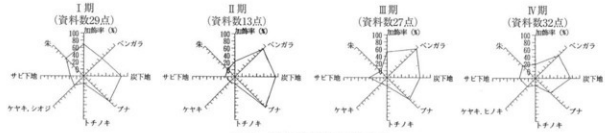


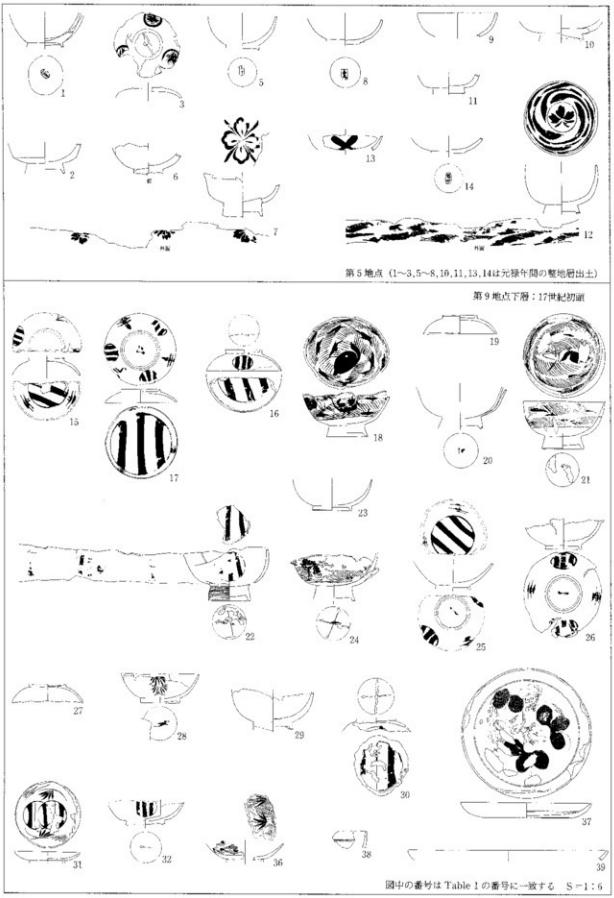
Fig. 6　年代別漆器資料の組成

仙台藩伊達家墓所跡出土隠衣桶（右）と同容器（左）

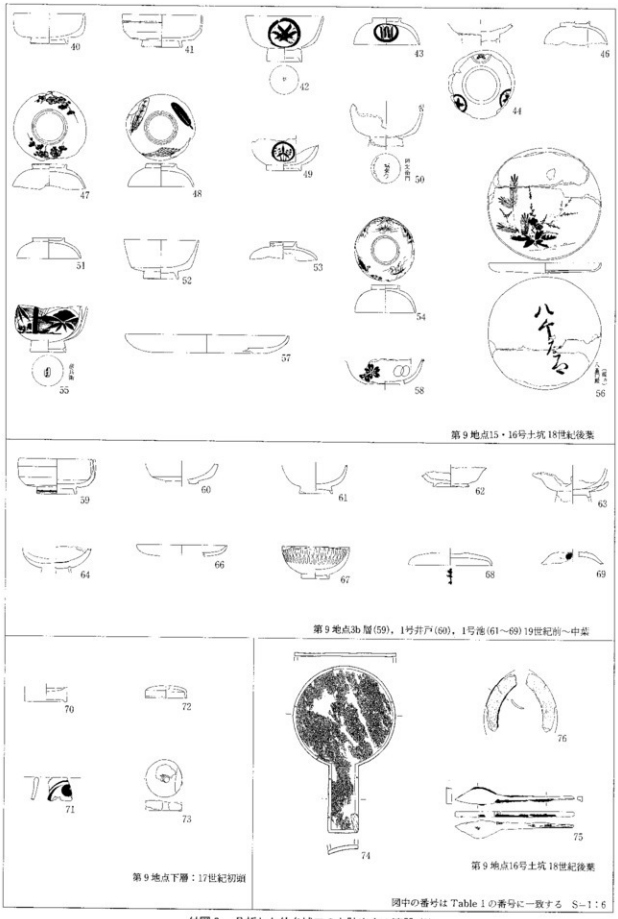
Photo 3　縦三引両文が加飾された什器類の一例

Table 3 『縦三引両文』が加飾された漆器資料観察表

1	椀	ブナ	B	茶		外			ベンガラ	1	2	北目城跡
2	椀	ブナ	B	赤	黒	外	朱		朱	1	2	
3	椀	トチノキ	A	茶	黒	外	朱		朱	1	2	
4	椀破片	－	－		黒	外			ベンガラ		2	
1	椀	ブナ	B	黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	仙台城三の丸
2		ブナ	B	赤	黒	外	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
3		ブナ	B	黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	
4		ブナ	B	黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	
5	漆膜面	－			黒	内外			ベンガラ	2	2	
6	漆膜面	－			赤	黒	外	ベンガラ	ベンガラ	1	2	
15	椀（蓋）	ブナ	B	黒	黒	内外			朱	2	2	本遺跡（仙台城二の丸）
16	椀（蓋）	ブナ	B	黒	黒	内外			朱＋ベンガラ	2	2	
17	椀（蓋）	ブナ	B	黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	
22	椀（身）	ブナ	B	黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	
25	椀（身）	ブナ	B	黒	黒	内			ベンガラ	1	2	
26	椀（身）	ブナ	B	黒	黒	内外			朱	2	2	
30	椀（身）	ブナ	B	黒	黒	内			朱	2	1	
31	盆	ブナ	B	黒	赤	内		ベンガラ	朱＋ベンガラ	2	1	
32	椀（身）	ブナ	B	赤	黒	外	ベンガラ		ベンガラ	1	2	
35	椀（身）	ブナ	B	黒	黒	内外			ベンガラ	2	2	



付図1　分析した仙台城二の丸跡出土の漆器（1）



付図2　分析した仙台城二の丸跡出土の漆器 (2)

付図3　分析した仙台城二の丸跡出土の漆器 (3)

東北大学埋蔵文化財調査年報13

平成12年3月31日

発 行　東北大学埋蔵文化財調査研究センター
〒980-8577　仙台市青葉区片平2丁目1－1
東北大学遺伝生態研究センター内
ＴＥＬ　022（217）4995

印 刷　株式会社　東　北　プ　リ　ン　ト
ＴＥＬ　022（263）1166